早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

# 玉座の「カタ」と「カタチ」

## －　メソポタミアの紀元前 3 千年紀における玉座の研究　－

“Kata” and “Katachi” of the Throne
Study of the Throne in the 3rd Millennium B.C. in the Mesopotamia

2011 年 1 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

服部　等作
HATTORI TOSAKU

# 目　　次

1.　　本論文の概要と構成

第1章　玉座の「カタ」と「カタチ」 …… 1

Ⅰ　本研究の目的と方法 …… 2
Ⅱ　正倉院の国宝「御椅子」 …… 3
Ⅲ 胡牀の原郷――西アジアの玉座 …… 5
Ⅳ 東西二つの玉座とその共通点 …… 7
Ⅴ 玉座の宿命 …… 9
(1) 限定製作品としての玉座 …… 10
(2) 標的となった玉座
(3)劣化と変形・損傷をこうむった玉座
Ⅵ 象形文字における姿勢 …… 11
(1) 漢字 …… 11
(2) メソポタミアの古拙文字 …… 13
(3) エジプトの象形 …… 14
(4) 英語の玉座 …… 15
(5) 玉座の象形 …… 15

第2章　姿勢と形態的研究 …… 17

Ⅰ　姿勢表現の原型と展開 …… 18
(1) 平座（正座，割座） …… 19
(2) 跪坐 …… 20
(3) 投げ足 …… 21
(4) 胡座，結跏趺坐，片立て膝の平座 …… 21
(5) 立位 …… 22
(6) 倚座 …… 22
Ⅱ 「座」の象徴的表現 …… 22
Ⅲ 「倚」の座像と立位・臥位の象徴的表現 …… 23
Ⅳ 玉座の「カタチ」 …… 26
1.新石器時代後期の座像 …… 26
(1) 地母神小倚座像 …… 26
(2) 地母神と神官の座像模型 …… 27
2.エジプト王の玉座 …… 29
3.仮説：天の指向とメソポタミアの玉座 …… 31
(1)　縦断的視点－天と天下の境界をなす玉座 …… 31
(2)　横断的視点－メソポタミアの玉座 …… 35

第3章　印章にみる玉座の「カタ」と「カタチ」 …… 36

I. 印章とは何か …… 37
(1)　印章の特徴と先行研究 …… 37
(2)　印章の図像と時代――「カタ」と「カタチ」を巡って …… 39
1. 1期の印章図像の「カタ」と「カタチ」 …… 40
1.1　平座する座像 …… 40
1.2　敷物に平座する座像 …… 42
1.3　スツールの上の平座像 …… 42
1.4　1期における座の「カタ」と「カタチ」のまとめ …… 46
II.　2期の印章と玉座倚座像－　饗宴図,動物闘争図の座像－ …… 48
2.1　2期の印章と座の「カタ」と「カタチ」 …… 48
(1) 饗宴図の座像の「カタ」と「カタチ」 …… 49
(2) 動物闘争文の座像の「カタ」と「カタチ」 …… 52
2.2　2期の美術表現と座の「カタ」と「カタチ」の美術表現 …… 53
(1) 地に直接平座する像 …… 53
(2) 平座と敷物 …… 53
(3) スツールの座像,および椅子の座像 …… 54
(4) 玉座の座像 …… 54
2.3　2期の座像と玉座の考察 …… 56
2.4　2期における座の「カタ」と「カタチ」のまとめ …… 57
III.　3期における玉座と倚座像－　饗宴図,動物闘争図の座像 …… 58
1.　倚座像をもつ印章図像 …… 58
(1)　饗宴図の印章と座像 …… 59
(2)　動物闘争図と印章と座像 …… 59
(3)　謁見図の倚座像 …… 59
(4)　有翼の神殿と玉座座像 …… 62
2.　印章の座像と他の資料図像の比較 …… 66
2.1　平座像 …… 66
2.2　スツールに腰掛ける座像 …… 66
2.3　玉座の倚座像 …… 67
3.　3期における座の「カタ」と「カタチ」のまとめ …… 68
IV.　メソポタミア4期以降の玉座の充実 …… 72
1.　4期以降の座像の「カタ」と「カタチ」 …… 72
V.　まとめ …… 74
1. まとめと今後の展開 …… 74
2. 謝辞 …… 77

参考文献と註 …… 78

図表，付図・付表，地図，年表 …… 114

# 本論文の概要と構成

本論考は,メソポタミア文明初期においてシュメール文化が成熟した前 3 千年紀に発展する玉座について,とくに「カタ：姿勢」と「カタチ：形態」の二要素に着目し,その歴史的・社会的・象徴的な発展・変容過程を文献・図像資料に基づき検討した内容である。

本論考の第 1 章は,まず玉座がどのようなものかを,東－西アジア世界の代表例として日本の「赤漆欟木胡牀」と称される国宝の御椅子とアケメネス朝ペルシャでダレイオス一世の玉座を取り上げた。前者は,「胡」がつく名称から漢代以降に中国以外の民族,地域や文化の意味に用い,特に椅子は西域よりもたらされ「胡牀」と称された。とすれば,椅子として唯一の国宝である正倉院の胡牀が西域と縁ある点に疑いなく,実際に正倉院の胡牀とダレイオスの玉座の「カタチ」が四脚の支持構造や背板(凭掛・よりかかり)をもつ点で共通している。だが,その座法となる姿勢の「カタ」が異なり,前者が胡座(あぐら)で,座面に平座(直接肌を接する座法)に対し,後者のそれが足をたらす垂足而座で背板に身をよせる倚座姿勢をとる。この相違点が何に由来するかは定かでないが,前者が明治時代に修復を経たものの,当初の原型を保っているのに対し,後者の原型は浮き彫りにのみ残っているにすぎない。総じて古代の玉座は,人為的破壊と経年変化ゆえにその現存例がほとんどなく,それに関するまとまった記録と研究が見あたらない。このため玉座の研究を困難なもの,未開拓な状況にしている所以である。

こうした資料上の欠点を補うために,玉座に関わる用語を定義し, 時間(古代-現代)と空間(西-東アジア世界)において玉座に対する異なる意識を理解することが必要となる。

そのため,第 1 章では象形(甲骨)文字に着目する。たとえば, 「座」と「倚」の象形は,他の姿勢を表す文字・語形と並び玉座を考察する上で特に重要となる。すなわち,象形の「坐」(座)は,神に伺いをたてるため向き合う二人が低い平座姿勢 を象ったものであり,神に伺う神聖な(訴訟)場の座姿勢の象徴的表現である。一方,「倚」の象形 は,人をあらわす偏に大刀を添えた形で権力を象徴する語形であり,刀や玉座に「身をよせる」姿勢を表していることが明らかである。むろん権力を象徴するには,玉座の座面(席)や背板,肘当て,足台ならびに王杖(太刀・槍,戈,楯),王冠といった威儀具(宝器)を必要とし,さらにそこには象徴的な姿勢の「カタ」と玉座の「カタチ」が不可欠となる。ここに象形の初義と初形は,玉座でとるべき姿勢と形態的側面からの考察に文字の体系として重要な役割を担っている。

玉座をとりあげた考古学発掘例は少なからずあるものの,その多くは「カタチ」を重視するあまり,「カタ」の言及がほとんどない。たとえば新石器時代の代表的な遺構出土品にチャタル・フュックの地母神座像の不充分な検討例をはじめ,後のエジプト・ツタンカーメン王の玉座,新アッシリア帝国の玉座があるが,研究の大半が玉座の姿勢の「カタ」を見逃し「豪華な椅子＝玉座」のとする偏った物質文明観に陥っている。

第1章ではまた,仮説として,玉座の「カタチ」のみならず,玉座が神(天)に通じるよう高いところから下を見下すため座姿勢の「カタ」が不可欠とする。この仮説に基づけば,メソポタミアは,生活の基本に信仰があり,神に近づくため天を指向した神殿建築を進め,神殿内部の玉座にも同じ指向をもつ「カタ」と「カタチ」を求めたとする。

仮説の検証方法として,(円筒)印章を初め座像の造形表現を検討した。述べるまでもなく,印章は前4千年紀中頃から原形が登場しメソポタミアを中心に長期間かつ広域的に継続して大量使用をみたが,印章が当初の計数手段で利用され次第に生活光景,特別な王や神の座像や立像,饗宴,動物闘争,神話主題,さらには王の謁見する玉座像を表わし,後に楔形文字の銘文が加わるために玉座の発展過程と登場人物や神,信仰様式の情報を有している。その結果,印章は玉座に関する多彩な情報を提供する文献に匹敵する資料となっている。

さらに西アジアからメソポタミアにかけての地は,人類がアフリカを出て各地に拡散する必然的な経由地であり,やがてこの地でシュメール人が革命的な潅漑農業はもとより,最初期の都市国家の誕生を促し,世界最古の文明を開くが,そこには,玉座や王権の発展要素が早くから備わっていた。

第 2 章では,前 3 千年紀のメソポタミアを約 500 年毎に区分する編年方式のもと 1 から 3 期に登場する玉座とに伴う座像の変遷について,具体的事例をあげて考察をすすめる。

まず, 1 期(前 4 千年紀後半から 3 千年紀初頭)は経済活動が都市に集まり,印章にもその活発な活動を反映して単独ないし群像の座像表現が登場する。また巫女や祭祀王が登場し,スツール(小椅子)上で片立て膝の平座像が腰掛けし見下ろす視点と独立した座像表現があるが, 1 期の印章図像に本格的な銘文がなく,スツールも特別な人物の席にとどまる。

2 期(前 3000 年－前 2344 年)は都市国家の時代で,印章の座像表現に銘文が加わる。この時期の重要な座像表現は,前 2600 年頃のメソポタミア南部ウル王墓群から出土した王妃「プ･アビ」の銘がついた饗宴図に現れる。王妃の座像は,座面より少し上に延びた背板に上半身を沿わせ正面向く姿勢で,他の人物より大きく表現した玉座の座像である。ただしここには，王権の象徴となる王冠，玉座を構成する基壇，足台といった付属するものがない。2 期の座像表現は,1 期のスツールより高い座面により高い視点位置となっている。

3 期(前 2334－2000 年)の印章をはじめ王法典碑に登場する謁見図の座像は,王が自らを神と宣言する場面を表現し,王権が強まったことを示す。代表的なウル第三王朝ウルナンム王法典碑の二段目に玉座の神(左にニンガル,右にナンナ)は,女神を従えて王環を受け取る王の謁見図がある。王は,手に王杖,頭に王冠を被り王権を象徴する玉座の神(ないし王)が上半身を支える高い背板や肘当て,下肢を安定する足台が加わって威儀を正した正面向けに身を寄せる玉座の倚座姿勢である。この 3 期の印章図像で特別な玉座の例は,神殿の門や階段状の建築様式を摸していて,神殿前に玉座を設け,有翼の神殿の門を表現している。そこには神殿をして天に通じさせようとする建設者の意図を示している。基壇上に設けた玉座で正面に向く神(ないし王)の倚座姿勢は,象徴性のみならず,足台や基壇が天に通じる階段となってい

ることを暗示する。だが前 3 千年紀後半にウル第三王朝の滅亡は,シュメール人の文明の終焉により群雄割拠の時代に入り,都市の中心にあり天を指向した神殿建築が都市とともに要塞化にむかう。

第 3 章は本論稿のまとめである。筆者はメソポタミアで前 3 千年紀の玉座に関する研究から,玉座の「カタ」と「カタチ」の両要素が,神＝王の一体観を中心に 3 期に揃ったと結論付ける。すなわち,「カタ」は自ら神と称した王権の頂点にたつ王が神として威儀をただして玉座に身を寄せ,高いところから見下せる倚座姿勢をとり,「カタチ」は天に通じる神殿を摸した玉座で,両要素は王権の拡大化ともに発展した。こうした玉座の「カタ」と「カタチ」は 4 期以降に充実期にむかう。とりわけ 6 期(前 1000～500 年)の新アッシリア帝国の玉座は, 足台, 基壇を常に備えた玉座になり階段の役目を意識した足台とともに玉座が天に向かう神殿のようにそびえ独立する玉座となり, 以降,直接的,間接的に各地の玉座に影響を及ぼす。

こうして本論考は,玉座の「カタ」と「カタチ」を通して,古代メソポタミアの王権思想と姿勢観とが不可分に結びついていたことを明らかにする。古代王権の統治原理は単に政治の仕組みだけでなく,玉座の形態とそこに座する姿勢観に託された象徴性にもあった。それは従来の王権論や政治史,あるいは美術史が看過してきた点でもある。本論考の学問的意義は,まさにこの点にある。さらに本論考が有する社会的意義は, 古代の姿勢観と物質文明観を考察し現代社会に生きる我々の期待する効率的生活, 経済的な物質文明の獲得の対極に位置する起居の文化的希少性と価値観を示す意義がある。

# 第１章

# 玉座の「カタ」と「カタチ」

## Ⅰ　本研究の目的と方法

玉座は特別な象徴性を有する席として古くからみなされてきた(新村,昭和30,Fontana, 1997：pp.70)。玉座が登場する光景の一つは,いうまでもなく王位継承の戴冠式である。この儀式で象徴的な役目を担う玉座は,権力の頂点に位置する王位(以下神権も含む)につく者にとって不可欠で特別な席である(註1)。儀式では王が集まった人々の歓呼のなか,王冠をかぶせられ,王の標章となる剣・笏・王冠といった威儀具(宝器)を受け取る(註2)。儀式が最も盛り上がる場である(ホカート 1990:pp.87-121)(註3)。文字通り天に通じる語を冠する「天帝」,あるいは「天皇」といった権力の頂点にたつ現人神が,そこから天下を治める玉座という席は,天(宇宙)の神に通じ,天下(地上)の人々を支配するために,領土の統治,天候,戦争といった重要な事業の吉兆を占う呪的行為,まつりごとを繰り広げる場でもあった(フレイザー 1986)。

そうした玉座に対し,天下の人々は膝と両脚を床面に直接つける正座や膝頭を地につけて低頭低身する跪座,さらには起礼を繰りかえし起居の姿勢(註4)をとって敬った。時に土(社)を盛り,生け贄の奴隷や動物,さらには様々な供物も供えた。**王権(šarrūtu)**が神授され(角田 平成15:pp.125-126)(註5),天に通じて神の代理人となる王は,自らに託された預言を裏付けるため,祭祀の長として自ら神への祈りや頻繁な供儀儀礼を行い,天下の人々の信頼や畏怖・畏敬を受けて王権を確立した。こうして玉座は,権力を可視化する象徴的な席となった。

本研究の目的は,こうした玉座につく王の座姿勢を「カタ」,玉座の形態を「カタチ」として(新村 昭和30：菊竹 1969)(註6),それが「天」を指向する象徴性を保ちつつ発展していった過程を明かにらすることにある。その主たる分析事例は,世界最古の文明が発達したメソポタミアの前3千年紀の玉座にある。

筆者の玉座と姿勢に関する関心は,「ヒマラヤをとりまく少数民族と伝統文化」をテーマとして自ら行った,同地域の部族と地域固有の伝統的な生活文化の現地調査(服部 2000,2002,2004,2007,2009a)に始まる。また西北インドから中央アジアで特徴的に見いだせる象徴的な姿勢を実見し(服部・荒川正晴 2006:pp.87-102)さらにパシュトーン族の部族長会議(ジルガ)の指導的な役割をはたした藩王(ワーリー)(註7)が玉座につく際に示す象徴的な姿勢も幾度か見る機会があった(Stein 1929:pl.37,服部 2001)。この藩王の率いる部族社会や王家の系譜および人物像などについては,すでに文化人類学(フレドリックバルト 1998)や社会学(スペイン 1980)の分野で扱われているが,本研究の特色と問題意識は玉座に焦点をあて,その「カタ」と「カタチ」の淵源をたどるところにある。

とはいえ,本研究の対象とする実物の玉座は少なく,玉座につく際の座姿勢の「カタ」もまた形を留めないため不明な点が多い(服部 2005:pp.9-16)。当然のことながら,それゆえ玉座の先行的な研究はなく,まとまった資料もほとんど皆無であり,近年の椅子の歴史書もほとんど玉座には触れていない状況(Florence, D,2006)である。

そうした隘路を切り抜けるため,本研究は前述したようにメソポタミアに目を向ける。それは,小規模なシュメールの初期王朝から都市国家の分裂と抗争を経て,アッカド,バビロニアという,汎世界的な王国に大きく展開するこの地の王権(šarrūtu)の発展過程がかなりの程度明確だからであり,その玉座の「カタ」と「カタチ」のありようを示す図像証拠が,メソポタミアの重要な発明品である印章図像や楔形文字の記録,神殿,王墓,ならびに法典碑といった遺品に残されているからでもある。つまり,玉座そのものは消滅していても,玉座の発展過程を検証するに足りる様々な要素が満ちているのである。

改めて指摘するまでもなく,玉座は多様な状況に応じてその呼び方が変化し,法王の法座,皇帝の帝座といったように役割に応じた呼称を持つ(松村明 1995)。文字通り玉座は,天帝や天皇,王といった特別な主を支える役目を有するが,その席につく主は人間以外にも祖先神や守護神といった偶像の席にもなり,時には空席の玉座をもって主の権威や象徴性を代用する事すらある。このことから,玉座が象徴的な役目を新たに担う時は天下が交代する時であり,主が交代するということが,玉座に一種の呪物的・象徴的性格を与えている(フレイザー 1986)。

玉座が空間として特定の地域や場所,時間として歴史(註8),ならびに天に通じる特別な神や王権につく人物と直接関係することは明らかである。では,そうした玉座で注目すべき内容とは何か。特別な象徴性とは何か。玉座が椅子と似ていながら何が異なるのか。その点を明確にするため,次に古代世界で良く知られる玉座(註9)を二例あげ,古代のオリエントから中央アジア世界を包括する呼称「胡」(新村出2008)(註10)がかかわる語句の内容とともに,玉座が有する共通性について考えてみたい。

一例目にあげた玉座は,日本の正倉院の御椅子で「赤漆欟木胡牀(せきしつつきのきこしょう)」と呼ばれる。「胡」牀の名がつき,実物と文書記録が残る御椅子(ごいし)として唯一の国宝である。二例目は,西アジアのアケメネス朝ペルシャの玉座である。この玉座自体はすでに喪失しているが,アケメネス朝の祝祭都市ペルセポリス遺跡には,多くの浮き彫りにまじり玉座の浮き彫りが損傷をうけながらも残されている。

## II　正倉院の国宝「御椅子」

一例目の玉座は,奈良・正倉院の南倉67号の宝物(木村法光 1992:図版21,pp.24, 宮内庁正倉院事務所 1987-1989)の御椅子である。椅子の名称がつくが,明治時代以降の正式名「赤漆欟木胡牀」に由来する。胡牀の名がつくため,西方世界との関わりがわかる。ここに扱う御椅子が胡牀をさし,正倉院以外の胡牀(台床)とは区別されなければならない。

図1.1にみられるように,御椅子の形態は緩やかな曲線を描く四脚の脚部で,座面や背板で身体を寄せることができる今日の椅子と同様の構造である。素材には主に木材の欅を用い,網代の席(座面・床),高欄(肘当て),さらに座面後部の背板に,錦をかけるための鳥居状

の横貫が通してある。各構造材は赤く染めた後に漆で表面処理を施し,鍍金金具で端面を強化している(後藤四郎 1992:図版155,pp.234-235)[註11]。

この御椅子が玉座として有する重要な資料的価値は,天平時代,聖武天皇(701－56)崩御により,光明皇后(701－60)が東大寺創建と盧舎那仏献納の国家的儀式でそれが象徴的な席を担った点にある。さらに御椅子は,天武天皇から持統天皇にかけての皇位継承用の御物として,東大寺献物帳第二号の「赤漆文欟木御厨子」と同様の素材,組み立て技術,表面処理技術もつ点でも重要である[註12]。そこからは玉座の「カタチ」とその役割が如実に認められるからである。実際,国家信仰の中心であった東大寺で,これが天平勝宝八年(756年)の儀礼に用いられた「胡牀」だという『国家珍宝帳・東大寺献物帳』[註13]の記録がある。とすれば,この御椅子は記録と実物が共に伝世されてきた世界的に稀少な価値をもつ玉座といえる。しかしながら,御椅子の研究は座姿勢の「カタ」の象徴的な役目にまで目が向けられてこなかった。そして研究の関心が正倉院の歴史(宮内庁正倉院事務所1988, 正倉院文書研究会 1993)および形態(＝カタチ)の修復 (飯塚1987:pp.11-36,木村,光谷2001:pp.1-28)に集まっていた。

御椅子を利用する際の座姿勢は,正座ないし胡座の座姿勢(座法,座勢ともいう)であったことが,鎌倉時代の五尊図(梶谷1998:図版6,法隆寺昭和資財帳編集委員会 1986:p.14)や,大正時代の真言宗管長・土宜法竜(1854-1923)の座像写真からわかる(井筒 2004:p.114)[註15]。それは,今日的な西欧の起居慣習[註16]や,四脚の椅子に垂足而座(垂下丙脚)の腰掛ける座姿勢と異なる。 (図1.1, 図1.2)

座具のうえの平座(平敷の座)は,中央アジア,インドならびに東アジアにまで及ぶ広汎な分布をみせ,古代から今日にまでいたる伝統の姿勢である。図像の証拠としては,シルクロードの交易路沿いのソグデアナ,ペンジケントの王宮壁画(Marshak 20021 : Fig.72,東京国立博物館1996)や,敦煌莫高窟138・196・285窟壁画の座像(高后2001:pp.20-29)があり,そこには胡牀の席上での平座や胡座,正座の表現例が多数現れている[註17]。

現代で一般的な椅子に脚をそろえて腰掛ける(垂足而座または垂下丙脚)といった一定の座姿勢を前提に胡座のように異なる座姿勢をとる例は,前述した鎌倉・大正時代の御椅子上の座像をはじめ,筆者が実見したインド人の椅子上の胡座を度々見ることがある。

元々の御椅子は,仏教を国家宗教に制定した天平時代に様々な儀式に用いたとされる席だったが,西方の座具の形態的な「カタチ」を採用し,同時に様々な文化と共に座姿勢の「カタ」も流入していた(服部 2000:pp.111-128,服部2006:pp.87-102,ibid.2009b)。前述したように,この御椅子は椅子の役目を越える玉座であった。天と通じる思想 (千田 2002)[註18]のもと,天を冠した天皇は天下を治め,その権威によって官営大寺の造営や遣唐使派遣という国事事業を推進するため,象徴的な玉座の「カタチ」を備え,継続して玉座を充実する必要があった。 (図1.3)

## III 胡牀の原郷——西アジアの玉座

二例目の玉座は,古代の西アジアを代表し,当時の汎世界的国家だったアケメネス朝ペルシャの玉座である(Curtis 2005)[註19]。この玉座の重要性は, この地の王権の歴史と背景を再展望すると理解できる。周知のように西アジアは,出アフリカを果たした人類の祖先が東方へ移動した際の必然的な経由地であり,「歴史はシュメールに始まる」(Kremer 1956) という人口に膾炙した表現からもわかるように,シュメール(シュメル)人[註20]のもとで人類史上最古のメソポタミア文明が誕生し,様々な文明要素の発明をみた地である(前田・尾形1992,40-71)。同時に西アジアは, 地中海沿岸部,古代エジプトと交流が常にあり後に「光は東方(オリエント)から」と例えたよう様々に影響をおよぼしていた。そうした影響の一つが「敬天」=身を引き締めて天を敬う,思想である。すでに前4千年紀半ばよりメソポタミア文明を特徴的づける神殿(聖塔:ジグラット・Ziggurat)が相次いで建設され,天に近づくよう建設された神殿建築の様式(後述する溝状の戸口)や形態が玉座の「カタチ」に応用する工夫がなされたと考える。

こうした都市文明, 王権, ならびに神殿建築を生み出した西アジアは,実際に中国や日本に伝わった「胡牀」[註21]の原郷とされている(服部2009b)。地中海東部から中央アジア世界にかけて王権の頂点にあったダレイオス一世(ダリウス,前522－486)[註22]の玉座は,現在失われているが,その玉座の浮き彫りは古代ペルシャの祝祭都市ペルセポリスに残り, そこに紀元前3千年紀に工夫と発展をみた玉座の威儀[註23]が具現化されている。

まず謁見の間(アパダーナ)にあるダリウス王(前486－465)の玉座倚座像の浮き彫りは,朝貢する領主と二基の拝火壇の前に玉座を表現している(Curtis 2005:pl.21)。この玉座像で注目すべき点は,玉座に座し,天下を支配する王を象徴的に強調しているところにある。基壇上で足台と玉座に身を寄せた王の端正な倚座像は,背後に立つ王太子や臣下の式部官達の立像と一体的に示されているが,王が天と天下を分け隔てるため,彼らは王と同一の地平に接していない。こうした図像表現は,後述するメソポタミア文明の一大発明品である円筒印章 (Collon 1987) の側面視観ともども,王権を神授された王と神々の謁見図(礼拝図)の伝統的な主題をなす[註24]。

側面からの王の座像は,上半身が背板によせるように背筋をのばし,下肢を足台に揃えて正面むきにすわり,あたかも王が玉座の形態に身体を正面向きに身をよせているようである。こうした倚座姿勢は,玉座が王を支えている象徴的な表現といえる。.

図2.1にとりあげた玉座像については,たとえば藤井純夫の概説的な論考がある(藤井1987:pp.9-21)。藤井はそこでクセルクセス王をダレイオス王とし,王の後ろに立つ人物を世継ぎのクセルクセス王太子とする見解のもとで,従来の椅子観にもとづいて王の椅子を席(座面)や足台[註25],ならびに椅子を設置するため基壇から構成されるとしたうえで,王太子が王と同じ地平に接していない表現上の特徴をあげている。だが惜しいことに,藤井の論

考は肝心の王が椅子でとる象徴的な座姿勢が何たるか,そして椅子をthrone(玉座)と混同し,足台(footrest,footstool),基壇(dias,platform),天蓋(baldachin,canopy)と玉座の関係,さらにはメソポタミア伝統の王権の象徴である王杖,王冠と玉座の関係に触れていない。

こうした玉座についてペルセポリスの三つの門(トリビュロン)にあるダレイオス一世の玉座の浮き彫りが様々な情報を有する。これは,天に通じている王を誇示するように,天に向けて担がれた「玉座担ぎ」(註26)の象徴的表現となっている。玉座の天蓋の上にいる主神アフラマズダは天に浮かぶように表現され,その下に王太子を配し,天と「天下」が不可侵な空間であることを象徴する。

二つの「玉座担ぎ」の図像は,装飾された天蓋の上に浮かぶアフラマズダ神の御意によってダレイオス王が支配した天下二十八国(ダフユ)の人々が,天に向けて玉座を担ぎ上げている光景である(ギルシュマン1966:図版246)。玉座の後にダレイオス王の世継ぎの王太子が立ち,「天下」の行政・徴税区の領主達が3区画で表現された地平を担ぎ上げている。もう一つの図2.4は,図2.1と同様の謁見図の光景を描いている。この図は,王の倚座像の背後に登場する王太子の表現がなく,最上段の主神アフラマズダの姿もない。また,ダレイオス王の倚座像を人々に示して,玉座担ぎの図像を使うことなく,足台が天に通じる階段の役目を暗示し天下を分かつ表現をとっている。

図2.2－4に三つ取り上げた王の倚座像は,偉大なるペルシャ王が玉座から新年の祝祭に参加する諸国の人々の謁見を主題にして敬天の思想を具現化している。謁見の間および三つの門の一画を飾るこれら一連の玉座の倚座像では,これから玉座につく王が王権の一威儀具である王杖と王冠をつけて玉座と真正面に向き合っている。後述の前3千年紀メソポタミアの印章で表現される王権の象徴（前田1998,pp.21-30）の王杖と王冠と玉座がここに出揃っている。ペルシャの広大な領地支配を示すこの玉座の表現は,メソポタミアの初期王朝時代から新アッシリア帝国の伝統を引き継ぐ表現をとる。 すなわち玉座は,天へと向かう指向が打ち出され,玉座は,玉座という特別な席につくため基壇，足台,さらには玉座に昇降するための階段を省略したうえで，神殿内部に設置された紀元前3千年紀の表現が，この祝祭都市に置き換わったのである。こうした経過は，3章に詳しく述べことになる。(図2.1)

こうした玉座像の表現意図は,玉座につく王が天の神となって天下の人々を謁見することを示すところにある。基壇の上の玉座,領主達が担ぎあげる玉座に座して高みにいる王は,新年を祝う大祭のとき,天に通じ,天下を睥睨する都ペルセポリスの万国の門から,百柱の間や謁見の間,さらに三柱の間からなる祝祭空間で謁見し,人々を迎えいれる。まさに玉座担ぎ図像を具現化するかのようにである。こうして玉座のダレイオス一世は,主神アフラマズダのもと,天に通じ天下を治めるために高みから人々を見おろす視点を獲得する(左2007)。このようにペルセポリスがペルシャ語で記された王書に登場するペルシャ帝国開祖の王に「ジャムシード王の玉座(タクティ・ジャムシード)」と賛美される名称に由来し,玉座と共にちなみ造営された祝祭都市を象徴的に讃える所以である(黒柳1989:pp.38-40)。

## Ⅳ 東西二つの玉座とその共通点

以上述べた日本の御椅子およびアケメネス朝ダレイオス一世の玉座は,四脚で背板を持つ椅子の形態に共通点をもつが,両玉座につく時の座姿勢は相違する。正倉院御物の「赤漆欟木胡牀」の胡牀とは,中国漢代に登場した折りたたみ可能な座具とされるが(田辺 1996,pp.27-30),胡がいうまでもなく古代中国の西域ないし北方を総称した用語であり(白川 1996:9画4762)[註27],胡座やメソポタミア文明に最古の記録が登場する特産品の「胡瓜」などの呼称にもみられる (杉2006,pp.175-176,松谷・江上 1995:2-10)ところからして,御椅子が西方文化の影響を受容した結果であることに間違いはない。
この「赤漆欟木胡牀」が招来されるまで,古事記や日本書記に呉床や胡床なる表記があり,そこからは大陸との交流が想起できる(倉野憲司1963.注297.森豊 昭和48,,pp.19-31)[註28]。実態の記録がなく比較できないが,この御椅子には明らかに平座や胡座で幅広く座りやすい座面,さらに網代の席面,背板,高欄など,風通しを良くし,しのぎやすくした工夫がみてとれる。(図2.2)
座面に網代を用いる例は,暑い気候風土の地域,たとえばエジプトの王朝家具(Killen 1986:Fig.29)[註29]やインドの玉座(Marthy 1982:Fig.1,no.4),ならびに現代の中央アジアの椅子(Georgina Herrmann-Curtis,V.1996:pl.80c)[註30]がある。
一方,「胡座」は背板や肘当てがない腰掛けで,わが国には胡座と垂足而座を示す埴輪座像がある(倉野憲司 1978)。古墳時代の豪族の墓主が征服民族か否かの議論(江上・佐原 1990)[註31]はさておき,埴輪で座具上の平座(胡 1992)と腰掛ける座法の併存を指摘した先行研究としては,原田淑人(原田1962)[註32]や山折哲雄(山折 1981:pp.220-228)[註33]があり,さらに古墳時代の椅子を玉座と関連づけたものには福田彰人(福田1990)。森豊(前掲森豊 昭和48),戦前に胡牀に関した検討を加えた藤田豊八(藤田1933)の論考がある。しかし,いずれの論考も玉座につく座姿勢(カタ)や玉座ないし座具の形態(カタチ)を対象に扱った研究ではない。
本研究は,玉座を構成する基本の要素として,座法の「カタ」とその「カタチ」を作業仮説として想定しているが,体の構えや格好をさす前者の座姿勢「カタ」は,当然のことながら痕跡をとどめない無形の性格であり,それだけにいままで記録することに困難性を伴ってきた。これに対し,後者の「カタチ」は有形の物質・モノである。しかしながら,従来の研究は,ややもすれば物質的価値を有する宝物のような黄金製の椅子や豪華な椅子のみを玉座とする偏った視点にとらわれてきた。本研究の存在理由(レゾン・デートル)はまさにこの視点を突き破ろうとするところにある。
繰り返しを畏れずに言えば,以上とりあげた東西世界の玉座二例はいずれも天を指向するという点に象徴性を帯びている。ダリウス王の玉座は王権を象徴するだけでなく,天にむけ威儀をただした姿勢の「カタ」と,高みから下を見おろす玉座担ぎにその「カタチ」に象徴性が備わている。御椅子もまた持統天皇直系の継承品であるというだけでなく,天皇の玉座

を「高御座」（たかみくら）と称し，それを用いた天皇の象徴性とも深く関わる。こうした「高み」のこだわりが王権と密接に結びついている。本研究の意義はおそらくこのメカニズムを明らかにするところにあるといえるが，たとえば天にある神々を示す比喩的な言葉として，「高高在上（高いところにいる）」や「居高下（高いところから下を見下ろす）」[註34]がある（左咏梅-2007：pp. 47－63）。この言葉は，立位の姿勢が平座や横臥位，さらには中間的な腰掛けの姿勢より優位性を帯びているとするものである。実際に象徴的な立位姿勢は，アフリカ，ギリシャ・ローマ世界で王者の姿に現れていた。そこには権力を象徴する杖や槍，さらに三叉戟を手にして身を寄せた立位の姿勢がある。今日では西洋の椅子座りの座法（椅子に垂足而座の腰掛け）が優位性を誇る一方で，遊牧民族やアジアの平座を軽視した偏見もみられる。あるいはそれゆえか平座の正座や歌膝，楽座という起居の基層文化が衰退をたどり消滅の可能性さえ囁かれるまでになっている[註35]（井上2000：pp. 74-75）。

しかし，古代メソポタミアの神殿建築が旧約聖書・天地創造叙事詩にあるバベルの塔（ウルのジッグラト）で天をめざしたごとく，高みから下を睥睨する高高在上と居高下という願望なり野望なりは今日でも生きている。天を摩するほどの高楼を意味する摩天楼（Skyscraper 字義は，空を削るもの）は，アラビア半島ドバイの高さ818mを誇る超高層建築ブルジュドバイ（Burj Dubai）がシュメール人の天を目ざした象徴的な願望が今も続いているのである。

本筋に戻り，日本の天皇は，「すめらみこと」[註36]とも呼ばれ，大和王権時代の5世紀後半から飛鳥浄御原令の編纂が始まった680年代までまで，当時の大王は「治天下大王（あめのしたしろしめすおおきみ）」と呼ばれた。こうした伝統と密接に結びついていたはずの天皇の呼称には，天下を治め，天に通じる思想を背景として「天」を，またその天皇の玉座を「高御座」，近世の城郭を「天守」とし，いずれの呼称も前述した「高み」とかかわる。

天皇の有職故事をまとめた延長5年（927年）の「延喜式」には，掃部寮（かもんりょう）の帳台の周囲に帳をめぐらし，御所の大極殿（幡宮殿）の一宮殿（紫宸殿）に天と通じる天皇の席に「高御座」と皇后の「御座（みくら）」を設け，そこでさまざなな行事が営まれたとの記述があり，今日においても伝統の行事が継承されている（今泉定介1928）。また天子のための高御座を御座所（新村 1955）と記すことから，帳台の内部に取り付けられた昇降階段の上に特別な座具である御椅子を設け，これによって天下を治める神の代理人として，現人神である天皇の「見おろす視線」を確保したのだろう。（図1.1（3-4），図2）

一方，天下の人々は土（社）を設けて供物を供え，正座または膝頭を地につけ，低頭低身の跪座と起礼という身体所作を通して天皇を敬った。そこからは天皇崇拝と玉座（御椅子）のもつ天／地の象徴的な関係性が読み取れる。そしてそれは，古代メソポタミアの玉座や象徴性への礼拝（ギュンターシャーデ1987：図28）[註37]と過不足なく符合しているのである。西アジアを起点とする胡牀の伝統が，長い時間と中国を経て，天平時代に東アジアの東端にある正倉院に伝わる（服部・荒川2006，服部2009）。さらにこの時系列的な線を延長して得られる面を追っていけば，西アジアでおこった王権と玉座が織りなした空間－時間－人間の広が

りに辿りつく。筆者ならずとも,そこに連綿たる歴史の奥行きを感じないわけにはいかないが,次章ではそうした文化の基層部分の点・線・面の広がりを,メソポタミアの印章に彫り込まれた玉座の図像から具体的に検討していく。しかし,その検討に先立って,当然の手続きとして,玉座が宿命的に辿った物理的要因をみておかなければならない。

## Ⅴ　玉座の宿命

玉座のまとまった資料は極めて少ない。玉座の実物は近世の王朝の玉座以外ごく少数が残されているのみで,古代より玉座の多くが失われてきた。そうした玉座の喪失理由としては,次にあげる (1) 限定製作品,(2) 標的,(3) 劣化と変形・損傷,の3点に集約できる。
日の目を見ることなく玉座が喪失した理由は,それがいうまでもなく限定的に造られたものであるというだけでなく,有形の物質で製作されるため,常に経年変化という宿命を担わされ,加えて有形と無形の象徴性を有するため,王権や主人公の交代時にライバルの攻撃・破壊の標的となって失われる歴史を避けることができなかった点にある。
以下,3点の内容について順を追って検討していく。

**(1) 限定製作品としての玉座**

玉座はその主人公や特別な注文主(王権や神殿ないし神権の関係者)が製作を命じ,一世一代の利用を原則にした,つまり今日言うところの王室御用達品として王朝家具の頂点をなす装置である。玉座の製作にあたっては,メソポタミア南部は資源が少ないにもかかわらず石や木材といった貴重な材料資源を使う必要があったため,王の肩書きに物資の供給者を意味するシュメール語の《ú-a》,バビロニア,アッシリア帝国の王(Šarru)で《zãninu》という肩書きを必要とした(江上波夫1995：pp.132-133)。玉座が宮廷工房や職人達が材料や技術・技能を最大限活用し,まさに時代の技術と文化の粋をあつめて完成させる限定的な稀少品であった。さらに宮廷工房に属した家具の技術者は玉座の設計図と関連する知識を門外不出とした。そのため,こうした物資を供給できる王権を要し,限定製作品としての玉座は長い歴史を経て秘伝となって知識が残る確率が極めて低いのである。

**（2）標的となった玉座**

有形の形態に加えて無形の象徴的な価値を有する玉座は,王位につく人物,政治的ライバルや王位簒奪者から常に獲得目標とされた。実際にバビロニアの古文書に神像の「紛失」とその復興をめぐるエピソードが語られている(Bottero1985:p.294)。神像およびその玉座の主人公の交代や玉座の継承に簒奪者が加わり,ライバル同士の戦争や略奪行為が玉座の周辺で繰りかえされ,その都度玉座が喪失したのである(Baker 1966:pl.332,302, Layard 1853)[註39]。(図3.1)
呪物の役割を担う玉座(前出Fontana 1997)には,有形・無形の象徴性の役目があった。やがて宗教の役割が明確になるとともに,玉座の主人公となる信仰や集団の統率者や王権神授

をうけた王の登場により,次第に高いところから天下を見おろすことが可能な神(天)の代理人として天下(地上)を支配する象徴的な役割を担う人物の玉座となる(世田谷美術館 2000：pp.64-65)[註40]。 (図3.2)
玉座の主人公交代劇は,チェスに王権－玉座の交代儀礼に一つの証拠を与えるほか,重複シュメールの王名表(王朝表)(ピエコンスキ 2004：554－559)[註41]や美術表現,ならびにシュメール文学にみることができるが,そうした王権の交代劇に関わる身近な証拠の一つが,チェスの詰めの手で知られる「チェックメイト」として残っている(Newton 2003)。この用語は,古代ペルシャ語のシャー・マート(Shah Mat),すなわち玉座の主人公と死－再生をめぐる交代劇を示した語を語源とする。それは,玉座の周囲で繰り返された暗殺や王権の簒奪ないし奪還,さらには戦争での戦利品として玉座の獲得などを証拠立てている(前掲　黒柳恒男1989,,pp. 49-66)[註42]。
一方,王権の交代劇とは埒外のところで財宝価値を目当てにより標的になった玉座もある。その事例としては,ムガール朝の第5代皇帝シャー・ジャハーン(1628－58)が製作を命じた「孔雀の玉座」が有名である(Cary et als.1965)。都デリーの謁見の間(ディーワーニ・アーム)に置かれた玉座は,「光の山」を築く様にダイヤモンドを大量に用いたため,玉座が宝石ごと持ち去られた[註43]。

**(3)劣化と変形・損傷をこうむった玉座**

玉座が今日まで遺されてこなかった三番目の理由としては,物理的な経年変化がある。遺跡から出土した玉座は,多くが盗掘や損傷を受けてきた。こうした長期にわたる人災や自然の経年の結果として,玉座が損傷していく宿命にあった(Mallowan1974：pl.1)。(図3.3)
そうしたなかにあって,埋葬時とほぼ同じ状態で出土したものが,前述したエジプトのツタンカーメン王の玉座である。乾燥砂漠地帯にあり王墓の上に施設があったため,大きな盗掘被害にあわず,原形をほぼ保った状態で出土している(Carter 1923,1927,1923)。こうした完全な原形表記統一の状態を残した玉座の出土を今後も期待したいが,現在まで残されている玉座としては,このエジプトの王墓から出土した玉座のほか,王室ないし皇室の宝として丁重に保管されてきた英国(The Queen’s House 1997：pp.16,22-24,28)やフランス,ロシア,中国,そして日本などの宮廷家具類があるが,その例は少数である[註44]。

以上,玉座が喪失してきた三つの理由を検討してきた。すでに指摘しておいたように,現存する実際の玉座の例が少ないこともあって,玉座にかかわるまとまった記録や文献がほとんどないのが実情である。
したがって古代のイメージまで辿ることができる資料は,古代の一筆の絵や一握りの粘土による様々な図像ということになる。そうした資料として,たとえば古代中国の象形(甲骨)文字や同じく古代エジプトの聖刻文字(ヒエログラフ)がある。

象形は,語や事象の本来的意味や役割を知る上で,語形と語義をはじめとする字解がきわめて重要な情報を伝えてくれるからである。

さらに玉座像にまつわる「カタ」や「カタチ」の実態を描いた古代メソポタミアの(円筒)印章やインドの(方形)印章,そしてより直接的には神殿や宮殿遺構にみられる壁画やレリーフなどもまた,本研究にとっては貴重な資料となる。まず,象形文字からみていこう。

## VI 象形文字における姿勢

### (1)漢字

多少の例外を除いて,象形文字はその多くが原則的に造字当初の初義と初形をとどめている。漢字の研究は漢代に許慎(30－124)が紀元100年の編んだ,大著『説文解字(せつもんかいじ)』14巻を待って飛躍的に発展したものである。少篆9353字,重文1163字を540通りの部首に分類し,漢字の成立過程を六書,すなわち象形・指事・会意・形声・転注・仮借の6種から説いたものである(尾崎二郎 1991,世界の文字研究会1993)(註45)。

許慎のいう六書という語自体は,中国の戦国時代以降に編まれたとされる儒家経典『周礼』の地官保氏篇に初出する。しかしこの書には六書の具体的内容の言及がない。
許慎は,自らの『説文解字』に,始めて六書を体系的に解説した。この書のなかで六書の特徴を次のようにまとめている(註46)。

1. 象形－物の形を象って作った字形
2. 指事－事象の抽象概念を図形化,組み合わせた字形
3. 形声－類型的な意味と発音を表す音符を組み合わせてつくった字形
4. 会意－象形と指事の字形を組み合わせて新しい意味,概念を表す字形
5. 転注－用字法の一つだが,詳細不明
6. 仮借－他の同音・類似音の字形を借用したもの,一種のあて字とされる

この『説文解字』からおよそ1600年後に清の康熙帝の勅撰による『康熙字典』全42巻が1716年に完成し,収録数4万9000以上もの文字の音義(字音と字義)を解いている。本研究ではさしあたり象形に着目するが,たしかに漢字には「坐」(座)や「立」,「臥」,「倚」,「跪」といった姿勢の「カタ」を表す文字が多数あり,同様に座臥具の「カタチ」を表す文字も「玉座」,「牀」,「床」,「枕」,「且」など数多く残されている。このため玉座に関連し漢字の語形と語義は,象形の初形と初義の痕跡を留めている貴重な資料であることがわかる。なかでも「坐」の象形は,神聖な場ないし神に対する伺いを問う座法を表現しているとし(白川 2003,7画－8810,10画－0021,白川 1994),象形(甲骨文字)が未出土だった漢代の『説文解字』十三下にある坐に と の解釈と異なるのである(註47)。坐の語形は,神に伺いをたてるため,向き合った二人が低い座姿勢をとり,神にみたてた棒を低い土山に立てた神聖な(訴訟の)場における座法を示し,人物の姿勢の坐－臥および高－低の関係から,象徴的な座

姿勢および裁判の空間を示している。「坐」の聖性は,中国の歴史書である『史記』(天官書)に「五帝の坐」と記されている用法からも明らかである。そこでは,星に星座・御座をあてて神の住むところとし,日本でも神を一座二座と数えるように,「坐」のは天の神に通じることを示している。 (図1.1(3))

「坐」と関連する語としては「跪」,「命」ならびに「倚」といった字が含まれる(註48)。このうち「跪」に含まれる危は,高所より下に臨む形であり,膝をついた(膝まずいて拝する)坐姿勢に由来する。象形の「座」の初義と初形に近い低い姿勢で,特別な神ないしその代理人から裁きを受ける時の姿勢で,東と西アジアに共通する姿勢である。(図6. (3-4))

一方,「倚」の象形・ は,元々人をあらわすつくりに大刀の束と組み合わせた語形に由来し,語義は刀に「身をよせる」姿をいう(白川 2003:10画2422)。(図9)
この象形のもとになったのは,特別な人物(権力者)が王権の威儀具,たとえば王杖や槍,大刀の類に寄り添う特徴的な姿となっている。それはヒューズ(Hewes 1957)がその姿勢研究が明らかにした杖に身を寄せる勝者の姿勢(図4.1-22)である。また古代世界に表現される神々や英雄の威儀をただした語義とおりに立つ「倚」の姿がみいだせる。例えば出アフリカをはたした人類が最初に通過した地に興ったエジプト文明でアメン,ホルス,アヌビスといった神々の王杖をもつ立像が多数あり,またメソポタミアではマリ出土の前1810年頃の印章図像に動物闘争文と踊り手など群衆の図像に混じり片足立ちで太刀に身をよせた英雄の立像がある(Collon1987:pl.679)。勝者の姿勢が登場するアフリカーシリアーメソポタミアーイランに通じる交易路の要衝に位置し,王権を象徴する威儀具の王杖と姿勢の関係を如実に示している。目を転じて同様の勝者の立像表現はギリシャのアポロンが槍や楯を持つ姿が想起できる。インドの立像表現はシバ神の三叉戟(トリラトナ),軍神スカンダの槍,カニシカ大王の大きな太刀と多数の例をあげる。こうした立つ「倚」の姿が象形が誕生した中国で大唐帝国の章懐太子をはじめ王の倚(立)像の姿に一致する。 (図9.1(2-3))

**(2) メソポタミアの古拙文字**

象形は中国で発展をみたが,世界最初の古拙な絵文字は,メソポタミアで前4千年紀半頃に発明されたという(前掲Kremer 1956,小泉龍人 2005:15−16,杉勇2006,pp.139-140)(註49)。そして,1872年にニネヴェのアッシリア語粘土板倉庫で出土した。バビロニア時代の古い伝承を記述した楔形文字の粘土板文書『シュメール王名表』に,「王権は天から降ってくる・・・」と記されている(杉,他1978:7-8)。メソポタミアの創世記とでもいうべきそこには,王権天(神)授の思想が克明に読み取れる(註50)。

《王権の〔……〕が天から降ってきたのち,
王権の聖なる〔王冠(?)〕と玉座(?)〕とが天より降ってきたのち,
彼は〔……〕をとりおこない,〔五つの町を……な浄らかた土地に〕建設し,
それ(ら)の名を〔名付け<首都>…〕として(神々に)それらを配分した。

これらの町の最初のものエリドゥを彼はリーダーであるヌディソムドゥに与え,
第二の(町)バドゥティビラをヌギグに与え,
第三の(町)ララクをパビルサグに与え,
第四の(町)シッパルを英雄ウトゥに与え,
第五の(町)シュルッパクをスドゥに与えた　…(以下略)…　》 (杉勇1978: pp. 6-8)

(凡例：本資料の〔 〕は原文の断欠で記述より補足,(　)内は推定補足,‥‥は全行断片)

ここに引用した『シュメール王名表』の一文は,冒頭に王権が天から降ってきたとして「天(の神)」が「天下を支配」する王権神授(王権天授)の神話を示し,続いて天より降ってきた正統な王権の象徴品として,玉杖(gidri,または šibir＝ḫaṭṭu), 王冠(aga),玉座(giš.gu.za)の由来とともに神々が動員されて国づくりが始まったと紀述する。蛇足ながらこのシュメール語の楔形文字でかかれた粘土板文書に旧約聖書が記すノアの箱船＝大洪水のエピソードと共通性がある叙事詩で知られる(前掲,岡田・小林 2008:pp.11-13)。シュメール神話で不死のウトナピシュティム(Utnapishtim)がギルガメシュ(ビルガメシュ)王に語る記述に神々が大洪水を引きおこし, (ノアの箱船)漂着したニシル山の山頂で洪水後にジックラトの上で灌奠を注いだとする話である(矢島文夫:p.163)。ここには天の神と天の代理人として天下を支配する王, そして玉座が示される(前田1998:pp.7-8)。

いささか記述が前後するが,神話の世界を現実化するこの王名表(尾形 1992:pp.40-71)は,ウル第三王朝時代(前2112～2004年)で初めて作成されたとされ,シュメールの神話的時代から古バビロニア時代初期までのメソポタミアの覇権を巡る諸都市と王権の力関係を示す記録となっている。こうした王名表を作成した意図は,前３千年紀末期に訪れたシュメール社会の成熟期に,「天から下された王権がこのような経緯を経て,現在の我が王朝に伝わった。それゆえ我らは由緒正しき王統である」ということを広く示すところにあった。そこでは,天下に２人以上の王が存在することはなく,その唯一の指定席が玉座であることが明示されている。

こうした一連の粘土板文書に登場する玉座の語彙“gú-za”は,いうまでもなく表音(形声)で記されているため(吉川守,民族学博物館(編) 2005：gú-za,杉 2006：144-145),語形と語義の関係が不明であり,この点において中国の象形と異なる。しかし,古拙な絵文字は,「王(神)」や「座る」という意味が,人の形に王冠または＊を付加し神 “din-gir”の限定詞を示す象形を編み出した。さらに,玉座担ぎに相当するシュメール語の“lu gu-za-l”が紀元前3千年紀初頭頃にあり,この語と対応する印影－巫女風の人物が片立て膝の平座で神輿と共に行進する図像がスーサから出土している (Amiet 1980：no.691)。玉座と王権との関わりは,ウルク,ニップール,ラルサ,ウル(現代名テル・アル・ムカヤル),ならびにケシュといった当時の重要な都市国家は,なならずそれぞれが固有の記号ないし紋章をもち,神殿と祭司王の支配関係を示す神殿の記号(小泉 2005:pp.16-17)を伴っていたために都市に強い影

響力を及ぼしていた(図7)。この王権の象徴と玉座の関係は4期のイシン・ラルサ以降に充実する点を後述する。また天に通じる観念は,四角に囲われた枠内に＊を付して「天空」を象徴的に示した。後にリセス型の玉座脚部に通じる神殿の門の象形も登場する(Parrot1962：pl.122)。神の象形“din-gir”は,中国の「帝」の音に近いとの指摘があるが,この古拙な絵文字と漢字の象形は一致しない(白川2007:pp.25-26)。さらにメソポタミアの印章や彫刻で平座や跪座像の表現は,シュメールの古拙な絵文字に一致する字が見いだせない。あくまでシュメールの古拙な象形は,中国の象形のように語義と語形に通じた字の体系でない(前掲,白川2003：10画・0021)。メソポタミア2期の印章は,楔形文字が本格的に銘文に書き加えられ,印章が人物や神の名前が特定できるため,メソポタミア文明の重要な資料となる。

**（3） エジプトの象形**

周知のように,エジプトの象形には聖刻文字(神聖文字,ヒエログラフ)がある(註53)。古王朝ナルメル王のパレットでは,初期の聖刻文字が王(神)権と結びつけられ,その造形はエジプト統一事業を象徴的に示しているという(シュエンツエル 2007)。

エジプトで玉座の情報が多いのは新王朝時代で,1922年にルクソール西岸の王家の谷からツタンカーメン王墓(Tutankhamun(Tutenkh-amen,-amon):トゥト・アンク・アメン王・前1347～39頃)の出土品が代表的である(ニコラスリーブス1993：pp.312-314)。そこには王の生前の豪華な生活をしのばせる遺品が王墓から多数出土している(註54)。王墓の入り口は,一般的に神の座像を象徴的に記した聖刻文字の印影(印章を押したもの) を捺しその聖刻文字が立像や片立て膝の平座像で高貴“spsi”を示す神々の神聖な座像が用い封印している。

イギリスのハワード・カーターによる王墓発掘の報告(Carter 1923,1927,1923)は,王墓から多数出土したなか黄金のマスク,９脚の黄金製の玉座(一部は椅子) (註55) や足台(註56)について「惜しみなく黄金を使用した豪華絢爛なファラオの文明」というその豪華なイメージを強調するあまり,物質文化観へ関心が向かうようになった。その結果として玉座の無形の象徴性を秘めた玉座の背板や飾りの聖刻文字,神の座像を用いて王の偉大さを示していることを看過してしまった。王の玉座の背板の透し彫りは“nbW”(黄金)を表す聖刻文字で片立て膝の平座姿勢の大気の女神ヘフが,胸飾りの形の上に座り(註57),腕に生命(アンク)の護符を,手には多くの年を意味する棕櫚の棒を握ったデザインである。棒の下には10万年を意味する動物と背板両側には３種(４個)の王名が聖刻文字で美しく浮彫りされている。さらに王名の周囲には,王を称える太陽や鷹,コブラが繰り返し表現されてもいる。こうした神の片立て膝の平座像を示すことで,百万年＝永遠性(註21)や神聖さを象徴的に表わし,さらに猛禽や毒蛇を配することで王墓を荘厳し守護した意図がある。 (図8.(1-3))

**（4） 英語の玉座**

英語の“throne”は古代ギリシャ語で神聖な玉座を意味する“thrónos”およびラテン語の“Solium”を語源とする(O.E.D.1934,Richter, G.M.A., 1912: pp.119-123,)(註58)。女性

用玉座は,Klismos (Cathedra) と称する。このことから「司教座の教会」を意味するカテドラ(Kathedra, ecclesia cathedralis)の語が“Katha”(深く)と“Hadra”(座ること)に合成され信仰との関わりを示すことになった。すなわちキリスト教が誕生した後にラテン語の“sella”(座る),そしてフランス語の“chaise”(椅子)に辿りつく。-

**(5) 玉座の象形**

漢字世界に戻る。まず指摘しておきたいのは,「玉座」の二字が象徴性を帯びているという点である。すなわち,「玉」の象形は特別に美しい石をさし,転じて物事を美しく称える謂いとなる(白川 1996:5画1010)。実際の玉の産出地は,中国新疆ウイグル自治区に属するヒマラヤ北縁の奥地にあり,古代中国の神話『山海経』に神々が集う聖山として登場する崑崙山や白玉河(註59)である。ここで採掘された準宝石の軟玉(貴石)は,やがて中原に運ばれ,人々に珍重されることになった。この世界的にみても独特な玉が,まさに中国独自の文化的な存在価値を築いてきたともいえよう。こうして「玉」の象形と「王」に共通する象徴性が備わったのである(白川 2003:6画4024)。.

「玉座」の象徴性を考える場合,その素材と空間ー時間ー人間によって違った特徴が生まれる。古代エジプトの玉座の素材が他国から輸入した木材や黄金を贅沢に用いるのに対し,中国や日本のそれは木材に漆の処理を施していた。一方,メソポタミアの場合は,シュメール文明がティグリス・ユーフラテス川の河床地帯沿いで「泥と砂の文明」と称される程の特徴的な文明である一方で,石の材料が特に貴重であった。

上述の内容をまとめれば,おおむね以下のようになる。わが国の漢字研究に偉大な足跡を残した白川静は,象形が「古代の(呪的)儀礼」を文字にしたものとし(白川 2007a),集団の中心の皇帝や一族は,占いや儀礼でこれを王権ないし王族の専用記号に用いたと指摘している(註60)。こうして白川は,象形の初形や初義を呪術・儀礼に関連づけて解釈をすすめた。ちなみに中国前漢の武帝の時代に司馬遷が編纂した歴史書『史記』に記されているものの,神話上の人物とされていた中国の三皇五帝が実在していたことが判明して,それまでの歴史に新たな事実(註61)が加わり,歴史認識が変わったとしている (牧角悦子2006:p.8,白川1996:p.349)。象形研究は,白川以外に郭沫若(郭 1972)らによる多くの蓄積があり,象形の初形や初義が明示されている(註62)。

すなわち象形は,漢字として発展をみて今もなお中国,台湾,日本といった漢字文化圏(前掲.世界の文字研究会1993)で使用され,古代のイメージ,言葉の抽象性を保ち古代と現代の意識を結んでいる(註63)。そのかぎりにおいて,何ら変更を加えることなく具体的かつ的確な内容を今に伝える漢字は,なおも使用できる世界唯一の文字の情報体系であり,まさに生きたアーカイブといえる。

いうまでもなく,他の古代文明の象形,すなわちメソポタミアの楔形文字,エジプトの聖刻文字,インダス文明の未解読の文字(Possehl 1996)は,中国の象形よりも古くから開発されていた。だが今日では,中国の象形以外(註64),三つの文明のもとで発明された古代文字は全

て消滅し,研究者や好事家のみが注目する文化となっている。しかし,こうした象形の内容は,後述する印章や彫刻・壁画と同様,王の倚座姿勢や対面者側の跪座姿勢を具体的に示す内容を含み,美術史や歴史学のみならず,文化人類学や人間工学,医学,さらに整形医学や生体機構学(BioMechnics)といった領域にも姿勢の根源的な意味を含んでいる。にもかかわらず,これまでこのテーマに関する考察がほとんどなされてこなかった。その間隙を埋める。本研究の意図の一つがここにある。

# 第２章

# 姿勢と形態的研究

## I.　姿勢表現の原型と展開

文化人類学の研究をまつまでもなく,姿勢や身振りは地域や民族毎に多少とも異なる.それについてはある有名なエピソードが知られている。ギリシャの儀仗兵たちが英国のチャーチル首相を迎えたときのことである。彼らはあのＶサインをもってこの第2次世界大戦の「英雄」に敬意を示そうとした。ところが,ギリシャでは掌を相手に向けるのは侮蔑の所作となる。反対に掌をこちらに向ければ,イギリスでは同様の意味をもつ。そこで彼らはどうしたか.掌を自分と垂直に構えたという。いささか出来すぎた話といえるが,マルセル・モースはこうした所作を「身体技法」(註1)とし,その背景に文化的伝統をみた(モース 1974)。

本研究の枠内でいえば,たしかに足を人に向け伸ばす行為は,東洋の姿勢観の一部では軽蔑を意味し,平座で礼を正した衣装と姿勢(註2)が玉座に相応しい身構え(註2)となるが,欧州人はそうした身振りに特別の意味を求めない。古代ギリシャ人は神が薄着や裸体で椅子に座ることがより人間的だとする価値観があった(註3)。 日本人をはじめとする仏教徒の合掌は,胸の痛みや慈悲の心のうちを表現するが,西アジアで両手を胸の前に整える姿は,神の前の敬虔さを表す(註4)という(Goldman 1992)。文化人類学者のレイモンド・ファースは,姿勢が身体全体の状態ないし位置であり,身振りは身体の部分の構造化された運動,たとえば腕や頭の位置の変化としている(ファース 1996：p.345-6)。この指摘は,各種の造形遺物からうかがえる玉座の座像表現で,王が身体全体を用いながら静止状態で座っているがゆえに,これを「座姿勢」とする本研究の用語法と過不足なく符合する。こうした静止姿勢は,信仰のなか即身仏のミイラ座像や仏陀の涅槃横臥像にもみてとることができる。これと対照的なのが,特に舞踏の身体技法である。一瞬の静止姿勢はとるものの,そこでは身体が構造的ないしコード化された象徴的な表現をとる(Barba　and Avarese 1991：pp.228-237)。

こと座姿勢の研究に関していえば,これまで少なからぬ研究と考察がなされている。古くは歴史的側面から古代の胡牀を研究した藤田豊八(藤田1943：pp.143-185)(註5)があり,より新しくは戦後まもない人間工学の導入期に,腰かける立位の姿勢が平座より優位であるとした野村茂治の研究(野村1963)がある。野村以後,人間工学や整形医学では快適な椅子のデザインを目指す取り組みがいろいろ行われるようになり,たとえば椅子の快適性デザインを追究した小原二郎は,鉄道車両から事務椅子の様々な動作と姿勢を扱った(小原1989) 。さらに野呂影勇は椅子の快適性という視点からはじまり,さらにこれを心の装置としてとりあげた(野呂1989a：pp.161-189)(註6)。さらに西洋の座法と関わる語彙に比して日本の腰かけや椅子に関係する語彙が少ないことを指摘し,さらに普段の生活実態を反映した姿勢を研究した(野呂・片方1994) 。またMandalは,外科医の立場から乗馬の座姿勢,エジプトの人物座像を例示した研究で,脊椎の自然なS字状カーブが上半身を正面に真っ直ぐ保持できる座面の前傾(註7)を推奨した(Mandal1985)。こうして姿勢と座具の研究は,情報環境のなかでエルゴノミクスデザイン(野呂,服部,1999)にまで拡大し作業性と汎用性の良い椅子が経

済・産業面で関心を集めるようになった。一方で特別な玉座の研究が依然として未開拓の状態のまま長く置かれていたが文化との融合の提案(服部1999:pp.106-115)をはじめ関心の高まりがある[註8]。

多少論述が前後するのを承知でいえば,姿勢を形態的な「カタ」にまとめあたヒューズは,世界各地の民族・文化・伝統に見いだせるある一定時間の静的な姿勢を形態的に分類し,前述したマルセル・モースの身体技法に影響をうけながら,「ある一定時間の静的姿勢」を図表化しまとめあげた(Hewes 1957 : pp.123-128) 。一方,姿勢には伝統と流行の側面があり,たとえば東アジア特有の平座の伝統的な慣習は,椅子を中心にした起居の生活変化が進んだ結果,今日では大きな変容をこうむっているとする指摘もある(井上2000) 。(図4.1－2)以下ではヒューズの姿勢の形態的分類研究を参考に,(１)平座ないし平敷の姿勢,(２)腰掛けの姿勢,(3)横臥,そして(４)立位で杖や槍ないし棒によりかかる姿勢について検討する(各姿勢の具体例は図4.1に示した) 。 (図4.1－2)

**(1) 平座 (正座,割座)**

平座姿勢の特徴は,尻や膝を地面あるいは床(座面)に直に接する点を, いわゆる床座とも呼ぶ姿勢である。世界中から事例を広汎にとりあげたヒューズの姿勢の研究は,地域固有の伝統姿勢とされた胡座,片立て膝の平座や投げ足といった独特な姿勢が,じつは西アジアやインドに広く分布することが一連の研究で明示した。この姿勢の地域性に対して,入澤達吉は中国と日本の平座を特徴的に分類している。すなわち,床や畳,敷物(筵)を敷いた上の平座を「坐」とし,さらに中国の文献記録から他に尻,跪,居,箕踞に四分類した(入澤 大正9年a) 。そして入沢は平座を歴史的な伝統と図像的に一貫すると結論づけている(ibid. 大正9b)[註9]。実際の座像資料は,前2千年紀・縄文時代後期の両立膝で尻をつけた合掌する土偶(国宝)が立て膝で平座する姿を示している(文化庁2009:pl.40)。(図4.2.(11－13))

図5.1に「坐」の象形, 図5.2に羌族,図5.3に漢族の平座例をそれぞれ示しておいたが,古代中国で,平座のなかで正座の姿勢は,象形の語義と語形が示すように,神前に伺いを立てる際の坐として膝頭をそろえて曲げ足裏に尻をのせ地面に直に肌を接し座る礼儀正しい座姿勢であった。その平座と跪座像は,殷王朝があった河南省安陽市小屯殷墟から玉製の人物や怪獣の平座像(李済 1982 : pp. 130-132)が,獣骨に刻まれた象形とともに出土している[註10] 。次にひざまずく姿勢で膝頭と脚指先を地面につけて拝礼する姿をさす「跪」の文字をみると,跪座は神の命,命令をうけた際の座法とされる。丁度「坐」が神の審判をうける姿勢に対する姿勢である(白川2003:7画,8810)。

こうした座像表現は後代にも多数ある.たとえば漢代の中国では,儒教が国教化し,儀礼的な「立則視足,坐則視膝(坐すれば膝をみる)」(池田 1973),すなわち正(平)座が礼儀に則る(漢族の)座法とされ[註11],馬車を操る御者にも適用された程である(本田 1973) 。さらに儀式や礼儀を優先した漢の文帝(前280～157)は,地面に席を設け,平座で主席に座って懇談している。おそらくそれが儀礼的に則る正式な作法の座像表現である。たしかに,当時の画

像石の表現では,従者が「踞」や「箕踞」で主席に拝礼し,敷物は莚と席だった。すなわち,礼儀ある座法とは,まず主席となる人物が正座して膝をつけ,尻を足裏上にのせて席より大きい筵の上に座るものだった(註12)。こうした座の配置は,儒教の考えに従った儀礼で,まず長上者,ついで身分や長幼を重視して配置を定めた(池田末利1973:士冠禮, pp. 4-5)。跪座で蹲う(つくばう)い平伏・平身低頭する拝礼する人物は,その身分が相手より低いことを表現している(中国美術編輯委員会 1988)。

漢族以外の異民族の座法としては,胡座や片立て膝の平座,足を垂らした垂足而座,さらに交脚で腰掛ける半跏座や倚座があるが,これらの座法はシルクロード交易や仏教文化の流入過程で中原に伝わってきたと思われる。霊帝(167～189)の頃には胡をつけた用語も増え,起居にも胡座や胡牀(註13)が加わり,その装置も牀(臥位＝寝台用)と榻(腰掛け)の２種類になる(范曄 2001:巻23)。そして,その流れが隋唐時代の中国,さらには日本に及び,前述した正倉院の「胡」を冠した御椅子「赤漆欟木胡牀」へと行きつくのである。

ちなみに,日本で正座や割座といった姿勢は,背筋を上に伸ばして両脚を折り,足の甲を床面に接して座る特有の姿勢で,入澤の研究で元禄享保時代(1694～1736年)以降に定まったという(註14)。

**(2) 跪坐**

膝と足先を地面につけて跪く跪坐の姿勢は,前述した入澤やヒューズの分類にもあり(図4.1.2(101,105,126～131)),白川が指摘する象形の語義とも合致する(白川 1996:13画－6711)(註15)。こうした跪座姿勢の一つに,膝を地に着けない蹲踞(そんきょ)は,(白川 1996:19画－6814)仏教の座法で蹲踞(そんこ)に相当し,目上に対する最敬礼と受戒時の礼式で,人に敬服を示す姿勢である(註16)。跪座は三分類でき,その一つが頭より膝までを一直線に伸展か直角に折り,膝から下の下肢(下腿)と足の甲は床に密接する姿勢である。もうひとつの跪座は,足の甲を地に着けず,両方の踵で臀を支えながら,足の趾は残らず足の甲の方に曲げて地に着け,それで全身を支える日本流の座姿勢である。その足裏は後方から全部見える。三番目の跪座は,いわゆる蹲(しゃが)む座姿勢で,両膝を折り頭や胸につけ太腿後側と下腿の前側に接触させ眼と足を平行にして足裏を床に着ける座法である。(図6(1-3))

跪座像の造形表現の一つに,殷墟遺跡出土の玉製座像(李済　昭和57:pp. 130-132)(註17)や侍女が跪座像で灯籠をもつ漢代の長信宮出土の灯具がある(黄能馥,陳娟 1999:図版2-16,東京国立博物館 2000:図版100)。また,前漢時代の雲南省にあった滇国の豪族墓から出土した銅製の男子俑は,日傘をもつ跪座像である。こうした跪座は,宮廷における拝礼の姿勢として,殷の時代から20世紀初頭の西太后への拝礼まで度々登場する(東京国立博物館 2004-2005:図版65,ジョンストン 2005,p. 347)(註18)。

跪座は,神の啓示を受けるために跪く姿勢である(白川静2003,8画　8062)(註19)。この跪座の座像を表現したものは,後述するメソポタミアの印章(註21)をはじめ,ギリシャ,エジプトの図像で天に拝礼する人物像の姿勢として数多くみられる。さらに跪座は,インドの仏伝図

「燃灯仏授記」(栗田2006)[註20]をはじめ(図6.(5)),西アジアから東アジア各地へと伝わっているが,明らかにそれは主人－従者,目上－目下の関係を表すものといえる。これら三通りの跪座以外には,結跏趺坐や半跏趺坐[註22],胡坐,投げ足,箕股・箕踞[註23],立膝などがあげられる。このうち,仏教では結跏趺坐は如来の座像,半跏趺坐は中宮寺や広隆寺の弥勒菩薩の座法が知られる。胡坐については『古事記下』に「胡床居の神のみ手もち」とある。これは胡床の胡床居(あぐらい)を指す。この胡床(あぐら)とは,足(あ)と座(くら)に由来し,御椅子につく時の座法である[註24]。

**(3)　投げ足**

一方,投げ足の姿勢(図4.1の50～76)[註25]は,文字通り脚を投げだして尻をつける平座姿勢であり,正反対の座法に膝を抱え込む姿勢(胡座,結跏趺坐,片立て膝の平座)がある。この投げ足は,西域から中央アジアにかけて,そして古ヨーロッパ各地で出土した土偶に多く見られ,メソポタミア1期の印章座像にも少なからず登場する(岡田1995:pp.50-61,フロン1987:pp. 22-24)。 (図4.1.2(70-76))。

地母神の投げ足の座像は,古代西アジアから東ヨーロッパの新石器時代の遺跡で出土するが,不明点も多い(Goff 1966 : fig.102-107)。文化人類学者の川田順造は,投げ足姿勢における脚部と腕の関係と道具つくりとを結びつけ,特徴的に作業のしやすい姿勢の「カタ」と道具の「カタチ」が直結しているることを指摘している (川田1992 : pp.18-22).身体の尺度が座具や座臥具にも通じることと同じである。

**(4)　胡座,結跏趺坐,片立て膝の平座**

膝を水平あるいは垂直に抱える姿勢としては,胡座や前述した結跏趺座(図4.1の80～89.5),半結跏趺座(図4.1.2の84)がある。安陽の殷墟遺跡から出土した前出の玉製座像は,正座,跪座,両膝立て開脚の平座像があるが,胡座や半跏趺座,あるいは結跏趺座の類の姿勢表現がない(山田2000)。このことから,古代中国の胡座姿勢は,漢代の仏教の流入(金子2006:pp.316～317)とシルクロード交易による胡人の交流を契機として,西域との活発な交流に伴い仏教が出家信者よりも民間の在家信者を中心に浸透したとされ,六朝時代頃以降に一般化したと思われる(山田2000:pp.337-344)[註26]。膝を抱え込まないで両足をなげ出した形にすわる箕坐(きざ)姿勢は箕踞(ききょ)とも称している。(図7)

垂直に膝を抱え込む姿勢は,片立て膝の平座(図4.1.2の120～125,127～130)がある。前者の座法は,片方の膝を立て,他方が尻や下肢,足の甲を床(地面)に直につける姿勢で,後述するメソポタミア文明前3千年紀の印章に同様の座像が多数表現されている。脚部を抱え込む姿勢は,脚を自由にできる片立て膝から完全に抱え込む睡眠の姿勢まで幅広く[註27] ,世界的にみてその分布も赤道をはさんで広範である(Hewes 1955)。(図7(1-3))

**(5)　立位**

立位の姿勢は,いうまでもなく人類が猿人から直立原人への進化の過程で二足歩行を選択し,人類に高く広い視点を与えることになったほど太古にまでさかのぼる基本姿勢であ

る[註28]。玉座における立位は,こうした遠古からの姿勢を受け継ぎ,これにより玉座の主人公は天から天下を見おろす視点を獲得することになった。加えて立位は,腰掛ける姿勢よりも高い位置にあるが,結果的に立位のための玉座が作られることはなかった。
一方でヒューズの研究例(図4.1の22－26.5)には,立位で杖ないし槍や棒によりかかり,力を誇示する姿勢がある。象形の「倚」の語義通りに,身体を杖や槍(太刀,武器)に身をよせ,社会を統率する人物や神の立像も多くの美術表現に残っている(白川 2003:10画2422)。

身をよせる姿勢の造形表現は,前述した正倉院宝物の御椅子やアケメネス朝ペルシャの座像の「カタ」と玉座の「カタチ」以外にもある。たとえば古代ギリシャにはニケが槍や楯を片手に寄せる立位の姿勢(倚立像)がある。エチオピア南部スルマ地方のオモ川流域のスーダンとの国境沿いの地域で営まれているキビッシユの祭り[註29]では,槍の争奪戦による勝者が権力の象徴となる儀礼を伝えている(Turton 2004)。

**(6) 倚座**

倚座は(椅子に)腰掛ける座姿勢と異なる。前述の象形による解釈に従えば,玉座の上で背板や肘当て,ならびに足台に身を寄せる姿勢となる(白川 2003：10画2422)。象形が未見の時代にあった『説文解字』で‘倚’の解釈は,「倚也,从人奇聲(一)」すなわち,「依るなり」-他のものによりかかる状態をいう。「依る也,人に从ふ」として象形の解釈と通じる内容となっている[註30]。玉座の「カタチ」は,倚座姿勢をとることができるよう,座面(席)に背板,肘当て,足台といった構成部材を必要とする。

## II 「座」の象徴的表現

姿勢観を反映した象徴的な平座姿勢の表現は,前述してきた殷の座像のみならずエジプト,メソポタミアやインダスの神々がとる聖なる姿勢が一般的であり,ペルシャ, ギリシャ,エトルスク,ローマ世界の椅子に腰掛ける姿勢観と異なっている。エジプトの王(ファラオ)やメソポタミアの倚座像表現は天に通じる姿勢と見なせるが,対面する側の王宮官房の書記官や高級軍人,家臣,従僕たちは胡座や片立て膝の平座が普通だった。これに対し,奴隷達の姿勢は平座で胡座,片立て膝,蹲踞,跪座など,様々な平座姿勢をとった。

後述するように,インダス文明のモエンジョ・ダーロやハラッパ都市遺跡から出土する方形印章の図像や彫刻には,玉座像をふくむ姿勢表現がある(Kenoyer 1985：Fig.6)。その詳細は次章に譲るが,インダス河文明特有の方形印章に見られる玉座座像としては,たとえばスツール(小椅子)の上にシバ神の胡座像[註31]がある(Makay 1937：p.38,Gyselen et als.1992)。この座像は,動物の角状の頭に被りものをつけ,腕輪や胸飾り様のもので身体を装飾したシバ神(Siva Pasupati)の祖形とされる。座像の周囲に未解明のインダス文字と神獣が描かれている(前掲,Kenoyer 1985)。その座の「カタ」は,正面に向きで両足のかかとを会陰部につける結跏趺座(Sida Asana)をとる[註32]。座は背もたれと肘当てがない低い座

面のスツールで一般的な背板や肘掛けがつく腰掛ける椅子と異なる。モエンジョ・ダーロ出土遺物にほ,ほかに石製座像がある。顎髭をのばした人物が結跏趺座あるいは片立て膝で平座するアラバスター(雪花石膏) 製の人物座像は,神殿跡で出土しているため,神官あるいは祭祀王といった特別な人物か偶像とされる。本印章のスツール上の胡座表現とインダスの未解読象形文字の組み合わせは意図不明だが,インダス文明における座法は,古代より平座と腰かける座といった重層的歴史があり,そのなかでスツールと様々な製作材料による座臥具が多様な発展をとげてきた(Murthy1982)[註33] 。(図7.1(1-7))

一方,地面に直接肌を接する胡座や片立て膝の平座姿勢は,インダス文明の独自性というよりメソポタミアがメラッハと呼んだインダスとの相互交流を物語る。実際にメソポタミアのテルアスマル神殿出土の座像とインダス文明のモエンジョ・ダーロ神殿址出土の石製片立て膝の平座座像や後頭部に髪を結う表現に共通性がある。

ギリシャの「歴史書」でヘロドトス(Herodotus:紀元前485頃-420年頃)の『歴史』(ヘロドトス 1967)やアッティカ(アテネ)といった都市国家(ポリス)が民族の平座姿勢を特別視している。たとえばギリシャの属領ナクソスのドラクマ銀貨(前440年頃)は,胡座,片立て膝の荒々しいデォニソス神の平座像を表現している(Sear2000 : Vol.1,no.872-875)。ギリシャ世界で貨幣の神像は,時の王権がその正当性を表現するため,統率者である王,王家,ならびに守護神ゼウスをはじめ肖像や民族の文化の象徴を象徴的に用いている。マケドニア朝のアレクサンドロス大王(前359－323年) の像を刻んだ貨幣(Errington& Cribb 1995:pl.10-12)を代表として,ギリシャの都市国家が発行した貨幣は,表側に王の肖像,裏側に王家を守護する最高神のゼウス神の端正な玉座倚座像,ニケといった都市の守護神の立像を採用している(Sear 2000:pl.6713-6724)。この点においてデォニソス神の貨幣の図像が他の神の座像,立像の表現と比較してインド帰りで若く乱暴な性格を持つ新しい神の性格を平座像として採用し際だてた表現となっている。両貨幣の図柄は,ギリシャ人が椅子の座姿勢の優越性を誇り,椅子を持たない東方世界の遊牧民族の平座,敷物の上に直接座る起居の姿勢観を未開で劣等とする民族観を反映した証拠でもある。(図7.2(1-2))

## III 「倚」の座像と立位・臥位の象徴的表現

倚座姿勢のもとになる象形「倚」の語義は,前述したようにものに寄りかかる姿勢である。この場合の奇の字は,把手のある大きな曲刀(白川 2003 : 8画4062)を意味し,細身の曲刀の場合を辟(白川 2003 : 13画7064)であらわす.玉座に則していえば,この形が寄りかかるモノは,権威を象徴する槍,王杖,ならびに玉座である.従って玉座は,倚座姿勢と倚座が可能な背板(前出),肘当て,足台といった形態を有し,単なる腰かけの椅子の役目をこえる要素となる。座る目的の倚几は,よりかかる台,ひじかけ,机や台によりかかることを示す語である。立位の場合の槍や太刀に寄り添う立位の姿(倚立像)として象徴的な姿勢の範疇に入る。

貨幣の図像は,前述したマケドニア朝アレクサンドロス大王をはじめ,その末裔にいたるまでの王権が発行した貨幣の図像例のようにゼウス神の玉座の倚座表現と同じくらい楯や槍を持つゼウス,ニケやアポロ神の立像が多い (Errington & Cribb 1995:pl.16-26)。

アレクサンドロス大王がインドより母国へ帰国途上にバビロンで死亡してのち,部下の将軍がシリアのセレウコス朝(前305－84年) を興し,ギリシャ系の神々の倚座像をもつ貨幣を発行した(ibid. :pl.13-14)。以降アルサケス朝パルティア(前250頃－227年頃),インド・グリーク,グレコ・バクトリア朝(前256－20年頃)の倚座・倚立像は,ギリシャの象徴的な表現にならった。一方でマウリア朝時代の貨幣が蓮華上の座像,遊牧民族の王朝であるインド・スキタイ朝,インド・パルティア朝(ibid.:pl.27-33)には,敷物の上の胡座,玉座についた倚座,ならびに騎馬の座像表現があり,出自民族の起居の姿勢観を反映している(註34)。

イラン系遊牧民族が西のローマ,東の漢という二大帝国にはさまれ北西インドに興したクシャン朝(紀元1～3世紀)の貨幣の図像は,インダス文明以来の伝統的な座像の象徴的表現を蘇らせている点が注目できる。クシャン朝カニシカ一世(在位紀元100～126年頃)は,インド土着宗教である仏教に関連し3種類の弥勒菩薩座像ドラクマ銅貨,および釈迦牟尼仏陀立像のスタテール金貨を発行した。その図像は,ギリシャ語でBuddo (仏陀)と Mitorago Buddo(弥勒仏陀)の表記と共に足台が附属したスツールの上で胡座の姿勢をとっている。この座像は,玉座上の座姿勢として平座,結跏趺座,半跏趺座,長跪と手印が組み合わさった,インダスの印章の伝統を引き継ぐ仏教の表現である(註35)。クシャン朝の貨幣図像には仏教を優遇した仏像表現があり,クシャン朝の統治下の領民が多くのイラン系や中央アジアの神々を信仰するにしたにもかかわらず,貨幣図像に仏教を優遇した (ibid. :pl.34-39)。理由は,シルクロード交易の要衝である領土を安定統治するため,インドの仏教徒のみならずガンダーラ地域に根づいた様々な信仰を取り込み仏教の美術と国際化に貢献が不可欠である。そのため貨幣図像にも仏教や他の伝統を取り込む必要があったためカニシカ1世は,クシャン朝貨幣の縁取りでイランの連珠文を採用したが,中でも領地で信仰を集めた仏教の座像を特徴的に表現した(ibid. :pl.197-199)。図像の表現は, イランや中央アジア系民族の守護神の日神(Mioro),月神(Mao),火神(Athsho),水の女神(Nana・Nania(バクトリアのAnahita),風神(Oado)など倚立像が多数にもかかわらずである(Rosenfield 1967) (註36)。インドにおける胡座,スツール,並びに玉座担ぎの座像表現は,その後1500年以上を経てムガール朝三皇帝のアクバル,ジャハギール,シャージャハンが継続して表現することになる(Beacg & Koch 1997:pl.3,4,14,17,19,33,142,143) (註37)。

一方,「立」は,人が正面に立つ象形を語形にしている.立法・立制などで「立」が全ての端緒をなし創建や秩序・基調を確立する意味に用いる(白川2003：5画0010) 。特別な人物や神が太刀,槍,杖,三叉戟に身を寄せる姿で「倚」の語義・語形と共通の姿勢である(註38)。

威儀具の一種の杖(ドンガ)を奪いあう,キビッシユの祭り(前出)は,杖の奪い合いで争奪した勝者(王権の獲得者)が杖に身を寄せ勝利を誇り部族集団の統率者の選抜方法と関連づ

けられる(Turton. 2004). 勝者の杖を持つ姿が‘倚’の語義と語形を彷彿とさせる[註39]。実際に片足立ちで槍に身をよせた倚立像の姿勢は，図像で重要な主題となって西アジアから地中海世界各地で図像表現をみた。メソポタミアのマリ(現代名テル・ハリリ)で前1810年頃とされる印章図像は，王杖に身を寄せた象徴的な人物を表現する(Collon1987:pl. 679)。倚立像の表現は,アレクサンダー大王のインド侵攻後，マケドニア朝，シリアのセレウコス朝，貨幣図像に登場するトライデントをもつポセイドン,および王の肖像と並んで,槍や楯を持つニケやアテネ神の他,ジュピター神が稲妻,ゼウス神が王杖,デオニソス神が棍棒の例があり,そこでは神と執り物(身をよせるための)が一体的に表現される。

「倚」の語義に従う執り物に寄りかかる立像表現は，アジア世界で多数ある。北西インドで栄えたクシャン朝で仏教を支援したとされるカニシカ王(紀元127～150年頃)(山本1990：pl. 20-194)の立像(図9.1.(3))像が知られ，クシャン朝のもとで発行された貨幣は，シバ神の持つ三叉戟(トリラトナ)，および仏教美術に菩薩が蓮華や経典を,眷属の執金剛神が金剛杵を持つ姿に普通にみられる。東アジアの大国，唐の章懐太子李賢(654～684年) の倚立像(天遊 2002)は,象形の語形通り大刀に身を寄せた倚立像で表現している[註40] (図9.1.(2)) 。同様に中央アジアにあってイラン系王族の座像(Livshits 2002：Fig.95) やソグド人－虞弘墓の玉座座像(前掲,服部2007)の特徴的表現が多数ある[註41]。

今日アジア世界において西欧化がすすんだ。パキスタンのカイバル・パクトゥンクア州(旧北西辺境州)からアフガニスタンにかけて住むイラン系王族の人々の起居は,椅子に腰掛ける姿勢をとるようになっているが,一方で,伝統的な胡座や片立て膝の平座の姿勢も普段から慣習化しこだわりをみせている(Barth 1998, Husain:1962) [註42]。

身を寄せる倚座，倚立像姿勢は，20 世紀初頭のアフリカに進出した英国の探検隊がコンゴ(旧ザイール)で,現地の村人達が数種のスツールに様々な姿勢の写真記録が残る。(図 9.2) 興味深い点は,首長(村の統率者)が高めの椅子に腰掛けて高い位置(天)から(天下を)見おろす視線で,スツールに腰掛ける別の村人に投げかけている(吉田 1997: p. 163)。

一方,臥位は,臥す,うつむく姿勢で,人が臥して下方を見る語形に由来する(白川2003：8画7370) [註43]。臥位は,立位がもつ高い視点から見おろす姿勢と対極をなす,見下される姿勢である。横臥位のための枕や寝台椅子は,身体を寄せる,横たえることが可能な家具である。新アッシリア帝国のアシュルナシバルパルと王妃が寝台と玉座でくつろぐ表現例(があるが(Pritchard 2003:pl. 451),そこでも寝台の位置は王妃の視線の高さに合わせている。
この他にもギリシャ,エトルスク,ローマ,ならびにクシャン朝の美術にベッド状の長椅子の横臥表現があり，ローマのミイラの棺,パルミラの地下墓の王や貴族の夫妻，死者を石棺浮き彫り,仏教美術では仏陀の涅槃の臥位姿勢,高僧の即身仏(ミイラ)など,それぞれ死－再生と死－輪廻転生への想いを姿勢からも表現している。

## Ⅳ 玉座の「カタチ」

古代の社会で，統率者は集団やコミュニティを統一して集団の頂点に立ち,その権力の発展と共に呪物崇拝(註44)や王権が発展する。西アジアでは,採取経済から新石器時代の農耕による定住社会が発達するにつれて,遺跡出土品に統率者の姿を彷彿とさせる土偶座像が出現するようになる。以下,玉座の象徴性を有すると思える玉座の類例を,その座具をふくめてとりあげる。

### 1. 新石器時代後期の座像

#### (1) 地母神小倚座像

まず,現在知られているかぎりで古代アナトリア最大級の遺跡跡であるチャタルフユックから出土した地母神とおぼしき土偶の倚座像を上げる。この遺跡は,チュムラ地方北部コンヤの南東52kmに位置しアナトリアで新石器時代前期から後期にかけて発展した大規模な遺跡で,本座像が高さ15cmの焼成粘土製で神殿II号埋葬跡祭壇付近の穀物入れから出土し,前6500～6000年代前半頃の作とされる(註45)。上半身が豊満な体躯を有するのに対し,発掘当初に破損していた無表情な頭部(頭部,右豹の頭部を後に修復)と両脚を並開脚の正面向き座姿勢をもつ模型の土偶座像である。両脚の間に塊状のモノが出産を象徴しているとされていることから,豊饒と再生を司る地母神の玉座像とされる。発掘者のメラートは,報告書に出土土偶座像,壁画,呪物のための護符類,遺跡全体の様子を述べ,「チャタルヒュユクで発見された新石器文明は,同時代の農耕民の文化に比べ,まるで暗い銀河に現れた超新星のように輝いている」と讃辞したのである(Mellart1970 :pl.184, Fig52,53)。 (図10.1-4)

本座像で注目する内容は,出土場所と姿勢にある。高さ20cmの焼成粘土製という小さな座像であるが,座像が両脇に猛獣の豹を従え,そこに身をよせて堂々と正面向きの倚座姿勢をとる。すなわちこの座像は正面向きに足を揃えた垂足而座の倚座姿勢,および身を寄せるため両脇に肘当ての役目と猛獣である豹に身をよせているために,単に腰掛ける姿勢でないことが明らかである。後代の倚座像は,肘当てや背板(背板･よりかかり)足台がつくようになるが,この土偶座像は,出土場所が室内の祭壇であることからも,豹に身を寄せて侵しがたい象徴的な空間を暗示する(註46)。また,この遺跡にのこる壁画は,当時の信仰の様子を伝えてくれる。壁画は統率者が風葬(曝葬)による埋葬が推定されているが,さらに古くからの伝統的な地母神信仰 (小泉 2001)の形跡(註47)があるため,当時から特定の家址以外に共通する信仰や儀礼の存在が示唆(註48)されている(江上,禿 1995：pp. 140-142)。

一方,現在も継続して発掘過程にあるチャタルフュック(Hodder 2005)と並ぶハジラル遺跡(前5700～5600年頃)からは,個人の所有物と象徴的な特徴を有する地母神座像(焼成粘土製),様々な印章,装身類,化粧皿などが出土し(Mellaart 1970,Temlzsoy1995：pp.18-27),チャタルフュック遺跡と同様に一種の呪物崇拝を物語っている (トルコ文明展組織委員会 1985: Fig.33,34)。

こうした地母神座像がはたして実際の玉座を摸したものかという疑問がある。実物の座像と玉座の実証する品がなく,またチャタルホユック遺跡以外に比較できる遺跡が未出現であるため,この疑問を解明するには,なにより新たな玉座の発見を待つ必要がある。
チャタルフュックおよびハジラル両遺跡は,非定住の狩猟採取の生活から天水を制御し潅漑農耕と定住生活に移行する社会の発展途上期にあって,小集団に属する家族や人々が地母神座像を崇拝し呪物信仰と所有意識が見え隠れする(古野1971)。信仰は,原始的な信仰を統率する巫女がほとんどの儀式を執行した様で,存在感自体が薄い男性神官が比較的小さな役割しか果さなかったようで遺品が少ない(ラジリー1999 : pp.34-35 )。

スツールは,木材か石の彫り出した様である。同様に木材から彫り出したスツールは,エジプトの前3千年頃の王墓からも出土しているが,これは作業者が王墓のなかで置き忘れたとされている。現在のアフリカ各地の部族民がつくるスツールと共通する造形である(Aronson 1965 : 413-414)。(図 12)

メソポタミア北部シャギルバザール(Goff 1966 : fig.120)で出土した片立て膝の平座像(註49)は,姿勢と台(座具)の寸法が不均衡な座具の例である(Mallowan 1936)。地母神が豊饒と再生の象徴とされることから,立像(ibid.トルコ文明展組織委員会 1985:図版 13)や模型像とともに祭祀(献呈)用に祭壇を飾ったとされ,さらに同類の土偶像が各地に影響を与えた可能性もある (Rollefeson1993,日本経済新聞社 1989)。

**(2) 地母神と神官の座像模型**

東のアナトリアと西の古ヨーロッパの新石器時代後期遺跡で出土する像が,共通のイメージを有すると指摘した研究がある(ギンブタス 1989: pp.206-208)。前5千年紀半頃の女神玉座像(ユーゴスラヴィア南部プレデオニツァ出土.ヴィンチャ文化),神官座像(ブルガリアのトゥルゴビィシュテ州,オボチャロボ遺跡)などチャタルフュックの地母神倚座像より1500年後に現れた。バルカン半島北部プレデオニツァ出土のスツール上の女神玉座像(Aronson 1965 : pp.413-414)や他にも先史時代の祭殿(約70平方m)から漆喰を塗った祭壇(2.75×6m)と粘土製の実物の椅子,そして祭壇の上で椅子に腰掛けているミニチュア女性(神か巫女)座像が32体出土している(ラジリー1999:pl.8-9,ギンビタス1989:p.150) (註50)。また前3千年頃後期金石併用時代の小形の神殿模型とともに神官(巫女)3体の座像,祭壇,祭儀用の卓,椅子,大小の祭儀用容器一式が出土している。この座像3体は,身体に黒色の幾何学文(螺旋,雷文,三角形,および太陽文) で彩色された卓を前にした座像である (岡山市立オリエント博物館1979:Fig.7)。一方,神殿模型は,五つの椅子があることから,他の座像があったことが想起できる。古ヨーロッパの遺跡群と出土の偶像が西アジアからの文化拡散の経由地にあたることから,地母神と呪物崇拝の伝播の可能性も考えられる。ギンブタスはアナトリアの座像に古ヨーロッパの出土座像と共通性が有ると指摘している(註51) (ibid. p.150)。この類例がモンダビア・サバテノフカII遺跡だが座臥具からの指摘した研究は少なく,不明点も多い(フロン1987 : pp.66-67)。

古代ヨーロッパ世界のバルカン半島で発展をみたセクスロ文化やスタルチェヴォ文化の複合遺跡から出土した地母神座像女神の特徴は,ハジュラル(前出)の座像表現の特徴と共通性があるとされている(ギンブタス1989：p.141)。また東ヨーロッパで出土した地母神座像は,正面向きに腰掛けにすわる,また乳児を抱き,蛇の模様がつく鳥のように首が長いためギンブタスが蛇女神と呼ぶテラコッタ製座像と四脚のスツールが特徴的である。

円筒形態をもつスツールはイスラエルのギラット遺跡(前3700-3500年頃)出土の地母神座像とともに登場する(註52)。座像は,右手で壺を頭にもち左手で赤ん坊を脇にかかえ,植物繊維(籐材,柳)を円筒形態の構造の中間部を束ねてで製作された形態が花のつぼみに似ている特徴がある (Ben-Tor1992,Murthy1982:pp.56-62,Fig.XII-XIII)。この地母神がもつ壺の中身が不明であるが,大量の花で死者を埋葬したと思われる北イラクのシャニダール遺跡の事例から,旧石器時代後期にすでに死者を崇拝する風習があったとしている(岡田1995：pp.33-35)(註53)。円筒形態は,チャタルフュックの地母神倚座像や四脚の座具と比べ正面性がなく,自由な位置から腰掛けることが可能な特徴がある。円筒形のスツールは,今日まで世界の各地で普段に用いられている。中国の円筒形のスツールはシルクロード交易の盛行とともに西域からもたらされ,石窟寺院の壁画に描かれ「墩」や「凳」の名前で呼ばれた(李宗山 2001:pp.204-218,服部2006:図5,7)(註54)。ただ王朝家具が多数出土したエジプトは,円筒形態のスツールおよび小形の玉座にも該当品がない。

新石器時代の遺跡より出土する座像や席の痕跡は,二足歩行を始めた人類の様々な起居の文化が始まっていたようである(註55)。しかし,個々の発掘の研究は,総じて出土品の形態＝「カタチ」に関心を向けてきた。特に新石器から金石併用時代にかけては,出土品がないため,その作業はたしかに貴重なものといえるが,玉座の研究は未開拓な状態に据え置かれているのである。

チャタルフユック遺跡から出土した地母神座像には,様々な説明がなされている.しかし,出産や幼児を抱く地母神とされる座像は,前述した古ヨーロッパやメソポタミア前4千年紀頃に先行する座像からエトルスク時代の守護神倚座像例(註56)が数千年後に伝統を引き継ぐ座像となって現れる(Richter 1912:pl.433)。新石器時代の座像表現の一般的傾向は, 年代や地域により差があり一様ではないものの,特徴としては男性では椅子の座像が多く,女性の座像では直接臀部を地面につけ両膝を曲げる立て膝の一種で平座する例が多い。(図11)

新石器時代遺跡の出土偶像や地母神,ならびに集団の統率者の座像は,死－誕生－成長－死－再生という信仰の痕跡を裏付けている。しかし,玉座がはたして実物を模して製作されたかどうか,つまり実物の模型かどうかは不明である。特に玉座像の表現は,前提として古くからの神話や信仰を継承する社会,集団の意識と集団を統率する人物の登場で始めて成立するのである。しかし考古学者の見方は,玉座(その祖型を含め)を含むか不明であるにしても,すでに石器や壺など実用的な道具製作が行なわれ定住できる住居が当時において製作可能と考えている (ラジリー1999：pp.330-335)(註57)。西アジアや古ヨーロッパ出土の地

母神座像は,宗教以前の原始的な信仰や定住社会の出現,さらに都市や社会の統率者と執り物との関係を示唆するものかもしれない(チャイルド1994,小泉龍人2001：p.3)[註58]。

## 2. エジプト王の玉座

エジプトで出土した王朝家具は,豊富な情報を現在まで提供してきた。エジプトで王＝ファラオは神の化身と讃えられ,その座像は,象徴的に用いられたなかで,エジプト新王朝時代のツタンカーメン王の玉座は,盗掘の被害が最小限の王墓からほぼ完全な状態で宝物として発掘され関心を集めてきた(図13.3(1－5))。しかしエジプトの玉座は紀元前3千年紀頃に遡る王の玉座像の歴史があり,新王国18王朝(前1550～1307年)のアメンホテップ四世をはじめ総勢13の王達の所有していた玉座が残されている。とすれば,研究者たちがツタンカーメン王の玉座だけをとりあげるのはいささか偏りがあると言わざるをえない。物質文明観から黄金製の玉座を重視し,反対に石や木製の玉座を軽視し,さらにエジプト,西・中央アジア,インドならびに中国にかけて一般的に見られる平座の姿勢観に対して,腰掛ける座法を重視する傾向（RichterG.M.A.1912, 野村茂治1963,ダンピエール2009）が否めない。

エジプトは古くから王の玉座座像以外に書記官の胡座像や職人の作業姿がたびたび彫刻や壁画に表現され,様々な座具の「カタチ」が存在していた。そのなかには前3千年紀半頃の古王国時代の木を削りだした三脚や四脚の背板がない腰掛け（Killen1966：pl.45-46）が残るが、それは王墓の建設に関わった職人が作業用に用いた遺棄品(王墓不明)とされる。(図12.1.1)。またエジプト古王朝の第一・第二王朝（前3100－2686年）頃の腰掛けは,個人用印章にネート女神(Neith)が四脚の腰掛けの座像彫刻がある。この腰掛けと類似形態と見なせる本格的な四脚スツールが同時代の壁画浮き彫りに残っていることから技術が高まっていた[註59]。(図12.1.2)

この腰掛けの「カタチ」は,新石器時代後期の古ヨーロッパやシリア出土品と後述するメソポタミアの円筒印章の図像と類似性がある。さらに前述の木を削りだしたエジプトの作業用腰掛けと同じ形態のものがザイール(コンゴ)のエフェ村で撮影された人物座像の写真記録から克明に読み取れる(Schmalenbach 1988)[註60]。もとより,これだけの証拠で多くを断定するわけにはいかないが,少なくとも太古の腰掛けの製作にかかわるこうした技術と用法は,多少の曲折を経ていながらも継続しているといえる。事実,同じザイールのパンガ村で1905年に撮影された住民の腰掛けもまた,木材を削り出した腰掛けを使用している(吉田憲司1997：図67, 68a)。写真中央の人物は左右の村人を見おろす姿勢の「カタ」と視線の位置にある。それを可能にするのが,削り出して製作され高低差をあわせもつ腰掛けの「カタチ」であることが見逃せない。

玉座に話をもどしエジプトの初期王朝時代にあって第二王朝最後の王カーセケム(Khasekem・前2674～2647年)の玉座像（Russmann1989:pl.6)は,王位更新祭の服装で白帽を頭にかぶり,手と膝を揃え身体を真正面に向けて倚座する威儀を正した姿勢をとる(図13.2(1))。この座像を注目するとわずかな立ち上がりを見せている背板の立ち上がりは,す

くなくとも座面に座する際に上半身を位置決めの関係－背板で支持し(一定以上後退できない),同時に正面からの着席位置を定める。この座姿勢の「カタ」と背板の「カタチ」の関係は,後述するメソポタミア2期のウル王墓出土のプ・アビ王妃銘の印章座像(図22.1-8)の玉座と通じる姿勢を正す特徴を持ち，玉座が単に王の座席の役目を越す王権の象徴性をみせる。神である王の玉座は，足台を兼ねた基壇に斬殺される敵兵の姿を彫刻している。本玉座像は,王位の更新祭(セド祭)にむけ製作され,在位30年に及ぶ王の肉体的な力の再生と上･下の全エジプトの支配を象徴する。玉座につく王は，祭典用衣装を着用しこの祭を繰り返すことで王の再生が約束される思想に立っている(Russmann1989:pl.1,マレク 2004：75-77)。カーセケム王が活躍した初期王朝の第二王朝末期が次の古王国時代で第二王朝から第三王朝への王権交代の道でファラオを頂点とする中央集権の国家体制が確立する過程で巨大なピラミッド建設の時代，エジプトは発展期にあった(大城2010:pp.138-140)。

ついで古王朝時代のカフラー王(Khafreの第四王朝･前2613～2494年)の閃緑岩製玉座像は,王が王冠とともに被った頭巾(ネメス),さらには王名を表す印(カルトーシュ)に端正に正面に向いた座姿勢をとる神の座像と聖刻文字(ヒエログリフ)が揃って示されている(ibid.:pl.6,ibid.pp.104-106,図版54)[註61]。通常では玉座の主人公の座姿勢の痕跡が残らないのであるが,幸いエジプト王の玉座は，石製の彫刻，壁画，ならびに背板の浮き彫りに生前の王の座姿勢の「カタ」と「カタチ」を同時に残している。

なかでもエジプトの新王朝時代で黄金製の豪華な出土品で有名なツタンカーメン王(Tutankhamen,前1361-1352年)王の玉座は,出土品が全部で6点あり,足台が8点ある(リーブス1993：312-314)。浮き彫りでは王が左手を玉座の背板にかけ,足台に足をのせてくつろいだ様子で王女に香油をつけてもらっている仲むつましい光景を浮き彫りしている。玉座の肘かけの側面にある透かし細工は,上･下エジプトを象徴する複合王冠をいただく有翼の聖蛇(ウラエウス)で飾り,王の初期の誕生名を残す。玉座の背面と中央の縦かまち両側にも聖蛇の装飾がある。玉座前部の二脚は,神獣として獅子頭部と脚の爪先で獰猛さを強調した表現となっている。この倚座像と神獣をともなう模型の玉座[註62]の例(京都文化博物館2005,図版168)があるため,前述したチャタルフュックの地母神座像と同様の象徴性を持たせた表現である。そこには数千年を経て受け継がれる造形伝統をみてとることができる。付属する足台(長さ64cm)は,玉座と同様に黒檀類の重い木で作り,表面には石膏と金箔をほどこし,青色ファイアンスと黄色い石を象眼している。その上面は,ヌビア人とアジア人各三人を含む異国の首長たちを足下側に描くことで王の力を強調する。

もう一つの玉座[註63]は,椅子と解説されたもので,前述の玉座と同様に高い座面に背板をつけ輸入した杉材を用いるが,肘かけはない(東京国立博物館1965：図版87)。

ツタンカーメン王の玉座は,製作材料と仕上げ技術が贅の限りを尽くしていることは事実である。構造材は,シリアから輸入されたレバノン杉やアフリカ産の黒檀を用い,その表面装飾に金の薄板で被覆している。また象牙やファイアンス(初期の釉薬),エレクトラム

(金と銀の合金)を用いて象嵌処理を施すなど,精緻で豪華な工芸品となっている(Nicholas and Shaw2000)[註64]。発掘の支援をすすめたカーナボン卿は,王墓の主室出土の椅子6点のなかから特に「黄金の玉座(主室出土品番号1)」を絶賛した(前掲 Carter1923)。 (図14.1(1－5),図14.2(1－2))。実際にエジプトの玉座が高価な材料や高度な技術と,いわば椅子の形態＝「カタチ」の豪華さに目を奪われたために「豪華な椅子が玉座」,「エジプトの椅子が玉座の源流」とする玉座観に偏る。さらにエジプトやギリシャ・ヘレニズム文化圏の王朝家具[註65]以外に玉座の文化を認めないような見解も生じた。エジプトの玉座は,上・下エジプトに君臨し権力の頂点に立つ主人公ファラオが神としてカリスマ性を象徴的に演出する装置として玉座の性格を獲得した発展過程を検証し, 見方の偏りを見直す必要性がある。

### 3. 仮説：天の指向とメソポタミアの玉座

本研究において,筆者は玉座を検証するための仮説を二点提示しておきたい。まず第一の仮説は,玉座が天をめざす指向のもとでデザインされ,天と天下,神と人の境界に設置されたとするものである。第二の仮説は,玉座の発展を促されたその原郷が古代都市文明の誕生をみたオリエントの中核をなすメソポタミアにあるとする。二つの仮説を以下に述べる。

#### (1) 縦断的視点－天と天下の境界をなす玉座

信仰が生活の中心にあった古代,何事も天命により全てのことが決する。人為の及ばぬことを,全て‘天’[註66]とした。なにごとも‘天’は,‘天下を治める’という‘敬天’にもとづく思想である(白川静2003：4画 1043)。玉座につく王が都市の中核に神の代理人として,「天」が「天下」を治める指向のもとで神殿の建設をすすめ,高い天から天下を見おろすことを意図して建築の階段状の門や溝状の建築様式を神殿内部の玉座に適用したと仮定する。すなわち天に通じるよう高きをめざす神殿(ジグラット)が建築される一方で,その内部では同様に玉座が威儀を正した倚座姿勢の「カタ」で天に通じるように見えない役目を担った。そのために玉座の「カタチ」を構成する身をよせる事ができる背板,天に通じる階段として足台と基壇,天との結界の役目となる天蓋を備えたと考える。実際の天を指向した証拠は,都市－神殿遺構の規模や旧約聖書の「バベルの塔」,楔形文字による粘土板文書にみてとることができる。そうした指向は, 今日ではメソポタミアのみならず世界各地で共通的に受け継がれ, 高きをめざして天をつける天国の呼称, 天に君臨する現人神としての天皇,天子の玉座である高御座,その楼閣を天守(閣),摩天楼(前出)という高さを誇る現代建築として共通の概念となっている。

繰り返しを畏れずに言えば,玉座の主人公が神の代理人となって高い天から天下を治める意識は,神神の存在を信仰し, 篤い信仰を実証しようと天を目ざした殿を建設した。天空と関わる事がバビロニアの神話にシュメール語で「アン」と称した「天」が,「地」を意味する「キ」と結合して宇宙の神「アンキ」を創造した神話と印章図像に証拠が残る。

《この世のはじめに,まず天と地がふたごのように生まれました。
次には天神アンと,アヌン,ナキ(神々の集団)がつくられました。
次には母神から,多くの女神たちが生まれてきました。
天と地は切り離され,地上にはイディグナ(ティグリス)川と
ブラヌン(ユーフラテス)川がつくられ,そのまわりには沢山の運河が掘られましたo
イディグナ川とブラヌン川には堤防がつくられ,
シュメールの国土は秩序正しくでき上がりました。
天上には大神たちと,アヌンナキの神々が座って,
これから何をしたらよいかを話しあいました。
大神たちとは,天神アン,大気の神エンリル,太陽神ウトゥ,
地と水の神ニンキで,このなかではエンリルが強い権力をもっていました。》
(矢島文夫1982：p.25)

天に通じる天空神アン（アッカド語アヌ），すなわちアンキ神が古代シュメールで誕生したとする神話である。アンキ神は,シュメールとアッカドの最高神であり,ウルクのジグラット(白神殿)の中心となる。神々の王であるエンリル神(アッカド語も同じ)は大気神であった(Black 1992)[註65]。とすれば,天空神アンを祀るウルクの神殿が神々のすまう高い天をめざしたことも不思議ではない。エンリル神に捧げられたニップールのエクル神殿や,エンキ神(アッカド語エア)のエリドゥ･エアブス神殿などもまた,遺跡の規模から,天に近づく神を意識し建築された(北原1983：pp.29-30)。 天の神々が人間を生みだし人為の及ばぬ天命により天下を治め一切を決する思想である。天への指向は,神殿建築をはじめ様々な伝承や図像が証明する。シュメール人は神殿を中心に集まり,物の取引や情報の交換を頻繁に行ってもいた。それがシュメールの経済を発展させ,世界最古の文明と都市国家を築いていった。

バビロニア神話の古い神殿の様子は,メソポタミア1期の印章図像に神殿が基壇の上に建設されていた事がわかる(Collon1987:pl.748)。その高度な土木技術によって古代都市エリドゥ(現在テル・アブー・シャハレーン)の神殿(ピエコンスキ2004:pp.554-559)や旧約聖書に記されたウルクの城壁の全容が知られ,初期王朝時代に全長9.5kmの二重壁の規模を有していた。後のウル･ナンムの前2100年頃にはウルの神殿(ジグラット)がその上にそびえるようになる（北原理雄1983：pp.29-30)。

大建造物は,メソポタミア以外のオリエント世界で同時代にあたるエジプト第3王朝2代目ファラオのジェセル王(Djoser,在位・紀元前2668～2649年)のサッカラにある階段の形をもつたマスタバ(階段状ピラミッド)の規模と形状と共通性を持つ事も見逃がせない。旧約聖書)にかかれたバビロンのバベルの塔(ウルのジッグラト)は,神殿であり階段の性格の意味が強いのである(天地創造叙事詩ーエヌマ・エリシュ)。共に天上の世界に登る助けが階段状の形であった（Keel,Othmar1996:Fig.149）。

旧約聖書にかかれたバビロンのバベルの塔(ウルのジッグラト)が,以降の都市ニップルやラルサ,キシュなどの国で高みをもつ「山の･･･」と呼ばれ,中期アッシリアの時代の印章にその高かみを継続的に表現された(ibid.:pl.810,Roaf1984:pl.Xiii)。後に 神殿は,塔や弓矢の射口をもち,厄払いの動物や魚の像を配置してさらに高みを増す(ibid.:pl.805-806)。天と神に通じる建造物が王権の力でもあった(註67) 。実際に高山地帯を水源とするティグリス・ユーフラテス川の氾濫に象徴されるギルガメッシュ叙事詩のなかで箱船が高い山に神に助けられたように洪水ですら天から下される天命によるもの，階段が高い天にのぼる一手段とみなされた。神殿の建築光景を表現する印章の図像は，神殿や労働する人間よりも大きな天の神，階段状の神殿を表現し，天が天下を治める当時の信仰と意識が読み取れる(五味 1978,岡田・小林 2008：pp.11-13,49-73)。(図 38.1(1-4))

天に通じ神に近づこうとする指向は,古代日本の最初期の出雲大社にまで及んでいる(註68)。印章には,角で象徴的に装飾された原始的で特徴的神殿(Collon1987:pl.271)が表現されている。この表現は,チャタルフュック遺跡の地母神座像が発見された神殿の装飾と壁画に先行例があり,その特徴はエラム(イラン)では約2500年間も存続した。

メソポタミアの神殿の建築様式があるなかで,その代表が日干し煉瓦製の建築である。この方法は煉瓦の壁と壁龕とを交互に並べ装飾的な壁龕や溝状のリセス(Recess)を様式化したもので,後の紀元前3千年紀末期頃のウル第三王朝以降に玉座の溝状の形状に応用した。またもう一つの建築が南イラクの河床・粘泥地帯特有の葦で作られた建物がある。内部構造は,メソポタミア南部の河床地帯に現存する穹窿のかかったムドゥヒフ(mdhif)とよぶものである。同種の建物から判断して,神殿の内部と類似していたようである。

神殿の階段状や溝の建築様式には,材料と構造の技法をこえて天を指向する階段(神梯)のイメージがある。前述したように,玉座が天から降ってきたとするシュメールの古い伝承を引き継ぐバビロニア神話のような玉座が天と天下,そして神と人間の境界となる指向のもとに作られた。メソポタミアの紀元前3千年紀後半のウル第三王朝のウル･ナンム王から4千年紀初頭のバビロニア帝国ハムラビ王の法典碑に王権神授の図像と王の座像は天と天下が連なる意識を反映しているようである(岡田,小林2008：pp.11-35)。

天を指向する意識を反映している玉座の例は，スーサ出土の神輿に担がれた座像(印影)をすでにあげた。その実物例は,エジプトから神輿のように肩で担げる可搬型椅子(註69)が出土している (Baker 1966:pl.38)。こうした神輿状の玉座は,後に玉座担ぎの主題をとりいれ新アッシリア帝国の玉座やアケメネス朝ダレイオス一世の浮き彫りにのこる(Tanabe Cribb& Wang1993：pp.16-17,fig.1,2)。日本においては,名前通り天に通じるように高みをめざす高御座を担ぎ大嘗祭の儀礼にむかう。玉座を担ぎあげる,あるいは神輿により座するよりも天を指向し天を指向し,高いところから下を見下せる優位性を求めた事があきら

かで,玉座と椅子は似ても非なる発想をもったて発達を見たことが分かる。そして玉座の座姿勢の「カタ」の基本は,立位と横臥位の「カタ」が実現せずに,座面の位置も立位と臥位の中間の高さに落ち着いた。その姿勢の「カタ」は,高めの座面と背板に身を寄せ正面に向いて威儀を正し倚座姿勢をとり玉座の「カタチ」に合わしたのである。後に玉座に付属する足台,肘当てが加わり姿勢の「カタ」が一層端正にして天に通じるように背板に身を寄せるように拘束される。

一方で玉座が高いところから下を見下す姿勢の「カタ」と正反対なのが古代中国における敷物上で地面に肌を直に接する平座姿勢で,主席の位置関係が象徴性を持つとされる(前出・池田末利1973:士冠禮, pp.4－5)(註70)。西アジア以外の玉座は,古代インダス文明が胡座で席につく玉座を,また休息の姿勢に近い横臥位の玉座が新アッシリア帝国やエトルスクの美術に登場する寝台椅子がある(Richter, G.M.A 1912)。

**(2) 横断的視点－メソポタミアの玉座**

第二の仮説は,玉座の発展を促されたその原郷がオリエント(註71)の中核をなすメソポタミアにおいて,空間－時間－人間という基本要素の結びつきによるものとする。ここでの空間とは,メソポタミアという限定された地域の空間を指し,時間とは前3千年紀,そして人間とは,いうまでもなく天の神にかわって天下で働く国王ないし統率者となる。

こうした空間－時間－人間を結びつける歴史的な証拠品が,メソポタミア文明の発明になる印章である(Collon1982:pp. 86-87,Wiseman1967)。印章に残る図像とその主題は英雄や王権神話にとどまらず,王権の頂点にたつ人物と玉座の前で謁見する人々であり,時に楔形文字の銘文が加わり,その関係を明らかにする(松村,永澤 2007 : pp. 16-17)。周知のように,メソポタミアはその文明発展のなかで文明を形成する必然的な要素があった(註72)。例えに「光は東方(オリエント)から」と古代ローマ人が例えたように常に世界最古の文明を指摘されるのがメソポタミアである。近年では,古代ギリシャ文明でもメソポタミア文明の周縁にすぎないとの指摘もある(大城道則2010:pp.45-47)。こうした文明発祥の起源をたどれば人類の祖先のホモ･エレクトスが前180万年頃にナイルの上流の大断層地帯にある渓谷より「出アフリカ」を果たした点にある。結局メソポタミアが人－モノ－文化・情報の経由地となり (ストリンガー2001)(註73), メソポタミアの文明誕生-発展-成熟-衰退とともに王権－国家の興隆を繰り返えし,その過程で次の5項目が玉座に直･間接的に影響を及ぼす。

1)西アジアは,アフリカにいた人類の祖先が陸路沿いに各地へ拡散する過程で必然的な人－モノ－文化・情報の通過地であった。人類の祖先が,ホモ・サピエンス・サピエンスへと進化し(Rudgley1998:pp.18-20),人々が定住する地に西アジアを選んだ(ピエコンスキ2004:pp.258)。人々は,ウバイド文化期(前5千年から3500年半頃)に定住化がすすみ,メソポタミア文明の基盤となる潅漑農業へと道を開いた(註74) 。その後に都市国家にいたるまで集団を統率する神殿の管理者の祭祀王のエン(en),エンシ(ensi),後の王権に連なる人物ルガル(Lugal)が登場する(江上1995)。

2)シュメール人の科学的な指向は,農業,醸造,都市,法律制定,都市,神殿建築と支配者(王権),神殿による物資管理,経済交流などあらゆる分野で文明要素が誕生した[註75]。定住化と新たな居住形態になる都市と初期王朝を支え,印章に特別な人物(祭祀王,巫女,神,偶像)像が表現された(小林2005: pp. 180-181)。

3)メソポタミアは,都市国家が相次いで誕生した。前3千年後半～1千年紀後半頃まで汎世界的な拡がりをもった国は,バビロニア第一王朝,新アッシリア帝国,アケメネス朝ペルシャがあり,各国家の発展とともにメソポタミアと周縁国家との文化接触があった。メソポタミアはエジプトやアナトリアとの交流[註76],戦争による進出があった。そして国内で中心をなす神殿,王宮の建設をすすめ,その中核設備に玉座を設置した。

4)西アジアは,地母神,精霊,神獣,巫女を動員する原始的な信仰があり,後に多神教の信仰,宗教へと発達した地である。エジプトやメソポタミア世界,ギリシャならびにローマ世界の多神教から一神教の信仰に移り[註77],さらに予言者ムハンマドによるイスラム教が加わり,汎世界的宗教に発展する間も玉座が神と偶像を支えた(ibid. 2005, pp. 180-181)。

5)中世のオスマン・トルコ帝国(1299-1922年)を代表にイスラム教国家は,世界的な勢力,学問,科学と知を誇った歴史を有したが,その間に興ったルネサンスでヨーロッパに次第に遅れをとり勢力,権力ならびに主人公とその玉座の舞台がヨーロッパに移る。エジプトやペルシャが栄えた地域で16世紀以来オスマントルコ帝国が継続支配(16世紀以降のイランを除く)した。しかし後に帝国の崩壊がすすむ間,英,仏,独など欧州の列強諸国は,十字軍が征服出来なかった西アジアだけでなく世界各地で植民地開拓の進出結果,聖書に関わる遺跡や宝物探しの発掘も含め実物の玉座と断片,壁画を見いだしている。

こうした項目のもとでメソポタミアが発展の中核をになった地である。横断的,縦断的にメソポタミアですでにあげた重要な発明品の印章について,印章図像,および同時代の美術表現にのこされた座の「カタ」と「カタチ」から玉座の発展過程を確認していきたい。

# 第3章

# 印章にみる玉座の「カタ」と「カタチ」

## Ⅰ　印章とは何か

### (1)　印章の特徴と先行研究

印章がメソポタミアで使われた期間は,前4千年紀後半から紀元200年頃まで,4000年以上の長期にわたっている（前掲Collon1987,杉2006）[註1]。だが,その図像表現と主題は時代により変化がある。まず印章の原形は,メソポタミア北部のガラウ(テペ)で前4千年紀半頃のウバイド文化層から出土した封泥(ブッラ)あるいはトークンと呼ぶ粘土塊[註2]とされ,土器に絵文字らしきものを刻んだスタンプ印章も考案されて農業・経済そして道具の発展に伴う羊や麦の計数管理の目的に使用された。海岸線が現在より内陸に後退していたメソポタミア南部のウルク遺跡(Uruk・前3500年～3000年頃,現代名ワルカ,聖書にあらわれるエレク)で古拙な絵文字は出土している（Kremer1956）[註4]。当初は簡単な計数目的であったが,文字と同時期の出土層にあった土器は,金属の器形を摸した様子がある。神殿に相当する建物も発掘され,前4千年紀に初期的な文明が興っていたことが確認された(松本1995：pp.182-200)。この前4千年紀後半をウルク期,ウルク様式とよぶ印章と別のジェムデット・ナスルという印章が平行していた[註5]。初期の印章の製作材料は,前述したように土や粘土や骨などに頼ったが,もともとわずか数センチの表面に彫刻するのには制限がある。彫刻師は彫刻しやすい堅く高級な材料をもとめ,メソポタミアで貴重な石を北部や東部山岳地帯から,2期ではラビスラズリ(青金石)のような準宝石を遠くから調達し,工芸技術者が材料の骨・貝殻・石を一定の形に加工し,その表面に数字や象形などを古拙な絵文字(後の楔形文字)を浅く彫刻した。印章表面の彫刻の特徴は,錐や刃物で材料表面に図像を浅く浮き彫りし,それを粘土に押し当て捺印し,その鏡像をみる(押し当て転写)。印章は初期王朝の神殿祭司王を代表に,都市国家の王や工房の管理者など,公私をとわず様々に用いられた(Nissen, 1988)。その情報は膨大で20 世紀半ばに規準となったFrankfortによる様式の考え方にも新たな変更が必要用となっている(Frankfort 1939)[註6]。また印章の形は,初期の封泥形, 骨の形状を模倣したと思われる凹面形状(コンケーブ)の円筒, ＋字形状,ならびに円筒形状で製作された印章が知られている。円筒印章は,従来の押印よりも印章を回転し捺印でき簡便で無限の印章図像の転写が可能となった[註7]（Collon 1987：pp.100-101）。

図像の主題は,前4千年紀後半から3千年紀前半頃にかけては幾何学紋や動・植物が主であったのに対し,前3千年紀中期以降には饗宴や動物闘争,ならびに謁見図が登場し当時の神話や神殿,儀礼,信仰,日常の光景を彫刻した印章と印影が各地に伝播した。　(地図3)

本論考のもとになる玉座の証拠は,実際の玉座が残っていないことから印章の図像や同時代の美術表現の図像資料との比較が検証の鍵となっている。図版（図15.1-2,図16.1－4）はこうした印章図像を比較のためのものである。印章は,数センチ程度の小さな表面積にもかかわらず,彫刻師が正確で的確に2/3側面からの視点で表している(Collon 1987:pp.7-8)。

以上のことは,つぎの3例の印章比較からわかる。一例目は自然主義的な動物の図像,二例

目は神殿前の巫女座像,そして最後の三例目は祭司王とされる立像を示している。各印章の図像は細部を簡略化しつつ的確に彫刻している。

一例目の印章(図 15.1(1))[註8]は,左側の印章を転写した鏡像の図像がジェムデ・ナスル様式による図像で,倉庫の役目を果たす神殿と周囲に集まる動物といった自然との共生場面を表す。登場する図像は倉庫の左に顔をむける山羊と蠍,下方に移動する蛇,二頭の山羊,そして足下には壺(または瓢箪),その下に大型山羊の姿がある (Wiseman 1962:pl.5e)。

次の印章は,神殿と関係した祭司王を表現する[註9]。祭司王は聖樹を両手に束ね,もう一方で山羊が枝を食べる光景を借りた豊穣観の象徴的図像とされる(図 15.1(2)ベルリン国立美術館蔵 VA-10537)。その左側,羊をはさんで神殿用のポールと女神イナンナの象徴になる旗を掲げ,それぞれの祭司王の顎髭と髪をバンドで束ね巻き,衣服の格子文様を浮き出す。顔や手脚の筋肉の盛り上がり,動物の角,顔,あごから脚部にいたるまで表現が行き届いている。ウルク出土印章について祭司王の印影がわずかしか残っていない (Collon 1987:pl.6,Goff : fig 269. 5)。図像の分類が祭司王が供儀のための家畜に餌を与える場面(ibid.1987:pl.6),狩猟・戦場で捕虜と登場する場面(ibid.1987:pl.639,683,712,743,807)など聖-俗の役目を遂行している (Brandes 1979) [註10]。祭司王は,都市の支配者達の先駆けとされる (小林 2005 : pp.94-95)。

三例目の印章の図像(図 15.2.(1-4))は, 低目で背板と肘当てがないスツールの上に片立て膝の平座する巫女座像と神殿前の祭祀の光景を表している。巫女は髪を後ろに結わえて盃を持っている(ibid : pp.173-174,pl.801) [註11]。

この印章図像と比較のため,同類の表現を有する 2 例をあげる(図 15.2.(3-4))。片立て膝の平座姿勢は,スーサ出土の象牙製護符(アミュレット)で片立て膝の平座姿勢と後ろ髪の女性像が特徴的に彫刻されている(Collon1995:pl.35c)[註12]。またこの平座は,現在も西アジアで普段にみることができる。写真に示したのは,筆者が撮影したアフガニスタン人家族が食事をとる際の姿勢である(服部 1999 : pp. 111-128,写真 1) .シュメールの交易文化圏あったスーサの護符座像の表現は,印章の座像と比較しても遜色ない彫刻である[註13]。

印章に採用された神殿建築物を前にした巫女の図像がある。印章では,スツールの上の巫女が両脇には旗が立つ神殿とみなせる建物の門を前にして儀式を行う。建物の入り口に水甕が置かれている。印章に表現されている神殿は,メソポタミア南部に豊富に生える葦を結わえ柱や屋根などに用い,先端に渦巻きを作って飾りとするなど正面を形成する現地の伝統的建築と共通する (Unger 1966,Roaf 1996) [註14]。建築の内部は,穹窿(ムドゥヒフ)をいだき,大きな聖所(ギバルク)内部と似ているとされる。図 15.2 (1)に示す宗教儀式を執行する建造物のいくつかは,恒久的な建物ではなかった(Collon 1987:pl.803,810)。

本格的に天を目ざした神殿の建設を描いた印章(図 38.1(1))は,神殿建設に従事する神々を神殿や人間の建築従事者よりも大きく扱い,天と通じていた神と神殿の大きな存在を描写している (ibid.:pl. 802)。この神殿を具現化したのがジグラットであり, エジプトの

階段状ピラミッド(図 38.1(2))なのである。

以上の印章図像は,立ち入ることができない神殿内部の光景,実在しない神や精霊,神話の世界を扱っている。しかし当時の生活が今日と比較にならないほど信仰を中心にしたなかで人々は,超越した存在をあたかもその姿を見たように印章をはじめとして彫刻,壁画,陶器や工芸品などあらゆる分野に図像化し,さらには楔形文字に記録した(服部 2000:pp.38-51) (図38.2(1－6))。後のメソポタミア2期以降の印章には,神殿の戸口に翼をつけ,天に通じ高いところへの入り口とみなした図像,神話のなかの超越した人物(英雄),神や神獣と共にそれぞれの名をあらわす銘文が本格的に見られるようになる (Black & Green 1992)。これらの銘文と図像は同時期の美術資料と比較できるため,王・神・英雄,人物の名とその図像的解釈が可能となるのである。

**(2) 印章の図像と時代――「カタ」と「カタチ」を巡って**

本研究があつかう前3千年紀のメソポタミアは,シュメール人とアッカド人が文明の主体を担った時代である。メソポタミアの印章研究は,文明の発達にともなう学説や遺跡ごとにおきる意見の相違,時代区分や絶対年代に様々な見解や異論が印章に生じていた(Frankfort1939,Porada1948,Amiet P1972,Wiseman 1959)。この点に対し大英博物館の印章学者コロンが採用した印章から組み立てた編年は,メソポタミアの時代区分をほぼ500年ごとに区分する(Collon 1987:p.7)。本研究におけるメソポタミアの1期は,前3000年以前の創設期(ウバイド期,ウルク期,ジェムデ・ナスルの初期王朝期として,2期の都市国家の時代(前3000～2334年),ならびに3期のサルゴンの帝国からシュメール人が文明の幕を閉じるウル第三王朝の時代(前2334～2000年)である(註16)。各期の印章の表現主題は,前述したように饗宴図,動物闘争図,ならびに神との謁見図といった印章の図像に本研究の対象とする単独像や群像の座姿勢「カタ」と玉座「カタチ」が多数登場する(註17)。

まず,メソポタミア1期の前3千年紀半ば頃を境に印章は,計数ようとしてその祖型となったブッラやクレイ・トークン(粘土塊)が登場する。その後紀元前 3100 年以降の文明黎明期にはいり,後の本格的な(円筒)印章が一般化した。採用された図像は,牧歌的な動・植物文や幾何学文を描写し,図像のなかの半数を占めるようになる(付表 1 で全体の 59 /128 例)。一方で,ウルクやジュムデド・ナスルといった初期王朝の社会経済の発展とともに,出土印章の図像に作業する人物の座像や社会の指導的な立場の人物の座・立像表現が登場する(註 18)。とりわけ生産場面(土器造り,織物,製パンなど)は,地面や敷物の上に直接平座する女性の座像をあつかい,神殿にかかわる巫女のスツール上の片立て膝の平座座像,祭祀を執り行う祭司王の座像が見られる。これらの印章は平座像とともにスツールの上にすわる座像も登場しており,そこから所有物や富,職人と監督者,さらに社会的地位の格差に象徴される文明社会の光景を読み取ることができる。

2 期の都市国家の時代,ウルの王墓から出土した印章には,饗宴図と動物闘争図が描かれる。図像の背景には宮廷の新年の祭り,来世への旅立ち,そして動物の闘争光景をかりた神話

が示されているようだ(註19)。動物の闘争光景をかり死を見据えたオリエント世界最大の英雄としてシュメールの王名表に登場するギルガメシュ(ビルガメシュ)王の名が洪水と箱船の話や知恵の神エンキ神は,ビールを飲み酩酊する話が登場する(岡田,小林 2008:ii-iv)。

3期(前2344～2000年)の印章は，新たに閲見図が加わる,王が主神に王権神授のために謁見する場面で,神の姿を借りた王や神の座および玉座から天への指向が読み取れる。3期のなかで前3千年紀後半は,王権が強大になり王の支配領域が広域に拡大した(註20)。
サルゴンの帝国でサルゴン王が「世界の王」とする王の肩書きがつき,王の孫でメソポタミア南部シュメールを再統一したアッカド(バビロニア)のナラム・シン王(前2254-18)(註21)の登場以降に「四方界の王(lugl. an. ubda. limmu. ba)」と変化する(岡田,小林 2008:pp. 5-6,角田 2005,pp. 136-140)。この王が玉座につく象徴的な表現は，天の神々に威儀を正した座姿勢表現－天に近づくために高い背板に身をよせ,正面向に厳格な拘束姿勢を玉座でとる座像が印章の図像で本格化し，王が領地におきた反乱を平定し「アッカドの神」と称するようになる。王権神授を初めて唱え自らを神格化し,天の神と通じる王と称した王の登場したこの地が「王＝玉座＝天＝神」思想の揺籃となったのである(ピエコンスキ 2004:pp. 110-111)。

王権の神格化は，このような背景をもとに獲得され歴代の王全てが伝統を踏襲するようになる。続いて当時人口20数万人をかかえるウルを首都とするウル第三王朝初代のウル・ナンム王(註22)に始まり,五代目の王イビシン(前2029頃-前2006頃)を最後に王朝が滅亡し,セム人の王朝に代わり,シュメール人の文明が終焉した(註23)。ウル・ナンム王が王権の神格化の証拠を自らの石碑に残した。石碑は,王の玉座の倚座姿勢と玉座の身を寄せるための背板,天に向かうための足台,基壇といった「カタ」と「カタチ」の要素が出揃っている。

以下本稿は,これら1期から3期の印章図像を詳細にみていきたい。

## 1. 1期の印章図像の「カタ」と「カタチ」

1期の印章に頻繁に用いられた図像は，幾何学紋様(註1)や自然,そして発展途上にある社会と共存する牧歌的な光景,さらにこれらにジェムデト・ナスルおよびウルクといった都市や神殿の管理者の祭祀王が加わる。

### 1.1 平座する座像

ジェムデ・ナスル様式の印章図像は，幾何学紋様,自然の風景と動植物,ならびに女性の生産活動(土器製作,糸紡ぎ・機織り,パンづくりの作業)を扱い,さらに男性の顎髭や女性の後ろ髪を結わえる髪型で分かる(註2)。男性が神殿や都市の指導者あるいは支配者たる祭司王(聖職者),女性が女性作業者ないし神殿の巫女を表している。初期の王朝があったゆえ,こうした人物像は社会的な統率者とされている(Nissen et als. 1988;Collon 1987:pl. 6)。

一方で印章の利用は,ウルク様式の主に男性が使用したがそこには都市国家の王あるいは祭司王の姿に加えて,畜産・狩猟・穀物生産・灌漑や漁労・戦利品などに関係する内容が多数を占める(Brandes1979)。また王権(神権)と経済の発展の様相は,印章の幾何学文様に

も現れ,壺や容器の形,山羊,羊,牛などの牧畜産品の動物,さらに織物の文様や都市あるいは神殿も象徴的に描かれた(Wiseman 1962:pl.1-11)。

祭祀王の図像と関連で,古い神殿遺跡が前4千年紀中頃ウバイド期末のテペガウラ第13層から発掘されている。神殿址は小建築群と配列に相互関係がなく一種の都市を形成する状態であった。前3千年紀初頭のジェムデト・ナスル期に建設されたウルクの白色神殿は単独で神殿の基壇か高台の上に建設されていた。神殿が前3千年紀初頭よりすでに宗教的な高みの概念,つまり天に通じる観念を重視し,不定形ながらも後述する図38に示した印章の図像のような神殿が建築された(北原理夫1983：pp.30-31)。前3千年紀初頭には,メソポタミアが大きな文化圏を形成し,イラン,中央アジア,メラッハとよぶインダス河流域といった各地の産物と様々な情報を介してエジプトとの交易があり,この点も見逃せない。

1期の文明発展にともない神殿や生産の光景を代表とした座像の表現は,印章以外にイナンナ神殿への新年祭,豊穣儀礼を図像化したウルク大杯（岡田・小林 2008：5-6,序3図）,祭祀王の石斧(ibid.:pl.35 c-d),護符(Collon 1995:pl.35c)に見いだせる。都市の中心に位置した有力な神殿管理者や祭祀王が率い,名実共に社会の統率者となり神殿を食料倉庫の役目を果たすでけでなく経済のみならず都市を象徴する印を有して王権が発展した。小麦や葡萄など農業の飛躍的な生産向上と,ビールやワインの醸造といった産業的な分化,そして職能集団化による発展がすすむ一連の社会変化が直接生産活動に従事しない都市住民の増加と分業の拡大と重なっている。王権の発達と軌を一にして記録媒体としての印章や文字が社会基盤の様子を伝えている。

表1はそうした1期の座像表現を有する主な印章資料を示したものだが,生産場面の座像を注意してみると,その内容を以下にまとめることができる。

まず人が地面に直接平座するという地表の悪条件を緩和するため,すでに文明に先行して古い土偶の座像と腰掛けがある(Goff,1963：Fig 120)(註3)。1期の「カタ」と「カタチ」の内容が歴史上で異なる点は, 敷物や腰掛けの利用と普及が急速だった様子である。したがって女性を主とする職工達の地面(床)に直に平座する姿勢があり,敷物の利用,ならびに巫女がスツールの上に片立て膝の平座のように自由に腰掛けるといった起居の多様な様子がわかる(服部2005)。さらに興味深いことに祭祀王と円筒形状のスツール(Collon1987,pl. 713),天に通じ高いところから下を見下す神輿上の座像が登場している(Amiet1971:no.691)。このような座の「カタ」と「カタチ」は,メソポタミア文明1期で急速な発展の様相を示し,先行した歴史から今日のヒューズの姿勢分類(Hewes 1955)と対応できる程,集中的である。すなわちメソポタミア1期当時の社会は,印章図像が表現する数多くの作業場面からも分かるように,農業生産や経済活動に社会の活力が集り,そうした活力に基盤をおいて都市や神殿の指導者とともに王権も発展した。具体的な印章を表した作業の図像は,髪を後ろに結って腕を上にあげ,上半身を真直にした正座か片方を立て膝の平座で土器製作する女性たちがいる(Collon 1987:pl.13, Joost2003：29, pl.14,)。この群像表現では座具のみならず,頭

部から膝頭までが的確に表わされている。さらに紡績作業の片立て膝の平座像(前掲,Collon1987：pl.628）,製パン作業の跪座（ibid.:pl.625）の姿勢もある。そこでの跪座は,足先を地面につけ両膝頭を地面に接して座るため膝を地に着けない姿勢と区別できる[4]。ほかにも,製油,製粉,紡績と様々な職能の人物たちが作業しているそれぞれの姿勢が今日と何ら変わらない(ibid.:pl.622-623, 627-630, 680)。（図 16.1-3)(表 1)

ちなみに印章図像に頻繁に登場する土器づくりを述べると,前 4 千年紀のほぼ全期間にわたるウルク期の出土土器は,伝統的な彩文土器から大量生産の無文様土器へと交代し,その変化はが西アジアに広まった。初期の土器製作は,手作りだったがやがて轆轤(ろくろ)の発明により,手工業的生産に扱いやすい土と轆轤の使用により仕上がりが一定な土器の大量生産に拍車がかった。このことは,メソポタミアにおいて農業以外の手工業の飛躍的かつ集中的な発展の様相が印章の図像に採用されていた事実を物語る。つまり,これらの印章図像が示しているように当時のメソポタミア社会には分業化された専門職人を含めて都市住民が存在し,その頂点に祭祀王がいた社会発展の様子がわかるのである。

さて,印章に登場する座像の多くが平座か片立て膝の平座像であることは前述した通りである。もともと古代のオリエント世界で印章が側面視観から表現する共通性があるため胡座が判別しにくい点もあるが,おそらく胡座像は表現されなかったと考える。実際に同時期のメソポタミアの彫刻や美術に胡座像の表現がない。せいぜい 2 期にわずかながら胡座風のい像がみられるが,それも膝下がかなり欠損しているため正確には不明である(Collon1995)。胡座像が古代エジプト（Russmann 1989）やインダス文明（Alexandra 1982-83）で多数表現されたのと比較して,メソポタミアの胡座座像が少ない理由は, 不明である。

### 1.2　敷物に平座する座像

1 期の印章には敷物を用いた座像表現もある。後ろ髪を結う典型的なジェムデ･ナスルとウルク様式で表された女性の座像は,容器状のものに手をさしだし,敷物の上で平座の作業姿勢をとっている（Wiseman 1962:pl.3d；Buchanan 1966:pl.18)。 また正座(割座)像は尻下に一本線で敷物(絨毯や毛皮をふくめ)を示すようである。後述するスツールや玉座が立体を側面視した表現をとるのと比較しても明らかに敷物を表現している。敷物,スツールの使用は,地面と直接触れる平座姿勢が地表条件,すなわち無数の蟻やサソリ,毒蛇などの危険,および地表面の灼熱や湿気といった有害かつ不快な条件を避ける効果があり,絨毯やフェルトの敷物を尻に敷く座法がすでに一般的になっている(Wiseman1962:pl.3d,e,g,pl.3d, pl.3e pl.3g, Collon1987:pl.15,Buchanan 1966:pl.18)[註5]。(図 16.2)

### 1. 3　スツールの上の平座像

1 期の印章に現れる座具の大部分が四脚で座面が低いスツールの腰掛けである。スツールよりも高い座面をもち四脚の椅子は登場しない。スツールの類は,地面に平座する人の視線より高い位置となる。図 17 に実際に 1 期の印章図像から視線が相違する座像例をあげる。

巫女風の女性が先頭になり他の 3 人の平座する座像を表現した印章をあげる。(図 17)

左端の後ろ髪を束ねた巫女風の人物は,神殿を象徴する3本のポールに向かい手をかかげていスツールの上で片立て膝の平座する姿である。その後ろに従う3人(女性,精霊？)は,片立て膝と敷物風に表現された線の上に平座し，左端の巫女と同様,間に置かれたポールに手をかかげる。巫女風人物の後ろにいる3人については人,男女,精霊を表すかいずれとも判断がつきかねるが,同一場面でのスツール(または敷物)は,こうして人物の役割や身分差を反映している (Collon 1987:pl.15)。

ここに登場する四脚のスツールは,エジプト王墓出土品(前述Killen1986:pl.45,46)でみることができるが,1期の図像でスツールの上に腰掛ける人物の座像の組み合わせは,不明なものを除いて,動物と生産光景とスツール上の座像,生産光景とスツールの座像,ならびに祭祀の光景とスツールの座像となっている。(図16.3)

まず図18.1は,土器つくりの図像は，ジェムデ･ナスル様式と呼ばれスツールの人物座像に動物が混在した全体に牧歌的な光景の生産場面と座像を描いている。図18.1(1)は,画面中央の右側には,後ろ髪を結った女性が奥行きがある寝台風で四脚スツールにこしかけ土器に手をさしだした姿である。画面の中央左側には四角い蔦製風のスツールで糸をだす蜘蛛と脚をかける山羊,右端には壺にさしかけた標章(あるいはスツール)を表現する(Goff 1966：Fig.349)。図18.1(2)のスツール上の女性の平座像が上段中央にあるが,他のスツールがない。さらに取っ手がつく壺を挟んで二人の女性が兵座で作業する姿(下段左側)や,山羊が餌桶で食餌する姿(下段右側)もある (Goff-1966: Fig.350)。図18. 1 (3)は,画面の中央に蔦製風のスツールの上に女性の座像が手をさしだした姿で表わし，その前に横たわる牛と壺,牛の周囲に円球状の物を積みあげる(Goff-1966:Fig.351)。　　(図18.1)

図18.1(4)は,後ろ髪を結った女性が円筒状で蔦製風のスツール上に平座して壺状のものに手を差し出す光景である(Baker-1966 ： pl.249)。図18.1(5)は，後ろ髪を結った女性が四脚のスツールにこしかけ土器に手をさしだした姿を上下二列にあらわす。上列の女性を大きく平座？で表現,下列の女性を相対的に小さく片立て膝平座で表現する.その間に台座あるいはスツール上の女性が腰掛け,相互の対応関係がないように配置する。こうした意図は不明である(Kist.2003：pl.18)。

図18.1(6)にあげる座像は,スツール上の女性が投げ足で座り壺を手に取る様子を描写し,＋字形印章の各面に図像を彫り込んだ変形の印章である (Buchanan 1966：pl.14.a-d)。

つぎに,図19に曖昧なスツールの上の座像例をあげた。(Goff 1966：Fig.353) 図19.1は,座像の下に台座状の長い柵状のものが敷かれているために台座とは判断できない,また長い柵と見なすことができるが,他の座像のスツールと合致しない(Goff1966：Fig. 353).また図19.2は，図19.1が曲がったものであるがいずれも判然としない(Kist Joost2003：p30,pl.15). 図19.2は,長いベンチのような上で投げ足の座姿勢をとる女性座像である.ただジェムデ･ナスル様式の印章で投げ足をとる作業姿勢の図像が無い(註6)。中国の床のようである.この大きさから,スツールと決論づけるには難がある。他の考え方として画面を横切

る川の説明,柵,あるいは敷物といった説がある(前掲,Buchanan 1966:pl.14)。

図20.2(1)と(2)に人と神が混在する座像をもつ印章例をあげる。図20.2(1)は,敷物上の平座像と織物作業を象徴した蜘蛛(織物と紡績の神ウツッ(uttu)を表現する(Collon 1987 : pl.16)。図20.2(2)が四脚状の構造をもつスツール上の平座像である(Goff 1966 : Fig.356)(註7)。両図像に蜘蛛(神)と単独また二人の女性座像が登場する図像表現は, 2期以降の印章に採用されなくなり, 神が不要か目的が変化したようである。(図20.1－2)

つぎに神殿や祭祀とかかわる座像の例を図 21.1-3 にとりあげる。まず図 21.1(1)は神殿前で巫女が祭祀を行っている場面である (Goff 1966 : Fig.352)。巫女は,ジェムデド･ナスルの典型的な表現である長髪を後ろに結わえて後頭部に垂らし,スツールの上に片立て膝の平座姿勢で座っている。右手に杯をもち,もう一方の女性が差しだす酒器を受ける。神殿(聖所)前の 3 人物のうち,スツール上の巫女は祭祀の光景の中心に位置表現する。巫女の背後にいる長髪の女性は,手に道具をもち,片方を立て膝で(地面に)平座する姿をしている。床には酒(聖水)の容器,祭器 (火鉢,穀類を入れた鉢ポットまたは楽器)が数多く並んでいる。この表現は,片立て膝で平座姿勢の「カタ」,スツールの「カタチ」を揃えた表現で,神殿を前にした祭祀と関わる特別な祭事を表すと考えられている。 (図 21.1,(1))

この座像と主題が前述した印章図像(図15.2(1),(3))と同じ神殿前でスツール上の片立て膝の平座をとっている。両図像は共に,神殿前で平座の「カタ」とスツールの「カタチ」で神殿とかかわる何らかの祭祀で酒杯,儀式に特別な巫女の組み合わせである(British Museum Quartaly-1934: VIII,p.42, pl.1X-g,Collon,1987:pl.801)。ここに酒杯と儀式の主題にもとづき後の2期の印章に登場する饗宴風の図像として解釈すれば,巫女と酒盃の登場が饗宴が意味するあたらしい再生の可能性もあり,単に宗教儀礼の性格を越える意味が加わる。しかし印章に巫女の性格を特定できる銘文(註8)がなく,また神の前で威儀を正した姿勢はとらず自由な片立て膝の平座をとることからすれば,このスツールが特別な性格をもった席にとどまる。つぎに図21.1(2)は,神殿を無形の象徴とする印章の図像の例にあげる。神殿の溝状の戸口から右に向かう供犠に供せられる山羊,戸口にそって天にむかう小さく扱われた山羊,そして神殿脇に旗(イナンナ女神を表象する)をあげている。人物が登場しない場面が無形の象徴として神殿を示している。(図21.1(1)-(2))

図21.2,ならびに図21.3は,ともに祭司王の登場場面である。前者のウルク期の印章図像は, メソポタミア特有のイナンナ女神の旗をつけた聖なる儀式用葦舟に,祭司王が乗っている。舟の舳先は高く反り,葦を束ねた上部を輪にまるめた吹き流し状のイナンナ女神の旗印を二本立て,荷箱を牛の背にのせ,従僕風の人物が舟を操るが,その先の積荷から芽がふく様子を描いている。この図像は,印章が小さいにもかかわらず,聖婚儀礼にむかうイナンナ女神の象徴,網目の模様をもつスカート様の衣装をまとう祭司王の様子を的確に表している(ibid. : Fig.282 ; 岡田,小林2008 : pp.111-112)。 (図21.2,(1)－(4))

印章の図像に登場する座具は,繊維で編まれた円筒形スツールや折りたたみ可能なX字形

のスツールに腰かける人物座像がある。図 21.2,(2)の円筒形スツールは,葦製の舟上で人物が 葦(あるいは柳)で編み上げられた円筒形スツールに腰掛け, 手に瓢箪のような容器を持つ。その前と後ろ側に舟の見張りと漕ぎ手がいる(Collon1987:pl.807)　(2)(ibid.1987 : Pl.713 )。座像の特徴は, 円筒形スツールに腰掛けた人物が他のより大きな存在感を表現している。おそらくそれは祭司王と考えられている。このスツールの製作材料は, ティグリス・ユーフラテス川流域で豊富な葦を材料にして円筒形に葦で編み上げた物である。印章は 1 期末から 2 期への過渡期に製作されたとされる(ibid. : pl.713)。後の時代にも円筒形のスツール例がある。前述したギラット遺跡出土地母神の籐製スツール(図 15.2.(1))や,後述する腰掛ける Ebhil-il 座像(図 27)の葦製スツール,さらに当時メソポタミアと交易圏のインダス河流域(メラッハ)の都市から籐製のスツールの例が多数ある(Murthy K. 1982 : pp.56-62,Fig.XII-XIII)。

1 期の印章図像は,葦製の舟を利用した当時のメソポタミア下流域で移動する船上の様子がわかる。図像には X 字状の折りたたみ可能な可搬型の座具を表現する (Goff 1966 : Fig.282,OSTEN 1934:pl.V-35.)。(図 21.2.(3-4))

舟に乗船した祭祀王の図像は,エジプト古王朝時代の香炉の座像表現にも登場する。舟がメソポタミアと同様に古代エジプトにおいて運搬の手段のみならず信仰にも重要な役目をはたしていた (大城-2010:pp.99-101)(註 9)。座像の人物は王の象徴である,頭部に古代エジプト王の白冠をかぶり顎髭(あごひげ)をもつ。そしてセド祭(王位更新祭)用の衣装の一つに用いる笏(しやく)をその手に持つ(大城道則-2010:pp.48-49)。注目するのはこの玉座が後述する 3 期で本格化する神殿戸口の建築様式を摸した玉座が王と舟と共に表現されている点である。

運搬の手段に玉座担ぎの図像は,1 期の印影(印章の転写)に唯一の例がある(註 10)。メソポタミア南部の都市国家ウルクやジェムデ・ナスルの交易圏のスーサ(Susa)出土の前 3 千年紀後半頃の印影は,画面の下側に御輿風の台座に片立て膝の平座女性が担がれた様子を表している(Collon1987:pl.711,Amiet1972:no.691)。上には神輿をとりまく一団が,列をなし行進している。1 期は,メソポタミアに至る出土地スーサが山岳地帯に沿った地勢と神輿で移動すること自体が特別な人物の証である。陸路の馬車をつかう移動方法の一般化するまで待つ必要があった。1 期と同時代のエジプト第 4 王朝には神輿をつかう神事と実物の神輿が今日まで残されている事からメソポタミアとエジプトの相互に影響しあった可能性 (Baker 1966:pl.38) を考慮するとしても,1 期の印章と印影に「玉座担ぎ」の例がなく,メソポタミアで神輿や玉座担ぎの専門家が登場する新アッシリア帝国時代まで待つ必要がある (註 11)。

一方で図21.3の図像は, 監督者風の人物がスツールに腰掛け,ほかに片立て膝,蹲踞の人物座像を示す (Collon 1995:pl.35ｃ)。前3200年前に遡るウルク期の石斧 (ブラウモニュメント)の二面のうち,表側の図像は,髭をもつ人物が捧げ物をする場面である(註12)。裏側は,監督を中心に職人の作業光景を表す。から職人の道具づくりで2人が片立て膝の平座姿勢を

とり,監督(中央の人物)に顔をむける。工房監督の背後では,別の職長がスツールに腰を掛けている。この図像は,片立て膝の座像,および作業用スツールに腰掛ける職人,祭祀王とみられる人物を表現するが,全体の主題が不明である。この時期の古拙な絵文字が記されているため,社会的に共通する内容を示すと考えられる。(図21.3)

### 1.4　1期における座の「カタ」と「カタチ」のまとめ

とりあげた1期の印章は,前3千年紀メソポタミア南部に興ったシュメールの初期王朝の図像である.当時の都市国家とスーサなどの周縁地域から出土した印章は,社会発展がすすむなかでティグリス・ユーフラテス河口域の葦製建物,動物,牧畜,生産の光景,そして女性の職人,巫女,祭祀王が登場する。都市は,ウルが代表するように住民が二十数万人を抱えたとされ,都市が施設とともに規模が発展していく(小泉龍人2001:pp.12-18)。発達し神殿の管理者の祭司王,祭司をする巫女など非生産人口が拡大しつづけ,職業の分業化,専門化をうながし社会の階層化がすすむ.ウルク中期頃から神殿で統率する王(en)が都市の長老を招集し,人々の集会(ukkin,unkin)で長老(ab-ba)の語りが行われた。近年の発掘成果はメソポタミア最初の神殿が建築されたエリドゥおよびウルクが発展しつづき各地にウルク文化と類似の都市国家的な景観が町並み整備と市場が形成される様子を明らかにした。都市の中心が神殿とともに首長の館に移り,経済基盤を持った個人が政治を支配する。社会を統率する人物および玉座という王権(神権)につく特別な席を必要とした事は間違いない。

1期の座像表現は,印章以外の彫刻や工芸にその表現例がすくない。他のエジプトやインダスの造形表現と比べてもさらに少ない事が明らかである。当時の初期王朝ウルクで行政の中心が神殿にあったことが印章の出土数からわかる。しかし立像が多数発見されたテル・アスマルの神殿出土例と比較しウルクの神殿から神像自体の出土がない。せいぜい指導者(祭祀王,聖職者)風人物をあらわす王斧の座像,ならびにスーサ出土のアラバスター製の女性礼拝者の平座と片立て膝の平座像以外に例がない。印章に表現されるスツールの上に腰掛けた巫女や祭祀王,さらに円筒形スツールの祭祀王座像で石やテラコッタを使った表現がなく,その確たる理由も不明で,ここにエジプトの神殿の座像や立像の数と大きな相違点がある。(Colon1987:pl.713:BM-89349)。

1期の印章図像の座像の性格,王や神の神格の断言が困難で,結果としてスツールも特別な性格の人物が用いる席にとどまる。(前出,服部2005：付図1,付表1)

初期王朝の都市で祭司王は,後に官僚(神官)階級として祭祀の光景を印章表現し当時の広告塔の役目を果たしたために印章が個人私有より行政的性格を有した(Collon1987:pl.6)。従って祭司王を表わす印章は,神殿所属の倉庫封印用と推定ができる。ただしこの種の印章の印影が残っていることは稀で,祭司王のないウルクの印影は多い。当時のウルクのエアンナやアヌ神殿域で宗教的儀礼や儀式があった点は間違いないが肝心の玉座の出土例がない。

神殿が,祭祀以外に豊穣の儀式,食料や産業の倉庫の役目を担ったと考える理由にトーク

ンと呼ばれる物資の数を数えるため古拙な絵文字の記録が広大なエアンナ神殿の遺構と神殿域に集中して出土することから神殿と経済活動の関係性がわかる。
そして今まで階級がないシュメールの社会が次第に財産の獲得努力や富への魅力にもとづく文化-貿易, 裁判, 住宅, 社会, 教育の隅々まで階級性を形づくった社会発展の様子が少しずつわかってきた。前述した古拙な絵文字は, 日常品の牛乳, 穀物, 大麦, ビール, 壷, 容器, 神殿, 武器となる斧, 槍, 弓といった様々な単語が現れ, 印章が文化の諸相を取り入れた。灌漑農業による飛躍的な生産性向上は, 経済の蓄積が都市に集り, 生産活動の活発化が印章の製作量や表現内容にも反映した。

技術の応用と普及が様々な分野におよび, 農業の灌漑水路, 神殿の建築といった都市基盤のみならずスツールや神輿の製作工具が銅の精練とともに工具, 利器, 武器へ部分転用が可能となり技術の応用化にまで及んでいる。非鉄金属の利用は, シュメール人が得意とする漁業, 特に長期の航海が可能な造船と航海技術を獲得しインダス河流域と交易活動を可能とし, さらには印章用の道具に応用された。

## II　2期の印章と玉座と倚座像-　饗宴図,動物闘争図の座像-

### 2.1　2期の印章と座の「カタ」と「カタチ」

メソポタミアの2期（紀元前3000－2334年)は,シュメール人の都市国家が王権ともに興亡を繰り返す時代である。シュメールで文字にエン(*En*)と呼ばれた支配者が前3100年頃に初期王朝ウルクに現われる 前2500年頃にエンシ(*Ensi*-大きな人)またはルガル(*LUGAL*-王)と名を変え登場する都市国家ウル(Ur)は,ウルの王墓に関連していると思われる(Zettler and Horne1998:pl.19-28)(註1)。王墓出土品はウルの遺宝と呼ばれる豪華な埋葬品に混じり出土した王妃や人物の銘文がついた印章類が他の副葬品に混じり出土している(Woolley 1934)(註2)。印章の図像は,様々な起居の情報-地面に直接の平座,敷物と平座,スツールに腰掛ける,ならびに倚座姿勢の「カタ」と玉座の性格をもつ椅子や玉座の「カタチ」を含む(Wiseman1962, Legrain,1936)(註3)。一方で1期の印章の特徴的な座像表現－生産場面の群像,神殿前の巫女片立て膝の平座姿勢の「カタ」とスツールの「カタチ」の組み合わせが登場しなくなる(服部等作2005)。こうした2期で一連におきる玉座の発展の様相は印章と同時期の美術-彫刻,壁画,工芸にも反映した。

ウル王墓から出土した印章の特徴的な饗宴図,動物闘争図(Collon1987：cp.27.cp.31)(註4)の座像そして楔形文字の銘文のが注目できる。王権に関わる王と王妃らしい人物が正面向けに身を寄せた倚座姿勢,およびその姿勢を可能にする低めの背もたれがついた過渡期の玉座の登場である。1期のスツールと比べ座面が高い位置になったことによりあたかも高いところから下を見おろす効果を得たのである(註5)。こうした倚座姿勢の「カタ」そして玉座の背板が少し立ち上がる「カタチ」は同時期のエジプトにも登場している(Lehner,M 1997:p.203)。以下2期で重要な印章図像は,メソポタミア南部で前2600年頃のウルの王墓群出土と出土地不明でメソポタミアおよび周辺の国家都市の印章がある。　　(付表2)

特に王墓群にメソポタミアでまれな大殉葬墓(PG1237墓)は,兵士,従僕,楽団員たちの殉死体が黄金や宝石を用いた豪華な埋葬品とともに見いだされたウルの遺宝(Woolley,C.L. 1934, Zetter,R., and Horne.L.,1998)が知られ(註6),出土品にまじり王権の様相を語る図像と銘文を持つ印章類（Zettler and Horne1998:pp.75-84,Fig.44,pl.16a-28A）が重要な資料である。印章図像の主題は(1)饗宴図,および(2)動物闘争図を表現し,前者の飲酒を伴う饗宴(祝宴)図は,宮廷の宴会で人々の座像を表現する(註7)。後者の動物闘争図が,動物及び猛禽類が争う場面を表現し,図像の一部に飲酒する人物座像,動物の闘争図に人の姿をかりる神話上の英雄のギルガメシュ,精霊,神の座像を表現する(Collon1987：cp.27.cp.31),いずれも2期を代表する主題と図像の内容である.(註8)。

図像に登場する人物(あるいは神)は,人物の名前を楔形文字で‘シュプ･アド’,‘メス･カラム･サグ’,‘メス･アンニ･バッダ’などの名前が彫り込まれ,王権と関わり有る人物,家族,家臣,従者,ならびに楽士を画面で表現する(詳しくは後述)。人物は,丸みをもつ体つき,

見開いた大きな目,後ろ髪を束ねた髪形から女性,および剃髪から男性と判明ができ,共に独特の羊毛衣裳(カウメケス)の着用する。すでに製作方法が確立している人物の席は,ほぼ今日の四脚の椅子と同じ外観である。登場する座像は,人物の重要度に応じて大きく表現され,2期より折りたたみが可能なX脚状のスツール(図23.(2－4))以外の表現の多くが装飾的な造りと様々な構造とデザインの椅子(註9)が増し,例外的にUr-nina交脚平座像(後述する)とクッション(図26)が加わる。

2期の印章に楔形文字による銘文以外の文書類は,250近い楔形文字の文書と約400の古風な文書(Collon,1987:pl.521)があり,1期とくらべ格段に文書の数が増している。文書は,ウル第一王朝にあってメスアンネパダ王(在位年不明)からウル・ナンシュ王（紀元前2464-2455年)まで多くあるなか文学の祖形,宗教,王,神,天といった象徴的用語をふくむ王名表の記録(註10)には官職名の多彩さわかるため王権や政治体制の強化と整備に向かっている様子である(ピエコンスキ他2004：pp.554－559,前田徹1992: pp40-71)。

### 2.2. 饗宴図の座像の「カタ」と「カタチ」

#### (1) 饗宴図の座像の「カタ」と「カタチ」

2期の印章は,地面に直接平座する座像の表現が少なくなり(Legrain1936:pl.no.17－336,339,340)多くがスツールや椅子,ならびに玉座の座像に変化する(ibid.:pl.no.17－337-338, 341,344,348,349)。　(図22)

図22.1.1-6に饗宴を主題にした印章図像を示す。　(図22.1.1-6)

図像に楔形文字‘Pu-abi,nin’(シュメール語シュブ・アド)銘をもつ印章は,王墓(PG800)より同時に出土した被葬者王妃プ・アビとわかる(註11)。図像は,2本の横線で区切った上下2段で構成され,いわゆる饗宴図の主題のもとで宮廷の宴会(酒宴)と来客を扱う(註1)。
ウルの王墓PG800墓は,大きな規模を誇りその出土品が豪華な王墓である。印章上段の饗宴の場面は,天に旅立ち,新年祭りといった再生を願った表現から来世を,下段の場面が現世の光景を扱っていると考える。

上段の場面(2)は,倚座する王妃と王が杯を持つ。(2)の対面側に王(又は家族)と見られる剃髪の男性に杯をかかげて正面に向き倚座する。(2)-(4)に表現された王妃と王の座の座面から背板が少し突出ている。王妃プ・アビと王が他の人物像と比べ大きく表現され,側貫の装飾が他の(3)-(4)と比較し豪華に作られ,なかでも座面が1期の印章が水平状で簡単に表現するが,2期のプ・アビのは,背中側で立ち上がった背板の後端にまで深々と寄りかかり,その座面が臀部と沿って曲線状に表現し倚座姿勢がとれるようになり他の人物と座具の扱いに格差がある。腰,臀部の体形にそって座面が曲線を描く様子から,座面の材質が皮革や繊維など柔軟な材質を用いている(Collon　1987:pl.93)。さらに王妃の下肢長に相当する座席の座面の高さからも今日の座面の高さ,四脚の椅子の形状と共通する下段右の倚座人物2人(3-4)が杯をかかげ対面し,その右には食品をのせる棚(5)がある。棚は,X状の筋交いの強固な構造をとり,装飾的脚部がつく。上段の図像が玉座で下段が椅子で,玉座の構造と比べ椅子

の構造は,横貫(側貫)が無く簡素な椅子の構造に格差がある。

ここで上段のプ・アビ (1)と対面し倚座する人物(2),および下段の男性倚座像の座(3)(4)を比較すると,人物の玉座(上段)と椅子(下段)が四脚の構造,そして食物を置く大きな棚は,筋交い(ピン)構造である。いずれの椅子も人物の荷重を四脚(前脚-後脚)で分散し,今日の木製四脚椅子と同様のデザイン,支持強度を持つ様子がわかる。そして上下二段にわたる場面はカウナケスとよぶ羊毛皮の衣服を着けた人物が王妃と同じく座し,また王妃の横に立っ従者は,王妃,王の周囲と会話する様子のため宮廷に関わる人々である。印章の持ち主は王妃の銘文がつくために王権に属していることが明らかで,座席は後部のわずかな背板の立ち上がりをみせる。この立ち上がりをもつ背板は,身を寄せることが可能であり,実際に印章の座像が身体を立ち上がりをもつ背板に寄りかけて倚座する。さらに印章のなかの他の座像と比較して王妃のが横貫の念入りな装飾,主人公の座像を大きく扱う表現から,あきらかに格差をつけ,銘文が王妃の名前を有することから玉座の性格を備えている。しかしこの玉座は下肢を寄せるための足台,基壇がなく,メソポタミアの3期で王権の象徴となる王冠,王杖,玉座の構成要素が揃っていない。しかもプ・アビという王妃の名がシュメールの王名表にはない。王名表は,シュメールの神話時代からの初期王朝の管理者のリストで,唯一登場する女王・クババ以外の女王プ・アビの存在が確認されてないのである(前出小林登志子2005:pp.21-22)(註12)。このため印章のプ・アビ王妃座像は,玉座の性格を有する過渡期のものとしておきたい。この理由は,印章に玉座,王杖と王冠が後の3期の謁見図の印章図像のように一体的に示されず,唯一の特徴が2期にはじめて登場する王妃の玉座に背板のわずかな立ち上がりの特徴のみである。すなわちプ・アビの背板のわずかな立ち上がりを持つ特徴により上半身が身を寄せることができ威儀を正した姿勢をとることが可能となって,高い背板に身をよせ,正面向に厳格な拘束姿勢をとり天の神々に威儀を正す座姿勢の「カタ」を得たと考えるのである(註13)。

この特徴は,同時代のエジプト古王朝時代の玉座にも当てはまり,背板に同じ特徴を有する第二王朝皇后の倚座像(前掲Baker1966:pl.23),カセケム王倚座像(前掲Russell1998:pl.1),ならびにエジプトの宰相イムホテプ(前2630-2611年)の座像(図13.(1-2)),さらにはクストゥルの香炉の図像(大城道則-2010:pp.48-49)に登場する座像は,すべて同時代で背板の立ち上がりに共通性が見いだせる。さらにクストゥルの香炉で船にのる王の玉座像は,メソポタミアの祭祀王の船の上の玉座,玉座が神殿を摸した後述する特徴点も際だった共通性である(註14)。

図22.4に人物銘‘A-bara-ge’銘の饗宴図の印章を示す。 (図22.4)

本図の上段(1)と下段(4)のスツールは,図22.2と同じく前-後脚,横貫(側貫)の構造が共通するが,一方でX状の筋交い構造のものは,図22.1の上段(2,3)と下段(5,6)に同じものである。男性倚座像の中には(1,4)のように座面の後部側に背板がつくように見られるが判別が難しい。倚座する人物は,銘文‘ア・バラ・ギ’により知事であることがわかるため,特別

な人物の座像となる(Zetter,R.,1998:pl.18a)。

図 22.3(1-3)に饗宴図の金製印章を示す。　(図 22.3.1-3)

ウル王墓群から PG1237 号墓出土の本印章は,饗宴図を主題に宴と奏楽の場面を上下二段に表現する。上段の左側に食品をせる大棚と従者達を前に対面し飲酒する剃髪した男性とその背後に羊毛衣裳を着用し,後ろ髪を束ねたのが女性と 2 人の倚座人物がいる。下段の場面中央には,牝牛の頭をデザインした竪琴(同時にこの実物の竪琴が出土した)で演奏する楽士が座っている。その周囲には演奏する女性楽士たちの楽団とその横で何かの道具をもち踊る姿を表現する。印章は,印章材料の外側に金を打ち出し芯の材料として瀝青を使い豪華な手法を使っている。ウルの王墓群から他に同時に出土した品のなかでも竪琴を表現する印章のデザインは,プ・アビ PG800 号墓出土と同類の豪華な竪琴を表現する (Collon 1987:pl.819)(註 15)。

図 22.4(1-3)に饗宴図の印章を示す。　(図 22.4.1-2)

本印章は,饗宴図を主題に宴と奏楽の場面を上下二段に表現しウル王墓群出土のものと考えられる。上段の従者達をはさんで羊毛衣裳を着用し後ろ髪を束ねる女性 2 人が倚座し対面する。下段の場面左の食品棚に向かって倚座する女性を女官が給仕する様子を示す。右側には,図 22.3 のように楽士が竪琴(3 弦)を運ぶ様子を示す。その周囲には女官達が表現される。竪琴を表現する印章は,王妃プ・アビの埋葬されていた PG800 墓出土の豪華な竪琴と同類である点をみなし印章の持ち主とその席が特別な宮廷に属していた事がわかる(註 16)。

以上とりあげた印章は,ウル王墓から埋葬品と共に出土した一連の印章である。印章の持ち主は,王権に属していたとされ,被葬者に縁ある印章であることは確かである。

印章の図像が示す玉座や棚など王朝家具類は,構造,装飾,製作技術がそれぞれ異なる。なかでも今日の椅子と同じ構造を有する王妃プ・アビの玉座は,座面の支持構造と柔軟性のある座面に材料を用い,またわずかな背板がついているため身を寄せる座法が可能となった(付図 2.(4)Chr/Thr1)。前述したように背板の少しの立ち上がりは 2 期の石造彫刻やエジプトのものにも登場する。この特徴を有する印章の座像が後述する図 22.3,4 にも現れる。この特徴が後の 2 期,3 期以降の玉座で身を寄せる倚座姿勢の「カタ」に,さらに 6 期の新アッシリア帝国時代の立ちはだかるような背板と玉座の「カタチ」に大きな影響を与えることになる。

一方でウルの王墓から出土した印章の座像は,玉座の性格をおびたもの(図 22.7-8)が多数含まれている。図 22.7-8 上段の饗宴場面の図像に垂直の脚部をもつ登場する例である。垂直脚で座面を支持する構造は,図 22.7-8 のみならず図 23.1-3 にもあらわれ(付図 2.(4)Chr/Thr1)。後の 3 期に玉座の「カタチ」が本格的に現れるメソポタミアの神殿建築の溝や階段状の細部に登場する神殿の門(リセス・Recess)を摸した,いはばリセス型脚部(シュメール形)と呼ぶ玉座の特徴ある祖型の先行的表現とみなせる(図 22.7-8)。(付図 2.4)。特に図 22.7-8 共に上段右側の人物は,カウナケスを着用した人物(剃髪風から男性か)座像

で甕から管を使いビールを飲む。左側の倚座する人物は,前述の図 22.4 と同じX状の筋交い構造と背板が立ち上がる(玉座の性格を有する)椅子である(Collon 1987:pl.819)。

以上あげた印章の持ち主とその席は, 特別な宮廷の階級組織に属していた。ここで一連の饗宴図が主題とする表現の意図は,饗宴の光景のもとで儀式(註17)であり,ゾロアスターと新年(春分の日) (黒柳恒男 1989 : pp.38-40)祭,あるいは酒宴と共に神々へ変容するため新しい門出－天の世界,新年へ再生の旅出を想起させるのである(ibid.pp.38-40) (註18)。

**(2) 動物闘争文のなかの座像の「カタ」と「カタチ」**

図 23.1.1-4 に動物闘争図の中に倚座像をもつ印章の例を示す。 (図 23.1.1-4)

2 期に登場する印章の図像は,動物闘争図の主題にした図像があり,その一部に英雄の立像や饗宴の光景と共に倚座像,ならびに動物の戯画倚座像と組み合わせがある。豊饒多産を象徴する羊,牛など供犠に供する家畜に対し威力と威圧感の象徴・猛獣のライオン,鷲が争う場面を表現する。時に饗宴の人物座像や仲介役の天下の英雄(又は天の神)が登場する。

次に図 23.1-2 にスツールの座像をとりあげる。上段の図像は,椅子に腰掛ける人物が甕から長い管を使って飲酒の場面である。座具は,前述の饗宴図 22.2 に登場する側貫を持つ椅子と同じで,(1,3)が曲線を持つ座面で背もたれが有るが肘当てもない腰かける姿勢である。

図 23.1－2 に動物闘争図でX脚状スツールと座像を示す。 (図 23.1-2)

図 23.1 の例は,動物闘争－饗宴図というべき 2 期の二つの主題を同時に表現する(世田谷美術館編 2000:図版 100) (註19)。2 段にわたる主題で上の区画が饗宴図で向かって中央左側にX脚状のスツール,右側に 3 期に本格的に登場する神殿の門に特有な溝状の建築様式を摸したリセス型とよぶ脚部をもつ過渡的な玉座(付図 2.(4)Chr/Thr1-3)に座る人物が甕から長い管を使ってビールを飲む場面である。下段右側下段が動物闘争図の場面で二頭の猛獣の獅子が鹿を襲う表現である。X脚状のスツールは,折りたたみが可能と見なせる。一本調子の技法から 2 期末(紀元前 2500～2400 年頃)の制作年代とされる。(図 23.1)

図 23.2 の図像は,英雄と猛獣同士の闘争が錐や彫刻刀の荒々しく彫刻され,図像が変則的な 2 段組であるため彫り直しあるいは中央にのこる区画線から過渡期の図像とされている。闘争図の図像でライオンが羊に襲いかかる場面を表現する(Collon1987:pl.82) (註20)。スツールは,前述の饗宴－動物闘争図(図 23.1)に登場するスツールと同様に折畳み可能と想定できる。画面の右側で顎髯をはやした,野獣を逆さにつかみにし,先端の巻髪を分けた人頭雄牛で裸体の人物(英雄か神)が素手で猛獣と格闘する。 (図 23.2)

図 23.3 に上段に饗宴図,下段に動物闘争図の主題で饗宴図に様々な過渡期の玉座の登場例を示す。上段の場面は上段が饗宴図に杯を持って酒を飲む人物座像と一方に従者がつく。別の人物は,甕から管を使ってビールを飲む座像である。それぞれの人物は下端が垂れた羊毛風の服を着用し,左端にリセス型脚部の玉座(付図 2.(4)Chr/Thr1-4),中央に田型(付図 2.(4)Chr1),右端に円型(付図 2.(4)Chr4 の亜種)の過渡期の玉座が登場している。下段が動物の闘争図となっている(ibid : pl.91) (註21)。(図 23.3)

図23. 4が上段に饗宴図,下段に動物闘争図の主題を持ち,饗宴図では杯をあげる人物表現が図23.1,図23.3と同じく共通し2期末の制作とされる(OSTEN 1934:pl.V-40)。その過渡期の玉座は,図23.4が前述のプ・アビ銘の印章と横梁の同じ構造であるが背板の立ち上がりと簡潔な装飾をもつ過渡期の玉座ある（図23.4）。

以上の2期の椅子,スツールの座像例は,構造と構成要素,デザインが変化にとむ(註3)。(付図2)。この点は,1期のスツールと比べて構造,デザインで製作技術の格段の進歩から様変わりしている。このことは,特別な玉座(の性格を有する椅子)の仕様に応じ製作可能であったことがウルの王墓出土の戦車,楽器,黄銅製の工具などから副葬品の製作技術が質的に高く,急な製作の事態にも対応できたことがわかる。

2.2　2期の美術表現と座の「カタ」と「カタチ」の美術表現

玉座の特徴は,2期の印章と他の美術に表現さらたものと比較によりわかる。座像を表現する場合は,(1)地面や座面に直接平座する座像,(2)敷物に平座,(3)スツールや椅子の腰掛け,ならびに(4)玉座倚座像にわけることができ,その特徴を同時期の石製彫刻に登場する人物(神)倚座像の玉座を比較のため取り上げる。特に(3)および(4)は,椅子と玉座の相違点があり,玉座の性格を有する座像が何たるかをしめす。すなわち2期の印章に登場する椅子は,後に玉座の要素となる身体を寄せるための肘当,足台,さらには基壇が揃っていない。しかしプ・アビ銘を有する印章に登場するのは玉座の性格を備えている。

**(1)　地に直接平座する像**

印章が側面視で平座,なかでも胡座が判別しにくい理由があるにしてもエジプトやインダス文明の胡座像の表現数と比べその表現が極端にない。印章図像と同様にメソポタミアの石像彫刻が片立て膝の平座,跪座,蹲踞の姿勢を多数表現するが胡座の例がないのである。唯一Kurlil銘の人物胡座像石像があるが足下が破損し正確には不明である(Collon1995:pl.44)(註22)。

図24に示す男性跪座座像は,供物を頭上にかかげる男性が片立て膝で正座により下肢,その肌(尻)を直接跪座する。起座の関係で低い姿勢と立位の中間的姿勢である。神殿出土の本像が,神殿の神に対し祭司王(神殿管理者)が起座を示す低い姿勢をとる座像と想定できる(Amiet1980:pl.299)(註23)。　(図24)

**(2)　平座と敷物**

2期に敷物上の座像は,ウル・ニナのクッション上の交脚平座像がある。(図25)

歌手ウル・ニナ(Ur-Nina)は,腰には房飾り付き短ズボンをはいて羊毛風のクッションの上で交脚で胡座する。像は黒い彩色が残る長髪を中央で分け,眼を貝やラピスラズリ(青金石)で象嵌s,像の肩に銘文《マリ王イブルル・イル(Iblul-il)のもと,大歌手がこの石像をニンニ・ザザ神に捧ぐ》がある(Weiss 1985:pl.66)。このためメソポタミア中部の都市国家マリ出身のガラ神官(カストラート・去勢歌手)と呼ばれた宗教歌の歌手であり神殿へ奉献された像である(註24)。本座像と同じくウルの王墓出土の印章とスタンダードには神殿,王宮の特別

な楽団の要員である竪琴奏者,踊り手が表現され,身分や待遇が敷物や座具に反映した。

**(3)　スツールの座像**

2期の印章の座像は饗宴図や動物闘争図に登場するスツールの種類が多くなり座具の製作が容易になるとともに普及の様子がわかる。背板,肘あてのないスツールは,四脚の側貫,筋交いをもつ構造,X脚で折りたたみ可能な構造(図23.3),植物繊維を円筒状に編んで作った構造と種類が多い反面,彫刻の座像に登場をみない(註25)。

図26.1にスツールの神官のエビール(Ebhil-il)座像を示す(註26).　　(図26.1)

主人公は,顎髭を蓄え大きく見開いた目で前方を凝視し端正に胸前で手を結ぶメソポタミア独特の敬虔な祈りの仕草を表現する。スツールの製作材は,メソポタミアの河床地帯の葦である(Frankfort 1954:pl.23).

図26.2のDudu銘がある人物のスツール座像を示す(註27)Duduのが座面の後部まで腰掛けるスツールは,石製で足台がつくと見られる。この形は,後述する神殿建築を摸したシュメール形の椅子とするもので,シュメールの石像彫刻の優品で銘には《‥我,書記官ドゥドゥは,(不明?)献呈品をニンギルス神に捧げる‥》と記す(Pritchard2003:pl.229)。ニンギルス神は,ラガシュのギルス(ギルシュ,現代名テルロー)の豊穣神とされる(小林2005:p.23)。Dudu銘をもつ印章があり,スフインクスに先導されDuduと知識提供者がのる船をあらわしている(Collon1987:pl.717)。(図26.2)

**(4)　玉座の座像**

メソポタミア2期に奉献板に表現された特徴的な椅子ないし玉座の座像がある.奉献板は当時の特定階級の人物が自らの肖像や関係する光景を彫刻し祭祀場(聖所)に献呈した石板である。

図27.1にハファージェ(Khafaje)出土奉献板の玉座倚座像を示す。　　(図27.1)

奉献板は,3段の画面からなり後述のウルの旗章と同じである(Frankfort1939:pl.33(a)(註28)。。下段から上段の左上側の損傷があり,上段の右側の人物が普通に倚座するのに対し左端の人物の椅子に明らかに足台風の台の上に脚をかけ倚座する姿勢表現をとる。こうした玉座の性格に背板,ひじ掛けが新しい要素として登場している。そして背板に身体を寄せて座面が高くなったことで正面向きの姿勢になっている。足台の採用は,家族,皇太子など主人公の側近であっても同じ地面に接しない意識の表現であり,足台が天に通じる梯子あるいは階段の役割を示唆している。　　(図27.1)

図27.2にウル・ナンシュ(Ur Nansh)奉献板倚座像(註29)(青柳 昭60年:図158)を示す。

メソポタミア南部ラガシュ第一王朝のウル・ナンシュ王(在位・前2520年頃)は,上下2段に区画した面に供犠場面を銘文と共に表現している。上段の図像は,3人の礼拝者を従えた裸体の神官が倚座する神(ウル・ナンシュ)を前に酒を注ぐ。座姿勢は,背板に肘をよせる倚座像である。この椅子は,足台がないが玉座の性格を備えている。(図27.2)

場面は,下から上段に移り解説がすすむ下の段の登場人物は,特別神聖な場所である聖所に

向い神官と犠牲獣を捧げる礼拝者である。礼拝者3人のうち2人は動物の生贄を捧げ,その前に女性(巫女)風の神官がいる。裸体の神官が神殿建物の前で酒・油などを台座に注ぐ神事の光景である。ここでは,神殿の門が特別に神聖な空間を象徴的に表現している。

図27.3にスーサ・アクロポリス出土奉献板(世田谷美術館2000：図版66)(註30)を示す。

本奉献板は,宴会光景を2段表現が図28.1と同様に背もたれをもつ玉座の倚座像である。ウルの旗章とおなじく主題の流れが下段の動物を扱う人物に始まる。上の段が二人の人物が杯,片方が楽器と杯をもつ饗宴図の主題を,下段が動物の飼育光景を表現する(ibid.図版66)。上段に腰掛ける人物の椅子が後の垂直の溝状を表現した玉座の先行例としてあげる後述のシュメールの神殿の建築様式を摸したものである。本玉座は,背板が上に延長されるが足台がない。本スーサ出土奉献板は,人物や動物の図像表現,中央部の円形穿孔(通常は方形)に不手際が多く,メソポタミアの奉献板浮き彫り技法が細部で異なる。(図27.3)

とりあげた印章や彫刻に登場する腰掛け,あるいは椅子類は,宮廷で利用されるも玉座ではない。理由は,背板や肘当てがなく,身をよせて威儀をただした倚座姿勢でない点にある。

図28.1-2にウル王墓出土品の旗章(スタンダード)を示す(Collon1995:pl.50a-b)。(図28.1)。ウルの王墓(PG779)より出土した大きな台形の木製素地に瀝青で貝殻,赤色石灰岩,ラピスラズリ(輸入品)を表裏の二面,上下3段にわたってモザイクに象嵌する。全体の主題は画面の左から右へ,下から上に「戦争と平和」を主題にした場面を進めている(註31)。

第1面は,パネル第1面の(表)と上段から下段の場面は,画面中央に王が立ち捕虜の謁見場面.中段に槍を持つ兵が上段へ連なる捕虜の背後で行軍を表現する。下段では,四輪戦車が敵兵を蹂躙し進軍の場面である。反対側の第2面(裏)パネル上段は,王と高官の宴会場面で楽士が手琴を奏で,歌い手が唱和する饗宴場面である。もう一方の下面は,平行する下段と中段に行進する人々が穀物の入った荷袋や家畜,魚などを運ぶ者が敬虔,服従の身ぶりである胸に両手を合わせた人々を従えて進む。その傍らで家臣6人が饗宴のなか神に戦勝を感謝する場面を示す。

次の第2面の人物の玉座(椅子)像が注目できる。まず最上段に登場する13人の左端がウルの王とみられ,羊毛の衣を着用し獣脚の玉座に倚座する。地面に直接平座する人物が登場しない。椅子のような玉座であるが細部をみると,プーアビ銘の印章に登場する玉座(前出)と同様に座面から背板がわずかな立ち上がりにより身を寄せる倚座姿勢が可能となっている。この特徴は同時代のエジプトの玉座(前出図13.2(1-2))と類似している。

また肘当てと脚部が一体化され,脚部の前面が獣脚を摸した造形となっていると同時に前脚の下側の貫材が前方に延び足台(あるいは基壇)のように足場を安定する役目を果たす。

座面の後背面側には,背板の立ち上がりが身を寄せ正面向きの座姿勢を可能となるため,従来の背板がないスツールのような自由な腰掛け方ができる点と異なる。すなわち王の座姿勢は上半身を背板に,腰から臀部に沿う座面,下半身(下肢)を付属の足台にのせ,座面と背板に合わせ両足を垂下する垂足而座(または垂下丙脚)をとり,上半身が座面の高さ分だけ高い視

線を獲得する。空間的に高いところから下を見下す事になり独立性のみならず正面向きであたかも拘束された毅然とした威儀をただした倚座姿勢が可能となる。この段の座像は,王が臣下,楽士,従者達と同じ地面に接する平等さを意識した表現の一方で,王をおおきく6人の臣下が小さく表現している。

図29.1にマリの女性礼拝者の座像を示す(註32)。小さな本座像は,前述したウルの旗章とおなじく蹄をあしらった獣脚,肘当てと背板に身をよせ,元来ついていたとみられる足台に下肢を安定させ倚座する。座像の女性は,グデア王の建設なるエニンヌ神殿址出土品であるが,ナツメ椰子の房をもつ左手を膝の間におく。損傷して現在ない右手は,杯をかかげていたとされ, マリの典型的な美術表現をとり大きな目,三角顔,丸帽子,そしてカウナケスを着用することからマリの女王を想起させる(世田谷美術館2000:図版69)。　　(図29.1)

2期で特筆できる印章は,玉座(の性格をもつ過渡期の椅子)の座面は,曲線を表現し図22.4のプ･アビおよび対面する男性の饗宴場面,および図27.1－2の奉献板の座像に共通する。このことから座面は皮革といった材料を用い,また後脚側を高めに延長した背もたれの機能が上半身の安定性を与えた。身を寄せる機能は,ウルの旗章に登場する王倚座像(図28.1-2),およびマリ出土女性礼拝者倚座像(図29.1)が獣脚の下部を前に延長する形態をもち,加えて下肢の座姿勢が安定する背板,体形に沿え正面向きに姿勢を整える足台がつく。獣脚をモチーフに使う造形は,アナトリア,チャタルフェック出土地母神倚座像の例(図10.1-3,図11)を揚げたが2期の印章で祭祀王が乗る船を先導するスフインクスを表現するする印章がある(Collon1987:pl.628)。獣脚は,3期の謁見図(図34,35)に表現を継続する。

### 2.3.　2期の座像と玉座の考察

付図3に2期のウル王墓の出土印章を主にした印章と美術に登場する座具の形態を示す。ここでは (1)敷物/クッション類(M1－4),(2)スツール類(小椅子:LS1－7),およびX脚(折りたたみ小椅子:XS1－2),(3)椅子類(Chr1－7),ならびに(4)神殿を摸した玉座(の性格を有する椅子類も含め)分類できる(註33)。2期の印章で玉座の性格と過渡的な特徴を有するとして王妃プーアビの垂足而座で小さな背板に腰を寄せる倚座姿勢をあげた。王妃の玉座は,低目の背板が上にあがり上半身を椅子に身を寄せる事が可能となる。

ウル王墓出土の印章は,宮廷の饗宴に王が自らの座像を図像に残した。王権の証拠は,ウルの大殉死墓(Woolley1934)から同時出土の杯,兜,楽器の類,印章の図像と銘文と一体的に証拠が揃っている。泥と土の文化と称されるメソポタミアで印章に貴重なラビスラズリを中央アジアから輸入し,また奉献板の製作材に貴重な石を使った。さらに材料の調達以外に錫を使用した合金や工具を使う高度な技術,技能を発揮する職人,工房を守る神々を動員できる王が物資の供給者を意味するシュメール語の《ú-a》および《zãninu》という肩書きを持つことができた (前出,江上波夫1995:pp.132-133)。当時は物資の供給者を意味する王と技芸の神が出揃う時代である(角田文衛,平成15:pp.125-126) (註34)。

2 期が王権の発達がわかる。 印章は図像に饗宴図,動物闘争図と多様な生活の変化が進んだことを示し,王朝家具類,楽器,食料など一般の人々との生活格差を示している。
前 2000 年紀前半バビロニア時代の成立とされる王と都市名が登場するシュメールの王名表が有力な拠り所に加わる(ピエコンスキ 2004:pp.554－559)。ウルの王墓から出土した印章に登場する名前は,‘プーアビ’ (図 22.1), ‘アバラ・ギ’銘(図 22.2),‘メス･カラム･ドゥグ’といった銘文がつく座像である。王墓出土品という特徴にもかかわらず,そうした人物が王名表にない。家臣が使用したのであるのかと言った銘文をもつ。しかし原資料のバビロニアの楔形文字板は,損傷があると同時に伝承の箇所もあり‘プ･アビ,王妃’のように王名表から特定できこない。

印章の使用状況がどの程度公私にわたっていたか不明な点が多い。饗宴図を表す印章は,闘争図と比べ女性の墓,副葬品が豊かな墓からの出土数が多く, 反対に動物闘争図を持つ印章は,男性所有の傾向がある(Collon1987:p.123,pl.521)。印章の表現は,単独か対面する倚座像が宮廷の家臣,神官,一族,家族を表現し,椅子やスツールに座る周囲に従者や楽士を群像表現する。画面の中心人物‘プ･アビ,王妃’は,上半身を背板に,腰を座面に沿わせ,下半身(下肢)が足台と共に正面向きに拘束された倚座姿勢をとり,同一画面に登場する他の座像人物,従者,楽団員達の自由な姿勢と相違する事がわかる。また座像が大きく表現され造りが違う玉座の性格を有する「カタチ」となっている。‘プ･アビ,王妃’銘の印章に表現された王妃座像の特徴は,わずかな立ち上がりをもつ背板に身体を寄せた倚座姿勢をとり,同じ座像でも大きな表現と製作が違い玉座の「カタチ」である。

当時の王の使命は (1)国の防衛と遠征, (2)領土の平安と食糧の安定供給,ならびに(3)宗教機能―神殿建設と精神的充足,であった。統率者は,前 2700 年に王をさす軍事的実力者ルガル(大いなる人)が国家支配者を表す名称に変化し,エンシが支配者と称して両者は,巨大な神殿と食物貯蔵庫を支配し国家的な建設事業を推進した (岡田,小林 2008)。

### 2.4. 2 期の「カタ」と「カタチ」まとめ

2 期の印章は,ウルの王墓群出土の王妃プ･アビの銘がついた印章を代表とした饗宴や動物闘争図の主題のもとで座像とともに銘文が本格的に表現される。王妃の座像は,座面よりわずか上に延びた背板にそわせて身体をよせて正面向きの倚座する姿勢をとる。またウル王墓より旗章(スタンダード)が出土し,そのパネルの人物の座像は,付属物に足台が加わり両足を垂下し正面向きの倚座姿勢である。両座像は,1 期のスツールと比べて背板に身をよせ,座面が高くなった分,高い位置からの視線を獲得した座姿勢であり席が玉座の性格を伝える。登場する主人公は天と交流し来世への旅立ち,ならびに死－再生といった世界を図像表現している。しかしこの玉座は下肢を寄せるための足台がなく,メソポタミアの王権の象徴となる王冠,王杖,玉座がセットで示されていない。またプ･アビという王妃の名は,王名表や歴史には登場しない。こうしたことから玉座の性格を有する過渡期のものとする。

## III　3 期における玉座と倚座像－　謁見図の座像－
## －　閲見図, 神の姿の王と玉座　－

### 1.　3 期の印章の座像表現

3 期（紀元前 2344 年～2000 年）を特徴づける要素は, 王権の強大化と神への信仰である。この時代でアッカド（バビロニア）を統一したサルゴン王（前 2470～2285 年）のアッカド王朝は, 孫のナラム・シン（前 2254～2218 年）(註 1)が自らの名に神を表す語を並記(註 2)し神格化をすすめ, 神を冒涜する涜神者を排除し, 印章に神と対面する謁見図を採用し, 信仰を支え都市の要衝を占める神殿を天に近づくよう高層化をすすめた（角田, 平成 15：pp. 138-141）。
ついで「呼びかけられし者」という名前をもつラガシュのグデア王(註 3)は, 繁栄のグデア時代を迎えた。王の石像はアッカド美術の粋を集めた太い眉と大きく見開いた目, 太い鼻梁で丸顔の王の容貌を表す。アッカド王朝で第五代シャル・カリ・シャリ王（前 2217－2193 年頃）の治世に異民族の侵入で王朝の衰退と混乱がすすむ。

シュメール人とアッカド人が建国した統一国家ウル第三王朝（前 2112～2095 年）初代王ウル・ナンム王（在位・前 2112～1095 年頃）は, 自らを神と宣言し王権と民衆の信仰心の大きさを受け王が神の先導で玉座につく謁見図を法典碑や印章図像に採用した（Collon1982）。さらに謁見図は, 神殿を有翼で示し天の神に通じて高いところから天下を見下す図像化をすすめた。ウル第三王朝の五代目イビ・シン王で王朝が滅亡, シュメール人が歴史の舞台から姿を消した。同時に天を指向した神殿建築が衰退し神殿建築が衰退し要塞化にむかう。こうした 3 期にあって王と神の謁見図の印章は多く他の美術資料の比較ができる。（付表 3）

群雄割拠の時代を経た後にバビロニア帝国という汎世界的王国が誕生し第六代のハンムラビ王（在位前 1792－1750 年）に謁見図が継がれていく（岡田, 小林 2008）が天をめざした神殿建築は, 要塞化がすすむ。

### 1.　倚座像をもつ印章図像

#### (1)　饗宴図の印章と座像

図 30.1 に, 饗宴場面とスツールに腰かける座像表現を示す。本図は, 羊毛の衣服（カウナケス）を着た 2 人が長い管で酒（ビール）を飲む饗宴の光景を荒々しく彫刻する。人物と周囲の細部が不明であるが, 低い座面, 背板がなくＸ状のスツールは折りたたみ可能な構造と移動の可搬性をもつ様である(註 4)。他に神話の場面でＸ状のスツールに座した人物の座像を表す印章がある（Collon 1987:pl. 673, 820, 675）。　（図 30.1）

図 30.2 に饗宴場面と倚座像を示す。　（図 30.2）

冠をつけた男性は, 四角い輪郭線で表した簡素な小型スツールに腰かけ, 壷から管で酒を飲む光景である。人物は, 冠を着けた特別な神のようで, 供物, 神獣を置く供物卓（祭壇）及び旗を前にしているため宗教儀式の図像と見なせる（ibid.：pl. 123, Buchanan1966, No. 843）(註

[5]。人物の背後にある旗は,1 期の巫女がスツールの上の片立て膝で祭祀する光景と同じである。

2 期から 3 期に饗宴図の座像表現が継承され,甕から管で酒を飲み人物が対面する光景で主題は,単に酒宴を表すのでなく,酒を介した何らかの儀式で神に変容して新たな門出,結婚(聖婚)の儀式,ならびに新年(春分の日)の宗教的儀式の一端の表現を示す図像と考えられている。この点から饗宴の光景に登場する像が都市の守護神と考え,その花婿が支配者,花嫁が女性神官に仕え大地の恵みを祈願する象徴的表現である。

**(2) 動物闘争図と印章と座像**

図 31.1 に動物と対面人物の座像をもつ印章を示す(Collon1987:pl.109)[註6]。 (図 31.1)

図 31.1 の図像は,座像を持つ饗宴と有害生物(蛇やサソリ)の二段の場面で表現する。下段が背板やひじ掛けのない四角い形状のスツールの人物座像,上段に文様化した蛇,蠍,蛙を配置する。印章の材料は,河床地帯特有の貝殻芯を用いアッカド初期の特徴的な杉綾模様の表現をもつ。

図 31.2 に人物(神)座像の謁見図と水鳥のいる光景の印章図像を示す。 (図 31.2)

本閲見図は,上下に二区画した上段の図像に 2 期に登場したΠ型四角形状の四脚(箱状)の玉座に座す神に人物を紹介する場面である。裾に二筋模様のスカートで女神がつく席をここでは玉座としているが根拠が示されていない(Collon1987:pl.113)。下の光景は,水辺と鷲鳥の遊泳を描写し平和な豊饒観を示す。アッカドからウル第 3 王朝時代へつづいた伝統の画面である[註7]。

3 期で動物闘争図の座像表現は 3 点に特徴がある。まず一番目の特徴は,水平 1 段の場面で動物が闘う 2 期に多い群像表現(図 23.1)が 3 期に独立した座像を表現する。銘文が加わり闘争を表現するため,典型的な動物同士の闘争またはライオンや鷲の猛禽獣と供犠の犠牲獣の闘争を表現する面積が減り,人間の姿の神(英雄)が介入する神話の場面に変化する。

二番目の特徴は,2 期の印章材料で特徴的な輸入品のラピスラズリの使用が減少する。動物闘争図の印章は,主に蛇紋岩を用い,その後に初期アッカド時代ティグリス・グループと呼ばれる貝殻芯を用いた独特な印章材料も使われる。

最後の三番目の特徴は,饗宴図や動物闘争図をもつ印章が次第に謁見図へ交代し,印章が男性所有に偏る。その理由が饗宴や動物闘争の光景に神々の代理人としての王自身が神に謁見する表現と重ねたと考えることができる[註8]。

**(3) 謁見図の倚座像**

3 期の印章の主題に新たに加わった謁見図は,王権神授を主題に王が神や神格化され神の代理人となって角がつく帽子(王冠)をかぶり,基壇の上に足台とともに天に通じるよう意図された玉座の高い座面と背板,さらには足台に身を寄せる倚座姿勢の「カタ」,および玉座の高い座面と背板,基壇,足台,ならびに天蓋がつく玉座の「カタチ」に要素が出揃う。他にスツールや椅子に腰掛けて謁見する場面の座像が表現されている。

以下に示す玉座と謁見図にメソポタミアの王権の象徴－玉座,王杖,王冠を組み合わせをみることができる。特に玉座は,天を目ざし最終的に神殿の門や階段状の様式を模した玉座の「カタチ」となって次第に要素が出揃っている。

図 32.1 に神と対話する倚座像を示す。　　(図 32.1)

向って右側の角をもつ冠を被る神(神像)は, 2 期の饗宴図のように豊穣の象徴である棗椰子,蛇をあしらいアダムとイブの図像と例えられる楽園風の場面を表現するアッカド後期からウル第 3 王朝に引き継がれた図である。両座像の席は,図 31.2 と共通の四角い輪郭線で表し(Collon1987:pl.112) (註 9)左の主人公が神性を象徴する冠がなく髪型からみて女性で,飾り気のない平織りの長衣を着ける。

図 32.2 に謁見図の場面－腰掛ける都市神に閲見する高官の図像例を示す。　　(図 32.2)

守護神の女神に手をひかれる標準的な謁見図で知事のアッパは,銘文に《‥グデア(王),ラガシュの知事アッパ,書記は貴方の僕’‥》と記す(Collon1987:pl.114) (註 10)。都市,神殿の建築家として実在したグデア王(在位・前 2144 -前 2124 年頃)を銘に利用した知事アッパが箱型の構造で背板とひじ掛けがない玉座(図 31.1 と図 32.1 と共通)の神に閲見する。座面が前脚に向かい傾斜するために皮革製のようである。前脚を延長して基壇を兼ねた板が足下に見えることから 2 期のウル王座像(図 28)及びマリ出土石製女性礼拝者座像(図 29.1)の玉座の過渡期とした玉座と同じ特徴がある。座像の神は,グデア王の領地ラガシュの守護する都市神ニンギルス(註 11),またはグデア本人の守護神ニンギジタとされる。グデア王は,グデア時代と称され繁栄の時期をきずいた王(註 12)であると共に神殿の献呈の碑文がのこされている建築家でもある(青柳正規(編)昭 60：図版 173,飯島紀 1997: pp.100-101)。

図 33. 1 の閲見図は,玉座の太陽神シャマシュ(シュメール語ウトゥ)が背板に身を寄せ,下肢を足台にそろえた玉座倚座像である(註 13)。太陽神は,王冠をかぶり後述する図 34.1 の肩から炎を出し東の山々の間から神々を伴い登って手に鋸歯付きの短刀をかざして道を切り開き夜明けの開門をする,日の出の連想する場面である。神の前後に随伴する眷属の神が立ち,他の登場する礼拝者に対して太陽神を大きく誇張している。礼拝者は,跪座と蹲踞の中間的な低い姿勢の起礼を繰り返し神を見上げその後ろに謁見する王の立像が示される(Collon1987:pl.104)。この場面では基壇上の玉座で太陽神の倚座の「カタ」と玉座の「カタチ」の要素が揃う図像である。本場面に登場する玉座につく倚座人物に感謝を表す手を差し出す仕草,跪座や蹲踞で神の前にかしづき答礼をとる座像は,アッシリア帝国のトゥクルティ・ニヌルタ 1 世の祭壇への起礼(註 14)を繰り返す儀礼台前の跪座図に登場するほどの伝統表現であり,3 期の閲見図の座像表現が一対で表現され神への感謝,玉座の象徴性を強調する(Collon1987：pl.560.松島他 2000：写真 66)。　　(図 33. 1)

図 33.2 神格化された王の前での謁見図の玉座倚座像を示す。　　(図 33.2)

ウル第三王朝の初代王のウル・ナンム(在位：前 2112～2095 年頃)王が神に手を引かれて拝謁する高官ハシュ・ハメルの閲見図である。このナンナル・シン神に神格化された王が,左の

ニンガル(女)神前で,玉座に正面向きの倚座姿勢をとる。基壇のうえに設けた玉座は,その後に獣脚を摸し,背板を革製にして立ち上がりと曲線をえがく上端に手と上半身を寄せる。上方の三日月のもとで儀礼を行なう(Collon, 1987 : pl.532) (註15)。この背板は,2期のプーアビの印章にある過渡期の玉座の背板の立ち上がりを明確に有する点で進化している。印章の銘文は,《ウル・ナンム,強き男,ウルの王(ルガル):ハシュ・ハメル,イシュクン・シンの知事(エンシ:都市支配者),は貴方の僕・・・・》と記す。この場面は,神より王権が神授され事実上の王の玉座(正確には神座)が天の神が倚座した王権神授の場面である。銘文のウル・ナンム王は,法典碑に自らを王権神授により神格化したアッカド王ナラム・シン(註16) (前2254－2218年)が王権を引き継ぐ玉座像をもつ(岡田,小林2008)。

図34.1に天蓋下の足台と基壇一式を組み合わせた玉座像を示す。 (図34.1)

知識と水の神エア(エンキ)は,ひじ掛けや背板がない簡単な椅子(Collon1987:pl.105)に腰掛ける(註17)。椅子を囲む天蓋がつく空間(註18)は,天蓋(西尾,他2003)からあふれる水の流れに囲まれている。天蓋とは,後続する二番目の太陽神シャマシュ(Parrot1962:Fig.213)は,片足をライオンの背中の上か,2枚の翼の間のどちらか一方に立ち平衡を保ちその手には日出を象徴する山をのぼる道を開くため鋸歯がつく小刀をもつ。先頭の神の姿をした王と共に閲見する。ライオンの左には,裸で,髯を生やしたニヌルタ神が片腕をポールに巻きつけ座る。ここで新たな表現は,玉座の要素に天蓋が加わっている点が重要である。天上から神梯を伝って天蓋のなかにいる守護神に,王が閲見し,そのなかで地面に跪座し最高の敬礼を示す礼拝者が登場する。神が降り立つところを天下とし,玉座が ‘天と天下’,‘神と人間’の境界に梯子(階段)でむすばれた装置とする宇宙観を示している。

図は34.2に牛男が天蓋をもつ門柱を両脇から支持し,その中央に肩から火焔光を出す太陽神シャマシュの玉座倚座像を表現する。簡易な座席に座る太陽神に両脇を牛男が祭祀用の両脇の門柱を支え,門柱の上に天蓋(baldachin,canopy)が新しく加わる(西尾,他2003:天蓋の項)。本図像がシッパルのシャマシュ神殿(註19)を模した表現とされ足台,基壇,門柱,天蓋が加わった玉座の構成が揃っている (Parrot1961:Fig.213)。 (図34.2)

太陽神シャマシュは,メソポタミアの最高神でありアッカド時代以降も人気を集め天蓋の下や夜ごと地下の水域を舟で渡る神である(Black 1992)。1期の印章で祭祀王の神がX脚のスツールを備えた水路の交通手段である葦舟にのる図像から太陽神と舟との関連性がわかる。太陽神と舟がエジプトとあった影響がわかる。3期の印章でスフィンクスと神が先導する舟にシャマシュ神の玉座像の最古の表現例があるため,エジプトの再生を司る太陽神ラーとの関連性,蓋然性がある(Collon1987:pl.768) (註２０)。

図35.1に王のスツールの座像(Collon1982:pl.118)を示す。 (図35.1)

スツールの座像が登場する謁見図の人物は,ウルのイビ・シン王の臣下ババティである。銘文が《イビ・シン,彼の国の神,強き王,ウルの王,全世界の王,アハム・アルシー,書記,ババティの息子は貴方の僕(しもべ)’ ・・・》と記す。ウル王の叔父にあたる行政長官のババテ

ィが王家の一員で神と崇められるイビ・シン王の閲見場面である(Collon1982 no.446 BM-102510 (1908. 4. 11, 18),Collon1987 : pl.118))。(図 35.1)

王を讃える銘文と足台を用いた月神ナンナルが玉座の性格を含む倚座する。ここでは角をつけた王冠をかぶる守護神に導かれ,羊毛で覆った四脚のスツールに月神ナンナルが座り宇宙にみたて象徴的な三日月を配した標準的な閲見図である(註21)。スツールの前は,独立したΠ形の足台があり,2期に登場した前脚を延長する足台の形態の変化が注目できる。守護神は,ひだ飾りの衣服と角飾りが付く頭飾りを被り,ババティが綺麗に髯を剃りあげ右手首に腕輪をつける。月神はスツールの足台に垂足而座し,左手を引き寄せ右手に杯を持つ。謁見図の図像に月,星を表現し月神の登場(小林 2005 : pp.180-182)がメソポタミアで大陰暦が定着した事を意味している(ibid Collon,1987:pl.115-117)。太陽神と月神の表現は,アッカド人が天体に関連する神々を統合し神々の万神殿(パンテオン)の構築を目的にした。 礼拝者と共に頻繁に表現される太陽神シャマシュは,夜明けの開門のため杖,剣に身を寄せ立姿勢の(倚)像,および他の神々が謁見図で山を摸した玉座に腰掛ける倚座像の光景が多い。

図 35.2 に基壇付きスツール上のイビ・シン王の座像の印影を示す(註22)。 (図 35.2)

本図は, ウル第三王朝五代目で最後の王となったイビ・シン(Ibsin)の銘文を持つニップール出土(現代名:ヌッファル)の封泥印影である(小林 2005:p.255, Harvey1985,pp.54(A))。イビ・シン王(在位紀元前 2028－前 2004 年)は,四脚のスツールで羊毛で覆われた座面に正面に向き左手を水平にした姿勢で腰掛ける。髭がない王は若い時の姿とされ,頭部にグデア王のような王冠を被り杯を右手にもち,対面する神に王権神授をうける。本印影から王は,足裏に一本線を表現し,王と謁見者の足元と高低差があるため基壇と足台がある。

図 35.3 に基壇上の足台付きスツール玉座像を示す(Collon 1987:pl.156) (註23)。(図 35.3)

本座像は,図 35.1 と同様に謁見図の光景を表現する。無髯の人物が神格化された王(王である神)に謁見する。髪は剃っている様で,大きな帽子のような髪に地方色がでている。 羊毛で座面をおおったスツールの座像は,図 35.2,35.4(OSTEN1934:pl.15.no.174)と類例が多い。イビ・シン王は,ウル第三王朝最後の王で,王の座像は,足台がつく四脚のスツールに羊毛で覆われた座面に腰掛ける座像の表現した印章(印影)の図像が少なからず残されている。この座像表現は,身を寄せるための背板や肘当てがないが,足台(時に基壇も加わる)をともなうために,玉座の性格を有するスツールである。

3 期において「王は神である」とした王権神授の思想が,イビ・シン王の王朝滅亡後のシュメールとウルの滅亡哀歌に残された。歌は,シュメールの命運を定めた大いなる神々が,大河のほとりに再興するべき豊かな社会に守護神としてイビ・シン神が象徴的に登場する。

**(4) 有翼の神殿門と玉座座像**

3期に特徴的な座像表現は,王が単独で玉座に倚座する表現のみならず,玉座が聖なるものとして神殿の門に特有な溝状あるいは階段状の戸口の建築様式(Recess:リセス)を摸した脚部(リセス型と呼ぶ)を有する玉座,ならびに天に通じるように翼をつけ聖なる神殿に

綱(eškiri)で結びリセス型の玉座の座像例が登場する。

図36に特徴的なリセス型脚部の玉座に足台と基壇が揃う例を示す(註24)。(図36.1)

図 36.1 はリセス型脚部の玉座座像を示す(Buchanan 1967:pl.421)。基壇と足台を揃えた玉座につく神(神になる Ur-mes)と女神に手をひかれた謁見する主人公 Ur-mes を表す。

銘文は《Ur-mes, Ur-dunの息子は良き羊飼い(の長?)》とある。謁見の場面に鳥など食餌用の台を配置し,三日月,供犠の羊(天に向かうため),向き合った二羽の鳥,基壇の前に神権を表象する筒状の王杖(職杖)を置く(王・女王のモノが異なる)。玉座の脚部は,リセス型脚部である。前述したように天を指向した神殿は「敬天」の発想のもと宗教的な高みの概念,つまり聖なる山を実現することを重視した。実際にこの概念,高層化をめざし具体化したメソポタミアの例にウルクの白色神殿の基壇や高台の上に単独で神殿を建設したことからもわかる(北原1983:pp.29-30)。神殿の内陣に設けた玉座は必然的に建築意図に合わせ山を摸した玉座も登場する(Collon1987 : pl.642,)(付図3.(4)Thr6)。この謁見図は,メソポタミアで王権の象徴となる王冠,玉座,王杖(バトン)が揃っている例である。

図36.2はリセス型脚部の玉座の倚座像を示す(Collon 1987:pl.122)(註25)。(図36.2)

銘文は《ティシュアタル,ハルハルの王:マシアム・エシュタルは貴方の僕》と記す。玉座は,形態でまず神殿の階段状,溝状の門や外観の建築様式を摸しているが,この形式が前述した背板が少し上に伸びた玉座と神殿の戸口や垂直の柱列を摸した様式と共通する。

図37.1－5に有翼の神殿の門と結んだ玉座座像を示す(図13.1-2,吉村1990 : 図27)。

図 37.1 は,左手を挙げ右に向く玉座に座す女神は,後方に翼がついた門に雄牛と樹木を配置する(Collon1982:pl. 179)(註26)。また口状の玉座と樹木が図 34.1 のアダムとイブに例えられる神と対話する倚座像と類似性が指摘できる。

図 37.2 は,後髪を束ねた女神が房飾り付き衣服を着て,右向きに有翼のリセス型脚部の玉座に座す(註27)。左手に酒杯を右手に羽の着いた門につながる綱(eškiri)の一端を握る。門と結ばれた別のロープの端を縞模様のスカートをはく髯の従者が握る。有翼の門は女神に向き跪く雄牛の後方にある他にナツメヤシと上に三日月を表現する(ibid.1982:pl.182)。

図37.3は,リセス型脚部の玉座に座し後髪を束ねた女神は,有翼の門(扉)を背景にした雄牛と対面する。場面は,星と木を配する(ibid.1982:pl.183)(註28)。

図 37.4 は,リセス型脚部以外の例として口形の玉座に長髪の女神が有翼の門にうずくまった雄牛の背後に立ち,綱の端を持っ図像である。もう一本の綱は,女神と向き合い帽子をかぶり,縞模様の服を着た従者が持つ(ibid.1982:pl.180)(註29)。 (図 37.1-4)

図37.5は田型の脚部の玉座像を示す(ibid.1982:pl.181)(註30)。髯の神は,飾った上着を着て,左手に杯を持って三日月の下の玉座につく。玉座の星の下に二頭の雄牛がうずくまる。牛の背中に翼が付く門があり,門から伸びた綱を縞模様のスカートをつけた従者が持つ。碑文の半行に２本の横線,星形の鋤がわかる。 (図37.5)

図 37.4－5 の印章図像は,リセス型脚部でないが有翼の神殿の門(戸口,扉)と結ぶ表現を

とり,天に通じる玉座を意図している点で同じ内容である(註31)。以上の印章図像に登場する有翼の戸口と綱の表現は,ウル第三王朝期,都市の主神もしくはシュメールの天空神アンとエンリル神から王権を象徴する品々に「王座(giš.gu.za)」以外に「綱(eškiri)」の特徴的な表現例である。ウルクの最高女神イナンナは,天下の王権の神的起源を「冠と玉座と王杖とを王に与えるのは,あなたの権能です」と,「王権の座」「気高き王杖」「錫杖と綱」「気高き王衣(tûg.mah)」を讃え,天に通じる象徴性を示した(Farber-Flügge-1973)。

以上図37.1－5に特徴的な脚部を有する玉座が翼をもつ神殿の門と綱でむすばれた例を示した。この玉座の脚部の「カタチ」が神殿の門に特徴的な溝状 (Recess:リセス)の様式を3期の玉座に新しく適用した点である(註32)。前述してきたように天を指向する神殿建築,その神殿内部に設ける玉座の脚部に神殿の門に特徴的な凹みや溝の段差状のデザインを適用したのである。ここでは玉座の脚部をリセスの「カタチ」とする。

すなわち1から3期にいたるまで玉座が発展する過程に登場する玉座,ないし玉座の性格を有する過渡期の椅子の脚部は,2期では①Π型(付図2.(3)2期-Chr4),②口型(付図2.(3)2期-Chr7),③凹型(付図2.(3)2期-Chr4),④冐型(付図2.(3)2期-chr1), ⑤目型構造の田型(付図2.(3)2期-Chr1),ならびに⑥III状リセス型 (付図2.(4)2期-Chr/Thr1-3)をあげることができる。特に神殿戸口を摸した⑥III状リセス型の脚部を有する玉座の過渡期のものがプーアビの印章図像に登場している。

さらに3期で特徴的な脚部を有する玉座および椅子の例は,①Π型(付図2.(3)3期-Chr3),②口型(付図2.(3)3期-Chr7),③凹型(付図2.(3)3期-Chr/Thr3),④冐型(付図2.(3)3期-Chr4-5), ⑤目型構造の田型(付図2.(3)3期-Chr6),ならびに⑥III状リセス型 (付図2.(4)3期-chr/Thr1-6)をあげる。このほかに特別な形態を有するモノに付図2.(3)3期-chr4-5,Chr/Thr3のNini-Zaza像(図41.2),付図2.(3)3期-Chr/Thr4-5のウルナンシュ奉献板座像(図27.1,2),付図2.(3)3期-Chr/Thr6のグデア王像(図41.1)のがある。

またスツールに注目すれば,Π型(付図1. 1期LS1-4),口型(付図1. 1期LS5),凹型(付図1. 1期LS6),ならびに升目構造の田型(付図1. 1期LS6),および他に葦で作られた円筒状のスツールで脚部をもたない構造といった製作技術で変化に富むモノが1期から登場するが,こうした円筒形のスツールを玉座としない。理由は,背板がなく身を寄せる倚座姿勢の「カタ」がとれない「カタチ」による。

2期から3期にかけて玉座は,その脚部にも神経が行きとどく時期を迎えることになる。すなわち玉座の構成要素が出揃う過程で身をよせる座姿勢の「カタ」のための背板,足台,基壇をそなえた「カタチ」が完成にむかうと同時に天をめざして高層化がすすむなか,神殿の内部に設置する玉座にも天に通じる神殿の門の建築様式を脚部に持ち込んだためである。その結果,2期のウル王墓出土の印章座像(図22.7-8,図23.(1), 図23.(3)) の玉座の脚部に神殿の門に特徴的な凹みや溝の段差があるデザインが登場することになる。この脚部のはすでに2期の過渡的な玉座(図22.7(上段右より2人目座像,3･左端像),図22.8(上段甕より酒

をのむ右側の人物座像),図23.(1・上段右より2人目座像,3・左端座像)に実現していたことがわかる。ただ2期に登場する玉座の場合は,足台や基壇,そして王冠,王杖といった王権の象徴物がないためにあくまで過渡的な玉座にとどまっている。実際に3期の玉座は本格的な神殿の門＝リセス状の特徴をもつ脚部が印章の図像(例)やウル・ナンム王の玉座の脚部に登場する。このことから玉座の脚部にこの「カタチ」が本格化したことがわかる。

さらにこうしたIII状リセス型の脚部を有する玉座は,4期のハンムラビ王の玉座の脚部にもこの神殿の門の溝状の様式を適用していることから3期で完成をみたのち,4期に継続的な採用をすすめていることからわかる。(図37.4-5)

つぎに玉座の脚部に影響を与えた神殿の様子を印章の図像からみる。まず図38.1.2に基壇をそなえたメソポタミア1期の神殿を表す印章図像を示す。つぎに図38.3に基壇を階段状にした上に神殿を設ける様子,および神が人間より大きな存在として神殿の建築をすすめている様子を表した図像である。(図38.1－3)

メソポタミアにおいて初期の神殿は,前5千年紀後半から4千年紀初頭にかけてのエリドゥの神殿遺跡(現代名アブ・シャハレイン)のように小高い丘の上に神殿を建築し,広間そして祭壇を設置する建物を壁で囲ったにすぎなかった。初期王朝時代のウルクで発掘された白色神殿は,階段つきで高さ13mにおよぶ基壇の上に建設され,建物の中心に設けた祭壇があり奥に移動している(北原1983:P.30)。図38.1に神殿が高みの指向をもとに次第に天をめざして階段状の建築をすすめた証拠であり,その構造が同時期のエジプトのマスタバ墓の遺構との類似性に驚かされる(Crawford 2004:Fig.4.17,大城2010：図1)。(図38.1)

次に図38.2に示した神殿の高層化のため基壇の設置がすすみ,増広や再建も加わえてより大きく高い神殿が建設された(Collon1987:pl.748,Goff1966:Fig.245,ピエコンスキ他2004:p.246)。(図38.2)

王権が強大になるウル・ナンム王の時代の神殿は,前2110年頃に王が建築したとされ基壇が64m×46m,本来高さ12mの三段構造を有し,後の前6世紀頃に七段に増築される。
現在の保存状態が良く,多段(階段)式の神殿建築が神域と都市を支配する特色が際だっている(北原1983：pp.31-32,図46)[註33]。

こうして発達をみせたメソポタミアの神殿が建築される意図は,三点から想定できる。第一説は,春の洪水期間中に穀物の高い保管設備が発展したとする説。第二の説は,シュメール人が山岳地出身の推定に立ち神殿を人工的な山としてととらえる説。第三の説は,神殿が天に通じる階段であり,頂上の神殿は祭司を神々に近づける場所とする説がある(北原1983)。本研究では,「敬天」現在最も広く受け入れられている第三番目の説を注目する所以である。おそらく神殿が高い場所に据えるという発想から誕生し,神殿の建材は,排水用たて坑以外にレンガで敷き詰め堅固な構造で高層化を目ざし建造された。実際の遺構が頂上へ外側の三重階段もしくは螺旋状で坂道が通じていた。ジッグラトで現存する最大の遺構は,イランのチョガ・ザンビルの前13世紀の建築物で100m四方,高さが24mの規模を有

する。屋上にあがるために内部の階段を使用する点で独自的であるが,実際には建築当時の半分程の高さになっていると推定されている。

天に通じる神の大きな存在は,建築の遺構だけでなく印章に神殿建築よりも「敬天」から神を大きく表現しそして人間がより小さな存在とする意識が印章図像に示された。スーサ出土の印影は,基壇をもつ神殿建築の様子(Collon1987:pl.748)及び玉座担ぎの図像(ibid. 1987:pl.711)の先行例が1期の印章に登場することからもわかる(世田谷美術館2000:図版54, Goff, 1966:Fig.245)。

図38.3は,神殿の溝状周壁をエジプトとメソポタミアの例からしめした。図38.4は,その予想復元図を示している(Crawford2004 : Fig.4.17)。　　(図38.3－4)

メソポタミアは,神殿建築が自治的な都市国家により独自的に発達するがエジプトの場合は中央集権によりその余地がなかった。しかし建築技術から様式に共通性がみいだせる。メソポタミアにおいて神殿の建築様式は内部に設けた玉座も適用された。印章の図像には,前述した図37.1－3のように翼をつけた神殿の門と門に結ばれた玉座の表現が天と人,天と天下の境界であり結束点であったことがわかる。

## 2.　印章の座像と他の資料図像の比較

印章と他の美術資料に表現された座像と玉座倚座像の比較をする。まず3期の印章表現で座像の姿勢の「カタ」は1,2期と同様に(1)地に直接平座,(2)敷物に平座, (3)スツールを含む椅子の座像,ならびに (4)玉座の性格を有する倚座像が多数ある。また玉座の「カタチ」を構成する要素は,足台,基壇,ならびに天蓋が登場し玉座の要素が出揃う。この構成要素は,印章の座像と彫刻の座像を比較し,座の「カタ」と玉座の「カタチ」の表現が出揃い,紀元前3千年紀後半のメソポタミア4期以降も継承される。

### 2.1　平座像

図39.1と2にウル・ニンギルスの立像と跪座像をもつ台座を示す。　(図39.1-2)

グデア(青柳昭60:図版173)の息子ウル･ニンギルスの立像とその台座の礼拝者跪座像がある(ibid.昭60:図版180,Pritchard2003:pl.795)。図34.4の閲見図の礼拝者は片立て膝の跪座(図25.1,図31,図34.4)姿勢をとり,神の前で顔面礼足による畏敬や屈服の身構えを表現している。ニンギルス神は,ラガシュ市の最高守護神で理念上で「真の王」として都市を司る神である。本像は実際の神殿空間で神と礼拝者を具体的に表現した例と言える。

### 2.2　スツールに腰掛ける座像

スツールの上の片立て膝の平座姿勢は1期に多数の表現例をあげることができたが,2期以降にその姿勢が印章の図像に登場しなくなり,スツール,椅子の垂足而座,ならびに玉座の倚座姿勢に変化した。

3期のスツールは,X脚および四脚型のスツール(小椅子)の二種類が登場する。印章図像以外の美術表現にスツールとその座像が少ないことから前2100～2000年頃の図37.1のX脚状

スツールに腰掛けた演奏者座像(または調弦),および図 40.1-2 に木製品の製作光景に四脚のスツールを使う座像が貴重である(Pritchard2003:pl.795)。(図 40.1－2)

3 期に入り新たな工具の発達が明らかである。2 期がウル王墓から出土した真鍮製の鑿の刃,工具類を代表に工具と製作品とともに製作技術がわかり,印章製作に利用された工具は,印章図像に登場する太陽神の鋸歯の小刀の表現から(図 31)鉄製の道具の登場と家具や楽器類,製作する光景から状況がわかる。　　(図 40.1-2)

**2. 3　玉座の倚座像**

図 41.1 にグデア倚座像を示す. グデア王(前 2125－2110 年)は,都市ラガシュのギルス地区(現代名テルロー)の支配者としてエンシの称号をもつ王であり,同時に神殿建築家であった。さらに自らを信仰篤き礼拝者としての倚座像を多数残した(青柳昭 60:p.148)。王の玉座倚座像は,理想的な美しい王の姿を表現し全体に神経が行き届く。ターバン状の王冠(帽子)をかぶり,顔に杉綾文で表現した眉,見開いた目,胸元で両手を結び神への祈りを端正な姿勢と共に表している。　　(図 41.1)

グデア碑文は,玉座の象徴性を次のように記している。

《神ニンフルサグ(山の女神)に
立派な椅子(玉座)を
作り奉献した　・・・・・・(中略)　・・・・・・》。(飯島紀-1997:pp.100-101)。

本碑文は,山の女神のニンフルサグがラガシュと共に育ち,グデア・エンシ(知事)は,ギルスに女神の神殿を建て象徴として立派な椅子(玉座)を奉ったと表し,碑文の椅子を図像化した。本玉座は,後の紀元前 2 千年紀前半頃の柔らかな曲線をもつ職人の製作に使用しているスツール(図 41)と木材と製作技術が類似する。王の玉座は,肘当て,足を端正に揃える足台(基壇を延長した兼用)がつき,基壇の機能も追加されている。従って碑文にある神に奉献した玉座は,地上の天下と天に通じ結びつく役目をはたし,足台が昇降段,そして玉座が天に通じる環境装置の役目を果たす。

グデア王は紀元前 2200 年の前後頃にメソポタミア南部-バビロニアの復興をすすめ,メソポタミアーインダス河流域との交易活動で繁栄のグデアの時代を築いた。当時の繁栄を証する王の務めとして都市神ニンギルスのためのエニンヌ神殿を建立したほか,数々の神殿を建立し建築家たる所以となっている。グデア王は,シュメール歴代王のなか自身の祈願者像あるいは礼拝者像を多く残した。一方で王の建立しニンギルス神が祀られていたとされるエニンヌ神殿が残されていない。近年ニンギルス神立像(図 37.1-2)の一部が見いだされ胴体と台座が一体化した。像は天の神の崇高な表情と礼拝者の跪座拝礼の姿が残された(ibid.小林 2005:pp.224－225)。

図 41.2 に Nini-Zaza の倚座像を示す。　　(図 41.2)

主人公ニニ・ザザ(Nini-Zaza)は,背板がなくひじ掛けをもつ椅子に座り,カウナケスを着用し,頭にはポロスと呼ぶ帽子をつける倚座像である(Weiss 1985:pl.66)。椅子の構造は,四脚で背板がつき,脚部の側貫には前述した王妃プ・アビの玉座(図 22.1)の側貫と同様の装飾的・構造的な工夫と類似する。玉座の足台が下肢,両足元を支持し,さらに基壇,足台が倚座する人物の下半身(下肢)を足台に沿わせ,上半身を背板に,腰から臀部に座面を沿わすといった具合に正面向きに身をよせた倚座姿勢となる(世田谷美術館 2000：図版 69)。

本格的な足台の構成をもつ本石製彫刻は,後の 3 期以降の玉座の特徴の先行的表現である。この閲見図風の表現が前述した 1 期の印章表現にある神殿前の儀式風景と片立て膝の平座像の表現との関連性を示す。本座像のように 2 期に現れる背板,足台と椅子に身を寄せる機能強化により人物が正面向きに拘束され倚座姿勢をとる事がわかる。

図 41.2 にウル･ナンム王の法典碑の断片にある潅水儀式と倚座像を示す。（図 41.2）

ウル･ナンムの法典碑は，損傷が５段の区画全体に及び下からの 3 段は破損が著しく碑文をはじめ不明部分が多い(ピエコンスキ他 2004)。最上段は太陽と星で象徴された自らが天の神々の世界に通じ,天下を法により治める王権神授の意図を示す法典碑の図像は,神に信託された王をとりまく玉座の光景を印章の謁見図と同じ側面観で表現する。法典碑の頂部の図像が欠損する。ついで法典碑の上から二段目の図像がよく残り,左右対称の図像で右端にはナンナ像,左端にはニンガル女神が座っていて,紹介役のラマ女神をしたがえたウル･ナンム王が左右それぞれに聖樹であるなつめやしの木に灌奠の儀式を執り行っている。王が玉座で灌奠の儀式と王杖を授かる光景で神格化された王と玉座像が重要となる。およその内容は,左端がウルの都市神の月神であるナンナ神,右端が玉座側面に子供の足が見えるためナンナ神の配偶神ニンガル女神の座像,二人のウル･ナンム王が鼻に手を置いて礼拝する。一回の儀式を丁寧に二回に分けて表現する異時同画表現として一人の人物が時間をずらして行った２回の動作を同じ場面に配するアニメーションの効果を応用した表現である。

玉座につく神は,神の座がそのまま神の代理人となる。王杖を持ち登場するニンガル神(右)より王杖とリース(輪)を譲り受ける王の表現に寸法に差がないため対等な表現をもつ。ナンナ神からウル･ナンムが王権神授で受け取る図像の内容に二通りの解釈がある。一説では,王権の象徴である王杖,神殿建立のためのリース,もう一説が王は神殿の建立者であることから,測量用の棒(王杖)と縄(リース)の説がある。後のハンムラビ王法典碑の浮彫でハンムラビ王が太陽神のシャマシュから後者と同様のを受け取る図像があることから後者の説が妥当とされる。

向かって右側の王権神授の場面の玉座は,段状の基壇の上におかれ，王の足裏は基壇を直に踏まず基壇と足裏の間にもう一つの薄い段(敷物)があり,注意深く見ると玉座の階段の役目を果たすような足台ではなく敷物と考えられる。柔らかな曲線をえがく座面の玉座は,倚座の姿勢をとるための背板,肘当てがつかない。

## 3.　3期における座の「カタ」と「カタチ」のまとめ

3期は,王権の興亡とともに玉座の要素が出揃う時代で,あたかも王権と玉座が発展をみた前3千年紀を総括する時代であった。代表的な王権と王の名は,メソポタミア南部の群雄割拠状態を統一したアッカドのサルゴン王(在位紀元前2334年頃－前2279年頃),およびアッカド崩壊後のシュメールとアッカドを再統一したウル第三王朝(紀元前2112－2004年)初代のウル･ナンム王に代表される(小林2005:p.255)。

サルゴン王の称号は，天下支配の象徴として「四界(四方界)の王」すなわち上の海(地中海)から下の海(ペルシャ湾)まで支配する名（シュメール語:Lugal kiš ,アッカド語: Sharru kish ati)や「強力な王(lugal.kala.ga)がつく。当時の特別な組織は，官僚と常備軍を柱にシュメールの諸都市国家から中央集権国家を統一,新都アガデを建設し歴史上初めて汎世界的な王国に版図を広げた。サルゴン王の用いた「世界の王」という王号が後代にも踏襲され,王朝第4代の王のナラム・シンが「四方世界の王」を新たに採用,アナトリア遠征で最大領土とした。同類の称号が後のアッシリアのシャムシ･アダド一世も用い継続した(ピエコンスキ他2004)。

アッカド崩壊後,ウル第三王朝の初代王のウル･ナンム王は,自らを神に例え,天の代理人として「ウル･ナンム法典」を公布し,法治国家とした功績が大きい。王は,神の代理人として後のバビロニア帝国ハムラビ王の法典が同害の復讐の考え方を採用した点が異なるにしても天と天下,神と人の境界となり天を目ざす神殿建築をすすめた。王朝の末期イビ・シン王は,異民族の侵入で弱体化し,支配下の諸都市が離反,最終的にはエラムによるウル市占領によりシュメール人による国家が滅びた。

シュメールの文化が最後に輝いた紀元前3千年紀後半,王の名前と王権の高まりは,王名表に示されている(ibid. 2004:pp.554-559)。王名表は,ウル第三王朝時代で初めて作成されたとされ,シュメールの神話的時代から古バビロニア時代初期までメソポタミアの覇権を巡り王権と都市国家の権力の力関係を示す記録である。ニネヴェのアッシリア語粘土板倉庫から1872年に出土した粘土板文書(五味亨1978)が権力の交代の様子を伝える。

《天から都市…に王権が降り,…王在位…年,
…王在位…年,…王在位…年,…(中略)…
合計…人の王が…年統治。…王在位…年,
都市…が滅亡すると都市…に王権が移行,
都市…が滅亡すると都市…に王権が移行……》　(岡田,小林2008:pp.11-13)

この粘土板文書には王権と都市エリドゥ(現代名アブ・シャハライン)の交代，ギルガメシュ(ビルガメシュ)王の名も登場する。王の名が叙事詩第11書板が旧約聖書にある「ノアの箱船」-大洪水の説話部分と共通性がある内容であり（大津忠彦他1997：p.141）,バビロ

ニア時代頃にシュメール語による一連の粘土板の楔形文書の冒頭は,王権が天から降ってきたとして‘天(の神)’が‘天下を支配’する王権神授(王権天授)の神話,メソポタミアの創世記を記している(尾形禎亮(編)1992:pp.40-71)。王名表の作成の意図は,紀元前3千年紀末期のシュメール社会の成熟期に‘天から下された王権が現在の我が王朝に伝わったのである。我らは由緒正しき王統である’ということを広く示すことであった。 王名表は,天下に二人以上の王が存在することがなく,唯一の指定席が玉座であることを広く領土,領民に知らしめることにあった。シュメール文明を前3千年紀に引き継いだセム語族アモリ人のイシン第一王朝(前2017～1985年)後半の『シュメール王名表』に次の記述がある。

天から王権が下ったとき,
エリドゥに王権があった。・・・・・・・・・・・・・・・

エリドゥにはじまる王権が洪水による断絶の後に「王権が天から下ったとき,キシュに王権があった」と記される (Jakobsen,T.,1973:pp.73ff )。このようにシュメール初期王朝時代の支配者たちは,伝統をふまえたエン(en),ルガル(Lugal),エンシ(ensi)の称号でよばれた。都市国家の出現以降は,支配者がルガルを用いる傾向が強まり,ウル第三王朝 (前2112～2004年),アッカド王朝のサルゴン王やナラム・シン王が用いた称号,「強力な王,四方界の王」が一般化した。『シュメール王名表』の冒頭に窺われる,天から天下(地上)に下る「王権(nam.lugal)」の観念もこの時期に遡る。

以上のように王権が天から下ったとは,述べるまでもなく,地上の王権の神話的な起源にもとづき表現し,王に授与される王権の象徴の品々が証明する(月本昭男2010:pp.47-48)。ウル・ナンムの場合は.玉座(giš.gu.za),王冠(aga),王杖(gidri),ならびに錫杖(šibir)がウルの女神ナンナから贈られている(Renger, J.,1976-1980)。また,ウル・ナンムを継いだシュルギはその讃歌に玉座を次のように記している。

アン〔天空神〕が正しく気高い冠をわが頭に置き,
光輝くエクル〔エンリル神殿〕で私は王杖を手に取り,
輝く座,基礎の固き玉座で〔わが〕頭を天に上げ,
わが王権を強固ならしめた。

天下の王権は,天から下ってきたと強調するが,アッカド王朝で肝心の都アガデ(アッカド)は,メソポタミア地下水位上昇で消滅したか,神殿,謁見(玉座)の間,実物の玉座が未出土で資料不足が否めないにしても,一方で豊富な情報を提供するのが当時の莫大な印章や銘文,さらには楔形文字粘土板である。

3期の印章に表現される謁見図をはじめとする図像の主題のもと,一連の玉座倚座像を表

現する。ウル・ナンム王法典碑の王の玉座像は,王杖のかわりに王環(リース)をもつが王杖,王冠,玉座のメソポタミア伝統の王権の象徴的なモノと共に正面に威儀を正した倚座姿勢は,天に通じる意図で建設された神殿において,高いところから下を見下す天を意識して神にむかう威儀をただした座像で,後のバビロニアの王権神授の神話と重なる。(図 22.7-8)

座像は,四脚のスツールと玉座が主流であったが,ウル・ナンムの法典碑の玉座が神殿建築の門や階段状の建築様式を摸して玉座に採用した事がわかる(図 40)。天に通じるため建築された神殿(ibid.小林登志子 2005:p.255),その内部におかれる玉座は,天にとどく香炉や儀礼台と共に設置された。印章は,神殿前に玉座を設け,神殿の門を有翼で示し天に通じる意図を図像表現した。基壇の上に高い位置で設けられた玉座は,その足台が高い座面を相殺する役目があるにしても,背板と足台に身を寄せ,正面向きで拘束された倚座姿勢は,王の威儀をただした姿勢を示し,足台および基壇が補強するように天に通じる神殿の階段(梯子)と隠れた役目を担っている。

3 期ではさらに玉座の「カタチ」に要素が出揃うだけでなく細部が洗練される。その一つが優美な曲線をもつ獣脚の造形にある。獣脚は,2 期のウル王墓出土の旗章パネルに獣脚の椅子(図 28.1)が登場したが,3 期の獣脚をもつ椅子(図 34.2)が登場する。
神獣を脚部のモチーフにする先行的な造形例は,アナトリアのチャタルフュックの地母神座像の新石器時代後期の作例がある。後に古代メソポタミアの紀元前 3 千年紀半ばから後半にかけて従来の直材を加工した玉座と座具の類は,工房と工具の発達が轆轤加工(図 40.1),および曲線曲線(図 40.2)をもった部品の彫刻,轆轤加工が可能になり,様々な部品を組み合わせ製作された。同様にメソポタミアと通じていた古代エジプト新王朝時代の玉座,王朝家具にライオン,馬の獣脚,獣頭を椅子の正面装飾に用いている。このデザインは,後のギリシャ世界の王朝家具に影響を与え,今日まで猫脚モチーフの伝統となっている(Baker1967)。

前 3 千年紀後半のウル第三王朝最後のイビ・シン王は,紀元前 2004 年にエラム(現イラン)侵入でウル第三王朝が滅亡した結果,シュメールの文明が終り歴史から姿を消す。しかし王亡き後も,シュメールの人々の心,,都市を賛美する唄のなかで生き続けた。

メソポタミア文明の担い手となったシュメール人の出自がどこから来たのか,そしてどこに移動したか,未だに不明である(前田徹,尾形禎亮(編) 1992)。「歴史はシュメールに始まる」(Kremer,1956)という顰(ひそ)みにならえばメソポタミアの地は,天から王権が降ってくる天地創造から大洪水の神話,饗宴や動物闘争の印章図像にみられる不死の追求,神々の謁見の図像…と,世界にさきがける神話がメソポタミアに生まれ,信仰が宗教へと昇華していった。一方で天を指向した巨大な神殿は,都市の中心に建築され,その上の神殿の内部に建築様式にならった天に向かうがごとき端正な倚座姿勢の「カタ」と高いところにいて下を見下すがごとき玉座の「カタチ」の要素は,前 3 千年紀末期までに出揃った。しかしウル第三王朝の滅亡後に肝心の神殿がメソポタミアで建築されず,都市の要塞化に向かった。

## Ⅳ.　メソポタミア4期以降の玉座の充実

紀元前2千年紀以降に入り各時代の王権のもと玉座の構成要素が出揃い玉座が充実する歴史をたどる。長い歴史のなかで王権は,都市に天を指向する神殿を建て，内部に神殿の戸口を模した玉座を設けた。4期以降に玉座は，屋外の法典碑に図像として示され,「王は神である」と示し，人々が身を引き締めて天を敬う「敬天」の思想のもと天の定めと従った。

3期においてナラム･シン,ウル･ナンム王を代表に諸王も自ら神と宣言し,王権を象徴する玉座，王冠，王杖といった品々に王衣(tūg.mah)や綱(eškiri)を含むこともあり,ウルクの最高女神イナンナは「冠と玉座と王杖とを王に与えるのは,あなたの権能です」と讃えられ,「気高き冠，王権の座，気高き王杖，錫杖と綱，気高き衣」をもたらすと詠われ (Farber－FIügge,G.,1973),神に通じる玉座の「カタ」と「カタチ」が印章図像に多数表現をみた。

前3千年紀後半にシュメール人によるウル第三王朝は,前2004年にエラム(現イラン)侵入で滅亡し,イシンおよびラルサを中心にセム系の王朝が紀元前2千年紀の幕を開く(前田1992)。天を指向した巨大な神殿建築は,王朝の滅亡後にメソポタミアで群雄割拠をむかえ都市で要塞の建築を優先したが王権の称号,象徴性の考え方が4期以にも引き継がれた。天を指向した神殿の建築様式を摸した玉座が各時代の王権で充実する歴史をたどるのである。

### 1. 4期以降の座像の「カタ」と「カタチ」

以下は,シユメール時代3期の玉座の「カタ」と「カタチ」の基本の考え方が引き継がれて玉座が充実する内容を簡単にふれる。時代は,4期(前2000～1500年) のバビロニア帝国･ハンムラビ王の時代から前1千年紀前半の6期(前1000～500年)の新アッシリア帝国と汎世界的な帝国が相次ぎ強力な王権のもとメソポタミアから地中海に進出したバビロニア帝国,ならびに新アッシリア帝国に代表される。両国の王権の観念は,天から下るとしてそのまま玉座にも受け継がれた。アッカド語で残る『エタナ物語』に「王権(šarrūtu)が天から下る」以前,「王と冠,額帯と錫杖とは天に,(天空神)アヌの前に置かれていたとされ(Kinner Wilson,J.V., 1985:p.30),またバビロニア中期の卜占文書には「エンリルが王杖と玉座と錫杖とを宮殿にもたらすであろう」と記された(月本昭男2002:p.51)。このように威儀具(宝器)を神々から授与されることによって王と王権の正当性が認められた。

図42にハンムラビ法典碑とハンムラビ王玉座像を示す(図42.1-4)。

前2千年紀初頭のバビロニア帝国(註1)ハンムラビ王の法典碑(註2) の玉座は,謁見図の場面を採用し神と対面する王を象徴的に表している。ハンムラビ王は，法典碑に登場する太陽神シャマシュを動員し,「王杖と玉座，冠と錫杖の授与者」と呼ばれたバビロニアの主神マルドゥクを奉じるだけでなく,天空と中空と大地とをそれぞれ支配するアヌ(＝アン),エンリル,エア(＝エンキ)の三大神,さらに女神イシュタル(＝イナンナ)および太陽神シャマシュを動員することにより，王権の正当性を確証した(月本昭男2010:pp. 49-50)。玉座の脚部は，神

殿の門で溝状の建築様式を摸した脚部の「カタチ」を採用し3期のウルナンム王法典碑の玉座と同じとなっている(Prichard1969:pl.515,Collon1987:pl.1,4)。法典碑の太陽神シャマシュは,足台に脚を垂足而座し正面向きに王権の象徴である王杖を右手にかかげて謁見するハンムラビ王に差し出し,身を寄せて端正で威儀をただす倚座姿勢をとる。この図像は,ハンムラビ王銘を有する印章の座像にも適用される(図42.4)。その玉座は,前述してきたリセス型の玉座であり王冠,王杖,玉座とメソポタミアの王権の象徴が全て揃えた図像となっている。また足台は,聖なる山を摸している。次の図はハンムラビ王の法典碑と同時期に同様のリセス型の玉座が太陽と星の象徴のもとで神が謁見する人物に王権神授する玉座像である。ただしここでは足下の部分が欠損のため足台,基壇が不明である(Prichard1969:pl.514)。(図42.3)

次に紀元前1千年紀の前半から半ばにかけて新アッシリア帝国の玉座像から3期に出揃った要素の内容についてとりあげる。

図43.1に守護と豊饒のアッシュール神立像の押印をもつ王位継承確定のための盟約書の印影を示す。アッシリアは,アッシュールを国の名前のみならず国家の守護神として一貫して守り続け最終的に一大軍事大国(註3)となる。神は,有翼神獣の牛に立ちアッシリア王を見下す視線をとる(Collon1987:pl.559-561)。(図43.1)

図43.2にテイグラト・ピレセル三世の玉座像(註4)の構成変化をしめす。　(図43.2)

テイグラト・ピレセル三世(在位・前744～727年)は,新アッシリア帝国中興の祖とされ幾度となく領土拡張の遠征を繰り返した王の一人で,その遠征の様子と遠征地毎に変化する玉座の構成がニムルド宮殿中央宮殿浮き彫り壁画に残る(Barnett1962,服部2007:pp.171-183)。玉座は,天蓋の形態(註5)や材質とともに構成が壁画の場面で変化するが,玉座に共通する要素が,そそり立つような背板をもち,基壇と足台をくわえると山のようにそびえる玉座,そして王の威圧感ある玉座倚座像がわかる。王の遠征地での戦功を讃える壁画から玉座の構成が把握でき,確実な時代比定と共に現存してない王の仕草(Goldman1992)(註6),玉座,断片的な部品,石製の祭壇が内容を補足する(Crawford,1996:pl.10a,b,11b,13c)。玉座は,構造材を幾層にも積み上げ,身体の背中,上半身にそって垂直にそびえるような背板,高い座面につくために基壇と足台があたかも階段の役を果たす。足台が王の足を支持する役目を越え天に通じる昇降用の階段の意識が反映しているようである。一方で脚部が豊穣を象徴する樹葉や葡萄を台輪状,または獣脚を摸した造形となっている。時に天蓋が加わる。天蓋は,太陽を遮る実用的な傘の役目以上に天に通じる結界の象徴性を暗示する。玉座の背板は,従来の2から3期にかけて座面からわずかに立ちあがる控えめな背板と比べそびえ立つように高い。このため王が背板に身をよせるように倚座姿勢をとるため,天に通じ高いところから天下を見下す視点の位置を獲得することになる。すなわち3期の神殿を摸したリセス型の玉座の意図を継承するように,天に通じるための意識を反映しそそり立ち威圧感に満ちた玉座の「カタチ」は,神の代理人の天下の王を象徴する神の席となっている(服部2007)。

ここで玉座は,脚部に注目すると玉座の座面を支え天にどどくようにするために幾層にも人々(奴隷)が担ぎあげる「玉座担ぎ」の図像がある(田辺 1981：pp.129-135)[註7]。

テイグラト・ピレセル三世時代に玉座担ぎの行進(Prichard1969:pl.538)の場合は,遠征後に占領した都市の守護神を戦利品として担いでニムルド宮殿に戻る戦勝記念の行進の例やマラタヤの摩崖の王と神々の行進など多数の例がある。

つぎに新アッシリア帝国の絶頂期[註8]にあったサルゴン二世(前 721-705 年)の皇太子のセンナケリブ王(在位・前 704～681 年)の玉座担ぎの図像[註9]をとりあげる。(図 44)

ニムルドのセンナケリブ宮殿壁画に残された王の玉座像は,山を基壇に摸して玉座が山頂におかれている。センナケリブ王は,肘付きで高い座面と背板に身を寄せるのがたちはだかるような玉座で,座面の高さ分を相殺する足台を用いて倚座し式部官と謁見する場面である。王の玉座の肘当てから脚部に注目すると 座面全体を支持する構造に領土の人々や領地の朝貢者が玉座を担ぐ,いわゆる「玉座担ぎ」のモチーフを採用し,領民の奴隷支配を表すと共に王の偉大さ,超人間性を強調する。実際に壁画の銘文は,

《世界の王,アッシリアの王
玉座の上に王は座す・・・・・》
― šar(King of) kiššati(the world) šar(King of) mãtuaššur(Assyria) ina(on) $^{isu}$ kussi ni-me-di(on a seat) ti-šib-ma(he sat and) ・・・・ ―
(Mitchell1995：pp.59-64)

と王が地上世界にあって特別な玉座であることを誇示する(Mitchell1995：pp.59-64)。

玉座担ぎの表現は,メソポタミアの玉座担ぎの図像が古くからのこされている。前 3 千年紀のスーサ出土の印章図像に御輿に担がれる人物の印影,およびシュメール語 lu gu-za-l に遡る (Amiet 1980：no.691)。アッシリア王の玉座担ぎの表現は,人々の隷属的な表現(田辺勝美－1981)を採用するが専門の式部官を配置した程の伝統である。新アッシリア帝国と対峙したアナトリアのウラルトゥ王国(前 835 年頃建国)で玉座の図像は,アッシリア-ウラルトゥ様式と呼ばれる類似性と表現で相違がありウラルトゥの玉座が神々と随伴する守護神,有翼神獣が玉座の座面を担ぐモチーフにより神々へ連なる神性を誇示する(服部 2007)。

図 45.1 に玉座の想定寸法[註10]とその座像を示した。(図 45.1)

前述した図 43 のテイグラト・ピレセル三世の浮き彫りの壁画は,玉座の高さ,玉座の座面たかさ,ならびに視線の高さを推定できる。推定値の根拠なる寸法は,玉座の部品が現在,欧州各地の博物館に多数収蔵されている。そのために大英博物館(ロンドン・西アジア部, エジプト部)を代表に古代中近東美術(ベルリン) において収蔵品を計測し,その実測値から全体寸法を確認した。さらに王の遠征地での倚座像の壁画は,基壇,足台,またはその両方が必ず玉座にともなっている構成部品より推定ができた。

以上の想定寸法値から玉座の実寸法の試作検討を試みた。玉座の座面高さ 60cm,足台高さ

30cm,基壇高さ 28cm のとした。玉座につく主人公(この場合は,テイグラト・ピレセル三世)の視線の高さは,基壇から 178cm,(床より約 90.5～100.6cm)である。各地の博物館資料から熟覧,計測した玉座部品の多くが青銅製鋳物であり,その表面に往時には 0.1～0.2mm 程度の金を被覆し,しかも宝石類を象嵌している。こうした部品一つとっても玉座は,簡単に破壊できない大きさ,重量を有する事が明白で,前や背後からの襲撃,暗殺にもたじろがない座姿勢の「カタ」と玉座の「カタチ」を実現し, さらに図 3. 2(1)のように王朝家具を戦利品として運び出す光景は, 運搬に労力を要す場面を描く程に圧倒的な存在感を示す。

## V.まとめ

### １． まとめと今後の展開

本研究は,メソポタミア紀元前 3 千年紀(紀元前 3 千年～前 2001 年)に発達をみた玉座の発展過程を示した内容である。玉座は,有形と無形の象徴性があるために古代のほとんどの玉座が残されてこなかったうえに,まとまった玉座の資料がないという問題がある。ここで東－西アジア世界から玉座の代表例として,アケメネス朝ペルシャのダレイオス一世の玉座および日本で唯一の(御)椅子の国宝で正倉院の「赤漆欟木胡牀」を取り上げた。両玉座の外観が四脚の支持構造や背板（凭掛・よりかかり）をもつ点に共通点がある。一方でその座法＝姿勢の「カタ」が異なり,前者が胡座（あぐら）で,座面に平座（直接肌を接する座法）であるのに対し. 後者のそれが足をたらす垂足而座で背板に身をよせる倚座姿勢をとる。さらに前者が明治に一度修復されたが当初の「カタチ」と文書に記録がのこり,後者は浮き彫りの図像しかない。こうした古代の玉座に対して様々な情報を提供する王朝家具と玉座がエジプト新王朝ツタンカーメン王の黄金製の玉座である。この玉座は,発掘直後からすでに黄金製故に「豪華な椅子が玉座」とする物質文明観に偏って,今もなお玉座の研究が未着手な状態にある。

ここで古代と現代の意識の相違を可能な限り近づける方法が必要となる。そこで現代の漢字の源流で当時の語義と語形をとどめる象形にもとめた。まず象形の「坐」（座）は,神に伺いをたてるため向き合う二人が低い平座姿勢を象ったものであり,神に伺う神聖な(訴訟)場の座姿勢の象徴的表現である. 一方,「倚」の象形は,人をあらわす偏に大刀を添えた形で権力を象徴する. この語形より,刀や玉座に「身をよせる」倚座姿勢を表している。権力を象徴するには,玉座の座面(席)や背板,肘当て,足台に身をよせ,威儀をただした姿勢が必要となり,身をよせるための王杖(太刀・槍),王冠といった威儀具が必要となるが,玉座には象徴的な姿勢の「カタ」および玉座の「カタチ」も不可欠なのである。こうした象形の初義と初形は,時間（古代・現代）と空間（西・東アジア世界）を超えて,玉座にかかわる姿勢の形態的分類を行う本研究にとって重要な役割を担っている。ここで玉座の発展にメソポタミア

が不可欠な要素をななっていた。世界最古の文明が誕生し，この地を経由し文明の発明，要素を各地に伝えた。そうした情報をつたえるのが世界最古のしるしである印章と文字である。印章は，当時の主題の図像のみならず文字を記録したアーカイブである。

結果として印章の図像はメソポタミア文明の空間－時間－人間を舞台に紀元前 3 千年紀の 1 から 3 期にわかれた玉座の発展の様子を表現した内容が豊富に含まれる。

紀元前 3 千年紀の印章の図像表現をたどってゆくと，スツール上で片立て膝の平座像（1 期：紀元前 4 千年紀後半～3 千年紀初頭），腰かけと椅子に背板がすこし上にあがり身を寄せることが可能になった過渡期として現れる王妃プーアビの玉座（2 期：前 3000 年～前 2334 年，王妃は前 2540 年頃とされる），そして足台，基壇，背板に身をよせ正面向きに神に威儀をただした倚座の「カタ」と玉座の「カタチ」が組み合わせさる過程で，倚座姿勢の「カタ」から玉座の象徴性を獲得する。天を指向する神殿の門に特有な溝状の様式を摸したリセス型とよぶ玉座（3 期：前 2334 年～前 2000 年）が出揃う。有翼の門と結ばれ「敬天」の思想を背景にした玉座は絶えるえることなく発展する。

こうした玉座を表象とする神＝王の一体観や統治観が，メソポタミア文明の前 3 千年紀に形作られ，3 期以降も玉座がさらに充実する時代をむかえる。とりわけ 6 期（前 1000～500 年）の新アッシリア帝国の玉座において天にそびえるような天に通じ高いところから下を見下す天-天下，神-人の際を分かつ，境界としての装置の様相をとるようになった。その後，直接的ないし間接的に各地の玉座に影響を及ぼすようになり，階段まで付属する基壇と天蓋をともなう巨大な玉座へ発展し，空間的に独立する。メソポタミアの紀元前 3 千年紀以降にかけて玉座は，飛躍的な発展をとげたシュメールの文明と王権を反映して継続したのである。

ここで本研究の意義は，古代の伝統，文化の多様性が玉座の研究を通じ確認できた点である。今日の日本で生活習慣が効率重視へ偏重するなかで，偏った物質文明観－玉座の原形を椅子と混同し，豪華な椅子が玉座とする物質文明観からくる誤解，古代インドの床式の玉座や位置による主席－従席の序列をもつ古代中国やアジア世界の姿勢観への無理解など偏った点に対して広い視座をあたえる。またアジア世界で正倉院の赤漆欅木製の御椅子や中国の乾漆製玉座，さらに西アジアの玉座は，木材，石といった天然の材料を用い，貴金属（一部の鍍金部品を除き）や鉱物資源を多用しない玉座であり，今日の社会要請に基層にある生態系重視（エコロジカル）と持続可能性重視（サステナブル）の意図に沿っていることがわかる。
こうしたことから玉座の「カタ」と「カタチ」－起居の基層文化の検討を通じ，現代に必要な文化の多様性，持続性について再認識ができる。

## ２．謝　辞

本研究の着想に至った経緯は,アフガニスタンからパキスタンの国境地域の一つカイバル･パクトゥンクア州(旧北西辺境州)のスワート(県)で誇り高い蕃王の故シャハザード･サルタン･イルーム氏の王宮で生活を共にしたことにはじまる。王宮は，パシュトゥンと呼ばれる誇り高い民族の伝統と生活を強くとどめ､起居の慣習に接すると同時に天に通じ天下を見る部族の統率者の一面を垣間見ることができたのである。

その後,本研究をすすめるにあたっては,多くの方々の研究への理解,そして研究をまとめるうえで欠かせない資料へのご指摘にみならず御協力を頂いた。

本研究と関わる王朝家具,印章,貨幣の図像調査で海外では,大英博物館(西アジア部,エジプト部,コイン・メダル部,東洋美術部）特にJ. Cribb部長，J.Curtis博士，Willis博士，J.Putnum学芸員(当時)をはじめ,大英図書館,パリ国会図書館ならびにロンドン大学東洋アフリカ学院図書館の多くの研究関係者から資料調査に全面的な御協力を頂いた。同時に古代インド,中央アジア,ならびに東アジア世界にわたる王朝家具資料は,ビクトリア・アルバート美術館，ギメ東洋美術館，ローマ東洋美術館をはじめ欧州各地の美術館,さらにはインド･国立ニューデリー・マツゥーラ・コルカッタ博物館,パキスタン･ペシャワール・カラチ博物館,中国・故宮博物院・敦煌研究院・雲南省，各地の美術館と研究施設から資料調査のご協力を得た。

国内では,日本人の伝統作業姿勢を伊勢型紙研究会(三重県津市)での調査で関係者から様々なご協力を賜った。得難い資料のみならず実際の動作を観察でき，感謝が尽きない。

本研究をまとめるにあたって,早稲田大学･人間科学学術院,蔵持不三也教授を主査に野呂影勇・早稲田大学名誉教授,寒川恒夫早稲田大学教授,ならびに店田廣文早稲田大学教授に様々なご指導とご教示をいただいた。とりわけ主査・蔵持不三也教授の本研究のご理解とご指導により本論文が実現できた。また野呂影勇名誉教授は,企業に在籍していたた筆者による起居の文化研究への深いご理解があったことを記しておきたい。

最後に本研究の基層となる民族的な伝統文化の調査は,文部科学省科学研究費補助金,日本学術振興会･日英科学共同研究事業,財団法人姿勢科学研究所,ならびにコスメトロジー研究財団の助成による事が大きい。以上,関係者,関係機関に重ねて感謝と御礼を申しあげる。

2011年　1月　　服部等作

(広島市立大学･芸術学研究科)

# 参考文献と註

参考文献,註は,次の順に記載している：
①著者名-②刊行／発行年,③『書名／論文名』,④訳者(翻訳の場合),⑤出版社／掲載誌, ⑥巻,号, ⑦刊行地,(外国語文献の場合), ⑧引用ページ, ⑨原著,⑩ほかホームページのURL等アドレスを示す

## 参考文献


青柳正規(編),高階秀爾(監)-昭60:『ルーブル美術館1－文明の曙光・古代エジプト/オリエント』,日本放送出版協会
池田末利-1973:『儀礼』-士相見禮,儒教経典,東海大学古典叢書,東海大学出版会
飯島紀－1997:『最古の王朝･シュメールを読む?』泰流社
飯塚小玕斎-1987年3月:「正倉院の植物繊維にかかわる木工工芸品について」,『正倉院年報』,pp.11～36,第九号,宮内庁正倉院事務所。
井筒信隆(監修)-2004,p.146:『別冊太陽-「高野山」』,平凡社
井上耕一--2000,pp.74-75, 『アジアに見るあの座り方と低い腰かけ』,丸善ブックス88,丸善
今泉定介-1928:『故實叢書編輯部編;鳳闕見聞圖説』-「故實叢書」第9,宮殿調度沿革,調度圖會,東京・吉川弘文館。
入澤達吉-大正9a:『日本人の坐り方に就いて』,史学雑誌,31.8,
ウ-リッヒ.ヘルム-ト,戸叶勝也(訳)-1988:『シュメ-ル文明-古代メソポタミア文明の源流』,7版,原著Helmut Uhlig-1976:「Die Sumerer,Volk am Anfang der Geschichte」,佑学社
江上波夫,佐原眞-1990:『騎馬民族は来た,来ない』,小学館
江上波夫(監修)他-1995『文明の原点を探る』,同成社
ibid. -1995 岡田保良,『文明の原点を探る』-第 2 章建築文化初期毅階の住居と集落,fig.67,pp.182-183, [Wymer-1982]Wymer-1982:fig.67 参照,後期旧石器時代のスロヴァキアのドルニ・ヴェストニッェ遺跡(DolniVestonize・前 23,000 年頃)は,大小 2 棟の住居遺構が明らかとなり,そのなかに腰掛けの場合は,その一つがわざわざ傾斜地を選び高い方を削り,低い方に土手を盛土し直径 6m ほどの円形住居をな 5 本の支柱で屋根を支えた跡が残り,中央に暖炉を置き,その一つに座る席を想起させる石がある
ibid. -1995 岡田保良,pp.33-35,同成社
ibid. -1995松谷敏雄,pp.2-10:なぜ西アジア新石器時代を研究するのか,同成社
大城道則-2010：『ピラミッドへの道-古代エジプト文明の黎明』講談社選書メチエ475,講談社
黄能馥,陳媚-1999,中華歴代服飾芸術,図版2-16,中国旅遊出版
岡田明子,小林登志子著-2008 ：『シュメ-ル神話の世界-粘土板に刻まれた最古のロマン』,中公新書
岡山市立オリエント博物館-1979,7-8版:『古代トラキア黄金展-バルカンに輝く騎馬民族の遺宝』, Fig.7
尾崎二郎(編)-1991,『訓讀・説文解字注册』,東海大学出版会
小原二郎他-1986:『人体を測る-計測値のデザイン資料』,日本出版サ-ビス
角田文衛,上田正昭,初期王朝研究委員会他-平成15,角川書店
郭沫若-1972,2:『安陽新出土的牛甲骨及其刻辞』,考古,中国社会院,北京
金岡秀友-1989:『仏教文化事典』,pp.699－770bc, 佼正出版社
金子典正-2006:『中国仏教初伝期に於ける仏像受容の実態に関する一考察-仏像付揺銭樹の視座から』美術史160,Vol.55(2),pp.316～317
川田順三-1992:『西の風・南の風?文明論の組みかえのために-なぜ日本人は座るのか,フランス,西アフリカ,日本の「文化の三点測量」から考える』,pp.18-22,河出書房新社
菊竹清訓-1969:『代謝建築論-か・かた・かたち』,彰国社
北原理雄-1983：『古代都市オリエント都市-都市と計画の原型』,井上書院,(原著)Paul Lampl.e,George R.Collins(eds)：「Planning and Cities in the Ancient Near East」,George Braziller Inc.1968.,
木村法光-1992:『正倉院宝物にみる家具・調度』,紫紅社,図版21-「赤漆欄木胡牀」

木村法光,光谷拓美-平成13年: 『正倉院宝物木工品の年輪,年代関係調査-正倉院紀要』第23号
京都文化博物館-2005:『古代エジプト文明3000年の世界』,図版168,京都文化博物館
ギュンター-シャ-デ,勝国興(訳) -1987:『ベルリン美術館』,図版28,岩波書店
ギンブタス, マリヤ(著),鶴岡真弓(訳) -1989:『古ヨ-ロッパの神々,玉座の多産女神』,pp.206-208,言叢社.原著-Marija Gimbutas -1987:The Goddesses and Gods of Old Europe,6500-3500B.C.- Myths and Cult Images, New and Updated Edition, University of California Press:
倉野憲司-1978:『日本書記』校注1963,岩波書店
栗田功-2006:『ブッダの生涯-ガンダ-ラ美術にみる』,二玄社
黒柳恒男-1989, pp.38-40,『ペルシャの神話』,王書(シャ-・ナ-メ),泰流選書,泰流社
宮内庁正倉院事務所-1987-1989,『正倉院宝物-北倉,中倉,南倉』,朝日新聞社
宮内庁正倉院事務所編-1988.5:『正倉院古文書影印集成』,八木書店,宮内庁正倉院事務所
胡徳生-1992:『中国古代家具』,上海文化出版社
小泉龍人-2005, pp.15-16:『都市と都市以前』,建築雑誌.pp.15-16,Vol.117,No.1488
高后安-2001,図12:「敦煌莫高窟壁画看榻唐五代敦煌人的座具和飲食坐姿(上)」敦煌研究,2001第3期(69期),図12,pp.20-29,敦煌研究院.2001.
後藤四郎-1992(昭和53):『正倉院の木工』,図版155,pp.234-235,日本経済新聞社
五味亨訳-1978: 『古代オリエント集』-洪水伝説-筑摩世界文学大系１, 筑摩書房
左咏梅-2007: 『「上」と「下」のメタファ-について-日中対照研究』,杏林大学大学院国際協力研究科『大学院論文集』№４,pp.47-63,杏林大学大学大学院
山西省考古研究所-2005年: 『太原隋代虞弘墓』,文物出版社
柴田隆史,服部等作,野呂影勇,星野紘,寺島信義-2004:『立体映像によるチベット民俗芸能の記録』3D映像,Vol.16. No4.pp.11-15,The Joournal of Three Dimensional Images
白川静-1994:『字統』,１版,pp.334-坐の項, 平凡社,
白川静-1999,『1: 漢字,漢字百話』,白川静著作集,平凡社
白川静-2003,『字通』,平凡社
白川静-2007a,『漢字の世界2,中国文化の原点』,平凡社ライブラリ-
白川静-1999,pp.282-294:『1: 漢字,漢字百話』,白川静著作集,平凡社
シュエンツエル, クリスティアン＝ジョルジュ.,北野徹(訳) -2007:『クレオパトラ』白水社
正倉院文書研究会編-1993,『正倉院文書関係文献目録』(栄原永遠男編,1-10,東京,吉川弘文館
ジョンストン, R.F.中山理(訳),渡部昇一(監修)-平成17:『完訳・紫禁城の黄昏』上,p.347,祥伝社
杉勇,他-1978,pp.7-8:『古代オリエント集,筑摩世界文学体系』,原著Barton-1918:「Miscellaneous Bobylonian Inscriptions」,Pl.s.XVIII,XIX,New Heaven,1918.
杉勇,他-1978: 『古代オリエント集』,筑摩世界文学体系, pp. 6-8, 筑摩書房
杉勇-2006,pp.175-176:『楔形文字入門』,講談社学術文庫1744
ストリンガ-,クリストファ-,ロビン・マキ--2001:『出アフリカ記』-人類の起源,岩波書店
スペイン, J.勝藤猛,中川弘訳-1980:『シルクロ-ドの謎の民,パタ-ン民族誌-The way of Pathans』,刀水書房
世田谷美術館,NHK(編)-2000:『メソポタミア文明展』,pp.64-65, 世田谷美術館編
千田稔-2002:『海の古代史-東アジア地中海考』,角川選書336,東京,角川書店
多木浩二-1992:『眼の隠喩-視線の現象学』, pp.246,二版,青土社,東京
田辺勝美-1981:田辺勝美:『諸王の王の象徴的表現』,新潮古代美術館２,pp.129－135,新潮社,
田辺勝美-1996,pp.27-30:『大英博物館・アッシリア大文明展-芸術と帝国』-アッシリアと東アジア-文化の交流と伝播,2.胡床･床几･交椅・曲緑の項,東京都立美術館,朝日新聞社
チャイルド, V..G., 近藤義郎(訳)-1994年5月,『考古学の方法』,河出書房新社
月本昭男－2002 :『王権儀礼－王権と宗教儀礼-古代.バビロニア・アッシリアの場合』,岩波講座『天皇と王権を考える』－「コスモロジーと身体」, pp.47－69,第8巻,岩波書店
中国美術編輯委員会編-1988:『畫像石・畫像磚』,pl..122,126,130.131,216,220-223,中国美術全集繪畫編18,人民美術出版社.
天遊-2002:「章懐太子墓壁画-唐墓壁画珍品」,文物出版社
東京国立博物館-1965:『ツタンカ-メン展』,東京国立博物館
ibid.-1996:『シルクロ-ド大美術展カタログ』,図版23マハ-バ-ラタ図1面,13(ソグド)彩色壁画

ibid.-2000:『中国国宝展,東京国立博物館』,図版100,河北省博物館蔵,高さ48cm,青銅鍍金製
ibid.-2004-2005:『中国国宝展』,図版65,東京国立博物館,朝日新聞社

ダンピエール, フローレンス・ド,野呂影勇(監修),山田俊治(監訳),三家礼子,落合信寿,小山秀紀(訳) ―2009:『椅子の文化図鑑』,pp.7-9,2009,東洋書林
鳥海義之助-昭和61:『エジプト,ギリシャ,ローマの家具-木の家具』,読売新聞社.
トルコ文明展組織委員会-1985:『トルコ文明展』,中近東文化センター
奈良県立橿原考古学研究所付属博物館-2000:「権威の象徴」-古墳時代の威儀具,2000年度春期特別展
奈良シルクロード博協会-1988:「シルクロード海の道」-シルクロード大文明展特別展, 奈良シルクロード博協会,
新村出,下田正弘- 昭和30年, 平成19年,威儀,胡, 仏教の項:『広辞苑・第六版』,岩波書店
西尾実,岩淵悦太郎,水谷静夫(編)-2003:『岩波国語辞典第六版』, 岩波書店
ニコラスリーブス,近藤二郎(訳)-1993:「図説・黄金のツタンカーメン」,pp.312-314,原書房,Nicholas Reeves-1990:The Compl.ate Tutan-khamun, The King・The Tomb・The Royal Treasure,Thames & Hadson,
日本経済新聞社-1989:『王の道-ヨルダン9000年の芸術文化展』,日本経済新聞社,
野村茂治-1963, 『研究ヨーロッパ系 (立坐系) 居住型の発展に対する研究 (設計計画) 』,建築雑誌
野呂影勇-1989a,『現代のエスプリ-オフィスアメニティ,心の装置 心の装置としての椅子』,pp.161-189,至文堂
原田淑人-昭和37:,『日本における倚坐の習慣・東亜古文化論考』,吉川弘文館
服部等作,片方善治(編)-1989,『現代のエスプリ-オフィスアメニティ,文明のオフイスから文化の空間へ』,pp.106-115,至文堂
服部等作,野呂影勇,他-1990年,『エルゴノミクスデザイン』-「使いやすいハードウェアのデザイン」,pp.104-170,日科技連出版社,東京
服部等作(共著)-1990年,『図説エルゴノミクス』;公共機器における人間工学設計-銀行カウンタ装置,産業機器 〃 -医療機器,ﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞｼｽﾃﾑ,自動分析装置,pp.119-136,日本規格協会,
服部等作-1999:『食の光景と床座の文化-西北インドで見られる片立て膝の床座姿勢』,アジア遊学,Vol.14,pp.111-128,勉誠出版
服部等作-2000:『食の風景-宴の演出と造形,食の光景と床座の文化』-西北インドに見られる片立て膝の床座姿勢, 「アジア遊学」,Vol.14,pp.111-128,勉誠出版
服部等作-2000:『玉座考』-SD・スペースデザイン,pp.82-87,Vol.23,7月号,鹿島出版会
服部等作-2001:『集いの光景』4～7・緑地帯,1月31日～2月5日号,中国新聞社,参照
服部等作-2002:『スッールと床座像に現われた玉座の性格-古代メソポタミアの印章図像にみる初期の玉座について』,「芸術研究」15号,pp.43-56, 広島,広島藝術学会
服部等作-2002:『チベットの芸術と文化・その現在と未来国際シンポジゥム-ITS2002論文・資料集(2002)』, Tibetan Studies International Symposium an their Exhibition,2002 KYOTO *http://harpl.ib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/4068* 参照
服部等作-2004:『中国雲南省,四川省蔵族における工芸と芸能の記録保存と文化伝承を巡る国際研究』,pp. 87-102,2000～2003年,科学研究費基盤研究(B・1) 国際学術調査報告書, *http://harpl.ib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/3911*
服部等作-2005:「古代メソポタミアにおける初期のスツールと床座人物像の特徴-印章の座像にみる初期の玉座のイメージについて(1)」,デザイン学研究,9-16,日本デザイン学会.
服部等作,荒川正晴(編)-2006:『ソグド人虞弘墓の浮き彫りにみる座像と饗宴の光景-「東トルキスタン出土『胡漢文書の総合調査』掲載論文,科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書;平成15年度-17年度,研究課題番号:15401021,研究代表者:荒川正晴」. *http://harpl.ib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/5055* 参照
服部等作-2007:『玉座を支える有翼神獣』-ウラルトゥ王国の玉座における天空と地上世界の交流, 「神話・象徴・文化III」,pp.171-183,GRMC-比較神話研究組織,楽浪書院,年5月
服部等作-2007:『西蔵自治区-青海省を結ぶ蔵族の工芸美術と芸能の文化 : その資料と保存に関する研究』(2004～2008),http://harpl.ib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/1010
服部等作-2008:『王の座と玉座のカタチ』, 「姿勢と研究」,POSTURE,Vol.32,pp.44-51,姿勢研究所,

服部等作-2009a:『チベット仏画制作センターにおける伝統技材用法と継承に関する研究』(2005～2008),*http://harpl.ib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/1015* 参照
服部等作-2009b ：『正倉院・赤漆欄木胡牀と西方のイメージ-シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相(成果報告電子版)』掲載論文,科学研究費補助金(基盤 (A)(一般))；平成17年度-20年度,研究代表者:森安孝夫」,*http://harpl.ib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/5054*
服部等作,篠田知和基(編)- 2009：『天上と天下の玉座-ウラルトゥと新アッシリア帝国の玉座』,
「天空の神話ー風と鳥と星」,pp.43-62(635-654),楽浪書院
服部等作,篠田知和基(編) -2009：『中央アジアのソグド人虞弘墓にみる饗宴と楽園の図像』,「神話・象徴・文化II」,pp.277-290,GRMC-比較神話研究組織,楽浪書院
服部等作,柴田幹夫(編)-2010：『大谷光瑞と二楽荘ーその建築に影響した英国の邸宅文化とインドの僧院の景観』,「大谷光瑞とアジア」,pp.399-423,勉誠出版
范曄撰,李賢注,吉川忠夫注-2001：『後漢書』,東京,岩波書店,-巻二三,五行志
本田済編-1973,『漢書,後漢書,三国志列伝選』-中国の古典シリーズ,東京,平凡社
ピョトール・ピエコンスキ,アラン・ミラード(編)-2004, 池田裕,山田重郎(監修)-2004年,『大英博物館版-図説古代オリエント辞典』,東洋書林
ファース, レイモンド・佐藤知久 訳-1996:『尊敬の姿勢と身ぶり』: IV章身体のポリティクス,p.345,東京,大修館書店.
福田 彰浩-1990:『玉座の系譜-弥生・古墳時代における古代の椅子 』,ふくろう出版
藤井純夫-昭62:『西アジアにおける玉座の型式とその坐法について-シルクロード美術論文集』,pp.9-21,吉川弘文館
藤田豊八-昭和18年:『胡床につきて-東西交渉史の研究,巻下・西域編』,pp.143-185,萩原星文館,参照,
古野清人-1971:『シャルル・ド・ブロスと実証的精神』,同『宗教生活の基本構造』社会思想社
文化庁-2009：『国宝土偶展-海外展,大英博物館帰国記念』,pl. 40,文化庁
レイモンド・ファース 佐藤知久 訳ー1996:『尊敬の姿勢と身ぶり』: IV 章身体のポリティクス,pp.345,東京,大修館書店.
フレイザー, J.G.,著,折島庄司・黒瀬恭子訳-1986,『王権の呪術的起源』思索社,
ibid.-2006.7; 神成利男訳：『死にゆく神』(原著Macmillan, 1936第3版の訳)/東京. 国書刊行会,
フロン,クリスティーヌ(編),田辺勝美(監修)-1987,『考古学大図典』,pp.22-24,同朋舎出版,
ヘロドトス(著),松平千秋(訳)-1967,『歴史』, 筑摩書房
ホカート, A・M・著,橋本和也訳-1990,pp.87-121:『王権』,人文書院
法隆寺昭和資財帳編集委員会-1986:『法隆寺の至宝-昭和資財帳』,第6巻,pp.14,No.27,小学館.
前田徹,尾形禎亮(編)-1992:『古代オリント-西洋史(1)』,「シュメールの社会」,有斐閣(10版)
前田徹-1998:『シュメールにおける王権の象徴-王杖,王冠,玉座』,pp.21-30,早稲田大学文学研究科紀要,第四分冊,日本史東洋史西洋史考古学
牧角悦子-2006, p.8,創文社,
松島英子,田辺勝美他-2000：『世界美術全集-東洋編』-16,西アジア編,講談社
松村明,三省堂編修所(編)-1995,『大辞林』,三省堂,２版
松村一男,永澤峻(編)-2007：『死の神話学-死と来世の神話学』. pp.16-17,,和光大学総合文化研究所,東京,言叢社
マレク,ヤロミール著,近藤二郎訳-2004,図版54:『エジプト美術-岩波世界の美術』,図版54,pp.104-106,東京,岩波書店 , 2004.ヒエラコンポリスのホルス神殿出土,王位更新祭(ヘプ・セド「尻尾の祭」・王の礼服の要素からこの名前が由来)の衣装をまとい,紀元前2650年頃,石灰岩,H62cm,オックスフォード,アシュモリアン美術館
マルセル モース,足立和浩,他(訳)-1974:『身体技法マルセル・モースの世界』-仏季刊誌『アルク』,第48号(1972年),東京,みすず書房,
森豊-昭和48,『登呂の椅子-古代文化をもとめて』,東京,新人物往来社
矢島文夫1982：『メソポタミアの神話-神々の友情と冒険』,世界の神話１・人間と農牧のはじまり(シュメール),p.25,筑摩書房
矢島文夫:『ギルガメシュ叙事詩ー古代オリエント集』第11書版,156行,p.163ページ,ちくま学芸文庫,ちくま書房

山折哲雄-1981:『座の文化論』,学術文庫,pp.220-228, 図8, 講談社
山田明爾-2000:『仏教文化と僧侶と在家』世界美術大全集東洋編13,pp.337-344,小学館
吉川守,江口一久, 国立民族学博物館(編) -2005 : 「シュメール語辞書データベース」
*http://htq.minpaku.ac.jp/databases/sumer/index.jsp?HEADER=false*
吉田憲司,ジョンマック編-1997:『異文化へのまなざし-大英博物館と国立民族学博物館のコレクションから』,pp.163,図67,68a,国立民族学博物館
ラジリー, リチャード.,安原和見(訳)-1999年:『石器時代文明の驚異-人類史の謎を解く』,pp.34-35,河出書房新社,(原著)Richard Rudgley-1998,Lost Civilizations of the Stone Age,Andrew Lownie Literary Agent, London
李宗山-2001:『中国家具史図説』,湖北美術出版社
李済,国分直一(訳)-昭和57,pp.130-132:『安陽発掘』,新日本教育図書,pp.130-132,図12参照,
ロマン・ギルシュマン,矢代幸男(監修)-1966: 『古代イランの美術１-人類の美術』,新潮社

Alexandra A. J.,-1982-83:「Stone Sculptures from Mohenjo-Daro」, Report on Field Work Carried out at Mohenjo-Daro, Interim report Vol. 1, Pakistan 1982-83, by the IsMIO and Archen University,Istituto Italiano Per Il Medio ed Estremo Oriente, Roma. 1984 年照,Fig.16-18
(Mohenjo-Daro:HR163/193/226,Alabaster,H:42cm37:Fig.40(Mohenjo-Daro:DK1909,Alabaster,H:17.8cm-Fig.5.31参照
Amiet Pierre-1972:「Glyptique Susienne」
-ibid.1980a:「Art of the Ancient Near Eas」 t.Harry N.Abrams,Pub.New York
-ibid.1980b: no.691:「La Glyptique Mesopotamienne Archaique」. no.691,2nd eds.,
Amnon Ben-Tor(eds),Translatedby Greewnberg,R.,- 1962:「The Archaeology of Ancient Israel」
Andre Parrot-1962:「SUMER」,Thames and Hudson
Andre Parrot, :「DerTurm von Babel」,103
Aronson. Joseph,-1965:「The Encyclopedia of Furniture」, Batsford Books
Barba, Eugenio and Avarese Nicola S-1991,「A Dictionary of Theater Anthropology-The Secret Art of the Performer」,pp.228-237,Routledge,
Baker,Hollis,S.- 1966:「Furniture in the Ancient World-:Origins and Evolutions 3100-475 BC」. Norwich
Barnett,R.D. -1950:「The Excavation of the British Museum at Toprak Kale near Van」’,Iraq 12,
Barnett, R.D.-1957:「Catalogue of The NIMURUD IVORIES withother exampl.e of Ancient NearEastern Ivories in the British Museum
Barnett, R. D. & Falkner, M.-1962:「The Sculpture of Assur-nasir-apli II (883-859 BC), Tiglath-Pileser III,(745-727 BC), Esarhaddon (681-669 BC), from the Central and South-West palaces at Nimrud」,London
Bottero, J., -1985 :「Mythes et rites de Babylone」p.294. Paris
Brandes,Mark.,-1979:「Siegelabrollungen aus den archaischen Bauschichten in Uruk-Warka」 (Freiburger Altorientalische Studien 3).
Barnett, R. D. & Falkner, M., The Sculpture of Assur-nasir-apl.i II (883-859 BC), 1962
Beacg, Milo Cleveland & Koch, Ebba ., -1997:「Kings of the World」, The Padshahnama, An Imperial Mughal Manuscript from the Royal Library, Windsor castle,Held at Queen’s Garary
Ben-Tor,Amnon .,(eds) -1992: Translated by Greewnberg,R.,「The Archaeology of Ancient Israel」, Yale Univ.Press,New Heaven & London
Black,Jermy,and Green, Anthony-1992: God, Damons & Symbols of Ancient Mesopotamia an illustrated Dictionary,British Museum Press,
Buchanan Briggs.,- 1966:「Catalogue of Ancient Near-Eastern Seals in the Ashmolean Museumu,1 Cylinder Seals」, Oxford University
Carter,Howard-1923,1927,1923,「The Tomb of Tut-Ankh-amen」,3 vols.London
Cary welch Stuart,& Cleveland Beach Milo -1965:「GODS, THEONES, AND PEACOCKS」, Asia House Gallery Publication

Collon, D.,- 1982:「Catalogue of the Western Asiatic Seals in the British Museum-Cylinder Seals II,AKKADIAN-POST AKKADIAN UR III-Periods」, The British Museum Press
Collon, D.,-1986:「Western Asiatic Seals Cylinder Seals III」, The British Museum Press
Collon,D.,-1987:「The first Impression, Cylinder Seals in the Ancient Near East」, The British Museum Press,(和訳)ドミニクコロン著,久我行子訳,『円筒印章-古代西ｱｼﾞｱの生活と文明』, 東京美術.
Collon, D.,-1986 :「Catalogue of the Western Asiatic Seals in the British Museum, Cylinder Seals V-Neo Assyrian and Neo Babylonian periods」, The British Museum,
Collon, D.,- 1995:「Ancient Near Eastern Art」, The British Museum Press
Curtis, John and Tallis, Nigel . ed-2005:「Forgotten Empire」-2005-:The World of Ancient Persia, The British Museum Press, London
Cribb J., Errington,E.,(eds)-1999/2000:「Silk Roaad Art abd Archaeology」,Kanishika's Buddha Image Coins revisitedpp.pp. 151-190,Institute of Silk Roaad Studies,Tokyo.
Dampierre,Florence de-2006:「Chairs-a history」,Abrams,N.Harry Abrams,Inc.
Duling-Caspers, E. C. L.,-1985:「Magic Hunting Practices in Harappan Times」, South Asian Archaeology 1985, Scandinavian Institute of Asian Studies Munshiram Manoharlar. 1985,
Dormann,P.,et al-2005:「Egupt and the Ancient Near East」- Metropolitan Museum of Art, New York, 1991(3rd print)
Errington,E.,& Cribb J.,-1995:「THE CROSSROADS OF ASIA, Transformation in Image and Symbol in The Art of Anscient Afganistan and Pakistan」,International Conference Held at Madingley Hall,5th -7th Oct.1992,Anscient India and Iranian Trust, Cambridge, U.K,
Farber-FIｕ̈gge,G.,Der Mythos-1973:「Inanna und Enki-unter besonderer Berｕ̈cksichtigung der Liste der ME」,Rome:Biblical Institute Press, S.54,Z.103.
Fontana, David。,-1997:『シンボルの世界-図説聖なる言葉書』,阿部秀典(訳),河出書房新社,1997年,原書David Fontana-1993:The Secret Languageof Symbols,London,Ducan Bird Publishers
Frankfort, H.-1939-:「Cylinder Seals-A Documentary Essay on the Art and Religion of the Ancient Near East」Frankfort, H.-1939:「Cylinder Seals」, A Documentary Essay on the Art and Religion of the Ancient Near East, London. 1939,1971 reprint
Frankfort H.P.- 1954:「The Art and Architecture of the Ancient Orient」,The Pelican History of Art,ed.by Nikolaus Pevsner,London, Penguin Books
Frankfort, H.,Before Philosophy, The Intellectual Adventure od Ancient, 2nd eds. Univ. of Chicago.1946,訳本：山室静,田中明(訳)-1997:社会思想社,7版: 『古代オリエントの神話と思想』,哲学以前,pp.25-26
Goff, Beatrice Laura-1966,fig102-107:「Symbols of Prehistoric Mesopotamia」, Yale University, New Haven and London
Goldman,B.,-1992:Some Assyrian Gesture, BAI-Vol.4,pe.41-47, Bulltain of Asia Institute,1992
Gyselen,R,R.Curiel et als.,-1992:「Banquets D'Orient,Res Orientales IV,Bures-sur-Yvette」,1992,
Goff, Beatrice Laura-1966:「Symbols of Prehistoric Mesopotamia」, Yale University, New Haven and London
Hattori,Tosaku.,- 1999:「Study of the Throne and Sitting Figures」,Bulletin of the 4th Asian Design Conference, held at Internat. Symposium of Design Science at Nagaoka Institute of Design,Nagaoka
Herrmann,Georgina。, (eds)-1996:「The Furniture of Western Asia Ancient and Traditional」, Paper of the Conference held at the Institute of Archaeology」, University College of London, June 28 to 30, 1993,Verlag Phillipp Von Zabern-Gegrundet, Mainz
ibid. -Curtis,V.,「Assyrian Furniture,The Archaeological Evidence」,pl..80(c)
ibid. -Crawford, Harriet.,:「The Earliest Evidence fromMesopotamia」,pl..10a,b,11b,13c
Harvey Weiss -1985:「Ebla to Damscus-Art and Archaeology of Ancient Syria」, Getty Trust,
Hewes,W.Gordon.,-1955:「World Distributuion of Certain Postural Habits」,American Anthropologist,57
Hewes,W.Gordon.,-1957:「The Anthropology of Posture」,pp.123-128,Scientific American

Hodder, Ian.,(eds),Members of the Catalhoyuk teams-2005:「Catalhoyuk Perspectives: Reports from the 1995-99 Seasons-Catalhoyuk Research Project Vol5」,Britishi Institute at Anakara, McDonald Institute for Archaeological Report 2006-05-01, BIAA Monograph No.40. Fig.3.3,Univ.of Cambridge,
Husain, Ashruf Altaf.,-1962:The story of Swat as told by the Ferozsons.Ltd,Pesawar,1962,
Ilhan., Temlzsoy-1995:『アナトリア文明博物館』,原田武子(訳):アナトリア文明博物館
Jakobsen,T., -1973 :「The Sumerian King List」, Chicago, The Univ. of Chicago Press,4.ed., [1939],pp.73ff.
Keel,Othmar., -1996:「Die Welt der altorientalischen Bildsymbolik und das Alte Testament」, 5 Auffl.Göttingen,(邦訳 O.ケール(著),山我哲雄(訳) -2010年3月 :『旧約聖書の象徴世界・古代オリエントの美術と詩編』,教文館)
Kenoyer Mark Jonathan-1985:「Ancient city of Indus Valley Civilization」.
Killen, G.P.,- 1986:「Ancient Egiptian Furniture」Vol.1 & 2, 4000-1300 BC-Furniture, Aris & Phillips-Warminster
Kinner Wilson,J.V., -1985:「The Legend of Etana」, p.30Warminster:Aris & Phillips.
Kist Joost- 2003:「Ancient Near Eastern Seals from the KIST Collection」, Three Millennia of Miniature Reliefs, Culture and History of the Ancient Near East Volume 18, Brill, Boston.
Kohlmeyer, K. E.,& Roling,W.,(eds.,),今井綾子訳-1998:『シリヤの円筒印章-発掘出土作例・様式群と編年』,Syrian Glyptic Art-Excavated seals and sealings, Stylistic group and Chronology. Catalogue title of Land das Baal - Ebla to Damascus held at germany and U.S.A.Strommenger,堀内紀良発行,1988
Kremer,S,N,-1956:「From the Tablets of Sumer」,訳本:佐藤輝男(訳),植田重雄(訳)-1959年,『歴史はスメールに始まる』新潮社
Layard-1853:「The Monuments of Nineveh」,London,1853
Lehner,M-1997:The Compl.ate Pyramids,p.203,London,
Livshits, B. I.,&Legends,V. A。,-2002:「Tales, and Fables in the Art of Sogdiana (Biennial Ehsan Yarshater Lecture Series)」, No.1,Bibliotheca Persica.
Fredrik Barth (著),子島進(訳)-1998年:『スワート最後の支配者』-フレドリック バルト (著), Fredrik Barth (原著), 子島 進 (翻訳), 麻田 豊 ,勁草書房
Legrain,L.,-1936:「Ur Excavations volume Ⅲ-:Archaic Seal-Impressions」, Joint Expedition of the British Museum and of the Museum of the University of Pennsylvania to Mesopotamia,British Museum and the University Museum of Pennsylvania
Mallowan, M. and Georgina Herrmann-1974:「IVORIES from NIMURUD (1949-1964)- Fascicule III, Furniture from SW.7 Fort Shalmaneser」Published by the British school of Archaeology in IRAQ(london)
Mallowan, M. and Davies L,G., -1970:「IVORIES from NIMURUD- Fascicule II, IVORIES in Assyrian Style」
Makay,E.J.H-1937-38:「Further Excavation of Mohenjo-Daro」, Vol.I&II,Delhi,Gov.of India
Mandal.A.C-1985:「Homo Sedens」, private publishing,3rd edition,
Mandal.A.C -1987:「The Influence of Furniture height on backpain」, Behavior and Information Technology,1987,6(3),pp,347-352
Marshak-2002, Fig.72:「Legends,Tales and Fables in the Art of Sogdiana」,Bibliotheca Persica Press, New York.
Marthy,K.Krishna.,-1982:「Ancient Indian Furniture,Swadesh Prasad Singhal for Sundeep Prakashan」,Delhi,
Merhav R., -1991:「Urartu-A Metalworking Center in the First Millennium B.C.E」, Israel Museum
Mellaart, J.,-1967:「Çatal höyük」,A Neolithic town in Anatoria, London,Pl..184, Fig52,53,
Mellaart,J.,-1970,「Excavations at Hagilar」,2 vol.Occasional Publications of the British Institute of Archaeology at Ankara, Nos. 9-10, Edinburgh University Press,Edinburgh.

Mitchell, T. C., -1995, pp. 59-64: 「Bible in the British Museum」, The British Museum Press
Newton, Jan ., - 2003:「Chess Quest-The Origins of Chess The King Isn't Dead After All!」, The Real Meaning of Shah Mat or the Lesson of the Commode
Nicholas Reeves-1995:「The Compl. ate Tutan- khamun, The King・The Tomb・The Royal Treasure」, Thames & Hadson,
Nissen, J., Lutzeier, E., Northcott. K., -1988: 「The Early History of the Ancient Near East 9000-2000 BC」. Journal of Near Eastern Studies. Univ. of Chicago Press.
Nicholas and Shaw-2000: 「Ancient Egyptian Materials and Technology」, Cambridge Univ. Press
O. E. D. -1934:Oxford English Dictionary, Oxford University,
Osten, Hans Henning Von Der -1934 : 「Ancient Oriental Seals in the Collection of Mr. Edward T. Newell」, The Oriental Institute of the Univ. of Chicago, Illl,
Parrot, Andre, Malraux(eds.)—1962:SUMER, Thames and Hudson, London
Parvine H. Merrillee- 2005: 「Catalogue of The Western Asiatic Seals in the British Museum; Cylinder Seals Ⅳ Pre-Achaemenid and Achaemenid Periods」, British Museum Press
Porada. E., -1948: 「Corpus of Ancient Near Eastern Seals in North American Collections」, the Collection of the Pierpont Morgan Library, Washington, D. C.
Possehl, Gregory L. -1996:「Indus Age- The writing System」, The University of Pennsylvania Museum, Oxford & IBH Pub. Co. Pvt. Ltd.,
Prichard, James B., - 1969:「The Anear East in Pictures-Relating to the Old Testament」. Pritchard, James B., :The Ancient Near East in Pictures,, 2nd ed. Princeton Univ. Prss.
Pal Pratapaditya, eds. -2003 「Art from the Himalayas & China, Asian Art at the Norton Simon Museum」 Volume 2, Yale University Press, New Haven and London,
The Queen's House-1997:「A Royal Palace by the Thames」, The National Maritime Museum, The old Royal Obsevatory
Ravn. O. E-1960: 「A Catalogue of Oriental Cylinder Seals and Impressions in the Danish National Museum」, Nationalmuseet Kobenhavn,
Renger, J., -1976—1980 : 「Inthronisation」, in RIA, 5. Bd. (1976—1980), S. 129.)。
Richter, G. M. A., -1912:「Ancient Furniture-A History of Greek」, Etruscan, and Roman Furniture」, Claredon Press, Oxford
Roaf, M., -1996: 「Cultural Atlas of Mesopotamia」, England, Facts on File Inc
Rollefeson-1993,
Rosenfield, John M. -1967:「Dynastic arts of the Kushans」, Berkley, LosAngels
Russell, John Malcolm-1998:「The Final Sack of Nineveh-The Discovery, Documentation, and Destruction of King Sennacherib's Throne Room at Nineveh」
Russmann, E. R., -1989:「Eguptian Sclupture: Cairo and Luxor」, Pl.. 6, British Museum Press.
Sear, David R. -2000:「 Greek Coins and their values, Vol. II-Asia and Africa」, Pl.. 6713-6724, (4th eds.) B. A. Seaby Ltd. London
Seidel. U., -1994:「Der Throne von Toprakkale , Archaeologische Mitteilungen aus Iran
Stein, M. A., -1928: 「Innermost Asia」, 4 Vols., Oxford
Stein., M. Aurel, -1929: 「On Ancient Alexiander's Track to the Indus, Personal Narrative of Expl. orations on the North-West Frontier of India」, Pl.. 37, Benjamin Blom, Inc, New York Reprint参照, 邦訳スタイン, オーレル, 谷口 陸男, 沢田 和夫(訳) -1984: 『アレクサンダーの道-ガンダーラ・スワート』, 白水社
Turton。David., -2004:「Uneasy encounters between Mursi and tourists in southern Ethiopia」. Anthropology Today Vol. 20, No 2.
Unger, E., ma-1966:Der Beginn der altemesopotamischen Siegeld forshung, Wien,
Schmalenbach, W., (eds)-1988: 「AFRICAN ART-The Barbier-Muller Collection」Pl.. 115 -117, 156, 157, 172, 175, 176, 184, 197, Prestel-Verlag, Munich, アフリカ各地の部族のスツールが一木から削り出し, 部族の王(長)がいわゆる椅子の構造をとりることが多い.
Russmann, Edna R., -1989: 「Eguptian Sclupture: Cairo and Luxor」, British Museum Press, 参照,
Wiseman-1962:Catalogue of the Western Asiatic Seals in the British Museum- Cylinder Seals I, Uruk-Early, British Museum

Woolley,C.L.,-1934:「The Royal Cemetery (Ur Excavations II)」, London and Philadelphia
Zettler,Richard L., and Horne, Lee -1998;「Treasures from the royal tombs of Ur」, Univ. of Pensilvania Museum of Archaeology and Anthropology,

## 註

第1章　玉座の「カタ」と「カタチ」

註1:王と玉座の象徴性は,多くの作家や歴史のなかで語られてきた。旧約聖書列王記I 10. 18-20にイスラエル王のソロモンの玉座がもつ神々しい象徴性を有形のモノとして記述する。またシ-クスピアの『リチャ-ド二世』では,《列王の玉座,錫をいただく島,威風堂々の大地,軍神マルスの座所,もうひとつのエデンの園,地上の楽園　》と王と玉座の無形の象徴性として讃える。

象徴性,すなわちシンボルとは人間の深淵に根ざすとする。人は相手に伝達する場合に書き言葉,話し言葉,イメ-ジ,あるいは身振り(ジェスチャ-)と記号・サイン,何らかの「しるし」を拠り所とする。本稿では特別な権力をもち特別な階級の頂点たつ(男性,女性格をとわない)人物を玉座につく主人公とするが,玉座という特別象徴的な席は,宗教的な先祖神,守護神といった神々,歴史的に象徴的な偶像,動物,精霊といった象徴性となったモノを置くだけでなく,空席とすることがある。

註2:本研究は威儀をただすための道具として仏教用語を用いる。威儀(いぎ):①重々しくいかめしい挙動,また,作法にかなった立ち居振舞い。「威儀を正す」,②礼の細則。「礼儀三百威儀三千」,③仏教用語に法則にかなった振舞い,袈裟につけた平くけの具類,この他に威儀具は,天蓋(きぬがさ),威儀を正す法具如意(にょい),笏(こつ),払子(ほっす),扇(おうぎ)をあげる,正倉院宝物に「麈尾(しゅび)」と言う,麈(おおしか)の尾を用い団扇形にした威儀具が見られる。(新村出,下田正弘(仏教)-2007年,威儀の項)

また威儀具の範囲は,身につける執り物(王冠,王杖,玉座等)から移動手段(神輿,御料車),さらには空間まで広い幅がある。

註3:戴冠式の要素は,A～Zまでの26要素にまとめている,その項目は,A:理論では,(1)王は死に,(2)再生する。(3)神として。B:準備段階として,王は断食し,他の禁欲生活を実践する。C:.(1)供儀に参加資格のない,他所者,罪人,女子供は近づけず,なにも知らされない。(2)武器を持った護衛が覗き見を防ぐ。F:王は,(1)正しく統治するように戒められ,(2)彼はそうすることを約束する。そうして,人々の歓呼の後に,王には王冠がかぶせられ,王位の徴である剣・笏・指輪などを受け取った上で,王座に座り,王は新しい名を受ける,などとしている(ホカ-ト 1990) 。またフレ-ザ-の玉座の交代で「王は死せり」が「死んだ王」を意味するではなく,「待ち伏せにあった王,打ち負かされた王」が本来の意味であった

註4:起居とは立ち居ふるまいをさす。「出入起居,罔有不欽＝出入起居,欽マザルコト有ル罔シ」と書経に現れる。書経は,五八編からなる西周時代から戦国時代まで書き継がれた中国最古の歴史の記録で,王の宣誓や訓告の言葉が大部分を占める。「書」「尚書」ともいい五経の一つ,十三経の一つである。本書は虞書,夏書,商書,周書の順に並び,秦の穆公(ぼくこう)作という秦誓に終わる。勿論,尭・舜・禹,商(殷)の初期にかけて文字のない時代であるため虞,夏,商書が伝承を後世の史官が集録したもので実録ではない。

註5:メソポタミアの文明は,都市の発生と相前後して成立したものであり,人々の生活基盤は,人-モノ-情報が行き交う都市にあった。都市には,一つまたはそれ以上の神殿が営まれ,都市の守護神が祀られていた。ここでは神権的な性格も含めた王権もまた都市に基盤をおいていて,この特色は時代が進み王権の拡大と広い領土を治めるようになっても,基本的には維持された。文字記録の残る古代オリエントの地域の行政の基本形態は,一般的に王(例外的に女王)が執行し,世襲される王制であり,王は自らを国の最高神の地上における代理人とみなしていた。バビロニア神話では,王権は神々によって人類に降されたものであり,実際,王たちは神々より選ばれた者であることを強調する,いわゆる王権神授説が「王権は神から付与され,王の意志に人民は反抗できない」とする考え方である。玉座の解明作業は,信仰する都市の神殿,神々と王権の側面の掘り下げが必要である(角田文衛,上田正昭,初期王朝研究委員会他-平成15,pp.125～126:『古代王権の誕生３-中央ユ-ラシア,西アジア,北アフリカ』,pp.125～126,角川書店年参照)

註6:建築と都市の新陳代謝,循環更新システムを視点にした菊竹清訓-1969によるメタボリズム論『代謝建築論-か・かた・かたち』の提唱がある。本稿ではこの用語から引用しつつ, 新

村出-昭和30年『広辞苑』にある,「カタ」［形・型］を参照,座の「カタ」を玉座の座り方として,また座の「カタチ」をその形態として取り上げている。広辞苑は,「カタ」［形・型］を1.かたちに同じ-①形状,②模様,③占いにあらわれるしるし,④事があったあとに残るしるし,⑤銭の面で文字のある方,2.（普通「型」と書く）個々の形から形を生じるもととなるもの,または個々の形から抽象するもの。-①形をつくりだすもとになるもの,②①外見にあらわれた姿,かっこう,②中身や働きに対して外形,形式,③様子,顔立ち,容貌,容姿,とする。本研究では,「型・カタ」と書く,①形をつくりだすもとになるものは,「形・カタチ」として扱う。「カタ」と「カタチ」を換言すれば,「カタ」は,残りにくい「無形」の「方」,「カタチ」が残り可能性が高い「有形」の「形」,と二つの面を想定している。

註7: 筆者は,1988年よりヒマラヤ山脈をとりまく文化圏の調査の一環として中国西南部,ここでは東チベットのカム地方(Kam,雲南,四川,青海省南部の一部を含めた東チベット)に居住するチベット人を主にした少数民族固有の文化,地域の文化保存のため科学研究費補助金による国際学術調査を推進,国際研究集会,成果報告論文集としてまとめた。その間にスワ-ト藩王(現在パキスタン北西辺境州)の王宮に居住する機会を幾度か得た。当地のパシュトーン族は,スワ-ト藩王を旦那様といった敬愛をこめワ-リ-サ-ヒブと呼ぶ。当地の起居でイラン系民族の伝統的な片立て膝の床座(Half kneeling figure on ground),および胡座を扱うなかで片立て膝の床座姿勢が融通のある中間姿勢であることが起居の文化の基層にある点が明らかである。

註8: ‘三つの間’がおりなす関係は,間３のコンセプトが野呂影勇の空間-時間-人間を特徴づける内容(引用不明)として示している。

註9:玉座は,①王の座るところ,また帝王の位,②第一人者の地位,とする。他に教皇には法座,聖座,司教座,神の御座,神座とも言うが,琉球王家の玉座が御差座(みさすか)と様々な呼称がある。

天皇や天子の御座所,玉座は,他にロ-マ法王,ダライラマ法王といった宗教の指導的人物の特別席は‘法座’,さらには絶対的な権力がある皇帝の席を‘帝座’,神や偶像も含めて神の席を‘神座’,天上(空)の星は‘星座’と多数の呼称がある。本稿で引用資料に「坐」とする以外,当用漢字の「座」で統一する。一方で椅子(倚子・いし)は坐臥具の一つ。椅子の定義は,1)腰かけるための家具,こしかけ。2)役職または地位,ポストである。他に大辞典＃5071は,腰しをかける台,長く止まる意志なく一時的に身を置く地位,茶室の待ちあいの意味を示す(新村出-2008) 。

註10:胡(呉音:ゴ。唐音:ウ)は,①中国で,異民族の称である。秦代・漢代には匈奴,唐代には広く西域民族を指す。北魏時代五胡十六国時代は,遊牧民による国家である。②中国で一般に異民族・外国でオリエントとも呼びエジプトまで含めた広範な世界をさす外来のものに冠する語。しかし中国において‘胡’が中国国内を脅かしてきた異民族や異文化をさす。とくに春秋から漢代にかけて北や西の異民族である匈奴や羯といった遊牧民族を蔑視した用語である。後に遊牧民族による五胡十六国,北魏の建国後,唐代にかけて交易商人のソグド人をさすようになった(新村出-2008b)。また‘胡’を用語にくわえて異民族由来のものを示す用法に朝鮮半島,中国の長安,さらには西域にあたる中央アジアに興ったササン朝ペルシャ,吐蕃といった国々の物や文化に‘胡’をつけた宝物がソグド人やペルシャ商人を介して正倉院に伝播し中国経由で異国文化を留めている。

註11: 凭掛は,一般的に木材工芸の用語では背板(Backrest)にあたる。背板は,腰掛けなど人の背のあたるところの板である,正倉院南倉67号「赤漆欟木胡牀」は,鳥居形の背板と高欄(肘当て)が付いた四本脚の椅子で,床縦68.5cm,高さ42.5cm,凭掛高さ48.5cmと大形である。座は方形で籐編み(明治期の後補)で,脚は前と両脇に貫がある。主材は欅を蘇芳で染め,透漆で塗る。脚部の下,座と高欄の四隅,背の縦柱と笠木の交叉した部分と笠木の両先端に鍍金飾り金具が付いている。

註12: 正倉院事務所西川保存室長(当時)との調査における談話のなかで,本御椅子を東大寺の高僧用胡床と指摘があった。東大寺献物帳第二号の赤漆文欟木御厨子が赤漆欟木胡牀と同一材料と製作内容の調度品であるため,天武天皇から持統直系の皇位継承用に意図的に製作された皇位の継承用としてある種の神器の一つとして想起されている(木村法光-1992)。現在の御椅子は,江戸時代の復元製作と明治時代に修復されたものである。現在の御椅子は,『延喜式』掃部寮(かもんりょう)に登場する。江戸の復元品が京都御所の紫宸殿に御紋の飾具をつけた黒塗の高御座(たかみくら:大正時代の修復)として,大小の鏡,玉幡で飾る屋形内に置れた。弘仁十二(821)年の『内裏式』に「御座ヲ大極殿ニ整ヘ設ケ」る記述と一致する。 平安時代の内裏太政官庁で使用した座具は,椅子(倚子),床子,草墪(そうとん)の三種

類がある。使用する人物の階層に応じ最高位の座臥具が天皇用の黒柿製椅子とし,皇太子用が白木製の椅子である。床子は,男性用で赤漆-漆-白木床子と表面処理する,草墅が円筒形に作り布で包んだ凭掛(背もたれ)がない腰掛けである。『延喜式』に「紫震殿設黒柿木椅子が清涼殿・殿上の間に紫檀の御椅子(ごいし)とあり,位別に中納言以上が内裏内で使用規定がある。近世のを小床子(しようじ)という。

註13:国家珍宝帳の正式名は,東大寺献物帳の記述にある天平勝宝八歳六月二十一日献物帳である。 正倉院の宝物は,珍宝帳の献物帳と対応するものが多く含み,中には中央アジアのササン朝ペルシャ,ソグド,チベット(吐蕃)といった地域とのシルクロ-ド交易を通じて由留された貴重な文化財が多数ある。

註14: 宮内庁正倉院事務所の光谷らによる年輪年代調査などの研究から中倉202号・八足几(741年),南倉また中倉177号・緑地金銀絵長方几第17号が古木の中心材を利用し381年の古例がある。調査から八世紀半前後頃とされる。

註15:胡牀上の正座像は, 梶谷亮治があげる僧侶の肖像例弘法大師座像(平安時代,大阪金剛寺),図版19,蘭渓道隆座像(鎌倉時代,鎌倉健長寺)を代表にに多数あげる。土宜法竜(1854～1923)の写真は,赤漆欟木胡牀と同じ四角で4脚,左右および後部に手すりがあり,背部に鳥居形の凭掛があって,上に褥(しとね)を敷き上に正座する法座(高僧用の玉座)である(南方熊楠顕彰会,井筒信隆2004)。写真の椅子は,天皇や高官の公卿が立礼の儀式中,腰を掛けるためのもの。皇室行事で御椅子を使う一方で,天皇は,にいなめ祭,四方拝,和歌(歌会始め)も正座するために事前に準備する事を侍従長が述べている。

註16:座姿勢に対する見方は,偏見に満ちている。例えば東アジア世界の伝統にある床座姿勢の「カタ(座法)」=地面や畳の上の床座(正座,割座,胡座)姿勢に対して,西欧世界の椅子を代表に倚座や腰掛けの「カタ(座法)」が優位性をもつとする点である。このことは,現代文明がグロ-バル化のなかで文化の多様性認知に立つ必要を示唆する。すなわちアジア世界の居住様式が平屋を木材や土を多用して建築する伝統的な自然素材工法に対し西欧とくに米国文明が鉄,コンクリ-トを多用する効率,経済的な人工素材の消費文化による高層・高密度住宅に偏り,また富の分散に対し富の都市へ一極集中文明という,文明のありかたを問うことになる。さらに効率性と経済性を優先する傾向は,社会で格差を認めない平等観が格差を是認する富の集中もすでに起きている

註17:高僧と胡牀上の座像例は,筆者の敦煌莫高窟1997年夏,2009年夏で196洞,138洞,2010年春の敦煌莫高窟調査の際に確認している。 正座,胡座,交脚の坐像は,東アジアのみならず中央アジアさらに古代エジプトに登場する。ギリシヤ・ナクソスの貨幣にもデオニソ-ス神(ロ-マ名:バッカス)胡座像,及びイスラム教信徒の礼拝の時に見ることができる。特に中央アジアのソグデアナ,ペンジケントの王宮址から出土した壁画,および山西省太原市晋源区王郭村で出土した虞弘墓に登場する「墩」は, 籐座製で中間部を束ね肘当て,背板がつかない腰鼓形の構造を持つ座具である。西アジアから伝わった 墩胡牀の坐像とともに胡座,交脚,垂足而座といった起居の文化が表現する(東京国立博物館1996,服部,荒川2006:pp87-102,他)。

註18:日本においても天皇といいう称号の表記,および雄略天皇頃から「天下を治める」として意識される思想も天にかかわる。日本語の「天(あま)」と「海(あま)」が同じ呼称であることは,天空を宇宙とみなす思想を海まで及ぼしたものである。天命が変わり権力者一族が別の王朝に移ることが革命である。王権簒奪者は,武力行使(放伐)を許し,話し合い(禅定)が良いこともあり権力の交代は,天命が正当化され,古代社会において政治や思想の基本となっていた(千田稔2002)。

註19: アケメネス朝ペルシャ(アカイメネス朝,共にギリシャ語読み)は,古代イランの地中海かたインダス河流域まで領土として強大な王朝で,古代イラン語はハカ-マニシュ王朝となる。ハカ-マニシュほ王家の祖にあたる。

註20:シュメルの呼称が正確であるとする見方を採用する。先の二次大戦中に「高天原はバビロニアにあった」,天皇を「すめらみこと」と言うことが「シュメルのみこと」と俗説が生じ,当時のシュメ-ル学者の中原四茂九郎(京都大学)教授が誤解ないように長音記号をいれ「シュメ-ル」としたと言われる。シュメ-ルの呼称は,メソポタミア南部のバビロニア地方のニップル(現代名・ヌファル)を境界に北部をアッカド,南部をアッカド語でシュメ-ル(シュメ-ル語でキエンギ,意味は不明)をさす。シュメ-ルの古代都市は,ティグリス・ユ-フラテス川流域に発達し,シュメ-ルがペルシャ湾へこの二大河が流入する河床,低地帯をさす(岡田,小林-2008)。

ウル第三王朝の滅亡に際して元来シュメ-ル人とセム系民族相互の間に戦争があった訳で

はない。現在英国,オクスフォード大学付属アシュモレアン博物館蔵のシュメールの王名表(通称ウェルド・ブラソデルプリズム)によれば,シュメール人と共にセム系の人名がその初期から王として記録が残るため両者の共存が確認できる。シュメール人とセム人は,文明成立時,そして様々な発明の担い手であった(前田徹,尾形禎亮(編) 1992)

註21: ‘赤漆欟木胡牀’は,西アジアの文化的な影響として座の「カタ」の例が胡跪-こき(跪拝), 胡座であり, 座具の「カタチ」が胡牀, 御椅子の形態に見いだせる(服部2009b)。例は多数あげることができる。食品の胡桃-くるみ,胡瓜-きゅうり,胡椒-こしょう,胡麻-ごま,胡人の信仰に胡教-こきょう(仏教,あるいは拝火教か?),胡鬼-こき(仏),さらには胡散臭い-うさんくさいに登場する。また姫-こき(西域の女),胡蜂-すずめばち,胡琴-蛇皮をはった楽器,胡粉-ごふん,胡蝶-胡の国の蝶,など中原にない珍しいモノや文化に使った。そのなかには薬膳の品も含まれ,胡麻は,エジプトでタヒ-ナと呼ばれるほどの日常品で今日まで愛用されていた。古代エジプトの治療についての古文書(エ-ベルスパピルス-古都テ-ベ(現ルクソ-ル付近)出土,第18王朝の紀元前1550年頃)の247～249節と254節の処方例には,こえんどうの実 ,けしの実(モルヒネ),苦よもぎと実が登場する。

註22:ダレイオス一世(Dareios I,紀元前558年頃-紀元前486年)は, アケメネス朝ペルシア第3代の王(在位:前522年-前486年)でアケメネス朝全盛期の王とされる。通称、ペルシア語のダーラヤワウ(Dārayavau-名詞幹形)－ワウ(よきもの)を保持する者の意味がある。他にギリシア語形(ダーレイオス,Δαρεῖος),ラテン語形ダリウス(Darius)と共に知られる。王の功績は,全土に総督(サトラップ)を配置し約20の行政区(サトラピー)に分割した上で,スーサとサルデスを結ぶ「王の道」を代表に各地を結ぶ交通網と中央集権体制を整備し、エーゲ海からインダス川におよぶ最大版図を統治した。王の時代に祝祭都市ペルセポリスが造営されたが、政治の中心はスーサであった。交通網は、当時として驚異的な速度で通信や移動が可能となり, 中央集権的な統治体制を整備する一方で、帝国内の諸民族には寛容な政策をとり、交易で活躍するアラム人やフェニキア人の活動を保護した。上質な金貨・銀貨を鋳造し帝国各地への流通を図った。

註23:威儀とは, いかめしい挙動。作法にかなった立居振舞(たちいふるまい)を示す。仏教用語の「威儀を正す」用例がある。仏教の法会(伝戒や伝法)や御修法(天皇の御衣加持)は,規模, 目的, 意義を問わず様々な内容があるが, その進行のなかで荘厳をはたす威儀具と威儀師とよぶ進退威儀の遂行役をはたす人物が登場することから物心両面でその重要性がわかる(金岡秀友－1989:pp.699－770bc)。

註24:クセルクセス王(Xeres-在位紀元前486-465年)の座像説がある(Curtis 2005, Pl..21).本解説は,従来の研究例(ロマン・ギルシュマン,矢代幸男(監修) 1966)に従いダリウス王(紀元前552～530年)の座像とする。

註25:足台(footstool)は,脚をやすめるための台で,さらに玉座の席(座面)の位置が相対的に高くなるのに対し足台をつけることで相殺する役目がある。後の時代,少なくとも新アッシリア帝国の玉座の構成に壇(Plat form)が加わる。玉座の一部と考えることができる基壇は,その位置をたかくするだけでなく,建物を支える,石や土の壇を強化することで高層化が実現できる。後に基壇にも昇降用の階段がつき,足台が附属することで玉座の構成が出揃う。

註26:ダレイオスの「玉座担ぎ」,玉座担ぎは,他にも百柱の間にアルタクセルクセス一世の「玉座担ぎ」がある。図版248-アルタクセルクセス一世の「玉座担ぎ」参照。 アフラマズダ神の御意とは,「日の出ずる所から日の没する所まですむすべての人間の王」をさす。

註27:胡が頷(あご)の下に瘤(こぶ)を病む北方の民族の風土病から象形ができたと由来がある(白川静2003)。

註28:奈良時代までは胡床(あぐら)と呼ばれ時代により呼び方が異なった。胡座の登場例は,「後更亦幸行吉野之時,留其童女之所遇,於其處立大御呉床而,坐其御呉床,弾御琴,令爲擁嬢子」日本の最も古い歴史書『古事記-雄略記』に「大御呉床(椅子)」の名がつく椅子とともに「胡床居(あぐらい)の神のみ手もち」と胡座(あぐら)の座姿勢で座って琴を弾き,女性の踊りを見たこと,応神記に偽王を「呉床」に座らせた儀礼の様子を記す。座法は,結跏趺座を「趺坐」とし厳格に示していない。呉床の名がつく当時の椅子は現存しない(倉野憲司1978,森豊昭和48)。 天平以前の日本に古代中国の座具の‘床’の上で正座する礼に則った伝統と異なる胡座姿勢と形態がすでにあった事がわかる。

註29:エジプトの古代家具は,網代の席を多数有する。例は,Fig.29 (大英博物館蔵EA-2479),Fig.30 (大英博物館蔵EA-2480) Fig. 11(pl..36)の寝台(第4王朝:カイロ博物館蔵JE-532161),Fig.32 (カイロ博物館蔵JE-62028,Carter no.91)の黄金製玉座がある(Killen, G.P., -1986,Fig.29)。

註30:ニサ出土のパルテイア朝からササン朝の王朝家具の検討で中央アジアブハラの現在も利用されている家具がある(Curtis,V.,pl..80(c))。座面は網代である。筆者は,パキスタンで同様に長椅子,ベッド,スツ-ルの網代製の座面をもつ夏向きの工夫をほどこした家具を実際に見ている。

註31:古代日本において王権の交代が,半島からきた騎馬民族によってなされたかという問題提起は,そのまま中国の江南か半島からの起居の文化の流入と密接な問題である(江上,佐原1990)。

註32:原田氏は,日本における倚坐の習慣・東亜古文化論考のなかで古墳時代の埴輪の座像を三種類の倚座から分類をすすめ,「牀」を西域から伝わった座具とするがそれがどのようなモノか具体的な内容は示されない(原田淑人-昭和37)。

註33:栃木県佐波郡出土品の男子垂足而座像,図9:栃木県亀山古墳出土品の,図10,出土地不明の巫女,垂足而座像。埴輪の座像例をスツ-ル上の座像,もう一つがスツ-ルの上の胡座像(pp.97図9,栃木県亀山古墳出土品は,スツ-ル上の男子胡座座像を倚座像とするが明らかに間違い)をあげている。その論考は,床座を中心に座と立位,その文化的関係,神と仏の文化のなかにある起居の諸相について様々な話題を提供し,そのなかで玉座と関連するインドの仏教やヒンズ-教と座法をあげ総体として座の文化性をあげる(山折哲雄-1981,no.665,図8)。

註34:高高在上(高いところにいる),居高下(高いところにいて下を見下ろす)という言い方は,比喩的表現である。北京の紫禁城・太和殿は皇帝の謁見する場所で,その中の玉座は床面より高い台に設置し階段を設ける。このことから「上下」の関係が実感できる。

註35:起居の文化多様性は,急速に衰退する内容がある。入澤が示した「跪の二」,「跪の三」の割り座と横座の混じった座の「カタ」が,で現在の日本で絶えたとする。また正座同様に座り両方の足を外側に出し尻を床に着ける割座,亀のように両方に足を出す割座とほぼ同じ亀居(かめい),さらに亀居が歌膝(片立て膝の姿勢と胡座が混じる)とあわせて足の裏を合わせる楽坐の座法である(井上耕一-2000)。

註36: 天皇は,「すめらみこと」の呼称があり,その語源にモンゴル語のsümer(須弥山)説をとするとされる

註37:高御座とよぶ天皇の玉座は,天蓋がつく独立した空間のなかに,前述した南倉67号「赤漆欟木胡牀」を小型にした‘赤漆欟木胡牀’の形態を有する。この高御座は,大正時代に新たに製作された皇室用の赤漆欟木胡牀(玉座,御椅子)である。明治神宮の聖徳記念館の明治天皇之玉座行幸図には,先に製作された高御座の後方に昇降用の階段が付く。現在の御椅子は,江戸時代の復元製作である。明治時代の修復がある。現在の御椅子は,『延喜式』掃部寮(かもんりょう)に登場する。江戸の復元品が京都御所の紫宸殿に御紋の飾具をつけた黒塗の高御座(たかみくら:大正時代の修復)として,大小の鏡,玉幡で飾る屋形内に置れている。弘仁十二(821)年の『内裏式』に「御座ヲ大極殿ニ整ヘ設ケ」記述と一致する(今泉定介-1928)。

註38:跪座は,信仰意識の具体的な座像表現として神殿,神の図像に度々登場する。象徴的な無形の神を象徴する台座と解説するトゥクルティ・ニヌルタ1世(在位前1244-前1208,中期アッシリア最盛期)の大理石製の祭壇で象徴的に表現し,一方で祭壇に礼拝者が跪座を異時同画表現としてくりかえす表現がある。今日のアニメ-ションの効果を狙った一人の人物が時間をずらして行った2回の動作を同じ場面に配した表現である(ギュンタ-シャ-デ-1987)。

註39:新アッシリア帝国のニネベ宮殿の壁画にセンナケリブ王の軍隊が家具類を戦利品として略奪し運び出す場面(pl..332),戦利品から家具記帳の場面(pl..302)がある(Baker,H,S.,-1966)。

ライバルが玉座を略奪する視点は,有形と無形の象徴的価値にある。メソポタミア北部は,鉱物,木材など豊富な資源地帯に位置するのに対し資源の乏しいメソポタミア南部が「砂と泥のメソポタミアの文明」と特徴づけられる。メソポタミア南部で文明初期のウルク期は,生活の基本となる主食のパンをつくる石臼のための玄武岩,住居や神殿の建築用基礎材料の石灰岩,農耕具や武器をつくるためのフリント(珪石),印章に用いる水晶,ラビスラズリ,玉随といった石材が貴重で,メソポタミア北部やインダス文明など外国から輸入していた。西アジア内部が海や困難な地形,気候により分断されることのない陸続きの地であり,対照的に人,物,情報が自在に往来したため生産と直接関係しない都市,国家が発展した。実際にバビロニア,アッシリア帝国で王の肩書きは,物資の供給者を意味する《Šarru》であった(江上波夫1995)。

註40: 紀元前3千年紀半のメソポタミア2期(前2900～2554年)の時期に階級社会は,王族,書記,大祭司,高級官僚,軍人などが一層増加したことを物語っている。実際の出土品は,高価な輸

入材(アフガニスタンのラピスラズリ,インダス河流域地方から紅玉髄)を贅沢に使った美術や彫刻が登場した。

註41：英国オクスフォード大学付属アシュモレアン博物館蔵のシュメールの王名表(通称ウェルド・ブラソデルプリズム,王朝表とも呼ぶ)によれば,シュメール人と共にセム系の人名がその初期から王として記録が残るため両者の共存が確認できる。しかし,歴史の上では登場しているウンマの名前は,王名表には現われず,諸都市に関する碑銘もある。考古学者によってシュメール人の聖なる都(ヴァティカン)とされたニップールも王名表の中には登場しない。研究で〈大洪水以前〉の王名表から,エリドゥ,バドティビラ,ララク,シッパール,シュルッパクなどの諸都市ですら,シュメールのいわゆる初期王朝の時代-互いにしのぎを削っていた都市国家の時代に王名表が存在した。

註42:玉座の主人公の交代劇は,良くも悪くも新たな性格をおびる。特に簒奪者が自ら獲得した王権を正当化するために前任者を罵る事が常套手段であり,時に玉座の主人公が暴君の席となる事も歴史が繰り返されている。

註43: 本資料は,孔雀の玉座の資料写真がない。当時のムガール朝皇帝の宮廷生活の様子を表したラージプト派絵画に表現された玉座は,孔雀の玉座の前方に座すナーセロッディーン・シャーアフシャール朝のナーディル・シャーが1738年,ムガール朝に侵攻。1739年のイランへの凱旋に際して,ムガール朝のムハンマド・シャーから奪った多くの宝石とともに孔雀の玉座のオリジナルも持ち去られた。

註44:現在,各国の王室は,開かれた王室となって宮殿や施設を公開している。英国のバッキンガム宮殿やクイーンズハウスに17世紀からの王室家具が良く保存されている。フランスのベルサイユ宮殿,ロシアのサンクトペテルブルグ宮殿,ウィーンのシェーンブルン宮殿など往時の状況を伝える宮廷家具が陳列されている。日本の皇室に属する御所の紫宸殿の高御座(玉座)は,特別期間に限定公開となっている。

註45:説文解字,一上に示される。六書については「説文解字」より先に[漢書・芸文志(かんじょ・げいもんし)]や[周礼(しゅらい)・鄭司農(ていしのう)]の注にその名がみえるが,構造法を説く最初の資料は[説文解字」にはじまる。

註46: 中国漢代の許慎(紀元30-124年)が漢字9353字を540の部首に分類し,「説文解字(せつぶんかいじ)」十四巻・9353文字に漢字の字形と形態学的な面を著し漢字の視覚的,記号性の拠り所と基礎を与えた。漢字の構造法として六書は,字の構成と応用から象形・指示・会意・形声・転注・仮借から六書という原則を立てて解説した。今日の漢字文化の基本を見いだした功績は大きい。転注と仮借が本来の意味と異なった別の意味である。特に象形が会意としての象形,および指示の二つの役目を合わせて一定の概念を表し古代のイメージ(象形)を伝える意味(語義)を備え,漢字の基礎を得たといえる。一方で漢代は,象形が土中にあったため知られず,字の初形,初義を明らかにする方法もない時代のため,その説は誤りが多いとする。 筆者が象形文字を応用する立場は,象形が誕生した当時のイメージと共に初形,初義を再確認する必要にたつ。

註47:象形文字(甲骨文)が,象形の元となったイメージや語義以外,当時の口承や伝承の情報,様々な姿勢のイメージも含んだ蓋然性もあるが,そのなかに当時の特別な王たる人物とその一族が用いた様々な占いに用いた象形に託されていた。ここに象形の解明による意義は,古代人の有した六書の役目を把握でき,そして今日の漢字と照合することで古代と現代の考え方に接近できる生きた字の体系であるとする。象形(甲骨文字),文字は,言葉自体に形を与え,内容を固定し,概念を一定の集団と社会で共有するため発展してきた。象形は,具体的な図像表現による古代の体系的な価値観を表現するのみならず言葉の抽象的な概念を含む。我々が日常的に用いる漢字は,文字言語として形・音・義をそなえる。『説文解字』$_{十三下}$にある坐に憫と憮があり,［会意］で土は土主,神を迎えるところ。その左右に人が対坐して訟事を決する裁判用語である。それで訴訟の関係者を座といい,当事者として裁判にかかわることを坐という。『説文解字』$_{十三下}$に留止の意で「止まるなり」とし,字を留の省形とする。留は溜水の等形字で,坐とは関係はない。 『周礼-秋官,大司寇』に,罪過有る者を「桎梏(しっこく)(かせ)して,諸(こ)れを嘉石に坐せしむ」とある。 『周礼-秋官,朝士』に嘉石・肺石の左右に坐せしめて,その訟(うった)えを聴くことをしるしている。その嘉石・肺石が,坐の字形にみえる土主にあたる。

座・坐の語系はdzuai。訓義の坐は,1。神くら,御座,聖なる場所,もと獄訟を行うところであった。すわるところ。2.くらい,特定の者の位置するところ,星のやどり。3.ざしき,しきもの,あつまりのひと,つどい。4.聖所,また山林などを数える助数詞。5.国語では神くら,社寺に属する職能的集団の名につけて用いる。本稿で,当用漢字の「座」に統一して用いる

(白川静-1994:『字統』, 平凡社, 1版,坐の項を参照,) ［訓義］は,1.裁判の坐に連なる,罪に坐する,当事者として法廷に坐る。2.すわる,とどまる,ひざまずいてすわる。 3.いながら,いながらにして,たやすく。 4.座と通じて用いる。,その源流の象形は,その基本の意味を有するのである。記号やサインの類を含め文字と言語は,人類の発展過程に様々な事物を具体的に示す必要機能として社会,集団で共有されてきた確かな証拠である。文字と言葉に用いる音の相違点は,文字と異なり話しの概念を伝える媒介物にすぎない。今日の漢字を使う人々が,識字教育を受ける平等化社会への指向と比較が出来ない格差社会の象徴でもあった。 (白川静-2003年,刊行のことば)

註48: 白川静-1984:『字統』－１版,6,24,倚の項,平凡社参照,倚座は,モノに身を寄せる声符に由来する。倚の声符は,奇(き),奇は猗(い),椅(い)の声がある。-「机に倚る」,の「杖に倚る」のように身を寄せることをいう。そのため倚がよりかかるという元々の意味があり,よりかかって座ることが原意である。漢字の構造を通し字の初形と初義を明らかにする本辞書にたてば腰掛けに座る,何かに腰掛ける場合は,倚るに該当しない。広辞苑には倚座の用語がない。

白川静-2003,8画　4062,奇の字音, 声符は奇(き)。奇に猗・椅(い)の声がある。［字訓］かたがわ・あやしい・すぐれる. ［会意］㕒（き）＋口. 口は祝詞を収める器の粟（さい）. 㕒は把手のある大きな曲刀形で,直立しないものである。この曲刀を以て呵して祝冤の成就を求める意. 字の立意は可と近く,神の承認を求めることを可といい,奇はその系列の語である. 〔説文〕五上に「異なり」と奇異の意とし,また「一に曰く,刺（偶）あらざるなり. 大に從ひ,可に從ふ」とするが,大とは関係がない. 奇は剞州（きけつ）（彫刻刀）の形に従う. 曲刀で不安定な形であるから奇邪の意となり,それより奇異・奇偉の意となる.

註49: シュメ-ル語の古拙な象形は,紀元前4千年紀前後半頃にウルクのIV層（Uruk-Warka・現代名ワルカ, ,旧訳聖書のエルク,前3400年頃)より出土した5000点を超す粘土板に記されていた。約1200の文字が粘土板に書かれ, 古拙な絵文字風に表現した大英博物館所蔵WA-WA116627のウルク第４層の出土品が知られる。集団で農業生産物の蓄財と財力が巨大化するジグラットに奉献された穀物や家畜の数量の帳簿,神殿の活動記録である。この文字は,後の粘土板の楔形文字と比較して象形文字に近い。この古拙文字が利用可能な人物は,一定以上の階級性に属し。経済関係の契約(売買,賃金,奴隷雇用,養子縁組み),神話,叙事詩,奉納文書類などに用いた。 膠着語の性格を有し日本語とおなじルーツが考えられている(前掲。Kremer,S,N,-1956)。メソポタミア文明に先行したウバイド終末期には,古代の人的移動があったためにヒトや物,情報を管理するため文字が必要になったとされている。中国の甲骨文字が５万字の漢字に発展するが,一方でシュメ-ル人がメソポタミアの古拙な絵文字600字でなぜ意味を表現できたか不明である(小泉龍人-2005)。 シュメ-ル語の古拙な象形は古典期の古拙文字は古アッカド・シュメ-ル時代の前2500～2000年頃まで続く。メソポタミア文明の北イラク・テペガラウ遺跡(ウルク中期後半)の集落では行政や管理をになう効率的な組織が生じた様子がみえ,なかでも語彙が多いのが,経済関係について家畜,穀物,人(性別,身体の各部)など交易,数量管理用と具体的でおおよそ数百種類が認められている。漁業,漁師,魚類に関するものも多数あり,ペルシャ湾を介してメソポタミアとインドとの海上交易の存在が明らかになっている。さらに古拙な象形の特徴が漢字の原形となる象形(甲骨文字)と同じ六書の機能をもつ点も少なからず影響性も考えられている。古拙な象形が,文明の初期から王権といった特別な人物を象徴する役割を果たしたことが伺える(杉勇-2006,pp.139-140)。

註50:原文が農牧のはじまりについて,楔形文字粘土板裏面の冒頭6～10行目に記されている,裏面の冒頭部１から６行目が欠け,詳細な内容が不明である。

註51:二義的な意味は,座る(単数tus／複数durun)といった四角の枠内に記して象徴性を示す。メソポタミアにおいて境界石(クドゥル),釘用,定礎用が方形である。用途からは,文書の形態で円筒,俵形(バレル),角壔形(四から角壔)が分類でき,象徴性から多様である。

註52:殷の青銅器にしばしば見られる標識記号を類型的に数十種,細部の差異から数百例をあげ,その図像が氏族のあり方を示す標識とする。それは氏族の身分や社会的表示とする。

註53: エジプト語文書解読の端緒となるロゼッタ・ストーンは,エジプト遠征を行ったナポレオン・ボナパルト指揮下のフランス軍で1799年7月15日,ピエ-ル＝フランソワ・ブシャ-ル大尉がエジプトの港湾ロゼッタで発見した暗色の花崗閃緑岩の碑文(大英博物館蔵,縦114.4cm,横72.3cm,厚27.9cm,重量760kg)である石の表面は,エジプト語とギリシャ語(コイネ-)の2種類の言語が3種類の文字,エジプト語の神聖文字(ヒエログリフ),民衆文字(デモティック),そしてギリシャ文字で記されている。ギリシャ語部分の読解から,他もギリシャ

語と同内容が含まれていると推測され,1822年,ジャン＝フランソワ・シャンポリオンが解読に成功した。（シュエンツエル2007）
古代エジプトの聖刻文字(ヒエログラフ)は,先ずものの形を写した表意文字(イディオグラム)がその形に意味を持たせた。エジプトの聖刻文字の利用期間は,紀元前3100年に登場と394年のフィレ島碑文を最後に長い利用期間にもかかわらずその利用以前の文字の発展の過程と終焉以後の文字の変容が全くなく,象形の原形を忠実に保った事がわかる。ここで聖刻文字が漢字の楷書にあたる聖刻文字(ヒエログラフ),行書の神官文字(ヒエラティック),草書の民衆文字(デモテイック)に相当するように幅広く応用がある。聖刻文字は,漢字の原形となる象形(甲骨文字),楔形文字のもとになったメソポタミアの古拙な絵文字に座姿勢を用いて神聖さを示した内容がある。特に片立て膝の姿勢は,神を意味する目的に使った。以外にも人・男(rmt) 普段の飲む,食べる(wnm,swri),とこの姿勢を含む字がある。エジプトの聖刻文字は,神殿,墳墓,石碑に用い,また宗教的な文章をパピルスに書いた(Nicholas Reeves-1990,pp.184)。約3000字程の聖刻文字は,神の姿(座像,立像)を文字に象徴表現する事やカルト-シュ型飾り板のように座姿勢を図像化し文字に採用した。結局,エジプトも中国やメソポタミアと同様に文字の使用が王権と直結することがわかる。例が神々の座像を多数用いて礼拝(hnw),上エジプト王(nsw) ,オシルス神(iwsir) ,月神(jeh) ,セト神(st)などを表し,さらに聖刻文字に玉座を採用して,高貴(spsi)をあらわす文字の意味が加わる。ヘフ女神の片立て膝の平座姿勢および高貴の椅子座り(あるいは倚座)および玉座が,神聖を示し,「高貴」な性格を表現する聖刻文字の意味がある。

註54:発掘に当たっては,Camavon卿の援助を受けすすめた。王墓が古代にすでに盗掘にあっていたが,その被害は大きくなかった。椅子は,全部で12脚の発見された6種類に分類される。第1グループ(註66,81,88)は,高さが30.5～38cmの単純で,まっすぐな脚,中央に弓状にくぼんだ座面分,垂直とななめの筋交いの形態である。第2グループは,第1とほぼ類似するが,動物の脚部と格子(セマ・タウィ)を有し,高さ34.5と45cm,(註78,467)である。第3グループは,回転する脚と水平の支えをもち,高さ41.5cm(註242b,149)のもの,第4グループ(註83,139,140)は,折リたたみ式で高さが50cm以下のもの,そして第5グループは,一例しか発見されていないが,側面から見るとＸ脚状で前後二足式で高さが29cm,動物の足の脚と弓形の座面分からなる。パピルスとヤシの葉で作られた595番の椅子の形態は,悪い保存状態で明らかにされていない。獣脚,足台の形式は,メソポタミアの伝統(例・大英博物館蔵WA-89126のウル第三王朝のハシュハメルの拝礼の印章図像)をくむ(ニコラスリ-ブス,近藤二郎(訳)1993)。

註55:ツタンカ-メン王墓から玉座,床几(寸法・W465×D300×H345)など良好な状態の埋蔵家具類,玉座,寝台類の出土品が知られる。Color Pl..VI.pp.97-図6.(1), Pl..95.pp.97-図6.(2),本王墓出土品は,前述した玉座以外にも,全部で7点の椅子を数え,他に玉座に附属する天蓋,神輿,机,寝台,枕もあわせ多数出土した.王の死後の再生と復活のため王朝家具類,幼少期のスツ-ル,付属品の足台,臣下の将軍や書記官用の家具など様々な王宮,生活用具を同時に埋蔵している。天蓋は,当初の飾っていた布が失われ,他の装飾品や構造材の一部に破損を受けていた。天蓋は,単に日よけの機能を果たすだけでなく,後述する威儀具の一部である。カ-タ-による椅子,玉座の作図が含まれる。 椅子は,全部で12脚の発見された6種類に分類される。第1グループ(註66,81,88)は,高さが30.5～38cmの単純で,まっすぐな脚,中央に弓状にくぼんだ座面分,垂直とななめの筋交いの形態である。第2グループは,第1とほぼ類似するが,動物の脚部と格子(セマ・タウィ)を有し,高さ34.5と45cm,(註78,467)である。第3グループは,回転する脚と水平の支えをもち,高さ41.5cm(註242b,149)のもの,第4グループ(註83,139,140)は,折リたたみ式で高さが50cm以下のもの,そして第5グループは,一例しか発見されていないが,側面から見るとＸ脚状で前後二足式で高さが29cm,動物の足の脚と弓形の座面分からなる。パピルスとヤシの葉で作られた595番の椅子の形態は,悪い保存状態で明らかにされていない。王墓発掘出土した際に古代の建築用の作業建物の下にあったことが盗掘にあわずにすみ,砂漠の乾燥地帯といった条件が幸いし副葬品が状態良く保存された。

註56: 足台(footstool)は,脚をやすめるための台で玉座の一部と考えることができる。王墓から出土した足台は,装飾付き(註30)と無装飾の(註67,92,414,442b-e,592,613),これらのうち小型の子供用とみられる足台がある。

註57:一見,スツ-ルの上に片立て膝の平座像をとるがスツ-ルではない,胸飾りの形である。

註58: Oxford Dictionary of English-1934:throneの項,1.Chair of state for sovereign.bishop,& c.(come to mount,the t.,become sovereign).v.t. Enthrone＝玉座の意味に該当する。玉座の性格から派生した意味として:ascend the throne ＝即位す

る,the speech from the throne＝英国議会開[閉]院式の勅語,をあげることから,即位する事および我が国の用法と同じく天皇の御座所をさす場合を含んでいることがわかる。本稿では,特別な人物の席の総称として扱う。「玉座」に該当する英語の由来は,Throneが古代ギリシャ語のThronos(ラテン語・Solium),女性用玉座はKlismos(Cathedra)と称する。他の意味は,英国議会開(閉)院式の勅語,第二義に王位,帝権,the throneに即位すルガル。Richter, G.M.A., -1912は,古代ギリシャで６種ある椅子の「カタチ」は,Throneが古代ギリシャ語のThronos(ラテン語・Solium),女性用玉座はKlismos(Cathedra)に由来する。背板がない四本脚スツ-ル(Diphros),折りたたみ可能なＸ字脚(Okladias),寝台椅子(Kline),ベンチ状椅子(Bathlon),ならびに円形劇場の連結椅子(Iklia)をあげる。

註59: 崑崙山は,古代中国で人の死後に崑崙山に昇仙する世界観をも示す[曽布川寛1981],崑崙山への昇仙,中公新書参照。現在,中国・新疆ウイグル自治区にある崑崙山(こんろんさん)は,中国の西部にある山脈で長さ約3000km,パミ-ル高原に接する中国西部の国境,チベット北部の境界に位置し,タリム盆地の南端にある。コング-ル山(公格爾山・7649m),ムズタ-グ・アタ山(慕士塔格山・7546m)など多数の高山がある。古代中国の神話における崑崙山は,西王母の伝説と昇仙の世界にある霊山であった。湖南省長沙の馬王堆三号漢墓の帛画に描かれた図像では,玉による身体の魔よけと共に崑崙山へ使者を迎えに来る鳳凰や崑崙山へ行くための龍,羽人が表現されている。崑崙山は,伝説の融合した神々の山であった。玉の旧字は,王,王は完全な玉,を示す。玉は石の美なるもの,玉(ぎょく)を紐で貫いた形,佩玉の類いをいう(白川静2003,5画1010)。魂振りとして身に佩びるほか,呪具として用いられた。実際に殷(古代の夏)の武丁の妃とされる婦好墓からは,多くの精巧な玉器が発見されている。玉の旧字は王。王は完全な玉でもある。材料としての玉は,硬玉と軟玉に分類される。玉は宝石で,珠に対して美しい石をいう。硬玉・軟玉の併称。白玉・翡翠(ひすい・黄玉)の類をさす。一般的に玉の用法は,①貴重または美麗の意を表す語。②天子に関する事物に冠して用いる語。③他人に属する事物に冠して尊敬の意を表す語(例－「玉稿」)。④(取引用語)取引所で,取引の対象となる商品や証券の略。玉はその不思議な輝きから神話世界にとどまらず現在も中国人にとり不思議な効用があるとされ,高額取引商品である。
玉座の存在感は,席につく主人公が前提である(白川静2003,6画4024)。存在の会意は,神がここに在り,その占有支配する意を示す。その聖化の儀礼によって,生存が保障されることを存という。すなわち玉座の主人公が,一定時間の座姿勢の「カタ」を保つ席(空間)及びその「カタチ」の両者があって‘玉座’が成立し存在する価値が生じる。

註60: 象形を利用できる人物は,古代中国の殷(夏)王朝で巫女をはじめ宗教関係者,王族,その一族など古代の特別な階級に属する人々であり,象形がすでの族記号という特殊な役割を帯びていた。象形を利用する特別な階級は,象形とともに神のお告げを言葉,図像を使い占って,自らの主張など様々に応用したことが明らかになっている。今日において識字率の高まりとともに文字の使用は,世界中の漢字文化圏で有効な伝達の手段となっている。

註61:白川静の象形解読(白川静2003年)の成果は,象形が発展する初期は,王族など特別な階級で使った王権専属の象徴的(シンボリズム)記号と述べ,象形が本来古代人の目にしたイメ-ジを王権専属の記号として発展をみたとする。1927年に始まる中国中央研究院の河南省安陽市小屯殷墟遺跡の科学的な発掘により象形が出土した結果,古代中国の歴史の認識が三皇五帝といった神話とみなす歴史観が大勢を占めた古代王朝・商(殷)の時代を実際に存在事実が判明する。

註62:代表的な象形研究の一つが郭沫若-1972である。他にも殷墟遺跡発掘による出土した象形文字の研究は,羅振玉,王国維らによる甲骨文の拓本編集により解読がすすんだ。さらに岡田英弘-1992:『歴史のある文明,歴史のない文明-漢字・都市・文明』,pp.12-13,筑摩書房に中国人の歴史的なステ-タスとして名前と都市の居住をあげる。

註63: 文字改革が多年の懸案である中国は,簡体字の施行をすすめるなかで常用一級字2076字,二級字あわせて3004字として,文字の表音性をすすめている。中国以外に象形は,メソポタミアの古拙文字(紀元前3100年頃),メソポタミア文明より少し遅れてエジプト文明の聖刻文字(紀元前3000年頃),インダス文字(紀元前2500年頃),ならびに中国では象形(甲骨)文字(紀元前1200年頃)も同じような性格を持ち誕生後に漢字の原形が登場する。 象形の解読成果が漢字,アッシリア学,ならびにエジプト学で学問領域となっているが西アジアの文字が現在死語となっている。そのなかでこの他に東南アジアのトンパ文字や中南米のインカ文字の象形が残るがいまだに不明点が多い

註64: 現在象形を利用する地域に中国雲南省の少数民族の納西族が用いるトンパ文字など少数あるが,今は伝承されていなく,漢字文化に相当する影響力がない。

註 1:身体技法を舞台における身体表現としてとらえ,特有の座の「カタ」をとりあげている。マルセル・モースの場合は,人間の身体が人間にとり不可欠で最も本来的な道具であり,それが社会的に伝わり,それぞれの社会が固有の運動形式を持つとした。技法の相違点は,生理的・心理的・社会的な三つの差異を捉えて,また身体技術は,覚醒時の運動に限らず睡眠・生理過程にも及び,個人差も大きいが,明らかな社会的パターンを認め文化人類学,民族学から幅広い論考をすすめている。

註 2:中国の儒教精神にかなった儀礼を編纂された『周記』(春秋時代),『儀記』が周代から春秋時代にかけての諸侯の冠婚葬祭の作法を記録,戦国末-漢代に成立,『礼記』が戦国時代から漢初にかけ諸家の文化風習の論を集めた。敷物(席)の座法は,床榻の上の正座(平座)であり,召使いや一般の人は地(床)面へ両脚を折り,脛の部分および足の甲を床面に直接接して座り,背筋を上方に伸ばす姿で現代と同じである。

註 3:ギリシャ美術には,最高神のゼウスをはじめ,ビーナス,アポロ,ならびに暴れ者のディオニソースにいたるまでおおくの裸体の神々が立像,倚座,座像で表現されている。

註 4:筆者の実見したスワート蕃王の両手でとる仕草(身振り,ジェスチャー)は,パキスタンやアフガニスタンでよく見る人々の仕草である。この仕草は,新アッシリア帝国のニムルド王宮壁画の登場人物の仕草-両手を胸の前に整え座の「カタ」をとる神の前の敬虔な姿に共通する。すなわちアッシリアの壁画主人公の上半身をみれば,左手をさしだし,右手は肘掛けにあてる。このジェスチャーが,後のアッシリア時代に両手をあげて嘆願する側に対し座像の主人公が仲裁するときに両手をかかげ,右手を握りしめるのと対になる表現である。このジェスチャーは,すくなくとも3期以降の6期(前1000～500年)にも見いだせるためにメソポタミアで伝統化したことは間違いない。同様の図像資料は,後述するKurlil(大英博蔵WA-114207),腰掛ける Ebhil-il座像,腰掛ける書記官DuDu座像,ならびにニンギルス神立像がこの胸の前で組み手する伝統的な仕草をとる。こうした仕草の「カタ」が残る背景には,神に対峙するときの敬虔な祈りの姿が今も昔も伝統の身体技法と言える(Goldman,B.,-1992)。

註 5: 藤田は,西方世界から中国に伝わったのを「胡牀」と紹介する。また田辺勝美-1996は胡牀が折畳み可能な座具としている.

註 6:椅子の社会的な側面を考えるとき,文化人類学的な視点を忘れてはならないとするが,椅子だけを文化人類学的な視点から論じているという例は,あまりないとする。 また英語でSeatingを強いて持徴的に訳すと「座り方」であるが,Seatingの用法は,もっと確固としていて,椅子や座席がハードウエアであることに対しソフトウエアの感を指摘する。裁判を行うは,sit in judgmentである。日本で使われる大臣の椅子的な言葉としては,支配階級の象徴であった中世に出来た言葉のpapal seat-法王の椅子がある。身体の呼び名の点で日本語の「尻」が英語では,hip, buttockなどと複雑多岐である。そして,椅子に直接触れる部分は,buttockであって,けっしてhipではない。よく日本では,椅子は,明治以来の輸入文化だという。言葉が示している関心の違いは,日本とは異なる外国の椅子文化についての歴史的経過を辿りつつ今日に至っていることがうかがえる。

註 7:Mandal博士が姿勢の問題として指摘した点は,現代の成人,学童やオフィスのデータ入力で長時間におよぶ座姿勢中心の作業,学習で無理な姿勢が脊椎の自然なS字(弯曲)状のカーブが変形して無理を生じ,結果的に腰痛や脊椎変形を発生させるとした。この今日的な座姿勢の問題に対し,古代のエジプトの座姿勢や乗馬姿勢から安全,快適性をもとめる姿勢研究が中心になっている。

註 8:1989年,日科技連主催によるエルゴデザインの視点から日本で初のエルゴノミクスシンポジュームが東京で開催されている。

註 9: 入沢達吉は,史学雑誌のなかで日本人の座法と他の関係を述べる。日本人独特の床座を「坐または尻,跪,居,箕踞」と四分類する。仏教でいう蹲踞は,長老に対する最敬礼を意味し,受戒時の座法とする。胡牀の逸話を中国の『文天祥正気歌』からあげ,後漢時代の管寧という人物が足を投げ出して坐ったことがなく,五十年間も木の腰掛の上に坐っていた逸話を紹介している。そのため膝があたる箇所に穴ができた,という話をあげて,日本流の正坐でなければ,膝があたるところに穴が開くはずはないと推定している。また斉の桓公や周の文王などが胡坐をとる画像石の図像で侍者達は正坐していたことがわかる。王や主人に仕事を命ぜられた場合,すぐ立ち上がって仕事をするためには,そうした姿勢が便利であったわけである(西アジアで片立て膝の平座像の中間姿勢と地域で異なる考えである)。述べるまでもなくここにあげた事例は,すべて例外的なケースであって,正坐が日常的な風習として

定着していたという証拠にはならない。入沢達吉が示したは,三つの跪坐で「跪の二」,「跪の三」の割り座と横座の混じった座の「カタ」である。

註10:座像は膝を揃えて平座する正坐(Cheng tso)像である。獣骨に刻まれた象形は,1927年に始まる中国中央研究院の河南省安陽市小屯殷墟遺跡の科学的な発掘により,本格的な象形研究がすすむ発端となる。それまで象形は,一部の中国人学者のみ知られていた程度で,以降象形が世界的な大きな関心を呼ぶ結果となった。

註11:『周記』が春秋時代に国家の官制を編纂した,『儀記』が周代から春秋時代にかけての諸侯の冠婚葬祭の作法を記録,戦国末-漢代に成立,『礼記』が戦国時代から漢初にかけ諸家の文化風習の論を集めた。敷物(席)の座法は,床榻の上の正座(平座)であり,召使いや一般の人は地(床)面へ両脚を折り,脛の部分および足の甲を床面に直接接して座り,背筋を上方に伸ばす姿で現代と同じである。

註12:漢代の文字辞典「説文」は,「莚,竹席也」として筵が二種類あり竹編風莚と席をあげる。莚が席より大きい。席上に主なる人が座り「主席」と呼ぶ。 周から漢にかけて礼に関する‘坐すること尸(し・かたしろ)の如し’ [『礼記』玉藻] として身分の差,‘高高在上,居高下’意識よりもは席の位置と不動の座法でありが特別な人物と対面者も同じ視線位置をとり,後の倚座による見下す上下の視線による格差関係がなかった

註13:『後漢書』巻二三,五行志に「靈帝好胡牀,董卓權胡兵之應也…」とある。 腰掛けは‘拠’と呼び不作法な姿勢で腰掛ける姿が珍しかった時代である。中国仏教初伝期に於ける仏像受容について初期の仏像表現は仏陀とならんで神仙に登場する人物,神々を含め表現され当時の信仰の様子が伝わってくる。その例は江蘇省連雲港孔望山摩崖造像,山東省折南画像石墓,四川省楽山麻浩崖墓,長江中下流域出の神亭壷(魂瓶),画像石図像,帛画,木棺漆画,ならびに銅鏡図像と中国各地に及ぶ。

註14:①割座は,両脚を折って,相対する体側方向へ出し,その間に割り込むように臀部を落として床に接した姿勢(図4.1の104),②胡座(あぐら)は,臀部を床に接し,両脚をほぼ平らに交差させて引き寄せた姿勢(図4.1の80-89),③片立て膝の座り方(歌膝を含む図4.1の124)は,臀部を床に接し,片方の膝を立て,残る脚部を平らに折って,背筋を上方に伸ばし座る姿勢(歌膝を含む図4。1の121,123,124)とする。この姿勢は,跪座姿勢の一つで西アジアに多い姿勢で仏教文化の東漸と共に日本の歌膝として現われる。④横座り(図4。1の106-108):臀部を床に接し,両脚をずらして折って,共に同じ方向へ投げ出す平座姿勢。そして⑤投げ足は,両脚をずらして折らずに両脚ともに共に同じ方向へ投げ出す平座(図4。1の50-52,70-75)例をあげる。

註15:白川によれば,危は高所より嫌いて下に臨む形(他)。跪とはそのような姿勢とする。(訓義)膝をついて坐る,ひざまずく,ひざまずいて拝する。〔史記,孫子伝〕復(ま)た之れに鼓す。嫺人,左右聞後嫌劇し,皆規鮫繩抂に中(あた)り,敢て聲を出すもの無しとある。胡座の姿勢は,日本では古墳時代に登場を見ているが。後に仏教文化の隆盛に伴う造像活動のなかで結跏趺座,胡座がインドや西アジア(胡)特有の姿勢が次第に一般化してきた。胡の一字が示すように西アジア,あるいは南方から古代に伝わった西方の座姿勢で知られる(白川2003,13画,6711)。

註16: (白川2003,19画,6814)蹲踞は,日本では,相撲の立ち会いの際に儀礼的に用いる膝と脚を地面に直接つけないで,膝を折り曲げて足指先だけで上体を指示する座法である。もともと蹲踞は,「うずくまる」と「かがむ」意味をもつ跪坐のなかの一つの座法で仏教文化で長老に対する最敬礼を意味し,受戒の時の威儀ある座法とする。

註17: 図2-28が跪座,図2-18が正座をとる(黄能馥-1999)。

註18:清朝末期の1910年代にあって紫禁城の儀式を記したジョンストンは, 今では見ることが出来ない。王杖(勺杖,あるいは如意)をつかい三叩頭九拝(さんこうとうきゅうはい)の礼が登場する。

註19:坐が神の審判をうける姿勢に対し,跪座は神の命,命令をうけた際の座法とされる。命は [字音] メイ・ミョウ(ミャウ) [字訓] いいつけ・いのち・うまれつき・さだめ。 [会意] 令(れい)+口。令は礼帽を著けて,跪いて神の啓示を受ける形。口は祝詞を収める器の粟(さい)。神に祈って,その啓示として与えられるものを命という。『説文解字』二上は,「使ふなり,口に從ひ,令に從ふ」とし,口を以て使令する意とするが,もと神意を意味する字である。卜文・金文に令を命の意に用い,令がその初文。周初の金文〔大盂鼎(だいうてい)〕に「天の有する大令(命)を受(さづ)けらる」とあり,のち〔賢弦(けんき)〕に「公,事を命ず」のように,命の字を用いる。天命の思想は〔大盂鼎〕をはじめ,〔也弦(やき)〕などにも「顯々たる受令(命)」とあって,周王朝創建の理念として掲げられたものであった。人の寿夭も天

与のものであるから,列国期の金文に「永命眉壽」を祈る語を著けるものが多い。金文にまた賜与の意に用い,〔献弦(けんき)〕「厥(そ)の臣,獻(人名)に金車を令(たま)ふ」のように用いる。天の命ずるところであるから,人為の及ばないところをすべて命といい,君子は命を知るべきものとされた。

註20:跪座姿勢をとる光景は,予言をさずかった青年のメ-ガが燃灯仏の足もとに頭髪,顔面を地面につける姿勢である。後にこの青年が釈迦(仏教の開祖・仏陀釈尊,ゴ-タマブッダの前世)となるという教えを表現する

註21:印章図像では,謁見図に代表される座像表現である　。

註22: 結跏趺坐(けっかふざ)は,足の裏の「跏」,および足の甲をさす「趺」から足の表裏を結んで坐する意味に由来する。足を組んですわることを「趺坐」とも書くが結跏趺坐のような厳格さはない。仏教での如来または修行者の坐相「居」は,すわること,いること,また,その所に存在する,あるいは存在する所をさす。その坐相は,足背で左右それぞれのももを押さえる2種の「カタ」があり,右の足を左のももの上に置く降魔坐,およびその反対の吉祥坐がある。*半跏趺座は*胡座をかいて座った姿勢から,さらに右足首を左足の膝の上にかけた状態をさす

註23:箕踞は,両足をなげ出して箕みのような形にすわること。箕坐(きざ)を箕踞(ききょ)に同じとする。

註24:『古事記$_{下}$』に記述があることから,胡座の呼称から西方の座法として伝わってきた。

註25:投げ足(なげあし)は,文字通り前方に足を投げ出して座る姿勢。ヒュ-ズによる図4.1の70-75参照,この平座の投げ足の姿勢が新石器時代アナトリアで最大級の都市遺構チャタルフュックや新石器時代後期の農耕が始まったイラクのハラフ遺跡など出土した土偶の座像に多数表現される。チャタルフュックに地母神の倚座する座像模型があるが敷物や座臥具が未発達の状況がある(岡田)。

註26: 中国に仏教が伝わった記録は,前漢の哀帝代(前7-1年)の仏経口授,および『後漢書』光武十王列伝の楚王英(?-71年)の崇仏を『三国志』魏志所収「魏略西戎伝」,後漢の明帝(在57～75)の頃,仏像を祀り,桓帝(在146～167年)代には西域僧が訪れ訳経に従事し仏教が流行したとされるも不明確である。平座以外の様々な姿勢が登場したのち中国で平座姿勢が胡座の類に変化するのは,3世紀頃とされる。 (金子典正-2006)

註27:インドでヒマラヤ文化圏に位置するヒマルチュリプラディシュ州にあるラダックで観察された睡眠の姿勢は,膝を抱え込み眠る姿勢である。体温を一定に保持する基本の姿勢となっている。

註28:立位の姿勢選択の一方で休息のため横たわる,腰掛ける,寄りかかるといった姿勢の選択の場合,その場が必ずしも一定の条件を満たしているとは限られず,蟻,有毒の蜘蛛,サソリ,毒蛇,肉食獣といった多数の生物が棲息する場合や地表の灼熱と寒冷,乾燥と湿気など影響する悪条件も多い。このことから休息や作業する場は,安全であると同時に一定の条件と場所を選ぶ必要が生じる。

註29: スルマ系のボディ族の男性がドンガと呼ぶ杖を持って,相手と格闘し相手を倒しすまで戦いつづけ勝者が杖をもつ奇祭の伝統がある。この地域は,人類の起源説にかかわるアフリカのオルドバイ渓谷に近い地域,エチオピア南部のスルマ地方を流れるオモ川流域のス-ダンとの国境沿いのキビッシュである。エチオピア南部のMursiの文化人類学は,Oxford Univ.国際研究のURLは,http://www.mursi.org/を参照

註30: 許慎の『説文解字』に解釈される‘坐’は,白川らが行った甲骨文字の解釈と異なる内容である。簡単に‘坐’は「安也,从人坐聲(一)」として安らか也,人に从ふ,坐の聲とし,安らかに人がならぶと解釈をしている。また一方で‘倚’は,「倚也,从人奇聲(一)」すなわち,説文解字$_{八上}$に「依るなり」-他のものによりかかる状態をいう。「依る也,人に从ふ,とした。‘倚’は奇の聲として,(一)於綺の切,古音は十七部に在り,とする。

註31:胡座像の表現は,ハラッパ遺跡出土からFig.6.20(L)(H95-2524) Fig.6.20(R)(H95-2487), Fig.6.24(R), Fig.6.25(b)がある。

註32:シバ神は,結跏趺座(シッダ・ア-サナ:Sida Asana-漢名・阿娑嚢)で座をとる。行者の座姿勢には4千種あり,ゲ-ランダ・サンヒタ-には重要な32種をあげる。仏教の瑜伽大教王経巻一に56種がある。

註33:西洋の家具観 (Aronson, J., 1965) にたった解説は,しっかりとした骨組みかX型の折りたたみ式の座具,座部は皮や布地を主とする。この点は漢代の中国に伝わる‘胡牀’や‘交椅’と通じる(田辺-1996,pp.27-30)。ギリシャ人やロ-マ人は儀式用を除き,広範囲にわたってスツ-ルを使用していた。特別な身分の人の椅子はスツ-ルが発展したものであった。

中世から１７世紀を通して,スツ-ルや形態は最も重要な人々を除き,格差があった。つまり階級が分かるように座席が椅子,スツ-ル,簡易なスツ-ルに,ならびに立っ人と社会の格差を反映した。従ってスツ-ルの形態は,優雅で装飾的な形態から休息目的,作業用,素朴な形態まで幅広い(Aronson, Joseph.,-1965)。

註34: 筆者が大英博物館コインメダル部で貨幣の玉座表現を熟覧した。インダス文明以降のインドの座像表現例をあげるとマウリア朝時代のウジャイン国貨幣にラクシュミ-神(Laksmi)を表現した聖なる蓮華の上で結跏趺座の表現:左貨幣-大英博物館貨幣メダル部蔵-89.Lady Eliac旧蔵8.8,右貨幣-大英博物館貨幣メダル部蔵-94.5 Canningham旧蔵7.1936,Fig.13に示す。インドに進出したアレクサンダ大王の子孫が中央アジア(現在の アフガニスタンからアム河)に建国したセレウコス朝貨幣の図像(Pl..13-14)は,ギリシャ神の座像,立像表現が多数を占める。遊牧民によるインド･スキタイ朝およびイラン系遊牧民の王朝で,ヘレニズム嗜好が強いインド･パルテイア朝は,騎馬像が多い。前者スキタイ朝のマウエス王(Maues・前90-80年)発行の銅貨に敷物上の胡座像(大英博物館貨幣メダル部蔵-1859.3-1-68)がある。

註35: クシャン朝貨幣の図像は,イラン,中央アジア,インドのヒンドゥ-教系の神だけでなく国際化しつつあった仏教の信仰対象をも多数図像に採用する。そのなかで方形のスッ-ル上で前向きに結跏趺座する釈迦無尼仏陀の座像で (Pl.199),および足下には足台が付属する弥勒仏の座像Pl.199(1894.5-6.1457)がある.

註36: Rosenfield,John M. -1967:「Dynastic arts of the Kushans」,Berkley,LosAngels:1967参照,クシャン朝貨幣に登場するイラン系の神々は,その名前がイラン,インド,中央アジア,ならびにギリシャ･ロ-マ世界と関連するものが多い。そのなかで。前述したインダス文明モエンジョダ-ロ,およびハラッパ遺跡出土の方形印章の図像に表現されたスツ-ル上のシバ神胡座座像にさかのぼることが可能である。イラン人出自のクシャン朝がインドの伝統に則り尊像の座表現する点で異彩である。 Pl..199),および足下には足台が付属する弥勒仏の座像(Pl..199,1894.5-6.1457)がある。イラン系遊牧民の王朝であるが広大な領土を支配するためギリシャ,イラン,中央アジア,インド,ならびに土着の神々を貨幣の図像に動員したのである。

註37:座像は,玉座の倚座像,床上の片立て膝の平座,平座,胡座,ならびに神輿上の倚座像など多様である。

註38：［会意］は人の立つ正面形にある。一はその立つところの位置を示す。〔説文〕十下に「亭(とど)まるなり。大に従ひ,一の上に立つなり」とあり,一定の位置に定立することをいう。位に棟(のぞ)むということから,立法・立制など,すべてものの端緒をなし,創建し,秩序を定め,基調を確立するなどの意に用いる。［訓義］は,1.たつ,正しくたつ。2.たてにする,おこす,おくがある。

註39:祭りは,杖(ドンガ)を奪い合いにより争奪した勝者(王権の獲得者)が,執り物(槍,戟)に寄りかかるため‘倚’の初形と初義に相当する姿勢である。ここに部族集団の統率者の選抜の方法との関連が想起できる。

註40:章懐太子李賢(654～684)は高宗と則天武后の第2子であることから陝西省乾県の乾陵(高宗と則天武后の陵墓)に陪葬された。1971年～1972年発掘の壁画に,則天武后の怒りにふれて死を賜い章懐太子が太刀に寄せた立像表現である。また中央アジアから北西インドにかけてクシャン朝(紀元1ー3世紀)ビ-マカドフィセス王の彫刻像は,大刀に寄せる彫像(インド・マツ-ラ博物館蔵,アフガニスタン・カブ-ル博物館旧蔵)が知られる。武器を持つ人物は,神や王者として例えられ,美術表現されている。

註41:ペンジケントの壁画には座像の「カタ」と座具の「カタチ」がFig.95:図9.1(1), Fig.97:図9.1(2),Fig.59：図9.1(3)Fig.98に登場する。

註42:筆者自身は,カイバル・パクトゥンクア州の藩王,家族たちとの起居の文化を王宮で体験した。パキスタンに併合されたスワ-ト藩王国最後の王ワ-リ-･バッドシャ-・サ-ヒブ(ミアングルまたはワ-リ-サ-ヒブ)が活躍した北西インド-パキスタンの北西部からアフガニスタン東北部がパシュトゥ-ン族の部族支配地区で,現在イスラム原理主義タリバ-ンが活動する紛争地帯であるが,もとはイランの出自で,様々に文化的な伝統を引き継いでいる。

註43: 臥の［字音］は,ガ(グヮ),［字訓］ふす。［会意］臣＋人. 臣は眼の形。人が臥して下方を見る形で,一種の身を寄せる姿勢である。［訓義］1.ふす,うつむく. 2.やすむ,ねる。3.うつぶせ,たおれる(白川静-2003,8画7370) 。エジプトで枕は,王朝家具の範疇にはいる。実際に古代エジプトの王墓の埋蔵品に枕を多数ふくむ王朝家具がある。

註44:フェティシュ:土着信仰をフェティシズムと命名し研究したシャルル・ド・ブロスは,ア

フリカやアメリカ大陸に残る宗教以前を比較宗教学の立場で研究をし,フェティシズムを宗教と明確に区別した。フェティシズムは,崇拝者が自らの手で可視の神体すなわちフェティシュを自然物の中から選びとり,偶像崇拝(Idolatrie)の存在する以前の宗教でないとする。偶像崇拝のフェティシュが信仰の要求に反すれば虐待か放棄される。一方で宗教は,信仰の原点に神の代理か偶像かのいずれかであり,その背後,天上にはより高級な神霊が存在するとして,偶像崇拝の神霊は信徒に対し絶対者のである。

註45: 発掘者メラ-トがチャタルフユックの文明が体現して先導性を示している。像の高さ20cmの焼成粘土製で,発掘された前6000年代前半頃の当時の埋葬習慣は,床下に先ず埋め,後に頭骨を取り上げる慣わしで子供が部屋の床下,大人がベンチの下の部分に一人又は数人一緒に副葬品と共に埋葬していた。この他に祈祷の場や神殿に焼成粘土や石製の若い女,老女,産婦や女神小像やレリ-フの他にテラコッタの奉献動物像が出土している。当時のスタンプ印章がモノを所有する萌芽性が認められる。所有権,偶像化の観念的な証拠は,幾何学模様を彫った粘土や石製スタンプ印章,象徴的な頭骨から認められる。モノに象徴的,呪物的な性格を見ていた。さらに座像などの製作は,豪華な材料加工の形跡がない。むしろ自然界で簡単に入手できる普通の泥と粘土,漆喰,ベンガラ(酸化第二鉄)を使用する点から,サステナブルに通じる物づくりである。また銅,鉛の加工跡は,近隣と交易の証拠である。遺跡調査では,他にも豹を背にした地母神石像が祭殿址から出土している,遺跡は未だ大集落(新石器時代後期(PPNB:Pre-Pottery Neolithic B)・紀元前6800～5700年頃)の遺構の発掘がすすみ,1961～1963年,1965年の遺跡発掘調査で前6800～5700年頃の10の生活層を確認した。チャタルホユックの四角形の家址とその家屋(神殿)の内壁は,雄牛の角,乳房など粘土で象徴的に飾り,壁画(VII8神殿北,東壁画)は,火山噴火,骸骨をつつく禿鷲を追う人物また壁画禿鷲と頭のない人体を描く彩色模様(植物,天文,幾何学)で呪術的に装飾し,テ-マ別の生々した表現を残すことから死者の頭蓋骨を身体と切り離して家屋(葬屋)内で埋葬した。壁面は,牛頭を高浮彫りで象徴化あるいは本物の牛頭に粘土を塗り各戸毎に宗教的に特徴的なことから自然への畏敬と信仰がわかる。

註46：アナトリア文明博物館図版14:チャタルフュックVIA層10号祠址出土,アナトリア文明博物館Inv.79-798-65,および図版15:同上VIA層30号祠址出土,同上Inv.79-1-65。

豹上の女神像は図版13に示される(V1A層10号祠址出土,Inv.no.79-162-65.高さ約12cm,幅11cm,青色石灰岩製) 豹を背にする(女神)立像である.後に豹の皮をショールのように肩に三角に纏った像の前面が豹の背に手をかける表現,背面は一本の垂直線で表現された両脚に膝頭に相当する所に横に一本の刻線を表す.豹の毛皮の斑点模様は,錐で彫り込んだ後で白色顔料を塗り込む.土偶と豹は,それぞれ2ヶ所の穴があり,この像と同じ模様を有する断片が2点出土している.

註47: 西アジアで定住化が明確になる終末期旧石器時代のナト-フ文化(紀元前約10500～8300年頃)は,採取狩猟経済のもとでの定住的集落の様相があち,またチャタルフユックと同様に住居床下の墓葬が知れる。チャタルフュックでは墓葬の世代交代,更新の有無が不明である。

註48:ハジュラル遺跡は(新石器時代後期紀元前5700～5600年頃-銅石器時代･紀元前5400～4750年頃)チャタルフユックより規模が大きい新石器時代後期の居住地跡の4層/9層が発掘された。家は,石の土台と泥レンガ壁を持つ。死者の埋葬方法は集落の外に埋葬する。ほとんどの家から地母神の立像や座像(焼成粘土製,高さ14,1cm)が出土している。ハジラルは,農耕が行われ,粘土の糸つむぎ車から織物技術を持っていた。ハジラルの埋葬方法は,家族単位で家の外に死者を祀り,焼成粘土と彩色が施された偶像が念入りな製作のため専門の職人が製作した様子がある。

註49: Shagir Bazar出土品は,メソポタミア北部に位置するが黄金の三日月地帯にありメソポタミア文明に先行するハラフ文化期の遺跡がある。

註50: 西ウクライナ･ククテニ文化・紀元前4800～4600年頃)の先史時代の祭殿(約70平方m)から漆喰を塗った祭壇(2.75×6m)と粘土製の実物の椅子,そして16体の祭壇の上でミニチュアの椅子に腰掛けていた32体の女性像が出土し,そのなかの16体がギンビタスにより蛇女神としている。祭儀式模型(Fig.7)は,ブルガリア・トゥルゴヴィシュテ州出土,前3000年頃,神官,祭壇,祭儀用卓,椅子,大小の祭儀用容器を備えた神殿のテラコッタ製模型である。神官は椅子に座る。ブルガリア・トゥルゴビシュ州オブチョロブオ出土,紀元前3000年頃とされる。後期金石併用時代,トゥルゴビシュ州歴史博物館蔵 Inv.No.1456(岡山市立オリエント博物館-1979)

註51:腕を折り曲げる前６千年紀の間に女神の姿が従来の‘鳥女神’と異なる特徴点を指摘す

る。
註52:ギラット遺跡は,イスラエルNahal Besor川の支流にありガザの東側に位置する。新石器時代後期には,大集落を形成し周辺の小集落群を支配したとされる。当地の長い歴史と発展の間に多くの青銅品と家具が出土したイェリコ遺跡の文化的影響も指摘され原都市成立への発展説,メソポタミア文明への文化拡散の過程が考慮できる。花のつぼみから「カタチ」のデザインについて原形を得た可能性がある。
註53:北イラクのシャニダ-ル洞窟遺跡で大量の花とともに死者を埋葬したる宗教感覚の萌芽がみられることと本地母神がかかえた壺の中は,不明であるが何らかの関連性が指摘できる(岡田保良-1995,pp.33-35)。
註54:円筒型のスツールは,中国で鼓形座墩と呼ばれる。他の用語に筌蹄,筌台,筌床,束腰形圓凳をあてる。:南メソポタミアで自生し材料入手しやすい葦製をろくろでひいたように回転体として作られた家具(wheeled furnitue)のなかで籐は家具の交易があった蓋然性をもつ.後述するギラート遺跡の彩色表現されるスツール状のは,蓋然性として柔らかな蔦(Wicker),柳(Wicker),籐(Cane seat/stool)などを使用したとみられる。図像として中国での出現例は,雲崗石窟 (例えば10洞前室西壁上層仏龕,12洞前室西壁上層仏龕),図7. 2のキジル石窟(14,38,123,175洞),ならびにソグド地方出身でシルクロ-ド交易で活躍したソグド商人の利用した様子がソグド人虞弘墓の石棺の浮き彫りに表現されるなど中国でも本格的な利用をみたことがわかる。
註 55:東ヨ-ロッパのスロヴァキア・ドルニ・ヴェストニッェ遺跡(DolniVestonize・前23,000年頃)は,大小 2 棟の住居址があり,そのなかの一つがわざわざ傾斜地で高い方を削り,低い方に土手を盛土し直径 6m ほどの円形住居をな 5 本の支柱で屋根を支えた跡がある。中央に暖炉を置き,その一つに座る席を想起させる石がある(岡田-1995, fig.67 (Wymer-1982)。
註56:ギラ-ト遺跡の地母神座像に類似する座像例は,エトルスクの守護神倚座像(大理石製)で正面に向き両膝の上で両手に赤ん坊を抱く。また脇の肘当てに神獣を配置する点がチャタルフュックの地母神座像を継承する。後者の神獣は,四足獣の豹に対し有翼の有翼四足獣ライオンのスフィンクスで前460～450年頃作とされる。ギラ-ト遺跡の地母神座像が腰掛けの姿勢に対して垂足而座の倚座姿勢を取りほぼ同じ構成要素を約2千年後に正確にひきついた表現である。フィレンツェ近郊エトルスク時代のChianciano墓跡から出土した(Richter, G.M.A., -1912,pl..433,国立フィレンツェ考古博物館蔵)。
註57:最初に道具を作ったのは,現代人と同じ人類に属すホモ・ハビリスとされる,アフリカ東部タンザニアのオルドヴァイ渓谷の約220～160万年前の遺跡から通称オルドヴァイ石器が発見されている。日干し煉瓦は,メソポタミア文明より先駆けてチャタルフュックの遺跡ですでに実用化されている(リチャ-ド-1999,pp.330-335)
註58: 文明は,歴史のある一瞬から簡単に文明段階に入るわけではない。都市の形成は,チャタルフュック(アナトリア),イェリコ(パレスティナ)など紀元前７千年紀をさかのぼる頃にすでに見られることから明らかなように,ある一定の準備期間をかけ成立する変化の過程である。チャイルドによれば都市を生ずる主要因は,技術の発達累積と新たな階級社会の出現による余剰食糧の貯蔵と利用であった。政治形態としての都市は,その形成過程で神殿運営の基本要素-都市,神殿,貯蔵庫,文字,数量管理,印章,契約,生活道具などが次々と誕生する。メソポタミア文明は,都市を中心に国家形成が進み,その周辺圏に大きな影響を与える。ウルク期において,「都市」を「都市以前」 から区別し,考古学的な指標として,3つの十分条件の３点を①都市計画性,②行政機構,③祭祀施設,を挙げる.この３点すべてが揃って考古学的に都市とする(小泉龍人－2001： p.3).
註59:服部の大英博物館資料の研究ノ-トには黒凍石製,Nasty収集品で大英博物館蔵EA-265853,EA・65872で未解読の象形文字がある。引用は,Schmalenbach ed.,1(9)46 Kochと記される。この女神は古王朝に遡る下(北)エジプトの都市サイスの三相 (過去･現在･未来) 一体の女神である。「世界の身体」で,そこから太陽が最初に昇った「原初の深淵」,ラ-(Ra)に生命を与えた雌牛であり,エジプト人が「私は私自身から来た」の意味を有すると伝える。別名(アナタAnatha, アト-エンナAth-enna, アテナAthena, メドゥサMedusa)とも呼ばれる。
註60:アフリカ各地から収集された家具のなかで一木から削り出して作られたスツ-ルが多い。部族の王(長)がいわゆる玉座がわりに椅子として用いることが多い(Schmalenbach,W.,(eds)-1988:)。
註61: 紀元前3千年紀のエジプト,そして後述するメソポタミアの玉座は,様々な象徴性を動員した,エジプトでは,上上エジプトを象徴する王冠,王杖,玉座であり,メソポタミアの場合

は,王冠,王杖,玉座と共通する玉座が材質観にのみ偏って製作されたとする事実はなかった。
また象徴性は座像,立像にかぎらず様々な対象に表現された。例えばibid.,図版54,pp.104-106:カフラ王玉座像:アル・ギーザ,カフラ王の河岸神殿出土,前2500年頃,閃緑岩,H168cm,カイロエジプト博物館蔵をあげるが,座像に片立て膝の床座姿勢:Pl..12,82,両立て膝の床座姿勢:Pl..74,75,84,89,正座:Pl..51,跪座:Pl..39,42,87,胡座:Pl..50,83,をあげる。
註62: 菊川コレクション蔵で知られる青銅製玉座は,高さ14.8×幅9.3×奥行き13.7cmの奉献用の模型であるが倚座する主人公は失われている。背面の祈願文は,「ホルパケレド(ハルポクラテス)が,生命と満足をサァバステトに授けてくれますように」と記すことからハルポクラテス神を元は祀っていたと思われる。玉座は両脇に獅子を配し,その尾は玉座の背板にかかる。寸法は,高さ14.8×幅9.3×奥行き13.7cmを有する。本製作年代は,エジプトの末期王朝時代(第26-30王朝・前664-332年)頃とされる。
註63:朝日新聞社主催でツタンカーメン展-1965が日本において開催された。王墓出土品から王朝家具の一部が展示された。図版87,玉座を椅子と解説する。その理由は,単純に木製であり,黄金製でなかったと想定される。高さ95.5cmエジプト博物館収蔵番号J.E.62029,同墓出土なる長さ51cmの足台と関連する。ツタンカーメン展の解説でHeph女神が玉座の上に座ると解説書に間違って解説される。黄金を意味する胸飾りの象形と座像の組み合わせによりその神聖さを強調するものである。筆者の熟覧による大英博物館蔵WA-132989,(1962.11-10,3)も同類である。
註64: 表面材料は,アフガニスタン産ラピスラズリ(青金石),イラン産トルコ石といった貴石類(当時はルビー,サファイア,ダイアモンド,オパールは未知の宝石であった)玉座の製作材料は,アフリカ産黒檀を芯材に用い,表面を金と銀の薄板で被い,さらに象嵌(ファイアンス,貴石)するを用いて製作された豪華な家具である。
註65:アン(天の神) 神は, メソポタミアの重要な最高神であるウトゥ(太陽神,アッカドのシャマッシュに相当),エンキ(地と水の神), エンリル(大気の神),ならびにアヌンナキ(神々一般をさす)とともに上位の神として印章の図像に示された(Black,J.&Green,A 1992)。
註66: 古代中国において天と地を古くは天嶺といい,怜(嶺)とは天上の神が降下するところに,土(社)を設け,犠牲を供え,これを迎えるところを意味した。天命により全てのことが決する。人為の及ばぬことを,全て天とした［周書,五誥］。天が地上を生じたとする思想は,広く世界的なものである。天を神聖とする観念はすでに卜辞にみえ,殷はその都を「天邑悼」と称した。また周初の〔浩尊(かそん)〕や〔大盂鼎(だいうてい)〕には天室の祭祀や天命の思想がしるされ,〔周書,五誥〕の文は,天命の思想をその政治理念の基本としている。天地は古くは天嶺といい,怜(嶺)とは天上の神が降下するところに,土(社)を設け,犠牲を供え,これを迎えるところを意味した。すべてのことは,天命によって決する。それで人為の及ばぬことを,すべて「天」という(白川静2003, 4画 1043)。
註67:南メソポタミアの古代都市エリドゥ(現在テル・アブー・シャハレーン)は,紀元前6000～4000年のウバイド期から前2000～2004年のウル第三王朝に至る層が発掘されている。メソポタミアの最も古い都市で,大洪水以前に最初の王権が天下ってきた伝承がある。シュメールの王朝名表によれば,大洪水が時代を二分していることがわかる。「洪水以前」にシュメル地方で栄えた王朝(都市)はエリドゥ,バドティビラ(現代名アブ・マダー),ララク,シッパル(ジムビルと読む説もある。現代名アブー・ハッバとデル・エッ・デール),シュルッパク(現代名ファラ)の五都市である。また「洪水以後」の王権の所在地は,キシュ(現代名ウハイミル),エアンナ/ウルク,ウル(現代名テル・アル・ムカヤル),アダブ(現代名ビスマヤ),アクシャク,アッカド,イシンなどの都市があるが,最高神エンリルを祀る都市ニップル(現代名ヌッファル),初期王朝時代以来の有力都市ラガシュ(現代名テルロー),ウンマ(現代名テル・ジョハ)が記述されていない。他方でシュメール・アッカドの地から遠く離れた北東のアワン,ハマジ,西方のマリ(現代名テル・ハリリ)など地域の都市を記述する。またキシュ,ウルク,ウルは,この間に幾度も王権が交替し第二,第三の王朝を樹立したことがわかる。これらの王朝は,必ずしも王名表が述べるように整然と順序よく樹立されたわけではなく,戦争や外交その他の別史料から,たとえばウルク王ビルガメシュとキシュ王アッガ,キシュ王ウルザババとアッカド王サルゴンとウルク王ルガルザゲシ,ウル王カクとアッカド王リムシュなどのように,時代的に並存状態にあったことも推定されている(岡田,小林-2008)。こうした王名表に登場する特別な人物の役割は,都市国家,集団や社会的リーダー,神官,工事の総監督,王など特別な力を有する立場にある人物をさし, 大洪水の伝承神話は,

旧約聖書にひきつがれたとされている(ケール, 山我哲雄2010)。
大建造物は,古代より世界各地に分布した。仏教寺院の仏塔(ストゥーパ,宝塔),キリスト教の尖塔, イスラム教の塔(ミナレット)が同じ天空への指向をもつ。

註68:古代日本で雄略天皇の頃(456～479年)に造営されたとされる最初期の出雲大社神殿も同様に天を目ざしていた。84代目出雲大社権宮司の千家尊祐氏の出雲国造のための「金輪御造営差図」に本殿の直径3mの巨大な柱を9本で組み立てる本殿の建築図がのこされている。その図面と同じ規模の柱が2000年出雲大社境内遺跡(旧本殿跡)の発掘により宝治2年(1248年)造営の本殿の柱址である可能性が高い中世の遺構が出土した。その遺構は現在の延享元年(1744年)造営の本殿とほぼ同大平面であり,柱の分析から現在よりも大きな規模の柱が判明している。出雲神社のようにに神社には,‘天’と通じる「高天原」や「出雲」の用語が多い。源為憲(平安中期の漢詩人)の『口遊』に「雲太,和二,京三」の記述から1番が出雲,2番が奈良の大仏殿,3番目が京都平安京の大極殿と規模の比較が示されている。

註69:紀元前2600年頃第４王朝,Hetepheres女王の可搬型の椅子 (Carrying Chair)がギザより出土した。ボストン美術館蔵品

註70: 儀禮の士冠禮に,主席の配置を重視したことが以下の内容からわかる。すなわち,
「廂門に筮ふ。主人,玄冠・朝服・緇帯(したい)・素韠(そひつ)し,位(くらい)に門の東に即き西面す。有司(いうし),主人の服のごとくにし西方に即き,東面して北を神とす」。すなわち,玄冠(げんくわん)・朝服(てうふく)・緇帯(したい)・素韠(そひつ)を着用して,(門外の)西方の位に即いて,東面して北を上席とするのである。

註71:西アジアをあらわす名称は,様々でオリエント,メソポタミア,近東,中東などの用語は,いずれも西アジアの一部か同義語,もしくはもう少し範囲を広げた地域名称として用いる。現在の国名は,イラン,イラク,トルコ,シリア,レバノン,ヨルダン,イスラエル,エジプト,それにアラビア半島の諸国を含めた地域を指す。地理学の区分は,エジプトをアフリカとするが普通西アジアの一部とする。これは歴史学的意味,様々な研究分野からの必然性を持って成立した長い関わりを持っているからである。また同様の理由でアフガニスタンを含めることもある。いずれにせよ西アジアという地域区分は,歴史的認識の下に戦後の日本で成立してきた。この地域を称する用語は,時代によってその包括する範囲が変化することは「中東」の方がより広い地域を含める言葉である。これは,現代の国際政治や経済の分野で用いるのに便利な用語であり,西アジアの国々に加えて北アフリカの地中海沿岸,西はモロッコまでを含めたアラブの諸国をも一括しているように,各々の呼称が,正当とする経緯がある。(松谷敏雄,江上波夫(監修)-1995)

註72:メソポタミアはバグダッドを境に南・北の二地域に分けられる。北部の大部分がゆるやかに起伏する扇状地である。モ-スルを中心とする地域は,のちにアッシリア人が活躍する舞台となった。バグダッド以南の地はティグリス・ユ-フラテス両河とザグロス山脈を切る多くの河川が毎年春,上流山地の雪どけとともに増氷し,ナイル川の約4倍に相当する土を運び堆積する「泥と粘土の文明」の地である。両河は,メソポタミア南部で水平にひろがる乾燥した泥河床地帯をつくる。この土地に,紀元前4千年紀末から3千年紀にかけシュメ-ル人とセム人は,メソポタミア文明成立の当初から文明の共同の担い手であった。紀元前3千年紀中頃,その支配者によるメソポタミアにはキシュ,ウルク,ウル,アヴァン,カマツィ,アダブ,マリ,アクシャク,ラガシュなど多数の都市があった。これら王朝の支配領域は,都市と灌漑地域の枠を越えた文明として拡大していった。

註73:現アフリカは,人骨などの化石,石器などの考古学的証拠およびＤＮＡ分析などからホモ・サピエンスの起源に遡る人類のアフリカ起源説と人類がアフリカを出て各地に分散していったことが定説となっている。アフリカ東部タンザニアのオルドヴァイ渓谷の約220～160万年前の遺跡より通称オルドヴァイ石器が発見されている。 出アフリカを果たしたホモエレクトッスが誕生した西アジアは,同時に道具づくりの新時代を迎えたとされる。Rudgleyは,地球祖語といえる言語のル-ツの可能性を指摘している (Richard Rudgley-1998,pp.68-70) 。

註74:人類が500万年近く継続した狩猟採集生活を次第に食料の供給安定にもとづく定住生活に移行した。西アジアの食料生産社会の始まりは,天候や洪水まかせの農業から潅漑農業へ世界のどの地域よりも古く始まり,農耕と牧畜を基盤に定住,都市化への生活を始めるとともに,様々な文明の要素と共に社会的な統率者,新たな社会システムとして都市の必要が生じた。V.G.チャイルドは著 近藤義郎(訳)－1994の『考古学の方法』のなかで都市の枠組みを提示した.すなわち農業革命･都市革命,また西アジアとヨーロッパの関係についての新石器時代の村落と最初の都市を区別し,次の10項目から都市を定義している(補足).①規模

(人口集住). ②居住者のタイプ(工人・商人・役人・神官によって構成され,農民も含む),③余剰を神や神聖君主に献上する生産者(租税),④記念建造物. ⑤手工業を免除された支配階級,⑥情報記録の体系(文字), ⑦純枠ー実用的な科学技術の発展,⑧記念的芸術(芸術家),⑨奢侈品や工業製品の原材料の定期的輸入(長距離交易). ⑩世俗役人や神官の政治的・軽済的支配下にある在留専門工人.とする.西アジア初期文化の特質はそれ自身よりも,開発は困難であるが潜在力の高い地域に伝播することによって飛躍し,文明への歩みを加速する質を内包した.このような伝播が可能な社会組織・技術が文明の母体をなしたと言う。文明は,歴史のある一瞬から簡単に文明段階に入るわけではない. 考古学からも都市の形成は,チャタルフュック(アナトリア),イェリコ(パレスティナ)など紀元前7千年紀をさかのぼる頃にすでに見られることで明らかなようにある一定の準備期間をかけ成立する変化の過程である. チャイルドによれば都市を生ずる主要因は,技術の発達累積と新たな階級社会の出現による余剰食糧の貯蔵と利用であった. 政治形態としての都市は,その形成過程で神殿運営の基本要素―都市,神殿,貯蔵庫,文字,数量管理,印章,契約,生活道具などが誕生する。メソポタミア文明は,都市を中心に国家形成が進み,周辺圏に大きな影響を与える.

註75: 実際に初期の国家の登場は,考古学的証拠から西アジアが古くから新石器青銅器時代のアナトリアのチャタルフユック都市遺跡,およびメソポタミア文明のエリドゥのような神殿建築や周辺の都市や国家形成にも多大の影響を与えている。その過程で農耕は,狩猟採取の場に近接した台地や平地で徐々に発達し,いわゆる肥沃な三日月地帯となって地中海沿岸レバノンからメソポタミア内陸部にまで発展するなかで古代社会が紀元前約8000～7500年頃の中石器から先土器新石器時代の西アジアで徐々に固まっていった。メソポタミア南部で発達したウバイド文化で集落遺跡は,後にバビロニアと呼ばれる前6000年頃の地層(ウバイド0期)が最古である。農耕文化から都市文明に至る遺跡は,初期においてメソポタミア南部と中部に限られた前4300～3400年のウバイド3,4期は,北メソポタミア,シリア,アナトリアにも拡散してゆく。そして世界で最初のメソポタミア文明が花開く歴史時代までの遺跡は,ハッス-ナ・サマッラ期(前5千年紀前半),ハラフ期(前5千年紀後半),ウバイド期(前4000～3400年前半),ウルク期(前3500年～3000年頃),ジェムデド・ナスル期(前3100～2900年)を経て,文明に至る地域がある。最後に古代メソポタミア文明は,紀元前5千年期半 (ハラフ文化)を端緒に様々な文明の要素を展開した。

註76:メソポタミアからエジプトへのルートは,東地中海沿岸で現在のパレスティナとシナイ半島に存在した銅鉱山を経由し南下し,シナイ半島を経由しながら陸路伝いでエジプトまでのルート。そしてまた紅海から沿岸に沿って船を用いてエジプト東方砂漠を横切る巨大な涸れ谷であるワディ・ハンママートをたどることでナイル川へ比較的容易に着く。このエジプト東方砂漠全域において先王朝時代から数多くの岩絵・線刻画が分布している点も人々の移動を考える上で重要である。ナイル世界は常に東方へ確実に開かれていた。こうした交易は,第一王朝期終盤から第三王朝期にかけてメソポタミアをはじめとした東方世界からの交易品が途切れる時期からわかる。
アナトリアの初期青銅器時代(紀元前3千年紀初頭頃)においてもキュルテペと言った遺跡でアッシリア人の商業区(カルム)が存在したことが知られている。

註77:地母神,神獣,巫女を動員する原始的な信仰形態を経て後にエジプトやメソポタミア,ギリシャ,ならびにロ-マ世界の多くの神々による多神教をのちの一神教(キリスト教,イスラム教)が退け,世界的な宗教へと発展する。信仰にも支える玉座が必要となる。古代で玉座の例とその主人公をあげると,メソポタミアでは一時的な交代儀礼を除外すれば,常に神の代理人となる男性の神官王(Priest King)であった。一方エジプトの王は,メソポタミアと異なり,神王で現人神であった。

第3章　印章にみる玉座の「カタ」と「カタチ」

I. 印章とは何か

註1:印章は,円筒形とそれ以外の形態をもつ印章,印影類も含めその総称として呼ぶ。印章の歴史は紀元前4千年紀のクレイ・トークンにはじまり,スタンプ式にかわるササン朝に終える。

註2:印章の始まりはクレイ・トークンとよばれる,中空の粘土球のなかに商品の種類と数量をあらわす小さな粘土のしるしを入れたものである。ビールや羊などの商品と一緒に送る数量と契約管理に使われた。それは,小さな粘土塊に十字形を刻んだトークンは羊を表し,円盤に平行線をつけたトークンは羊毛を表す,といった具合であった。クレイ・トークンとよぶ初期の印章は,商品の種類と数量をあらわす小さな粘土製の証拠(円盤に十字形の刻みが羊を表し,円盤に平行線が羊毛を表す,小粘土球が数を表す)を中空の粘土球を入れ商品を

相手に送る。粘土球の表面には中のトークンと同じ記号を刻むか,トークンそのものを押しつけて記号を転写し,その上に印章を回し捺す。まもなく粘土球は,粘土板に替わった。印章の材料は,河床地帯の貴重な石あるいは外部のアフガニスタンバダクシヤンからの輸入石材ラビスラズリを用い,材料の表面に象徴的な図像を彫刻し,様々な情報を込めて製作した。印章は,文明の発達と共に数字としての記号を刻むか押しつけた「証拠」を有する粘土板もあり,これらの記号は文字の初期の形であり,絵文字様のものからやがて楔形文字へと発展し,ひとつの言語を表記することができるようになる。メソポタミア文明の印章は,当初より計数管理を目的に出発した点は,古代のエジプトやインダスの方形印章が,聖なる表象を表す利用目的と異なる。また中国のいわゆる「はんこ」は,インダス文明の方形印章と同じシステムに立つ。

註3:メソポタミアを代表する印章の様式は,ジェムデ・ナスル,ウルクが代表的である。他にニップール,シリアのハッブーバ・カビーラ,ジェベル・アルーダ,イランのスーサ,チョガー・ミシュ遺跡の出土品にある。またトルコのマラチャ近くのアルスランテペで後期シリア様式に似た印影と共に,ウルク様式の印影が出土している。

註4:古拙な絵文字風に表現したのがウルク遺跡第4層の出土品(大英博物館所蔵WA-WA116627)である。この文字は,後の粘土板に記される楔形文字と比較して象形文字に近い。楔形文字が紀元200年を最後に登場しなくなる(杉勇－2006)。

註5: メソポタミア南部のジェムデド・ナスル様とイランのスーサ出土のジェムデド・ナスル様式の印章から両様式が前4千年紀末に並行して存在した。1期の印章は当時の都市遺構テル・ウカイルでも少数発見されている。本研究のなかで取り上げる女性の座像として頭の後ろで髪を結ぶ片立て膝の平座女性座像をもつ印章がドリルの使用で大量生産されている。この様式は,メソポタミア以外にイラン,シリアと広い交易圏でウルク期,ウルク様式を示す印章と共に発見され,後期ウルク期の印章で々な生産労働に従事する座像表現の盛行と共にジェムデド・ナスル期で次第に衰えたと説明をする。ニッセンは,利用方法としてウルク様式の印章を個人使用,ジェムデット・ナスル様式の印章を法人が使用したとし,ジェムデット・ナスル様式の印章はウルク様式の印章より広範囲に分布するとしている(Nissen)。なかでもシュメールの交易文化圏に属したスーサやシリア,エブラ,エラムといった交易圏内では,同時代に属する印章の図像と登場する家具は同じ内容であるため基本の製作材料,技術,利用方法が共通していたと考える。シュメール人がどこから来て,どこに行ったのかという問題が背景に残したままである。

註6:印章研究の入門書的な役割を果たしてきたFrankfort 1939, Porada 1948, Pierre 1972, Wiseman 1959らの一連の研究は,歴史とその様式変化に集中し,古拙文字から楔形文字への発展を辿って編年と銘文解読を中心とした。Frankfort, H.-1939:Frankfortの分類は,紀元前3千年期(前3000-2334年)を3期3段階として初期王朝(Early Dynastic:EDと略記)I期(前2900-2725／2700年),II期(前2725／2700-2600年),第IIIA期(前2600-2500),B期(前2500-2300年)に分類する。その後に20 世紀半ばに規準となったFrankfortによる様式の変遷を順列化した説は,1930年代に行われた遺跡発掘から,ウルク様式とジェムデット・ナスル様式と別々の印章の存在から,2つの様式の印章が同時期に並存したため修正を要した。

註7: Collon等の研究によって,古代近東全域に経理実務の初期的な体系のあったことが知られる。初期の印章は,クレイ・トークンとよぶ商品の種類と数量をあらわす小さな粘土製のしるし(円盤に十字形の刻みが羊を表し,円盤に平行線が羊毛を表す,小粘土球が数を表す)を中空の粘土球を入れ商品を相手に送る。前4千年紀半ば過ぎ,はじめて円筒印章が使われ粘土球が粘土板に交代した。数字と印影,記号を刻むか押しつけた粘土板の記号が文字の初期形であり,絵文字様が楔形文字へ発展し言語表記ができるようになる。

註8: Collon Pl..28 ,大英博物館蔵 WA-102416

註9: Collon Pl..16(ベルリン美蔵VA10537)

註10: ウルク出土の初期の印章に関するBrandes,Mark.,-1979の研究は,印章の図像主題を分類しそれぞれの種類は特定の行政部門をあらわすとした。ジェムデ・ナスル期の彫刻は,頻繁に登場する顎髭,髪を束ねて頭にヘアバンドを巻く,格子様のスカートをつけた人物の役割を, 男が聖・俗二面的な役目を遂行しているようで,いわゆる「祭司王」とする男の姿は,当時のシュメール社会のリーダの姿を写したのではないかと思われている(Collon1987,pl..6:イラク・ウルク近辺出土。ベルリン国立美術館VA10537;`大理石製5.4×4.5cm)。この頃都市の指導者が出現し始めたと考えられるのである。この「祭司王」の図像は,宗教的な儀式の役割の一方で家畜に餌を与える他に狩り,戦場にあり,捕虜とともに現れる(Pl..639,683,712,743,807)。この種の印章の大半は質が高いが稀にしか印影が残っ

ていない。ウルクの神殿は,行政の中心であり従って祭司王を描く印章が神殿倉庫を封印用と考えられている。一方で祭司王が登場しない印影も比較的多い。それらがどのような行政を相当した印章であったかは,依然として未解明である(ibid.pl..9)。他にウルク様式の祭司王が登場する印章は,神殿の組織で,畜産・狩猟・穀物生産・灌漑や漁労・戦利品など原料および生産物を管理する人々,主に男性の使用とする(Goff-1966.Fig.269)。ウルクの神殿は, 神殿倉庫の封印用と考えられている。一方で祭司王が登場しない印影が比較的多い。

註11:大英博物館蔵WA-123280である。壺の解説がBritish Museum Quartaly-1934: VIII,p.42, pl.s.1X-g,およびCollon,1987,pp.173-174.pl.801にあるが,筆者は,古拙な絵文字として「収穫(gur)+壷(dug,duk)」とする。壺や容器の形はpl.4(BM－123575,121156),山羊,羊,牛など牧畜産品はpl.6から7(例,BM－128596,89539)の動物,織物の文様はpl.11から12(例,BM－128558,126523) 神殿のシンボル図像の表現はpl.1(例,BM－116722) , pl.5ｄ (例,BM－116844)がある(Wiseman－1962：pl.1－11)。

註12: ジェムデ･ナスル様式の特徴的な座像である。大英博物館蔵WA-120963のジェムデット・ナスル様式の印章は,糸紡ぎ・機織り・土器作りといった手工業製品の製造活動にたずさわる人々－主として女性が使ったと推定する。ジェムデット・ナスル様式の印章には女性たちの活動のすべてが描出されている。

註13:片立て膝の平座(床座)姿勢は,西アジアで今日もつづく伝統ある民族習慣である。

註14: 印章に表現される建築物は,ほとんど失われている。ペルセポリス都市遺構や彫刻,壁画に当初の姿が少し残る状況にあって,印章は,当時の状態を表現している貴重な図像である。

註15:図像は,後の中期新アッシリア時代のテル･モハメッド･アラブ出土の印章が示している。イラク博物館蔵MA118,Roaf1984：pl. Xiii,参照

註16:メソポタミア南部の平坦で開放的な地勢から従来の学説毎,遺跡毎,時代区分と様々な異論があった。実際に歴史は,権力や文化がその初期から最後まで流動的で,長期的にも民族移動,王権と国家,支配者,言語といった様々な興亡が幾度となく繰り返された。結果的に発掘の調査結果,遺跡毎の学説,あるいは考古学的な発掘出土品の検証方法次第でその扱いに相違が生まれる。

メソポタミアの印章の様式と約500年で時代区分の設定が次の内容になる。

1期:紀元前3000年以前　…創設期(ウバイド期,ウルク期,ジェムデ･ナスル,初期王朝期),2期:紀元前3000～2334年…都市国家の時代,3期:紀元前2334～2000年…サルゴンの帝国とそれに次ぐ時代,4期:紀元前2000～1500年…ハンムラビの時代,5期:紀元前1500～1000年…国際交流の時代,6期:紀元前1000～500年 …アッシリア帝国とバビロニア帝国の時代,7期:紀元前500年以降…メディア人,ペルシャ人,ギリシャ人の時代とする。

Frankfortによる印章様式からの編年は,紀元前3千年期 (前3000-2334年) を3期3段階として初期王朝 (Early　Dynastic:EDと略記) I期(前2900-2725／2700年),II期(前2725／2700-2600年),第IIIA期(前2600-2500),B期(前2500-2300年)に分類した(Frankfort, H. 1939), Collon1987による区分と大きく相違していない。

註17: 印章の図像は,使用状態により表面の摩耗や破損,土中にあって材質の劣化が生じているため図像で座像の「カタ」の特定,座臥具が正確に判別できない場合がある。

註18: 1期の印章に関して, Collon, 1987,Frankfort,1939の文献から抽出した結果,印章に登場する図像の比率の内訳は,128例中に人物が23例,スツールが18例,建築など他の文様が４例と少なく,動植物.幾何学文が全体の５９例の半数以上をしめる。

註19:シュメールの神話は最古の神話の一つで,その後に生まれる神話に大きな影響を与えた。そのような神話のひとつは『ギルガメシュ叙事詩』に結実したヒルガメシュ神のいくつかのシュメル語版の物語であり,もうひとつが「旧約聖書」の「ノアの大洪水」にまで伝わるシュメル語版『大洪水伝説』である。『ギルガメシュ叙事詩』の主人公ギルガメシュは死を見据えた英雄として古代オリエント世界最大の英雄である。ビールを飲む神々のように限りある時間の現世を楽しんだシュメール人にふさわしいユーモラスな神話もある。文明人ならばパンを食べ,男神も女神もビールを飲むべきとシュメール人は考えていた。大神たちのなかでは,知恵の神エンキ神は親しみのもてる神で,ビールを飲みすぎ酩酊したことが一度ならずあり,そこから愉快な物語が展開していく。

註20: 領土拡大は,異民族社会の接触と統合のため領土の意識統一をするため古代においても問題が起きていた。メソポタミアの紀元前3000年期の後半に汎世界的な王朝の先駆けとなったバビロニア朝は,法整備(ウル･ナンム法典,ハンムラビ法典)と実施をすすめた。現代の紀元2000年期は,グロ-バル化と情報化社会のもと多様な文化と接触により国際的な法整備

と連携が不可欠である。
註21:メソポタミアではアッカド王朝第四代ナラム・シン王(前2254～2218年)が初めて自らを神格化し,ウル第三王朝のシュルギ王(前2094～2047年)も「正義を全うし,庶民を守護するもの」として神格化され,「現人神」として名前の前に「神」を表す印をつけた。しかしシュメルの「現人神」は追いなる神々と同格ではなく,臣民の安寧を神々に取り持つ役目を負う「下位の神」とみなされていた。一方でエジプトの神王が最高神と王の統合となる「現人神」と異なり人間社会の運命を支配する個人神の立場をとる(ピエコンスキ,ミラ-ド(編),池田,山田 (監修) 2004),人間をあたかも神のように指名し,遇する行為とその過程をさす。古代オリエント社会で神格化は,王に限定されていただけでなく,王の在命中のかぎられた時期である。神格化された王に対して各地の神殿で礼拝が在命中から死後にかけても行われた。ナラムシン王を代表に,イシン,ラルサ,バビロンの諸王達にこの思想が引き継がれる。
註22: ウル第三王朝は,ウルの軍事司令官ウル・ナンム(前2113頃 - 前2096頃)が建国してから5代目のイビ・シン王(前2029頃-前2006頃)までの時代をさす。建国者ウル・ナンムは,神殿の建築や運河建設を行い,のちにウル・ナンム法典を定めた。この法典が古バビロニア王国のハンムラビ法典に影響を与えたと考えられている。第三王朝は,第2代王シュルギまでに行政機構が確立し,王権の神格化が進んだ。この王朝はアムル人やエラム人の侵入に悩まされ,シュルギ王やのちのシュ・シン王は,彼らの侵入を防ぐために防壁を設けたが,ついにシュ・シンの息子であるイビ・シン王(前2029頃 - 前2006頃)の時代にウルは陥落し,エラム人によって王は東方へ連行され,ウル第三王朝は滅亡した。
註23:ウル第三王朝は,ウルの軍事司令官ウル・ナンム(前2113年頃 - 前2096年頃)が建国した。5代目のイビ・シン王(前2029頃-前2006年頃)までの時代をさす。建国者ウル・ナンムは,神殿の建築や運河建設を行い,のちに古バビロニア王国のハンムラビ法典に影響を与えたと考えられるウル・ナンム法典を定めた。第三王朝は,第2代王シュルギまでに行政機構が確立し,王権の神格化が進んだ。この王朝はアムル人やエラム人の侵入に悩まされ,シュルギ王やのちのシュ・シン王は,彼らの侵入を防ぐために防壁を設けたが,ついにシュ・シンの息子であるイビ・シン王(前2029頃 - 前2006頃)の時代にウルは陥落し,エラム人によって王は東方へ連行され,ウル第三王朝は滅亡した。

I. 1期の印章図像の「カタ」と「カタチ」
註1:自然界のモチーフは動植物文,幾何学紋など様々な表現が多い
註2:印章図像の髪を後にディアデム(鉢巻)状のもので束ねた巫女の姿と思われる片立て膝の平座像がジェムデ・ナスル様式とされている。その例は,Collon-1987 : pl.13(博物館蔵WA-89413の群像表現),15, 622-623,624,627,628,630, 680,801,など多数あげることができる。pl.
註3:メソポタミア文明に先行して本土偶は,スツール様のようなものに腰掛ける表現(Goff, 1963:Fig 120)である。通称ハラフ文化期(紀元前6000－5100年頃)とよぶ時代は,ハッスーナ文化とサマッラ文化に継ぐシリアと北メソポタミアを起源とする文化である
註4: 跪座は,トゥクルティ・ニヌルタ1世(在位前1244-前1208,中期アッシリア最盛期)が神に対しての具体的な座像表現にあるように神殿,神の図像に度々登場する(ギュンターシャーデ-1987:図版28)。白川によれば,危は高所より嫌いて下に臨む形(他)。跪とはそのような姿勢とする内容と一致する。
註5:座像の下に一本線で敷物をしめしている例は多数ある
(Wiseman1962:pl..3d,e,g,pl.3d(大英博物館蔵WA-102411), pl.3e (同右WA-89355),pl. 3g(同右WA-102571)),前述の印章図像比較に用いた印章したスツールの座像をしめす(ibid. pl. 2d (同右WA-121280),3d,e,g)。さらにスツールの座像と平座座像で明らかに敷物を表す同時表現がある(Collon1987:pl.15(WA-1323336)。
アシュモレアン博物館蔵(Buchanan 1966)の印章は,pl..14a-dの座像は投げ足(アシュモレアン博物館蔵・1926.483.14),出土地はジェムデド・ナスル-2579,薄茶色石灰岩,寸法:直径19×高さ21mm,形状は三面型である。pl.15は平座で,写真は逆向き,アシュモレアン博物館蔵Burn収集品・1949.878.15,ジェムデド・ナスル様式,凍石,寸法:直径19×高さ18mm,pl.18a-bは,蔵no.1895.84.18,出土地は不明でシリア・アラダスとされる。ジェムデド・ナスル様式,赤大理石,寸法:直径16×高さ19mm,形状は凹面型(コンケーブ)である。1895.85,薄桃色大理石,寸法:直径16×高さ19(17)mm,を参照,一本線で敷物をしめしている。
註6: Buchanan B.-1966: pl.14a-dの座像は投げ足(アシュモレアン博物館蔵・1926.483.14),出土地はジェムデド・ナスル-2579,薄茶色石灰岩,寸法:直径19×高さ21mm,形状は三面型で

ある。
註7:蜘蛛のウトウとスツールの女性座像で,ウト神(Uttu)は,太陽神である。 Goff-1966.Fig.356,(ルーブル美術館蔵A113),Collon 1987:pl.15(大英博物館蔵WA-894316) Wiseman1962:pl.4h.
註8 :筆者の解釈は,古拙な絵文字として壷(dug,duk)と収穫(gur)とする。
註9:船は,エジプトで王による国家事業や葬祭にいたるまで重要な意味がある。ピラミッド建設に使用された石材などの運搬の手段であった。信仰においても太陽神や亡くなったファラオは,太陽の船と呼ばれる船に乗って昼は天空,夜は地下世界を旅すると考えた。このように現実世界で権力の象徴の船が冥界でも重要だった。1954年にエジプト考古局が発掘したクフ王ピラミッド東側から船の形をした巨大な竪坑とピラミッド南脇長方形の空間から解体された状態の巨大な二艘の船が出土した。発見された船の一つは,クフ王の息子の一人ジェドエフラーの献物として知られている。おそらく船がピラミッド文書にある太陽神ラーのための天の葦船と昼船を指す太陽の船を具現化したもので二艘確認されているために日の出から日の入り＝太陽神の昼間の航海時間と,その後次の日の日の出までの夜の時間＝地下を旅する時間を表すと考えられる。船は現在のレバノン共和国のビブロスを経由しエジプトへともたらされた巨大建材レバノン杉で造られた全長43mの木造船であった。もしこの巨大な船が本当に死した古代エジプト王が太陽神と共に天空と地下を旅するために用意された「副葬品」であると解釈すればピラミッドの王墓説を補強する。来世を旅する際に王である被葬者が必要とした船であり,のちに太陽の船と呼ばれることになる原型と理解ができる。あるいはこれらの船は死した王のミイラを運ぶために使用され,その役目を終えた後,王の側に埋められたものなのかもしれない。いずれにせよ船の存在は,古代エジプト人の来世観とピラミッドの理解する上で大きな役割を果たす。
註10:メソポタミアやエジプトでは,神をはこぶために神輿がある。メソポタミアにおいては,スーサ出土の神輿の座像がしられていて,新アッシリア帝国では,「玉座担ぎ」の式部官がいた。古代エジプトで行われていたオペト祭(収穫祭の一つ)のような儀礼行為・儀式においては,神像が神殿と神殿の間を聖なる船に乗り,神官たちによって神輿に担がれ運ばれていた。
註11: シュメール語の用語lu gu-za-lが担ぎ手に相当する。後に新アッシリア帝国の宮廷の官職の一つに玉座を支え持つ者の名称がある。その職掌の詳細については不明であるが「玉座担ぎ」の図像が新アッシリア帝国には多数あげることができる。そのまま訳したものに王(主人)の椅子を持ち運ぶことが元来の仕事だったと思われる。
註12:ウルク遺構出土の石斧でBlau monumentと呼ばれる。2つのうちの一つで大英博物館蔵WA-86260-I である。

II　2期の印章と玉座と倚座像-　饗宴図,動物闘争図の座像-
註1:レオナルド・ウーリーを代表とした大英博物館･ペンシルバニア大学の1926ー32年の共同調査ではウルの遺宝と呼ばれた大殉葬墓と豪華な副葬品が出土した17基を紀元前2600年頃(メソポタミア２期)の王墓とする (Richard and Horne1998;pl.19-28) 。
註2: Collon, 1987,pl.521:及びZettler and Horne1999のFig.46b参照,調査報告に王妃Pu-abi銘の印章は,赤塗りの木製チェスト(225X110cm)のワードローブ付近から発堀した(Woolley,C.L., 1934)。筆者は大英博物館収蔵の印章で図像を熟覧確認したところ,楔形文字銘から王妃Pu-abi (シュメール語シュブ･アド) とする。後ろ髪で束ねる表現は,1期の生産風景に多数登場した女性のお下げ髪(Pig-tail)の表現が,2期に入り王宮の女性が,この髪形をとっていたことがわかる。
註3:敷物およびスツールなど座具が図示されている(: Leon, Legrain, 1936:pl.40,no.300)。
註4:Collonー1987:cp.27.cp.31:.27章に神殿と宗教行事,31章に動物闘争図の項,参照,饗宴図(Banquet Scenes･pl.68-169),および動物闘争図の図像は,後の閲見図の主題に継承される。
註5:王妃Pu-abiが倚座するのを過渡期にある玉座とする。座面の素材としての皮革は,体形に沿う座面の曲線が座り心地と獲得の手段として実用化され用いた (Collon　1987 : pl.93,pl.40, pl.43)
註6:ウル7号墓の殉死者(30-12-2)周囲から竪琴(大英博物館蔵WA-121199)の副葬品が出土する。饗宴主題のなかで倚座像をもつ同様の表現が'HE-KUN-SIG':ヘ・クン・シグ,パビルサグ神の(女)祭司と銘を持つ印章mおよび王名表にない称号'Dumu-kisalーメス･カラム･ドゥグ'の銘文を持つ印章が他に知られる。他の円筒印章の銘文から‘アカラムドゥグ’,‘メス・アンネ・パッダ’,など被葬者の名が判明している(Zettler 1998:pp.75-84,Fig.44,pl.16a

－28A)

註7: 黒柳恒男－1989,pp.38-40:饗宴(酒宴)の儀礼が後世の豊饒を祈るイランの正月に相当する春分の3月21日である「新年祭(ノウ・ルーズ)」と比較できるものの当時の饗宴が「聖婚(結婚)の儀式」の一部をなしていた可能性がある。酒と饗宴(祝宴)を古い記録に従えばゾロアスター教のヤスナ第9章の記述でハオマ酒を創造したのが,イランの最初の王ジャムシードとし,王がもつ酒杯が世の中の出来事を思いのまま映し出せるとしている。中世イランの「王書」では王族達が新年(春分の日)の祝宴に酒,杯,および楽士をもとめたとする古くからの伝承の記述から饗宴が単に新年の酒宴(饗宴)を示すのではなく,天と交流,来世への旅立ちが想起できる。儀式が後世の豊饒を祈る「新年祭」と比較できるが当時の饗宴が「聖婚(結婚)の儀式」をなしていた可能もある。

註8:動物闘争図は,単独の図像表現と饗宴と動物闘争図を組み合わせた二段にわたる表現がある。 動物闘争図は野生動物と家畜の闘いを表現する例が多い。また動物の闘いに人間の姿をかりた神や英雄の介入場面(Collon1987:pl.83,イラク博物館蔵IM-14315),闘争を伴わない家畜だけの図,さらにはこうした動物闘争図に饗宴の場面と組み合わせた図23.(3)の印章(Collon1987:pl.91,大英博物館蔵WA-103318)がある。登場する動物は,牛男,ライオン,豹,ライオン・グリフィン,雄牛,人頭雄牛,水牛,雄鹿・ガゼル・山羊・その他有角獣,怪獣がある。構図は,垂直性を強調し,人間は髪を整えた英雄に姿を変え,英雄は牛男と共に闘う象徴的な意味を持った。動物たちは,構図のなかで交差し画面中央はＸ脚状のスツールで折りたたみが可能なものが登場する。

註9:椅子は,小形で背板のない低い座面のスツール(小椅子)が登場し,そのなかに折りたたみ可能なＸ脚状の形態が登場している。さらに座面が皮革,または繊維で作られたかのように自然な曲線を描き,その終端がエジプトの椅子(図13.2. (1-2))と同様の立ち上がりを見せるため低めの背板を持つ事がわかる。

註10:オクスフォード大学付属アシュモレアン博物館蔵のシュメール王名表(通称ウェルド・ブラソデルプリズム)からシュメール人と共にセム系の人名がその初期から王として記録が残るため両者の共存が確認できる。プ・アビの名前は,王名表にはない(ピエコンスキ他(編) 2004:pp.554－559)。シュメール人の出自がどこから来たのか,そしてどこに移動したかについては,不明である。ウル第三王朝の滅亡にさいして,もともとシュメール人とともにセム系民族相互の間に戦争があった訳ではない。

註11:本円筒印章は,濃青色のラピスラズリ(青金石)製で・40×直径20m m‘Pu-abi,nin’ 銘をもち女王とされる遺骨の右上腕に横たわっていた。この2段にわたる饗宴の登場する人物は縁のついた衣類,スカートを着用する。女性の長い髪は,首のうなじで束ねられている。上段の場面の女性二人は,お互いに顔を合わて飲む仕草で円錐形の杯を手にもち,椅子ないし玉座に座る。二人の間には召使いが手をあげて立ち,そして3人目の召使いがやさしく角形の扇様のものをあおっている

註12: 小林登志子－2005,pp.21-22『シュメル－人類最古の文明』,中公新書1818,中央公論出版社,またエジプトの王には女王の存在が確認されている[pp.20－21]キシュ第三王朝に居酒屋の女主人を意味するクババ(クバウ)と称される人物の登場をみるが,女王ではない。

註13:紀元前4000年紀末からウルク遺跡のエナンナ神殿出土の祭壇風家具を王朝家具の先駆的とする研究がある(Crawford,H.,1996:pl.10a,b,11b,13c)。メソポタミアの紀元前4千年紀末から前3千年紀初頭における家具の「カタチ」の視点でとらえるが,姿勢の視点が欠落しが,その寸法,材質,構造など出土条件が悪いために, 検証に疑問点が残る内容である。

註14: メソポタミア紀元前3千年紀初頭頃とエジプトの古王朝期にかけて信仰は,マスタバ形のピラミッドをはじめ舟にのった太陽神の信仰など,相互の影響があった。その足跡は,エジプトで東方世界の特産品である中央アジアのラピスラズリ,シリア・パレスティナ製の土器などがエジプトの第一王朝期終盤から第三王朝期にかけてメソポタミアをはじめとした東方世界からの影響が途切れる時期を迎えることでわかる。玉座に則して言えばエジプトの背板の立ち上がりの特徴を有する玉座の例は,当時のヌビアAグループ文化特有の遺物にクストゥルの香炉と呼ぶ(インセンス・バーナー)に座像がある。この座像の特徴は,古代エジプト王が用いる王権の図像(Pharaonic Icongraphy)－王の化身のホルス,上エジプト王の象徴である白冠,玉座を使用している(大城道則2010:pp.48-49)。しかもシュメールとの共通する船上の祭祀王などの人物玉座像を意識した表現であり,またここにある玉座が神殿の戸口(後述)の様式をもしたとして注目できる。また図13.(2)がエジプトの宰相イムホテプ(前2630-2611年)の玉座座像である。イムホテプは,サッカラの階段ピラミッドを建設した。メソポタミアの階段状の神殿建築があり印章にもその形を表したものがある点でメ

ソポタミアとの関係づけができる。またエジプト南部で初期のエジプト王権に関する研究対象となってきた。クッション付きの小椅子の特徴も見逃せないFig.28(pl.85) 中王朝(紀元前2133-1633年)のスツールが示される(Killen1986:pp.51-54,Fig.28)。ほかに古王朝の紀元前3500年ころと推定されるNaga-ed-Derの共同墓地487号墓の壁画にFig.25(カリフォルニア大学Lowie人類学博物館蔵6-2062)の座像にも共通性がある。

註15:アブシャラビーフ176号墓出土,旧イラク博物館の収蔵品(Collon1987: pl.819)

註16:宮廷のなかで王の周辺には王の軍務,政務を助ける親族,高官,側妻,召使などからなる臣下の集団があった。廷臣の多くは宮殿に居住し,そこで仕事をしたと思われる。宮殿は王の住まいであるだけでなく,各種手工業,農園,商業活動の司令塔であった。王の最側近は国家行政,軍事,宮廷儀礼を担当する最高位の役人たちであった。たとえば,新アッシリア時代には宮廷長官,軍事司令官,家老がこうした高官であり,家老は王に直接近づくことのできる唯一の人物であった。これに続く階位の役人の任務は宮殿の管理運営で,給仕長,執事,王宮伝令官などがこれにあたる。このような宮廷でつかわれた家具は,宮廷家具といえる。王と王妃の玉座は,のべるまでもないが,２期のプーアビは,王妃の名がシュメールの王名表になく,プ･アビの存在が王墓の埋葬遺体以外に確認されてない。従って印章のプ･アビ王妃座像の玉座は,ここでは, 印章に玉座, 王杖と王冠が後の3期の謁見図の印章図像のように一体的に示されておらず玉座の性格を有する過渡期のものとしている。新アッシリア時代までにはこれら高官は,王宮つき家臣だけでなく,高位の軍人や地方州長官も含むようになった。彼らの称号は家内労働の役割から派生した古い伝統を反映し,「ワイン長」といったようなプロセスの名残りが見られる。王妃,側妻,王子や王女たちはすべて宮殿に住まいを持ち,宮廷の一部をなしていた。王はときとして宮殿を離れて王国内の別の場所や国外,占領地の訪問の機会には後宮を含む宮廷の少なくとも一部が王に同行した。

註 17:祝祭(Banqets and feasts)は宗教的,国家的,個人的祝賀などを示す行事であった。「祝祭」にあたるシュメール語表意文字は「ビール注ぎ」の意味で,祝祭ではビールとワインが主要な役割を果たしていた。メソポタミアでは酒の醸造は特にイシュタル祭儀と結びついた神殿活動の一部であった。飲酒場面はさまざまな時代の印章や彫刻に特徴的に見られる。饗宴図に登場する坏は高価な素材(金,銀なで)で作られ重要であったことがわかる。さまざまな時代の文献や考古学的遺物は共同で用いる甕,把手と注ぎ口のついた容器,個人用大杯あるいは動物の頭の形をしたリュトンとよぶ容器,そして長い「ストロー」などさまざまな容器が祝宴で使用されたことを記録している。人々が酩酊を求めていたことがアクハト伝説からもわかる。

新年祭は神々が召集し来る年の運命を決める祝祭の時とも呼ばれた。マルドゥクが創造の叙事詩のなかで権力を任されたときのように,集会の祝祭は決議をしたり忠誠の誓約を行なったりする機会であった。古バビロニアの軍事的国勢調査に伴う「テービトゥム(tebibtum)」の祭儀には忠誠の誓約を行なう祝祭が含まれていた。婚約は祝祭が催されるもう一つの機会であったし(「結婚」を参照),シリアで見つかった鉄器時代の碑には葬儀における饗宴の様子が描かれている。ナボニドウスの母の死に際しては,七日間におよぶ食事を通し公的に弔意が表された。すべての主要都市の神々が集まるアッシリアの国家的祝祭「タークルトウ(takultu)」では王は神々に食物や飲物を献げ,王と国家に対する神々の祝福を期待した。

註18:中世イランの「王書」に王族が新年(春分の日)の祝宴に歌舞と酒宴の伝承を記述している,前出の註7を参照。

註19:饗宴倚座像である,H41×径17mm貝製,テロ出土品,ルーブル美術館蔵Inv.no.MNB－1351b,二頭の猛獣の獅子が鹿を襲う動物闘争図である。 一本調子の技法から2期末の制作年代とされる(世田谷美術館2000：pl.100)。

註20：アブシャラビーフ173号墓出土,ラビスラズリ製である。画面中央はＸ脚状のスツールで折りたたみが可能とされる(Collon1987:pl.82)。

註21：饗宴図と動物闘争図と人物座像の組み合わせた印章図像である。 (大英博物館蔵 WA-103318)

註22: Collon, D.,-1995, pl.44: pp.52,pl.44R参照,Tello(古代名Girsu-現地名アルウバイド),高さ26×幅37.5cm.Kurlil胡座像は,神への敬虔な身構えとして胸前で手を組み,おそらく胡座の平座姿勢と考えることができる。大英博蔵(WA-114207) 。この座は,エジプトの新王朝期の書記官座像から西アジア全域の神殿や宮廷の座姿勢に多数登場する。

註23: Tell Agrabサラ神殿出土,紀元前2700年頃 約100cmライムストーン製である(Amiet1980, pl.299)

註24:マリの歌手と演奏をエブラ文書祭儀式に記される。男性の宦官説もある本像が,もともと楽器を持つとされる。ダマスカス博物館蔵 S2071,(M.2416/2365)　高:26cm,敷物径:11.6cm アラバスター製。 ウル・ニナ(Ur-Nina)の交脚座像が出土したマリ(現地名テル・ハリリ)は,ユーフラテス川中流域のシリアとアナトリアに通じる水陸路の要衝で,地中海沿岸に至る交易路を支配した都市である(北原理雄-1983)。本像は往時の要衝の地に宮廷の賑わいを偲ばせる。

註25: 印章の座像表現にウル・ニナ座像と同じ羊毛風のクッションの座像表現がない。しかし3期ウル第三王朝のイビ・シン王の座像がスツールに羊毛(座面)を敷いた上の座像として特徴的である。スツールに羊毛(座面)を敷いた石像の表現がない。 (Legrain1936:pl.40),

註26:エビール(Ebhil-il,またはIbihil)とされる人物の座像は葦製とみられるスツールに腰掛けている。使用される葦材は,南メソポタミアで自生していて入手しやすい。またメソポタミアの河床地帯で今もなを葦舟が利用されているように,製作が容易と見なされる。繊維で編まれたスツールに腰かける祭司王とされる人物の座像が1－2期の過渡期の印章が示されている(Collon1987, pl.713)

註27:ニンギルス神は, 南メソポタミアの都市国家テルローのギルスの豊饒神で,ラガシュでは都市神にあたるとされる。シュメルの『王名表』には,ラガシュやニップールといった当時の有力な都市が含まれないが,ラガシュの『王名表』に「大洪水が(すべてを)押し流した後に・・・・」という文にラガシュ市が含まれる。 2期に後の3期でアッカド様式の印章表現をとる先導的な表現かられ前3千年紀半頃の制作とされる。Dudu銘をもつ印章がある(Collon1987:pl.717)。スフインクスに先導され祭祀王がのる船をあらわしているが,この座像と異なる時期にあたる。

註28:前2600年頃とされる。H176×160mmアラバスター製奉献板。

註29:ラガッシュ王ウルナンシェの奉献板,紀元前3000年紀半の作とされる。

註30:スーサのアクロポリス出土なるも,メソポタミア南部の表現と比べローカルな作風に特徴がある。 スーサはメソポタミアとイランを中継する重要な交易ルート沿いに位置し,アケメネス朝ペルシャの首都にもなる(世田谷美術館(編) 2000,図版66: H17×16cm,アラバスター製)

註31: ウルの王墓(PG779)より出土した大きな台形で木製旗章 (楽器の共鳴箱説も)と言われている。竪琴とともに楽士を交え宮廷の人物の饗宴場面は,酒宴を単に表すのでなく新年の祭や来世への旅立ちといった宗教的な意味が背景に隠されているとされる。ここに登場する座像は,様々に玉座の過渡期の要素を有する。

註32: ルーブル美術館蔵AO12455で紀元前2500年頃とされる。アラバスター製,寸法:高11×幅8.3cm一般的に神にささげる奉献者像は胸元で両手をむすぶ敬虔さを表する仕草であるが,本像は異なっている。また大歌手ウルニナ座像と同様の特徴的な象嵌された目などマリ彫刻の特徴を有する。

註33:筆者が大英博物館蔵の印章資料を熟覧した内容をまとめたものである。印章の図像で饗宴場面(Banquet Scenes),及び動物闘争図(Contest Scenes)を主題とする印章を熟覧したものを含む。閲見図の主題にする倚座像に対し拝謁する人物像を表現する。

註34: 前2千年紀半頃にアッカド語でかかれた神官が朗唱した歌(Kalu)は,技芸神としてニンイルドゥ(木材工芸),ニンシムグ(鋳金),グシュキンバンダ(金銀細工)など技術を誇った神々をあげてる。このことから物資の供給者を意味する王名と技芸の神の名が出揃う充実した時代である

III　3期における玉座と倚座像－　謁見図の座像－

註1: アッカド時代にナラム・シンは自らを神と称し四海の王となった。ハムラビ法典のハムラビ王はバビロンの都市神であるマルドウークを,エイリル神をそれぞれ祀り,また新たに台頭したアッシリアが首都の守護神アッシュールを最高神に祀る。女神イシュタールは,ニンガルの娘である。

註2:王のラガシユでの改革碑文からアッカド語の単一碑文からシュメール語とアッカド語併記によりすすみ容易となった

註3: グデア王は,都市国家ラガシュの主神・ニンギルス,およびグデア本人の守護神・ニンギジタ,ならびに女神ババのため多くの神殿を造営したとされる。

註4:3期の饗宴場面でX状の脚をもつスツールが登場するのは,Collon1987:pl.673(大英博蔵WA-28806),820(ｱｼｭﾓｰﾙ博蔵1929-263),pl.675(Freiburg59)). およびFrankfort－1939,pl.XV,a-eに取り上げられている。

註5:3期の閲見図に登場する倚座像に対し拝謁する人物の跪座する姿が表現されている。また前掲した図11の大英博物館蔵WA-123280と同じ旗章がpl.684,693の閲見図の倚座人物の横に登場し,1期から継続的な使用が認められる。宴の儀式表現は祭祀と関わるとされる印影がアララクXI層の宮殿址からも出ている。

註6:ふつう製作材料が巻貝の貝殻芯,区画線の表現表現が杉綾模様の帯をもつティグリス・グループの印章として知られる(Collon, 1987,pl.109：旧イラク博物館蔵IM-14334)。ふつう製作材料が巻貝の貝殻芯,区画線の表現表現が杉綾模様の帯をもつティグリス・グループの印章として知られ,初期アッカド時代独特の一群の印章である。闘争図の印章の製作材料は蛇紋岩が主に用られたが,2期で最上質の印章に使用されたラピスラズリは初期王朝期ほど使えなかった社会変化がある)。,初期アッカド時代独特の一群の印章である。闘争図の印章の製作材料は蛇紋岩が主に用られたが,2期で最上質の印章に使用されたラピスラズリは初期王朝期ほど使えなかった社会変化がある。

註7: Collon1987:pl.113(大英博物館蔵WA-132834)である。玉座に冠をかぶる神と特別階級の人物との対話場面はアッカド後期に始まりウル第3王朝時代に引き継がれた。図は,水際で鷲鳥の遊泳と人物座像の組み合わせで玉座と解説する(Frankfort1939：pl.XXVI.e)

註8: この他に別の理由は,遊牧民出身のアッカド人がシュメール人の農業･牧畜主体の祭儀に無関心だった点も考えられる。

註9:ナツメヤシの祭壇や樹木の両側に人物を配した,楽園を想起させる主題である(Collon, 1987:pl.112,大英博物館蔵WA-89326)。

註10:女神が台座の上の四角い輪郭線で表現した王座に座る標準的献呈場面として知られる。寸法:3.5×2.0cm,他にibid.pl.386参照

註11: グデア王は,神殿造営にあたって奉納者である自身の名と奉納される神名を明記し土にうめた定礎碑文や粘土釘の存在から,彼の倚座像が篤信行為を実証する。グデアの座像は,ババ神殿建設の事を記す神殿の設計図を膝の上に置き,手を胸元で結び素足の脚を端正に揃えて前向きに座る礼拝の倚座像が知られている。倚座像は,背もたれとひじ掛けがない椅子で,構造から木製の木組みをもつ四脚である(青柳正規(編)昭60：図版173)。

註12:胴体のみのグデア王の彫刻であるが頭部が完全に一致するものがメトロポリタン美術館より発見された。グデアの息子ウル・ニンギルス神立像の台座の跪座座像である。アラバスター製,高さ54cm,テルロー(ラガッシュ)出土の座像である。グデア像の碑文は,次に記す。/(第1欄)神ニンフルサグ（山の女神）,町と共に育った所の女王,全ての子供の母,彼の女王のためにグデア･エンシ（知事）,ラガシュ市の-（グデア）は,ギルスの地区の彼女の神殿を彼女に建て奉った。/(第2欄)（又）彼女の聖なる盥を,彼女に建て奉った。（又）立派な椅子を彼女の女神の権威を（示す）彼女に作り奉った。彼女のエマー（大神殿）に（それをそこに）運び入れ給うた。マガンの国から, /(第3欄)：閃緑岩を下ろし彼女の像へと作り給うた（そして）「天地において ー女神運命を決する所のニントウ女神 神々の母がグデア, /（第4欄）：神殿を建てた人ーについて彼の生命を長らしめ給う」を名としてそれを命名し神殿に（それをそこに）運び込み給うた。(飯島紀－1997: pp.100-101)

註13:太陽神は,シャマシュ(シュメール語でウトゥ)と呼ばれ肩から火焔光を出す。一般的に倚座 像と立像表現をもつ。シュメール語のナンナル神は,バビロニアとアッシリアの月神でシンに相当する。王冠の主という称号を持ち,アッカド時代は,天空神,最高神,水神の三主神に集約される.閲見図に登場する太陽神シャマッシュは,立像,倚座像共に表現が多い。

註14:中期アッシリア時代の守護と豊饒のアッシュール神立像の印章図像を示す左から牛の上に立つ神アッシュール立像は,手に神権を象徴する環を手渡そうとし,仲介者の守護神とその後方でひざまずく跪座して祈る（印影では左右逆の鏡像になり左手を挙げ祈祷する風に見える）。トゥクルティ・ニヌルタ一世らしい人物および有翼の獅子の上に雷光をもつ神アッシュール(アダド)神立像が見据え,その優劣関係を示している(Collon 1987:pl.560）。この印章の銘文は,欠損し内容も解読難により不明箇所がある。そのため,現在この印章の図像は, Wiseman,1958,p.21,およびPorada,1979,pp.7-8の二つの異なる見解がある。最初の見解は,トゥクルティ・ニヌルタ一世のアッシュル神への奉献印章説,次の見解が王権神授をうけたトゥクルティ・ニヌルタ一世へカッシート王の跪坐説である。両説共に,神々と仲介の神に対し跪座する座像から,神々と連なる関係,玉座に対する作法を示し,さらにアッシュール（アダド）神の下に台座となった有翼の獅子が重要な役を担っている。

註15: Collon,1987：pl.532:前掲前掲,.Collon1982：pl.469参照,大英博物館蔵WA-89126,寸法:5.28X3.03(2.87)cm。獣脚のデザインは,ウルのスタンダードと同じ,他に獣を直接足台(pl.174－4期)。玉座(pl.314－5期)に直接用いる例があり,伝統が継続している。

註16: アッカド時代の後期は,シャル・カリ・シャルリ王やイビイル王に代表される。印章に取り入れた図像,様式は,以後何百年間も各地に勅激を与えた。
註17：Collon1987：pl.105: およびFrankfort1939：pl.XVIIk,pp.102-103,旧イラク博物館蔵IM-14577である。
註18:天蓋は,笠（かさ）状の装飾。祭壇や寝台などの上に設けた装飾的な覆い。天をおおうもの,吊り下げた絹傘,その形につくり葬具,天を覆うモノとする(西尾実他(編)－2003)。
註19：シッパルにあった後世のシャマシュ神殿図参照。太陽神のシャマシュは,アッカド時代も以降もメソポタミアで最も人気の高い神であった。太陽神は夜ごと地下の水域を舟で渡ると信じられる。太陽神と舟の関わりからエジプトの太陽神ラーと再生の主題を想起させる。舟上におかれる座具は, 講造と形態から折畳み可能なX状,円筒形のスツール,四脚の椅子と変化が多い。
註20:アッカドの太陽神シャマッシュ(ウトゥ)は,アン(天の神),エンリル(大気の神),エンキ(地と水の神),ならびにアヌンナキ(神々一般をさす)それぞれとともにメソポタミアの重要な神である(Black 1992) 。さらに太陽神と舟,船を先導する有翼神獣のスフインクスのメソポタミアに出現する早い図像例がありエジプトの太陽神ラーと再生の主題を想起させる(Collon,1987：pl. 768)。他にpl.118（大英博物館蔵WA-102510(1908.4.11,18)寸法:3.22X2.0(1.9)cm) ,ならびに図像例(Collon,1982a,No.446)がある。古王朝時代のエジプトと文化的に匹敵する当時のエジプト南部にヌビアAグループ文化に属する文化特有の遺物にクストゥルの香炉がある。図像は,船上の人物玉座像が王の存在を意識した表現として古代エジプト王が用いる王権の図像－王の化身のホルス,上エジプト王の象徴の白冠を被り,メソポタミアの神殿戸口を摸した風の玉座を使用刷る図像が注目できる(大城道則-2010:pp.48-49)。
註21：三日月が登場する印章は,太陰暦,農歴との関わりが示唆されている。
註22:ウル第三王朝はシュメル人が建てた最初で最後の統一王朝で最後の王があった。シュメル王朝表が伝えるサルゴン王が創始したアッカド王朝の十一王,合計181年,及びウルク第四王朝が五王,合計30年,その後にグティ人によるメソポタミア南部のバビロニア支配が始まる。グティは二一王,合計91年の支配の後,ウトゥヘガル王（ウルク第五王朝）によって倒されるが,そのウトゥヘガルは一代限りであって,彼の臣下であったウル･ナンムがウル第三王朝を興した。王は,賛歌を作り,「正義の牧人」と称した。最後に王権神授をうけた王は,イビ・シン神と神格化された王は,まさに死しても現人神のように人々の心のなかで生き続けた。その王のと王朝の滅亡後も五章からなるシュメールとウルの滅亡哀歌は,大河のほとりにイビ・シン神が豊かな社会を再興する期待となって残された。
註23:ベルリン古代アジア博物館蔵VA-156である
註24:図36.1は長さ26×径14.5mm,黒色蛇紋岩製(Buchanan 1967:Pl.421)
註25:図36.2は神殿様式を摸す玉座と倚座像である(Collon 1987:pl.122)
註26:図37.1は有翼の神殿の門(戸口)に結ばれた玉座座像である。大英博物館蔵WA-22423,寸法:2×1.35cm (Collon1987：pl. 179)。エジプトで同様の例が「アンハイの死者の書」のパピルスにアメンラー神殿の女神官の主題で登場する。死者が死後に生活する祝福に満ちた土地の様子のなかでアメンラー神の玉座が神殿の戸口。そのもので表現する。新王国20王朝時代,紀元前1186－1069年代の作(吉村作治(編) 1990:図27)
註27:図37.2 (Collon1987：pl.182)大英博物館蔵WA-89390 (41.7.26.169),寸法:3.5X2.2c
註28:図37.3は,神殿の門を摸した玉座に座し後髪を束ねた女神は,有翼の門(扉)を背景にした雄牛と対面する場面。星と木を配する(Collon1987：pl. 183): (Collon1987：pl. 183)大英博物館蔵WA-132845(1960. 5. 17.17),寸法:2.7×1.5cm
註29:図37.4 (Collon1987：pl. 180)。大英博物館蔵WA-120545(1908.4.11,53),寸法:2.7×1.65cm
註30:図37.5は,有翼の神殿の門を摸した玉座像を示す(Collon1987：pl.181)
註31: 神殿が天に通じる建築意図のもとで建設された。そのため玉座が神殿と外部,天と天下の境界の装置として建築の様式を内部にも適用されたのである。
註32:神殿の遺構は,神殿の溝状のあるいは壁の凹んだ門(戸口,壁龕(へきがん) ,入り込み:alcove)の存在を示している。またその建築様式を玉座の脚部に適用した玉座の印章図像の例が多数ある(例:世田谷美術館pl54. ルーブル美術館蔵MN－B1166)。印章図像は神殿内部の神々を表現しなかったが,神殿建築やその内陣の什器,備品,ならびに神殿で謁見の儀式を描写している(Roaf, 1996:pp.73) 「敬天」=身を引き締めて天を敬う目的で天をめざし建築されたメソポタミアの神殿とエジプトのピラミッドも共通性がある。しかし前者

の神殿建築が共同体構成員の努力と自律性の高い市民組織に基づいて神殿が都市の中心に建築され行政や経済の中心的役割を果たしたのに対し,エジプトが早くから中央集権国家の統一により神殿建築が独自的に発達する余地がなかった(北原1983)

註33:ウル第三王朝時代に作られたウルの赤のジッグラトは,豪壮な建築であり当時として三層式(現存のは二層)の基礎になる基壇部分は,64×46mの規模をもつ。日干し煉瓦と葦と交互に敷き,モルタルで固めてある。その外側は厚さ2.5mにもおよぶ焼成レンガで覆い補強して,さらに装飾を施している。北東面に階段が３つつき,うち２本は壁面に沿って,そして１本は壁面に直角の昇降階段となり,その３本が交差するところに門があり,そこをくぐりさらに階段があり二層に続く。現存しないが第三層の上には,小さな祭壇を設けた神殿があったとされる(ibid. 2004:Fig.4.18, Amiet 1980, Roaf, Herrmann(eds) 1996)。

註34: 石膏製でマリ・イシュタール神殿出土から本倚座像が女王あるいは女神のような特別な性格を有する事がわかる。ダマスカス博物館蔵 S2072(M.2308/2368/338),高さ34.4cm,玉座部寸法14X10.2　X13.5cm,紀元前2600-2350頃作(Harvey1985:pl.66)

註35:ウル・ナンム王,「王は神である」とする王権神授の原理ウル第三王朝の創始者ウル・ナンムが潅水儀式を行っている有名な場面である。ウル・ナンムは,「下から上まで道をまっすぐにした」年号名が残っているように外交によってその影響力を拡大したと思われ,「上から下まで」が意味することは,ペルシャ湾から地中海に至る全地域を示唆している可能性がある。後代にのこる王の功績は,月神・ナンナ(アッカド語のシン)とその配偶女神ニンガルあみえを祀ったウルのジッグラトの建設,およびシュメール最古の法典を王の治世で編纂したことである。片方がルーブル美術館蔵,ペンシルバニア大学蔵・neg.S4-140070(ピエコンスキ (編)-2004)

IV.　　メソポタミア４期以降の玉座の充実

註 1:バビロニア朝は,メソポタミアの紀元前 3000 年期の後半に汎世界的な王朝の先駆けとなった。そのため法整備が必要となりハンムラビ法典を公布し実施をすすめた。領土拡大は,異民族社会の接触と統合のため領土の意識統一をするため古代においても問題が起きていたのである。現代紀元 2000 年紀においてもグローバル化と情報化社会のもと多様な文化と接触により国際的な法整備と連携で同じ問題がおきている。同様の問題は,今も継続していることがわかる。

註 2: ハンムラピ法典は,全 282 条からなる。遊牧民の同害復讐主義と都市住民の賠償主義の混在,階級による法の適用の差別を明記している。ウル・ナンム王以降に法典の編纂の伝統は,イシン朝・リピトイシュタル法典(前 1930 年頃),およびエシュヌンナ法典(前 1830 年頃) が現在に伝わる。 ハンムラビ (アッカド語 Hammurabi あるいは ハンムラピ Hammu-rapi) は,都市国家バビロン第 6 代王。 後に,メソポタミアに勢力を拡大しバビロニア帝国の初代王となる。 アムル人. ウル・ナンム法典に次ぐ人類最古の記録された法律である。ハンムラピ王のリセス型玉座の印章は,Collon1987:pl. １表紙(大英博物館蔵 WA-89002)にある。

註 3: 本印影は,アッシュル神の捺印(右 560,左 561,中間縦方向に 559)でアッシリア王エサルハドン (紀元前 680－669 年在位) の「宗主権条約」書板中に王位継承を確定するための盟約書である(ニムルド出土 (ND 4327) ,イラク)。アッシリアは,シャムシアダド一世(即位前 1671-1662 年)の下に商業国家から軍事国家に変貌,初の外地遠征を試みる。中バビロニア時代にあってアッシリアを軸に統一がはじまるり,国際化によりフェニキァ人が地中海貿易と植民,アラム人の内陸貿易に活躍した時代の末期である。新アッシリア帝国はエジプトからアナトリアまで領土の拡張をすすめ汎世界的な軍事大国となった。

註 4:ティグラトピレセル一世は,前 1115 年頃地中海にまで征服地を拡げるの個人的な戦争成果と一時的な領土拡張によるアッシリア帝国建設を始めた。新アッシリア帝国の歴代王から遠征と偉業をなした王の先駆けとなったティグラトピレセル 3 世(前 744～705 年)は, バビロニア王名表に「ブル」と記されたバビロニア王でもあり旧約聖書-列王記下 15 章 19 節では「ピレセル」を短縮した「プル」の名で登場する。745 年即位したダマスカス,イスラエルまで進出し,ウラルトゥに勝利し,さらにシリア。フェニキァ・バビロンを併せ,イスラエル人のアッシリアへの強制移住をすすめ新アッシリア帝国の建設に成功する。遠征地は, ウラルトゥ,バビロニア,アラブ,ティルバルシブ遠征の場面がある。ティグラト・ピレセル三世は,碑文に父王名がないため,王子ではなく王位簒奪者と推測される。ティグラト・ピレセル三世王は,メソポタミアで勢力を拡げるため前 735 年まで北方のウラルトゥを征圧する。領土の拡張のための遠征でティグラトピレセル三世は,メソポタミアを南北軸で結んで勢力を拡げるための前 735 年までアッシリアに敵対していた北方のウラルトゥを制圧し,さらに西方の

シリア・パレスティナ地方でもほとんどエジプト国境付近に至るまで覇権を回復し,各地から貢納を受け,さらにバビロニアの覇権を掌中におさめた。一方領土拡大に抗しシリア・パレスティナの反アッシリア同盟とのシリア・エフライム戦争（前 733 年）で同盟軍は,敗退しダマスカスは前 732 年にアッシリアの属州となる。こうした一連の王の偉業を座の「カタ」と「カタチ」と共に讃えたのである。

註 5: 3 期では天蓋の設置が明確でない時もある。紀元前 3 千年紀から前 2 千年紀前半頃まで基壇と天蓋の設け方が明瞭でない。4 期のハムラビ法典期が基壇がつかない表現もあり,シュメールの文化とアモリ人の文化が異なる点にあるかもしれない。さらにアッカド時代にナラムシンは自らを神と称し四海の王となった。ハムラビ法典のハムラビ王はバビロンの都市神であるマルドウークを,エイリル神をそれぞれ祀り,また新たに台頭したアッシリアが首都の守護神アッシュールを最高神に祀る。女神イシュタールは,ニンガルの娘である。

註 6:両手でとる様々な仕草(ジェスチャー)は,新アッシリア帝国の壁画にも登場し共通性がある。なかでも両手を胸の前に整え座の「カタ」をとる姿は,神の前の敬虔な姿とされる。こうした図像資料は,後述する図 25.Kurlil(大英博蔵 WA-114207),図 27.1.腰掛ける Ebhil-il 座像,図 27.2.腰掛ける書記官 DuDu 座像,ならびに図 36.1.ニンギルス神立像がこうした胸の前で組み手する像の伝統的な表現をとる。こうした身振りの「カタ」が残る背景には,神に対峙するときの敬虔な祈りの姿が今も昔も当地に伝統として残されてきた蓋然性がある。

註 7: すでにとりあげたようにエジプトの神輿やアケメネス朝ペルシャのダレイオス一世の玉座かつぎあるが,神輿は可搬型の椅子といっても良い。玉座担ぎ(神輿)の図像は,メソポタミアの 1 期にスーサ出土の印影例(Amiet 1980：no.691)があり,すでに玉座担ぎに相当するシュメール語の“lu gu-za-l”が紀元前 3 千年紀初頭頃にある。テイグラト・ピレセル三世時代に占領した都市の守護神を戦利品として担いでニムルド宮殿に戻る戦勝記念の行進の図像やマラタヤの摩崖の王と神々の行進などの例がある。

玉座担ぎの図像は,アッシリア-ウラルトゥ様式と呼ばれる程に敵対していたウラルトゥ王国との類似性があるが,ウラルトゥの玉座が神々と随伴する守護神,有翼神獣が玉座の座面を担ぐモチーフにより神々へ連なる神性を誇示するのに対して新アッシリア帝国のは奴隷支配を象徴する図像である(服部等作－2007)。

註 8:サルゴンニ世（前 721〜705 年）は,新首都ドウル・シャルルキン（現コルサバード）を造営した後サルゴン朝を築く。皇太子センナケリブ（前 704〜681 年）は,新首都ニネヴエ（現在クュンジック丘）を建設した。以降の王は,エサルパドン（前 680〜669 年）,アッシユールバニパル（前 668〜627 年）と四人の王が新アッシリアの全盛期を迎える。旧約聖書の「列王記・下」16 章 7-8 節

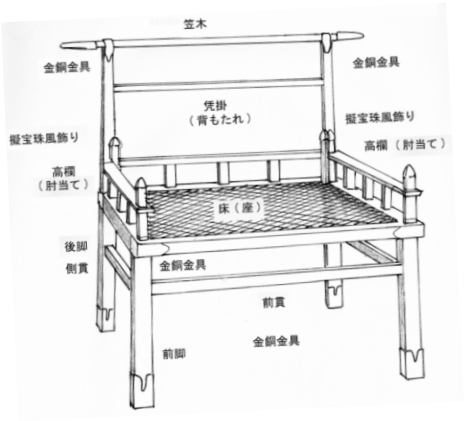
註 9: センナケリブ(前 704〜681 年)は,ニネヴェの都市を整備した,またバビロンを水攻めし破壊した,軍事的にはシリア,シドン,ウシュ(ティルス島に面した居住地),イエルサレム(前 701 年）まで到達した。エサルハドン(在位前 681-669 年)王は,エジプトに進出しメンフィスを征服し,再度エジプト制圧の帰路に病死（前 669 年）する。

註 10: 服部等作－2007:『玉座を支える有翼神獣』-ウラルトゥ王国の玉座における天空と地上世界の交流,神話・象徴・文化 III,pp.171-183,GRMC-比較神話研究組織,楽浪書院参照,基本的に,玉座を構成する青銅部品の構成は,アッシリアのを模している点がよりわかる。「玉座担ぎ」の表現は,有翼神獣による守護神,その造形に独自の美術をもつ。

# 図　表　資　料

(後藤四郎-1992)

(1) 国宝・正倉院の御椅子(赤漆欟木胡牀)




(服部等作-2009)

(2) 構成部品の名称

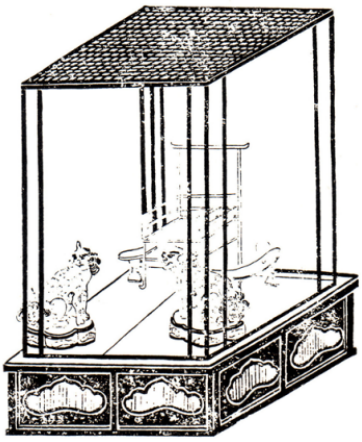
(梶谷亮治－平成10年)

(3)玉座のカタとカタチ－五尊図の胡座と胡牀

(井筒信隆(監)－2004)

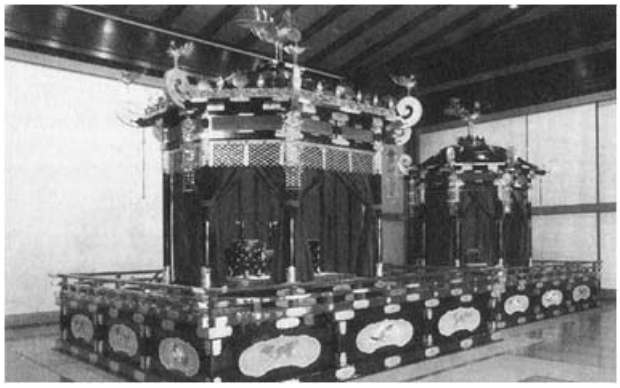
(4)真言宗管長･土宜法竜の胡座と胡牀

**1. 正倉院の玉座・御椅子**



(今泉定介-1928)

(1) 所鳳闕見聞圖説の胡牀

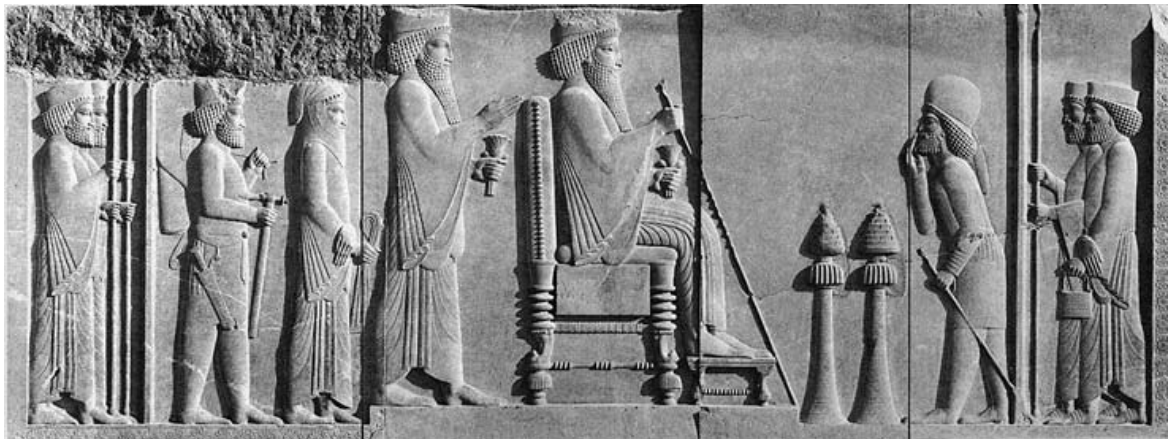


(宮内庁-2010)

(2)大極殿　高御座と御座

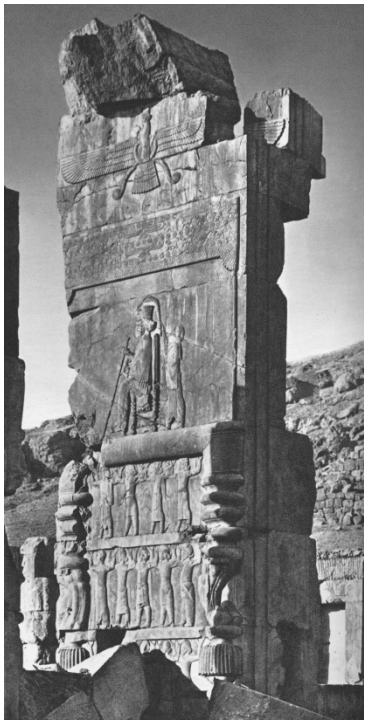
**２．　京都御所・紫宸殿の高御座と御座**

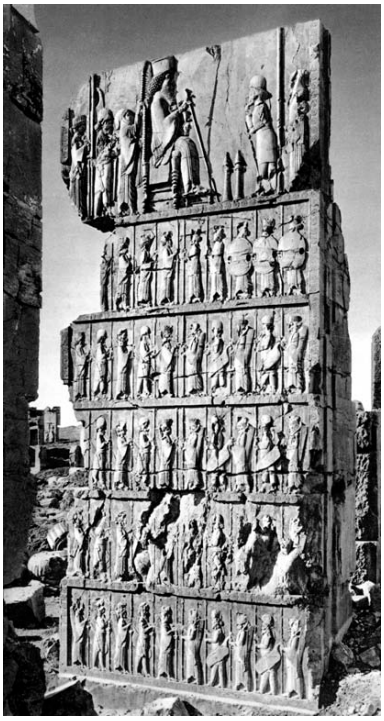
**図１　　玉座のカタとカタチ　－　日本**



((Curtis2005･ペルセポリスーアパダーナ)

(1)　アケメネス朝ペルシャ・ダリウス王謁見図





(Amiet1980)

(ペルセポリスーアパダーナ)
(2)　ダリウス王の玉座担ぎ

(ペルセポリスートリビュロン)
(3)ダリウス王の玉座担ぎ

(ペルセポリスーアパダーナ)
(4)ダリウス王の謁見図

**１．西アジアの玉座ーアケメネス朝ペルシャ･ダリウス王の玉座**

**図２　玉座のカタとカタチ　ー　西アジア**

（大英博物館 WA-124825）

**１．限定製作品としての玉座ー王朝家具の記録場面**

（大英博物館　筆者撮影）

（１）玉座運搬図･ニムルド北西宮殿壁画

（Crtis1987）

（２）玉座運搬図･ペルセポリス浮き彫り

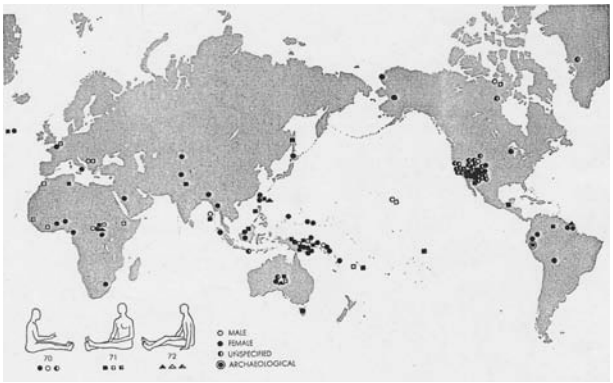
**２．使用時-標的と・戦利品になった玉座**

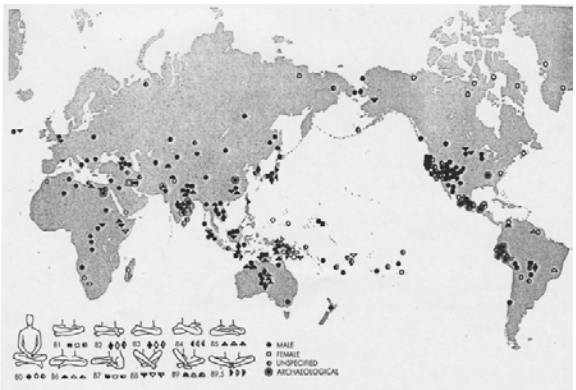
（Mallowan-1974：pl.1）

**３．　劣化と原形を損なう玉座ー王朝家具の悪い出土状態**

**図３　玉座が失われた理由**

**１．姿勢の「カタ」－　世界の立位ー床座位の形態**　(Hewes. G.W.－1957)




(1) 投げ足座姿勢の分布　　(2)　胡座姿勢の分布

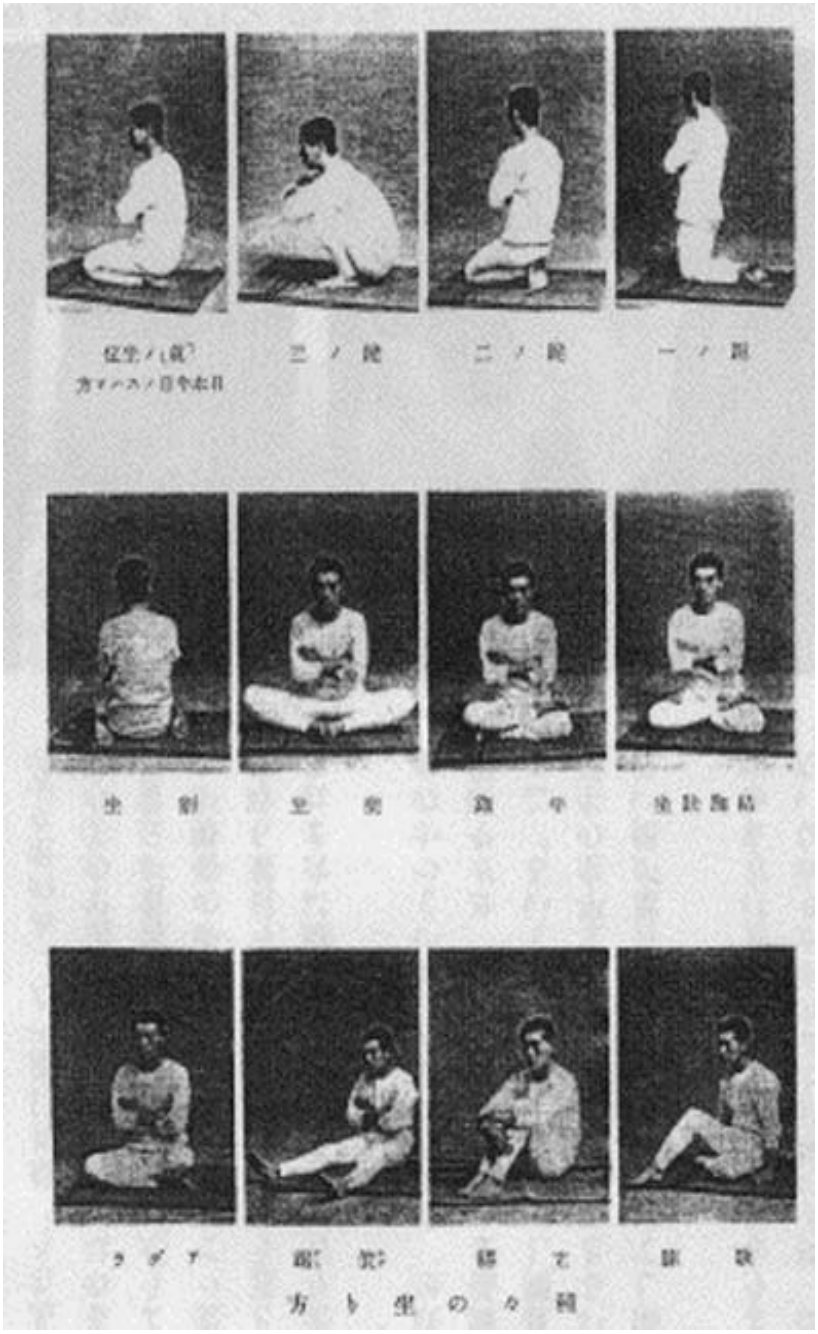
**２　　姿勢の「カタ」－　平座位の形態と世界的分布**　(Hewes. G.W.－1957)

(大英博物館蔵ーザイール･エフェ村,20世紀初撮影)
(1) 木枝座具に臥位に近い倚座

(インド･筆者撮影1991)
(2)椅子の上の胡座

**３．座姿勢の「カタ」と座具の「カタチ」**

**図4.　　姿勢の「カタ」－　姿勢の形態　(1)**




上段左から右へ:①眞の坐位(日本今日ノスハリ方)、②跪の三、③踞の二、④跪の一

中段左から右へ:　①割坐、②楽坐、③半跏、④結跏趺坐

下段左から右へ：①アグラ、②箕踞(ナゲアシ)、③立膝、④歌膝

**４．平座の「カタ」－　日本の平座の「カタ」**（入澤－大正9a）

**図４．姿勢の「カタ」－　姿勢の形態　(2)**

（白川2003：7画,8810）
(1)「坐」の象形

（李済－1982,安陽小屯殷墟出土）
(2) 玉製人物平座像

（中国美術編輯委員会編-1988:四川省･漢画像石）
(3) 床と筵上の人物平座像

**図５　‘坐’の「カタ」－象形（甲骨）文字と美術表現された座**

（白川2003：13画, 6711）
(1)「跪」の象形

（李済－1982：安陽小屯殷墟出土跪座像）
(2) 跪座像

（中国美術編輯委員会編-1988:四川省･漢画像石）
(3) 跪座，蹲踞座像

（ギュンターシャーデ-1987：図版28）
(4)　無形の象徴への跪座と起礼（中期アッシリア）

（観水庵コレクション・燃灯仏仏伝記より）
(5)　仏陀への跪座と起礼（クシャン朝）

**図６　‘跪坐’姿勢の「カタ」　－象形（甲骨）文字と跪座の表現**

（白川2003：9画　4762）
(1)「胡」の象形

（Makay1937-38：ニューデリー博蔵-5075/123）
(2) シバ神胡座像（インダス文明）

（Makay1937-38：NMP50.296）
(3) シバ神胡座像（インダス文明）

（Makay1937-38：Oxford Ashmolean Museum-MD013）
(4) スツール上のシバ神胡座像（インダス文明）

（Errington,E.,& Cribb J.,1995：大英博物館1859.3-1-68）
(5) マウエス王・胡座像（パルティア朝）

Cribb J., Errington,E.1999/2000：Pl.6no. 113 (1894.5-6.1457)　　ibid.：Pl. 5 no. 74
(6) 弥勒仏陀座像ドラクマ銅貨　　(7) 仏陀座像ドラクマ銅貨
**スツール上の結跏趺座像**（クシャン朝　AD.2世紀）

（Sear2000：Vol.1,no.872-875, ナクソス　BC.440頃）
(8) デオニソス神胡座像（ナクソス）　　(9) デオニソス神座像銀貨（ナクソス）

**図７．　胡座の「カタ」－ 象形（甲骨）文字と美術表現された胡座**

（Nicholas Reeves－1990：ツタンカーメン王墓出土印影）

(1)片立て膝の床座像の印影　　(2)高貴(spsi)の聖刻文字

（Nicholas R.，1990:）

(3)黄金(nbw)の象形とヘフ女神座像

（ニムルド出土･大英博物館蔵WA-132989）

(4)黄金(nbw)の象形とヘフ女神座像

**図８　片立て膝の座の「カタ」 －　象形(エジプトの聖刻文字)と美術表現された座**

(白川 2003：10画2422 )
（１） 倚の象形

（天遊 2002：陝西省・乾陵）
（２）章懐太子倚像(唐)

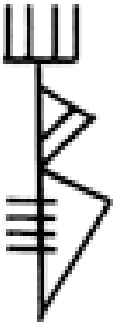
（インド・マツゥーラ博物館蔵13.213.4）
（３）カニシカ王倚立像(クシャン朝)

**１　倚の「カタ」 –象徴的なモノによりかかる立姿勢**

（吉田1997: pp.163, アフリカ・ザイール･パンガ村・1905年撮影）

**２.倚座の「カタ」ー木製腰掛けの見上げる視線と見下す視線の座姿勢**

**図９．　倚座姿勢の「カタ」 ー　身を寄せる姿勢**



（白川2003:4画1010ー鉞に由来）　　（吉川,江守-2005：「神ーdingir　（天ーan）」　「王ーlugal」の象形

**1　王の象形**（甲骨文字）　　**2 シュメールの象形**（古拙な絵文字）

**1　王ー王権の象形（甲骨）文字と古拙な絵文字（楔形文字の原形）**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ジェムデ･ナスル<br>出土都市記号 | | | | |
| ウルク<br>出土都市記号 | | | | |
| | UNUG<br>ウルク | NIBRU<br>ニップール | ARARMA$_{D1}$<br>ラルサ | URI$_5$<br>ウル |

**2　　都市ー王権の古拙な絵文字**　（小泉2005）

**図１０　　王権と都市の象形**

（Mellaart1967,Ilhan.Temlzsoy1995: ）

**１ 地母神倚座小像**　　**２ 同 側面**　　**３ 同 正面** （出土時の状態）

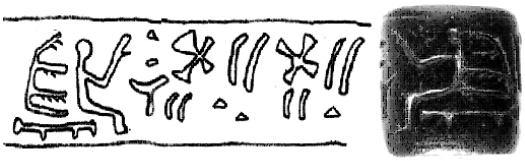
（Melllaart1967,Pl.89, 84,チャタルフユック出土）　（(Ben-Tor1992パレステイナ・ギラート出土）

**４土偶男子座像と腰掛け**(85)　　**５ 地母神座像** ）

（Richter,1912:pl.433,フィレンツェ考古博物館蔵）

**6.エトルスク・守護神倚座像**

**図11　　玉座の「カタチ」― 地母神座像の「カタ」**

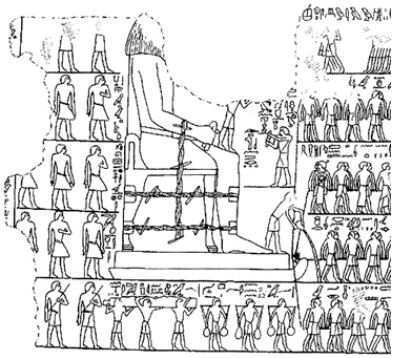


(Killen, G.P., 1986 : pl.45)
1. 三脚形の削り出し製の腰掛け

(Killen, G.P., 1986 : pl.46)
2. 四脚形削り出し製の腰掛け

(大英博物館蔵-65872)
3. エジプトの腰掛けと印章図像

**図12　伝統の座の「カタ」—アフリカ伝統の一木づくりの腰掛け**



エル＝ベルシェのジェフティヘテフ壁画(部分)
(1)背板立ち上がり付玉座(Lehner,M-1997:p.203)

(2) 背板なしスツール (Baker1966 : pl.20)

**1 古王朝時代の玉座/スツールの座像**

( Baker1966 : Pl.23)
(1)第二王朝皇后の倚座像

(Russell,J.M.,1998:pl.1)
(2)カセケム王倚座像

(Russell,J.M., 1998:pl.6)
(3)カフラ王玉座倚座像

**2 古王朝時代の玉座倚座像**
**図13 古代エジプトの座の「カタ」と「カタチ」**

(1)ツタンカーメンの玉座

(2) ツタンカーメンの玉座背板

(３)ツタンカーメンの玉座

(４)ヘフ女神片立て膝座像

(5)王の玉座

1.　　ツタンカーメン王の玉座の「カタ」と「カタチ」 (ニコラスリ-ブス,近藤-1993)

(1) 守護神獣脚の玉座模型(京都文化博物館-2005:図版168)

(2)小椅子 (大英博物館蔵 EA-2480)

2.　　模型の玉座と小椅子の「カタ」と「カタチ」

**図14　エジプト新王朝時代の玉座の「カタ」と「カタチ」**

(Collon 1987:Pl.28/大英博物館蔵WA-102416)
(1) 神殿と星獣

(1987:Pl.16ベルリン美術館蔵VA-10537)
(2) 祭祀王と神獣

**1. 神殿, 動物の印章図像ージェムデ･ナスル様式-動物,倉庫(神殿)と周辺の動物表現**

(Collon 1987:pl.801大英博物館蔵 WA-123280)
(1)スツール上の片立て膝床座像と祭祀風景・１期

(Collon 1995:pl.3) .
(2) 印章の図像と類似する建物

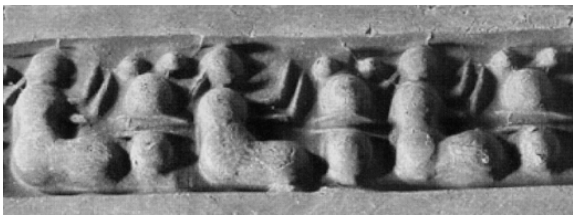
( Collon 1995:pl.3 5c大英博物館蔵WA-120963)
(3) 片立て膝の床座像の象牙製護符

ﾊﾟｷｽﾀﾝ･ｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ国境にて1991年筆者撮影
(4) 片立て膝の床座姿勢

**2. 印章図像ージェムデ･ナスル様式の座像と神殿の表現と実際の姿**

**図15　　印章の図像表現と実際の建物と姿勢**

Collon 1987:pl.13（大英博物館蔵-WA89413）
(1) 土器製作の平座像

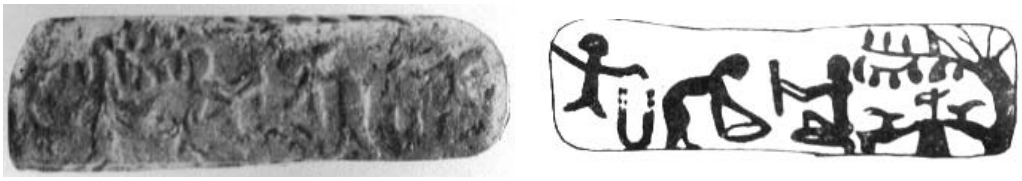


(Kist- 2003：pl.014)
(2)　平座

(Collon-1987：pl.628)
(4) 紡績作業光景の片立て膝の平座像

(Osten-1934：pl.IV-31)
(3)紡績作業の平座像.

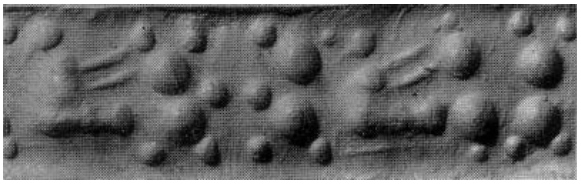
(Collon-1987：pl.625)
(5).製パン作業の跪座像



(Mackey－1937-38：pl.LXC　13a )
(6) 片立て膝の床座像-インダス文明

**1　平座像・印章１期-ジェムデ･ナスル様式他**

( Wiseman-1962：大英博物館蔵　$WA_{-89355}$)
(1)後髪を結う女性の平座像



(Buchanan －1966：pl.18)
(2)　女性の平座像

**2　敷物上の平座像・印章１期-ジェムデ･ナスル様式他**

**図16　印章図像１期　－生産の場面と平座－敷物－スツールの上の姿勢「カタ」**

(Collon-1987 : pl.1 5)

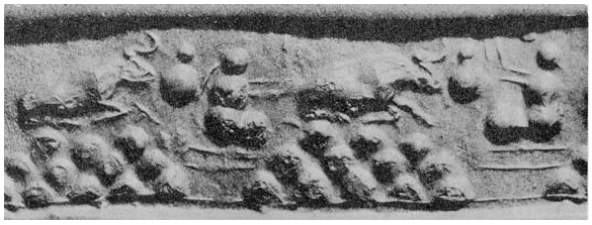
**図17　　スツール上の腰掛ける象徴的人物座像と平座像ー1期**

(Goff-1966 : Fig.349)

(1)　土器製作

(Goff-1966: Fig.350)

(2)　土器製作



( Goff-1966 : Fig.351)

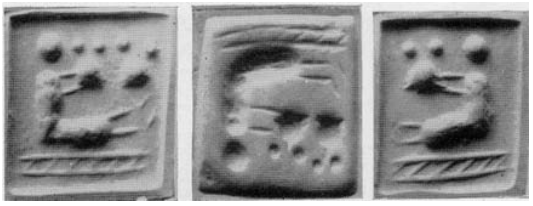
(3)土器製作

(Baker-1966 : pl.249)

(4) 円筒型スツール

(Kist-2003 : pl.18)

(5)　四脚型スツール

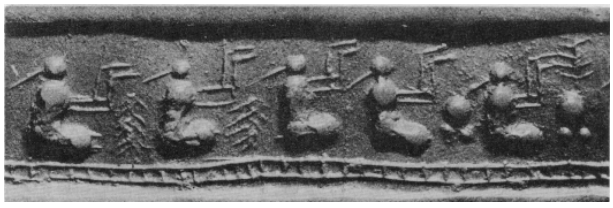


(Buchanan-1966 : Pl14a-d)

(6)人物の投げ足座像とスツール

1.ジェムデ･ナスル様式

**図18　　スツールと座の「カタ」と「カタチ」**



(Goff-1966 : Pl353)

1 不明の座具，敷物上の平座像

(Kist-2003 : p30pl.01)

2　不明の座具，敷物上の平座像

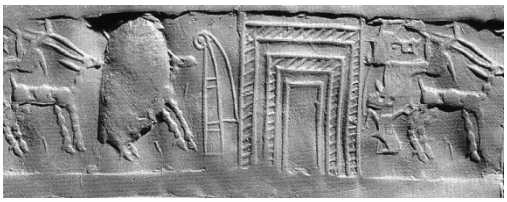
**図19　　座の「カタ」と「カタチ」ー　曖昧な台座.スツールの図像例　ー 1期**

(Collon,D.,-1987 : Pl.16)
(1)スツール上の平座像と蜘蛛の神

(Goff-1966 : Fig.356)
(2)　スツール上の平座像と蜘蛛の神

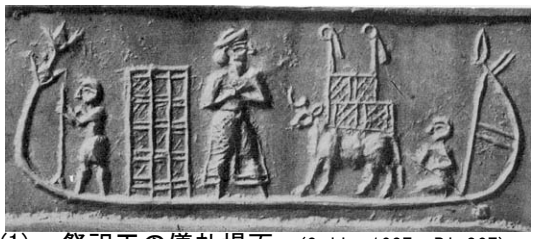
**図20. 座像と神の象徴的表現**

(Goff-1966.Fig. 352)
(1) 片立て膝の平座巫女と儀式徴･吹き流し



(メソポタミア文明展：pl.54　MNB1166)
(2) 神殿戸口･神獣･イナンナ神の象

**1　神殿前の祭祀場面**



(1)　祭祀王の儀礼場面　(Collon1987：Pl.807)

(2)　祭祀王の儀礼場面　(Collon1987：Pl.713 1期ー2期)

**2.　船上の祭祀王と円筒形スツール**

（1）(Prichard1969：Fig.676)

（2）(OSTEN 1934:pl.V-35)

**3．船上の祭祀王とX形スツール**

**4.　祭祀王の祭祀場面**　(Collon1995：pl. 34ｃ大英博物館蔵WA-102422 )

**図21　1期座像の「カタ」と「カタチ」ー祭祀王と座像**

(1)上段左:Pu-abi倚座像 (2)上段右:男性倚座像

(3)下段左:男性倚座像 (4)下段中央:男性倚座像 (5)棚

**1． Pu-abi銘饗宴図の印章と転写図** (Collon,D.,-1987:Pl.521･大英博物館蔵WA-121544 )

**2． Pu-abi墓出土饗宴図の印章転写図** (Collon,D.,-1987:Pl.668･Zetter-1998-Ur20a )

(1) 上段左 男性座像 (2) 上段中 女･男性座像 (3)下段中 女性楽士座像

**3． Pu-abi墓出土饗宴図の印章転写図** (Collon,D.,-1987,Pl.669バグダッド博旧蔵IM-11904)

上段左端 (1)男性倚座 上段中央 (2)男性倚座 上段右 (3)女性倚座

下段左端 (4)男子倚座 下段中 (5)女性倚座 下段右 (6)女性倚座

**4．A-bara-ge銘饗宴図の印章転写面** (Zetter-1998:Fig.18aウル出土U10448)

**図22 人物座像の「カタ」と「カタチ」ー2期饗宴図と印章座像**

(Zetter-1998:Fig.19a)

５　Pu-abi墓出土Dumu-Kisal銘饗宴図の印章

(Zetter-1998:Fig.27a)

６　Pu-abi墓出土饗宴図・動物闘争図の印章

７．ウル王墓群出土饗宴ー動物闘争図の印章　(Zetter-1998:Fig.28a ,Bakerpl254)

(1)印章転写図

(2)上段中央座像　拡大図

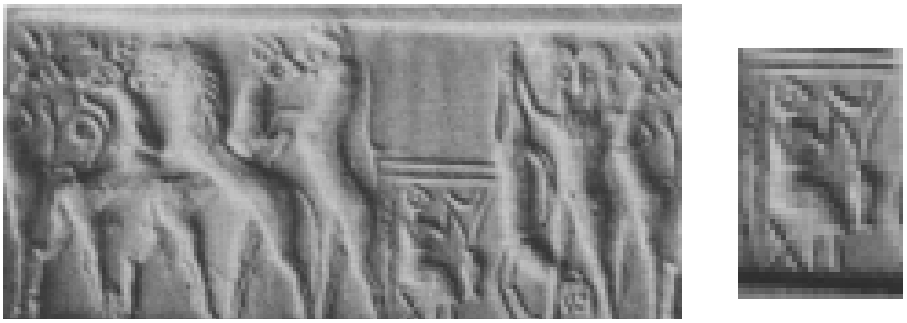
８．　饗宴図の印章座像　( Collon,D.,-1987:Pl.819)

(1)　飲酒する人物座像

９．　饗宴図の印章座像　( Collon,D.,-1987:Pl.640)

図22　　人物座像の「カタ」と「カタチ」ー2期饗宴図と印章座像

(1) Ｘ型スツールに腰掛ける人物座像ー饗宴図と動物闘争図　(世田谷美術館- 2000,Pl.100(MNB1351b))



(2)　動物闘争場面のスツール　(Collon -1987 Pl.82)

(1)左女性　(2) 男性　(3)女性

(3)　動物闘争図と饗宴図の人物と座像　(Collon -1987 Pl.91 (大英博物館蔵　WA-103318))

(4) 動物闘争図と饗宴図の人物と座像　(Newell_plateV-40)

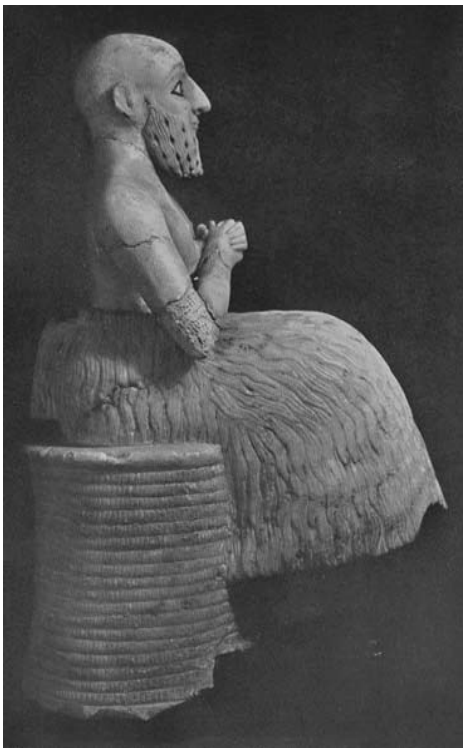
図23　　人物座像の「カタ」と「カタチ」ー2期動物闘争図と印章座像

(Amiet1980:pl.299バグダッド博蔵)

**図24　2期ー片立て膝の人物平座像ー石像彫刻**

(Weiss 1985:pl.66)

**図25　2期ー敷物上の交脚Ur-nina交脚胡座像**



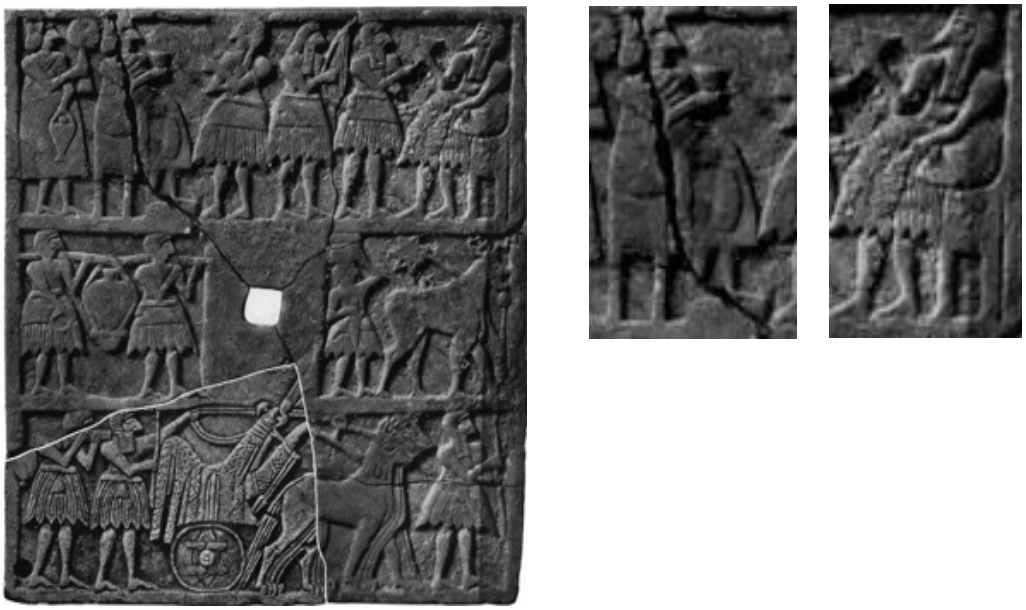
(Frankfort 1954:pl.23)

**1.腰掛ける Ebhil-il座像**

(Pritchard2003:pl.229)

**2.腰掛ける書記官DuDu座像**

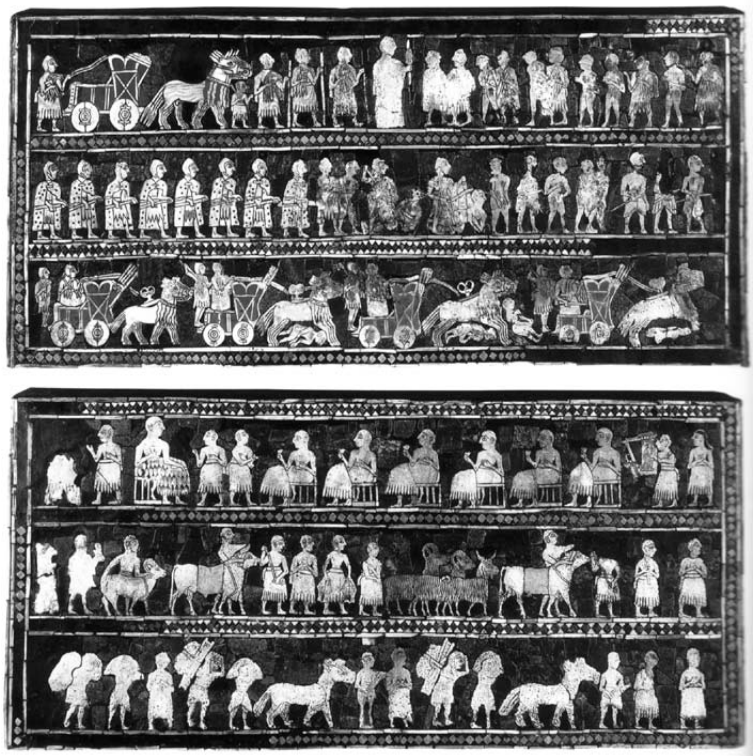
**図26　2期ースツールの腰掛ける人物座像**

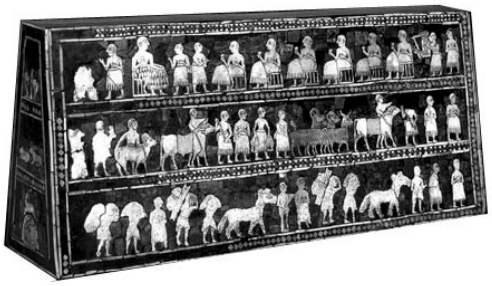


1　奉献板の足台と倚座像　(Frankfort1939:pl.33(a) Khafaje出土)

2. 奉献板座像(ウル・ナンシュ座像)　3.奉献板玉座像(世田谷美術館-2000,Pl.66・バグダッド博蔵sb―41)

図27　　2期ー奉献板の背板付き玉座倚座像





1. ウルのスタンダード

2. ウルのスタンダード.上段パネル・ 下段パネル

3. 下段の倚座像

**図28　ウル王墓ー獣脚をもつ人物玉座倚座像と拡大図**　(Collon1995:pl.50a-b,大英博物館蔵　WA-121201)

(世田谷美術館--2000,Pl.69(ルーブル美術館蔵A018213))

**図28　マリ女王倚座像ー獣脚をもつ玉座の奉献者の倚座像**

1. 饗宴図 (Collon1987:Pl.820 ｱｼｭﾓｰﾙ博蔵1929-263)　　2. 饗宴図 (Collon1987:Pl.123ｱｼｭﾓｰﾙ博蔵1913-545)

**図30　印章3期ー饗宴とスツールの倚座像**

(Collon1987:Pl.109 イラク博物館蔵IM-14334)　　(Collon1987:Pl.113　大英博物館蔵WA-132834)

**1　動物と人物座像**　　**2　鷲鳥の遊泳と人物倚座像**

**図31　印章3期ー動物図と人物座像**

(大英博物館蔵WA-89326　Pl.112　III-302)　　(Pl.114 III-386　pl.XVIIk　大英博物館蔵WA-119330)

**1　　閲見図・神と対話する倚座像**　　**2. 腰掛ける神と謁見図**

**図32　印章3期ー閲見図・ｹﾞﾃﾞｱ銘の倚座像**

(Collon1987:Pl.104 )

**図33.1　印章3期ー閲見図・閲見する人物跪座像**

(Collon1987:Pl.532大英博物館蔵WA- 89126)

**図33.2　閲見図・神格化された王の倚座像**

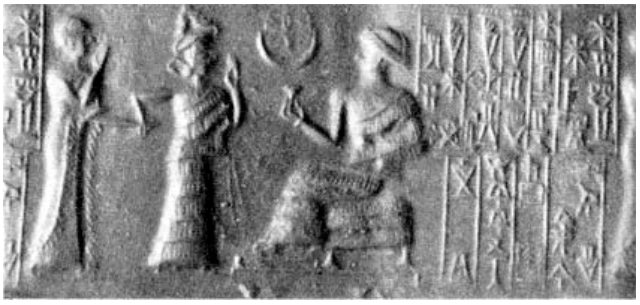
(Collon1987:pl.105)

**1　閲見図・天蓋下の倚座像**

(Collon1987: pl.765 )

**2 門柱と天蓋下の玉座像**

**図34.　3期の印章閲見図・神の姿をかりる人物と玉座の座像**



(Collon1987:pl 118　大英博物館蔵WA-102510)

**1　閲見図・神格化された王の座像例；**

(Harvey1985 )

**2. 閲見図･神格化されたIbsin王座像**

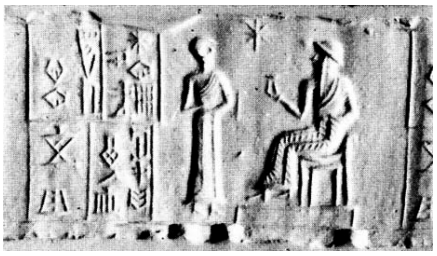
(Collon 1987:pl.156 ベルリン博物館蔵VA-156) )

**3　閲見図・神格化された王の座像**

(OSTEN-1934: Pl.5, no174 )

**4.　閲見図・神格化された王の座像**

**図35.　閲見図・スツールの座像**



**1．リセス型脚部をもつ玉座**(Buchanan　Pl.421)　　**2．リセス型脚部をもつ玉座** (Collon1987：pl.122)

**図36　　3期ー神殿の門を摸したリセス型脚部をもつ玉座**

(Collon:1982：Pl.179大英博物館蔵　WA-22423)

**1. 有翼の神殿を摸した玉座像**

(Collon1982：Pl.182大英博物館蔵　WA-89390)

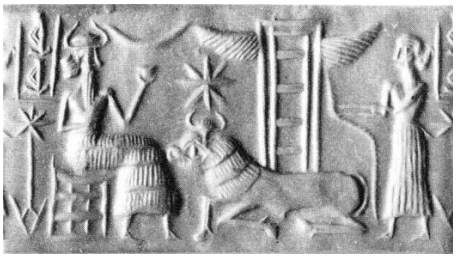
**2．有翼の神殿を摸した玉座像**

(Collon:1982：Pl.183大英博物館蔵　WA-132845)

**3. 有翼の神殿を摸した玉座像**

(Collon1982：Pl.180大英博物館蔵　WA-120545)

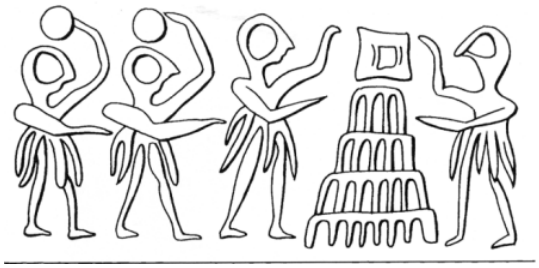
**4．有翼の神殿を摸した玉座像**

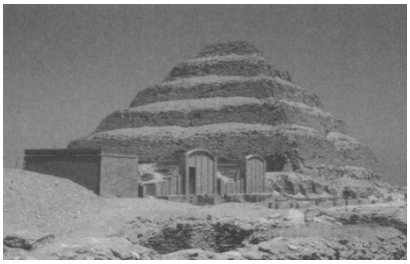


(ibid.：Pl.181　WA-129485)

**5．有翼の神殿を摸した玉座像**

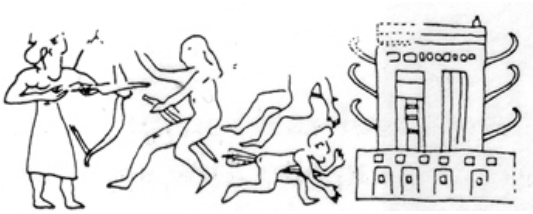
**図37　　3期ー有翼神殿と神殿の門を摸したリセス型脚部の玉座**

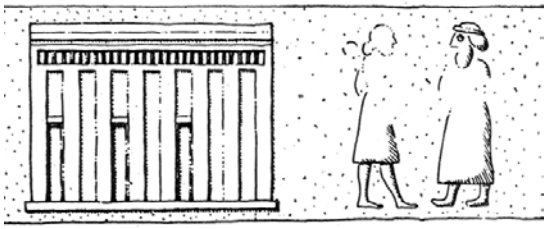




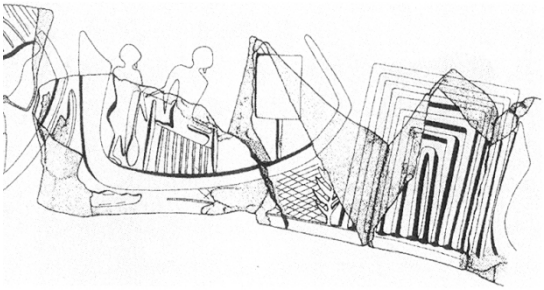
(1).メソポタミアの神殿建設の印章印影(Crawford 2004:Fig.4.17) (2).エジプトのメチュリケト王階段状マスタバ墓 (大城2010：図1)

**1．階段状の建築：メソポタミアの神殿ーエジプトの階段状マスタバ墓**



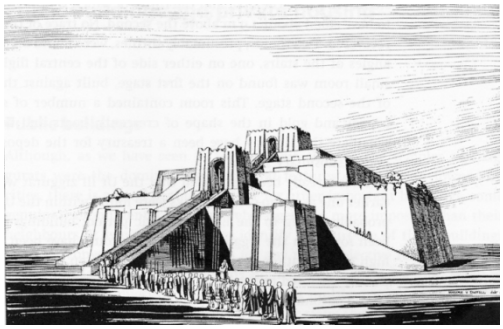


(1)． 神殿と神の戦い印影(Collon1987：pl.748)　　(2)．神殿と祭祀王(Goff1966：Fig.245)



クストゥルのインセンスバナーの部分

(3)．エジプト･マスタバ墓の溝状周壁址(大城2010：図13)　　(4)．エジプトのリセス型脚部の玉座座像 (大城2010 ：図16)



(5).ウルの神殿の溝状周壁址(Zettler1998:Fig.12)　　(6)．高層化神殿基壇と門の溝状(Crawford2004:Fig.4.17)

**2.ウルとエジプトの神殿のリセス(溝状建築様式)**

**図38　神殿と溝状周壁-ウルとエジプトの神殿，図像比較**

1.ウル・ニンギルス立像　　2.台座の跪座像拡大図

**図39　ウル・ニンギルス立像台座の跪座像** (Parrot1962：pl.269)

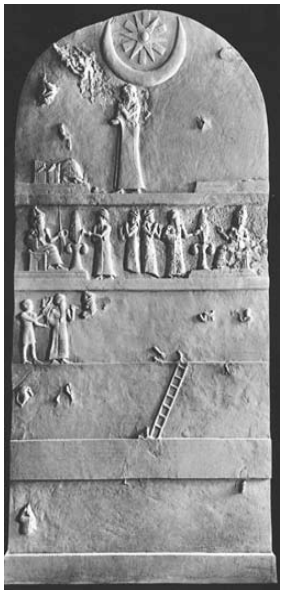
1．X脚スツールと座像　　2. 四脚スツールの座像

**図40.　スツールの座像** (Pritchard2003:pl.795)

１．グデア王座像　(Pritchard2003:pl.431)

２．足台付きNini-Zaza倚座像(Weiss 1985:pl.66)

図41.1　足台と無く玉座座像



１．法典碑ー現状

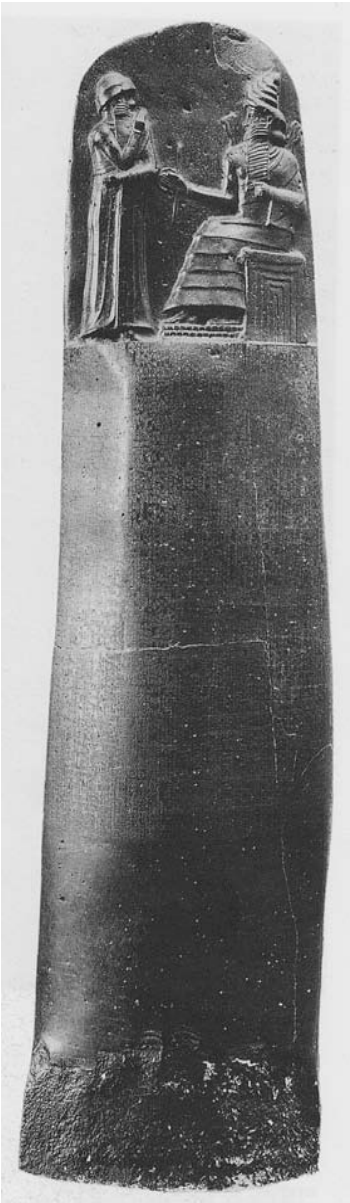
２．法典碑ー復元図像

３．上から2段目左側ウル･ナンム

４．上から2段目右側ウル･ナンム

(紀元前2100年頃　ペンシルバニア大学博物館蔵)

図41.2　基壇・足台上のリセス型脚部の玉座ーウル･ナンムの潅水儀式と倚座像（岡田,小林2008）



(Prichard1969:pl.515)

(1) ハムラビ王法典碑像

(Prichard1969:pl.515)

(2) ハムラビ王法典碑の太陽神玉座像(左図拡大図)

(Prichard1969:pl.514)

(3) 法典碑の太陽神玉座像

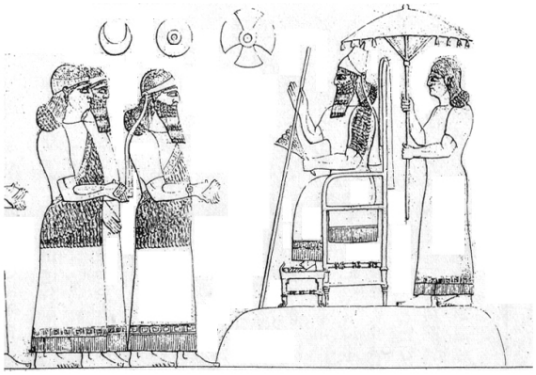
(4)ハムラビ王銘の印章リセス型脚部の玉座座像(Collon1987 : pl.1,4)

**図42.　法典碑の玉座像とリセス型脚部の玉座**

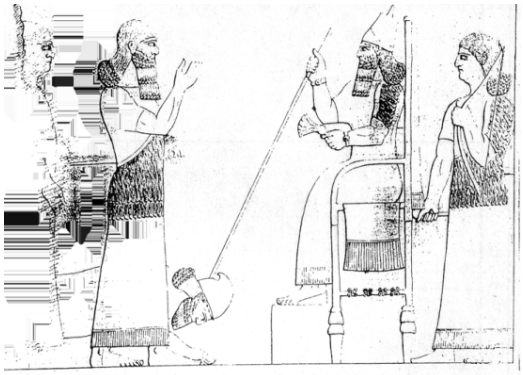
(1)神々の印影(Collon1987：pl.559-561)　　(2)アシュール神
(ibid.560)

**1　守護と豊饒のアッシュール神立像**

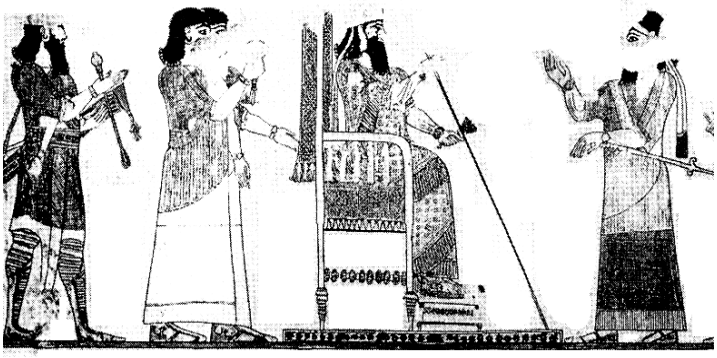
(1) ウラルトゥ遠征の玉座構成



(2) バビロニア遠征の玉座構成



(3)アラブ遠征の玉座構成



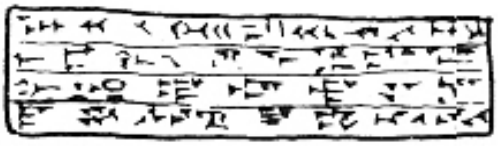
(4)テルバラシブ遠征の玉座構成

**2．ティグラト・ピレセル三世王倚座像と玉座の構成**　(Barnett1962,服部2007)

**図43　「玉座」の「カタ」と「カタチ」－ 新アッシリア帝国**

šar (King of)
kiššati (the world)
šar (King of)
$^{mātu}$aššur (Assyria)

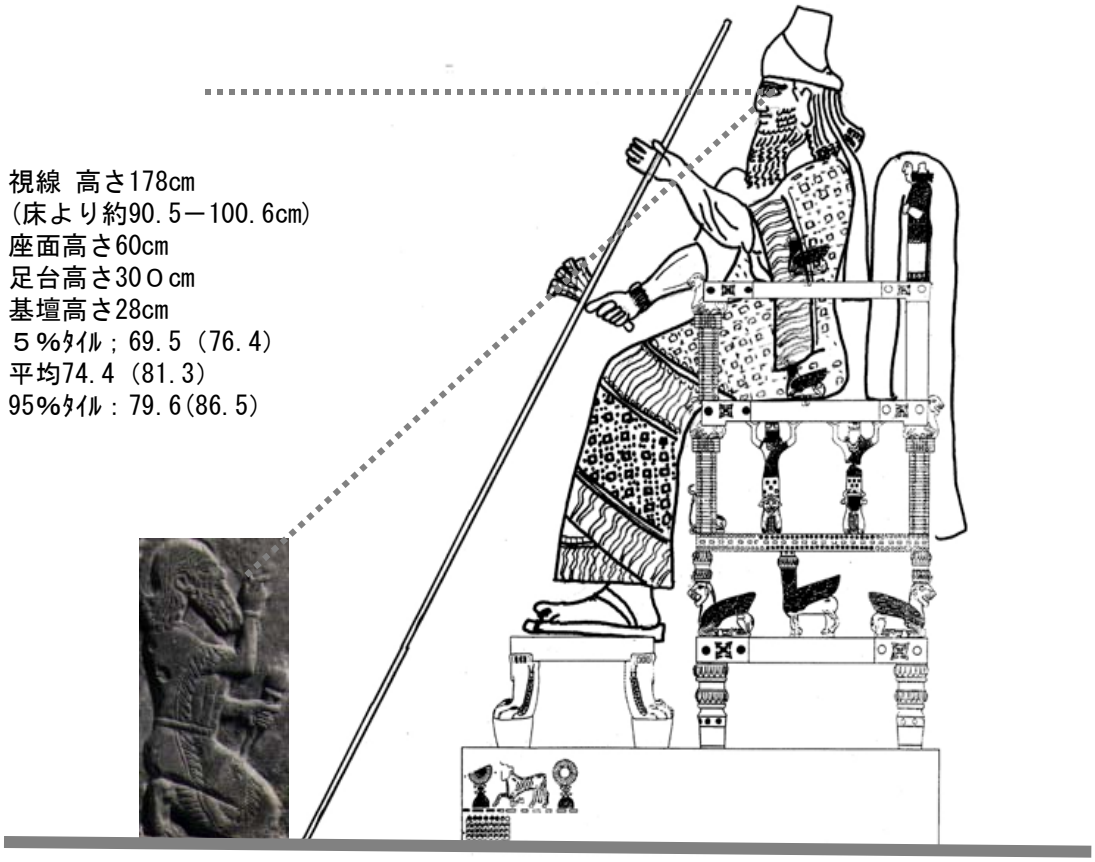
Ina (on)
iṣu kussî (a seat)
ni-me-di
Ú-šïb-ma (be sat and)



**1.　　センナケリプ玉座像碑文**

**2．センナケリプ（紀元前704－681年）玉座座像・**(Mitchel-1995, p.64

**図44　「玉座」の「カタ」と「カタチ」－ 新アッシリア帝国**




**1．　　想定寸法と視線**（服部による）

**図45　アッシリアーウラルトゥ様式「玉座」の想定寸法と視線**

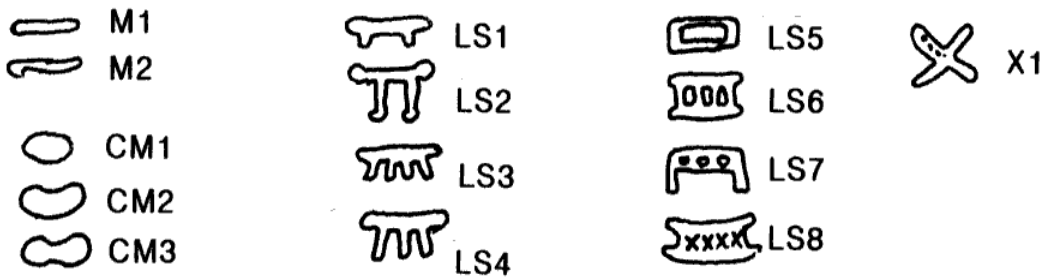
（アッシリアーウラルトゥの玉座寸法検討用のモデル）

**2. 想定寸法試作品正面図**　　**3. 玉座試作品・側面図**

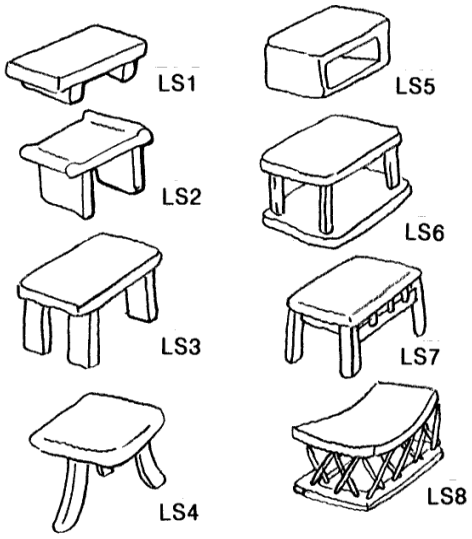
**図46　「玉座」の想定寸法と検討試作**

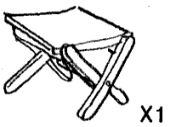
| 図像モチーフ | 図像数 | 人物 | | 動植物 | | | 付属物 | | 建築物 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 様式＼ | | | 座像 | 動物 | 植物 | 幾何学模様 | 器物 | スツール | | |
| ウルク期 | 8 | 4 | 1 | 5 | | 1 | | | | |
| ウルク～ジェムデド・ナスル | 5 | 3 | 1 | 3 | | | 3 | 1 | 1 | |
| ジェムデド・ナスル期 | 115 | 3 | 21 | 51 | 21 | 59 | 15 | 17 | 3 | 1 |
| 合計 | 128 | 10 | 23 | 59 | 21 | 60 | 18 | 18 | 4 | 1 |

**附表１　印章の図像内容ーメソポタミア１期**




**（１）　印章に登場するスツールの図像（側面）・1期**



LS３：四脚スツール立体想定図

X1：折りたたみスツール立体想定図

**（２）　スツールまたは小椅子の「カタチ」**

**付図1　　1期ー印章に表現された座の座の「カタチ」ー　台座．スツールの例**

P2/ M1　P2/ M2　P2/ M3　P2/ M4

(1)　ウル王墓出土印章に表現された敷物/クッション類

P2/ LS1　P2/ LS2　P2/ LS3　P2/ LS4　P2/ LS5　P2/ LS6

P2/ LS7　P2/ XS1　P2/ XS2

(2)　ウル王墓出土印章に表現されたスツール（小椅子）類

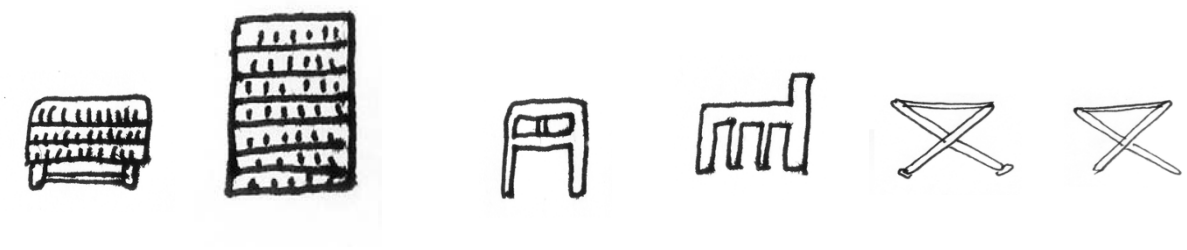
Chr1　Chr2　Chr3　Chr4　Chr5　Chr6　Chr7

(3)　ウル王墓出土印章に表現された椅子類

Chr/ Thr1　Chr/ Thr2　Chr/ Thr3　Chr/ Thr4

(4)　ウル王墓出土印章に表現された玉座の性格を有する椅子類

付図2　2期印章－印章に表現された座の「カタチ」

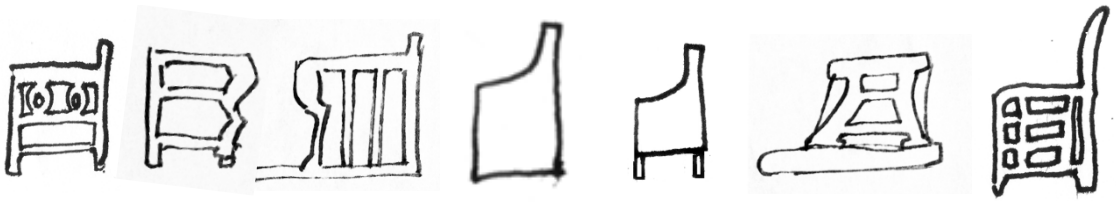


P2/ LS7　P2/ LS8　P2/ LS9　P2/ LS10　P2/ XS1　P2/ XS2

(1)　2期印章に表現されるスツール(小椅子)類

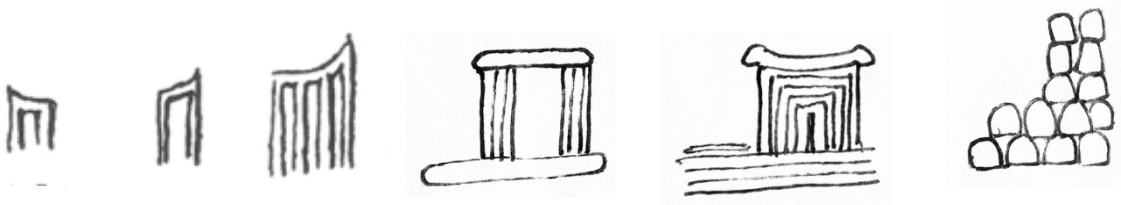
Chr1　Chr2　Chr3　Chr4　Chr5　Chr6　Chr7

(2)　2-3期印章に表現される椅子類



Chr/ Thr1　Chr/ Thr2　Chr/ Thr3　Chr/ Thr4　Chr/ Thr5　Chr/ Thr6　Chr/ Thr7

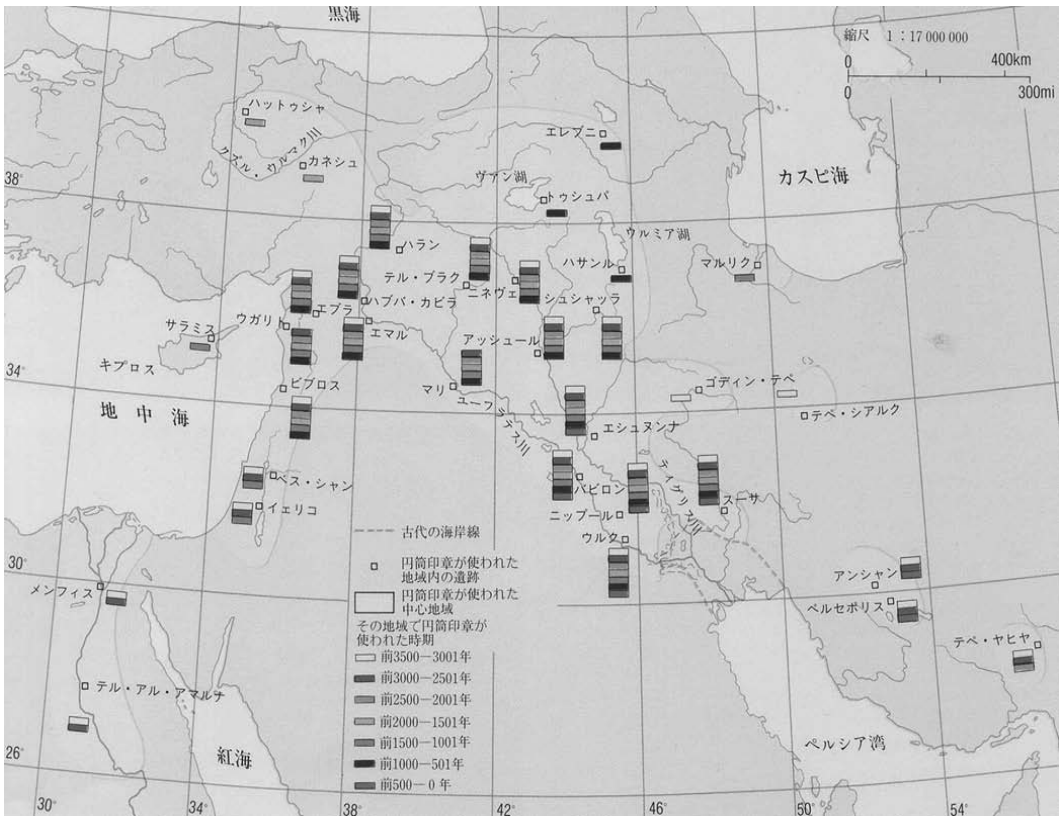
(3)　2-3期印章に表現される玉座の性格を有する椅子類



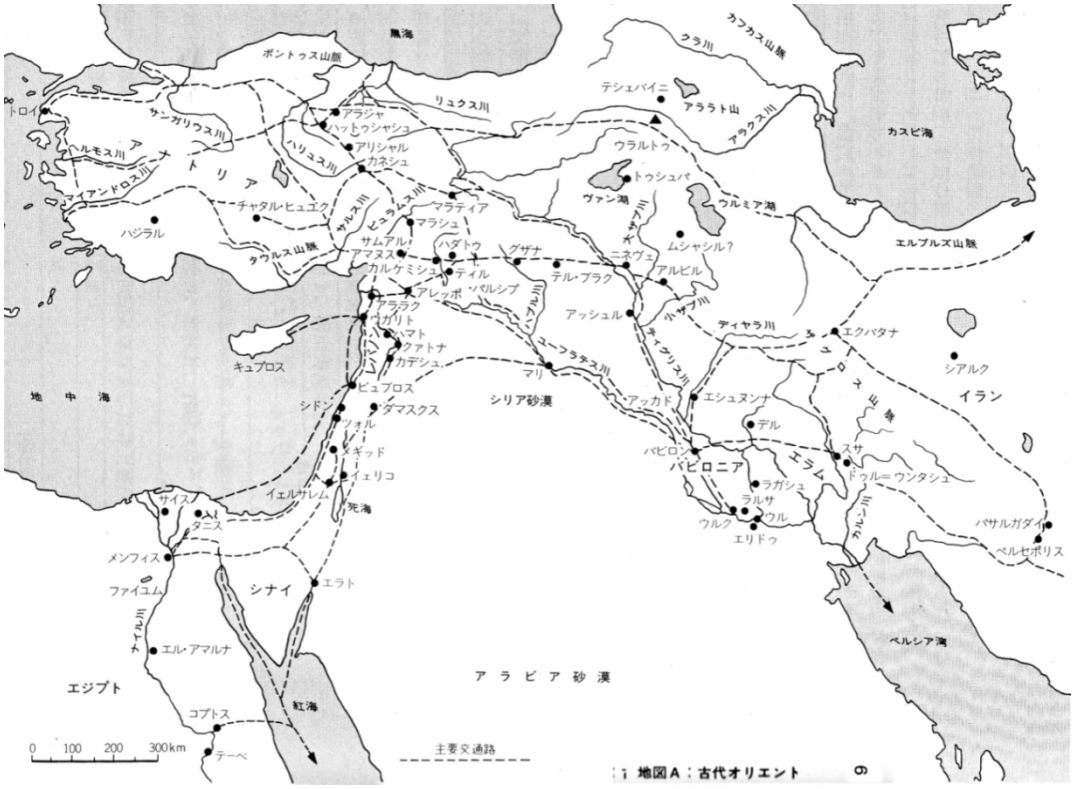
**Thr1　Thr2　Thr3　Thr4　Thr5　Thr6**

(4)　2-3期印章に表現される玉座類

付図３　　2-3期印章ー印章に表現された座の「カタチ」




**地図 1　　印章の使用地域、遺跡、使用期間と数量分布**　　(Roaf,-1996: p.73から)




**地図２　　古代オリエント世界と交易路**　　(北原理雄-1983)

**地図 3　　メソポタミア 都市遺跡**　　(北原理雄-1983)

## 附表1　1期の印章図像-床座と敷物･スツールの図像例

メソポタミア１期の印章(ウルク、ジェムデド･ナスル様式)と印影・紀元前3100年-2900年 から

| 番号 | 図像名 | 出土地,材質,寸法･高さ×幅 | 座像の座具構成（品名） | 引用資料･文献参照,図版、（所蔵元番号） | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 1.メソポタミア I期　（ウルク） | | | | |
| 1 | 土器製作風景の女性平座像 | ｳﾙｸ?･水晶･20.5×19 | 座具なし(土器製作の女性座座像) | Collon1987,P1.13(BM-WA89413),Wiseman1962 | 図16.1(1) |
| 2 | 土器製作風景の女性平座像 | メソポタミア･蛇紋岩･33×26 | 座具なし(土器製作の女性座座像) | Kist2003,P1.014 | 図16.1(2) |
| 3 | 紡績作業の女性平座像 | メソポタミア･蛇紋岩･18×20 | 座具なし(糸紡ぎする女性座座像) | Osten-1934,P1.IV-31 | 図16.1(3) |
| 4 | 紡績作業の女性片立て膝平座像 | スーサ, 印影,22.5 | 座具なし(糸紡ぎする女性座座像) | Collon1987,P1.628 | 図16.1(4) |
| 5 | 製パン作業の女性跪座像 | スーサ, 印影,12 | 座具なし(パン生地作り女性座座像 | Collon1987,P1.625 | 図16.1(5) |
| 6 | 3人の儀式 | スーサ近郊, 淡灰色石･22.5×22 | スツールと敷物 | Collon1987,P1.15 | 図17 |
| 7 | 捕虜の処刑 | ｳﾙｸ-W22660･印影･ 45×52 | 平座捕虜と5人の処刑兵士 | Collon1987,P1.746 | |
| 8 | 船頭、司祭平座像 | ｳﾙｸ･ﾗﾋﾟｽﾗｽﾋﾞﾘ･43×35 | 船上で正座男性平座像 | Collon1987,P1.807(VA-11040) | 図21.2(1) |
| 9 | 壷に3人の後髪結い女性 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･黒大理石･21×20 | 床に正座 | Wiseman1962,P1.3-I(BM-WA102471) | |
| 10 | 虐待捕虜の座列と禿鷹 | ｳﾙｸ･ｲﾗｸ･印影･ 32×28 | 跪座,縛られた捕虜 | Collon1987,P1.887、 | |
| 11 | 女性平座像と外神 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･紅大理石･17×21 | 床に正座する後髪結い女性 | Collon1987,P1.888、 | |
| 12 | 女性平座像と外神 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･緑泥石(方解石)･22×21 | 平座女性（ｽﾂｰﾙ） | Collon1987,P1.889、 | |
| 13 | 対面の祭祀王立像 | ｳﾙｸ･石膏･46. 5×37. 5 | 立像（祭祀王と人物） | Collon1987,P1.890、 | |
| | | | | | |
| | 2.メソポタミア I期　（ジェムデド･ナスル） | | | | |
| 1 | 土器造り女性平座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･水晶･20.5×19 | | | |
| 2 | 土器造り女性平座像 | JebelArda,Syria灰色石製･25×27 | （敷物上）平座像 | Collon1987,P1.17 | |
| 3 | 土器造り女性平座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･暗緑岩･21.5×22 | 正座の女性平座像 | Collon1987,P1.19(BM-WA103011),Wiseman1962,P1.4a | |
| 4 | 後髪女性座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･方解石･18×23 | （敷物上）平座像 | Wiseman1962,P1.3-d(BM-WA102411) | |
| 5 | 後髪女性座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･ 石製･寸法不明 | （口形腰掛け？）平座像 | Wiseman1962,P1.3-e(BM-WA89355) | |
| 6 | 後髪女性座像と動物･壺 | ｼﾞｪﾑﾃﾞｨﾄﾞﾅｽﾙ･石製･寸法不明 | スツール上の平座女性像 | Goff1966,Fig.349 | 図18.(1) |
| 7 | 後髪女性座像群像と動物･壺 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･ 石製 ･　寸法不明 | スツール上の平座女性像 | Goff1966,Fig.350,MLCpl.III,no.8 | 図18.(2) |
| 8 | 後髪女性座像と動物･壺 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･ 石製 ･　寸法不明 | 平座像とスツール上の女性座像 | Goff1966,Fig.351 | 図18.(3) |
| 9 | 後髪女性座像と動物･壺 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･ 石製 ･　寸法不明 | スツール上の平座女性像 | Baker1966,P1.249 | 図18.(4) |
| 10 | 後髪女性座像群像と壺 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･bowenite･22×18 | 平座像とスツール上の女性座像 | Kist2003,P1.18 | 図18.(5) |
| 11 | 女性投げ足座像とスツール | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･方解石･38×23×20 | スツール上の女性投げ足座像 | Buchanan1966,P1.14a-d | 図18.(6) |
| 12 | スツール上の女性座具(不明) | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･石製･ 寸法不明 | (囲い/スツール上)女性正座像 | Goff1966,Fig.353,MLCpl.III,no.16 | 図19.(1) |
| 13 | スツール上の女性座具(不明) | ｼﾞｪﾑﾃﾞｨﾄﾞﾅｽﾙ･凍石･13×14 | 手を差し出す女性 | Kist2003,P.15,P1.1。 | 図19.(2) |
| 14 | 女性平座像と外神 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･石製･ 寸法不明 | | Frankfort1939,P1.VIIIf | |
| 15 | 女性平座像と外神 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･赤石灰岩･25×33 | スツール上の後髪平座女性 | Collon1987,P1.16(BM-WA89516),Wiseman1962 | 図20.(1) |
| 16 | 女性平座像と外神 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･石製･ 寸法不明 | スツール上の後髪平座女性 | Goff1966,Fig.356 | 図20.(2) |
| 17 | 女性平座像と外神 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･赤石灰岩･25.4 | スツール上の後髪平座女性 | Ravn.O.E1960,No.4(Inv.6397) | |
| 18 | 女性平座像と外神 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･赤石灰岩･25.4 | スツール上の後髪平座女性 | Louvre蔵 | |
| 19 | 女性座像と神殿 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･灰色石灰岩･17×15 | スツール上の後髪平座女性 | Collon1987,P1.801(BM-WA123280) | 図15.(1) |
| 20 | 後髪結い女性平座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･方解石･20×20 | （敷物かｽﾂｰﾙ）平座女性 | Wiseman1962,P1.3-e(BM-WA89355) | 図16.2(1) |
| 21 | 後髪結い女性平座像 | 石灰岩･38×25×20 | （敷物上）平座像 | Buchanan-1966,P1.18 | 図16.2(2) |
| 22 | 人物平座像（印影） | ｼﾞｪﾑﾃﾞｨﾄﾞﾅｽﾙ･石製･ 寸法不明 | （敷物上）平座像 | Frankfort1939,P1.IIIc | |
| 23 | 壷づくりの人物平座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･緑泥石･16×18 | スツール上の平座女性像 | Wiseman1962,P1.3-g(BM-WA102571) | |
| 24 | 後髪結い女性平座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･緑泥石(方解石)･18×18 | (スツール上？)平座女性像 | Wiseman1962,P1.3-j(BM-WA102538) | |
| 25 | 後髪結い女性平座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･赤大理石･21×21 | スツール上の平座女性像 | Wiseman1962,P1.4-f(BM-WA129597) | |
| 26 | 女性平座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･ 石製 ･　寸法不明 | スツール上の平座女性像 | AOMO-P1.3L- L-R) | |
| 27 | 後髪結い女性平座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･紅大理石･19×21 | スツール上の平座女性像 | Wiseman1962,P1.3-c(BM-WA129598) | |
| 28 | 後髪結い女性平座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･方解石･19×20 | スツール上の平座女性像 | Wiseman1962,P1.3-a(BM-WA102422) | |
| 29 | 女性座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･大理石? ･16×20 | 女性平座（長反りｽﾂｰﾙ） | Wiseman1962,P1.3-b(BM-WA132190) | |
| 30 | 神殿と巫女座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･ 石製 ･　寸法不明 | スツール上の片立て膝平座女性 | Wiseman1962,13A | |
| 31 | 祭祀の巫女と群座像 | Susa淡灰色石製 ･25.5×22. | スツール上の片立て膝平座女性 | Collon1987,P1.16(BM-WA132336) | 図17 |
| 32 | 神殿と巫女座像 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･･寸法不明 | スツール上の片立て膝平座女性 | Goff1966,Fig.352,ルーブル美術館蔵A117 | 図21.1(1) |
| 33 | イナンナ女神殿と星獣,ウルク旗章 | ｼﾞｪﾑﾃﾞｨﾄﾞﾅｽﾙ･凍石･41×35 | 人物なし | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ文明展-2000,P1.54(MNB1351b) | 図21.1(2) |
| 34 | 祭祀王の儀礼舟と平座従者と漕手 | ｳﾙｸ,ﾗﾋﾟｽﾗｽﾋﾞﾘ:4.3×3.5cm | 平座従者と祭祀王の儀礼舟 | Collon1987,P1.807(BM-WA89516),Wiseman196 | 図21.2(1) |
| 35 | 馬が牽引する祭祀王の儀礼舟 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･石製･ 寸法不明 | X形スツール上の祭祀王 | 不明 | 図21.3(1) |
| 36 | 船上の饗宴図 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･貝･19×8 | X形と箱形スツール上の対面座像 | Osten-1934,P1.V-35 | 図21.3(4) |
| | | | | | |
| | 3.メソポタミア I -II期　頃 | | | | |
| | 倚座像と従者 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ･緑石･26×17 | 倚座（ｽﾂｰﾙ）従者は立像 | Collon1987,P1.718(BM-WA89349) | 図21.2(2) |
| | 4.　参考比較資料 | | | | |
| 1 | インダス文明方形印章 | | | | |
| 2 | 女性片立て膝平座像 | ﾓﾍﾝｼﾞｬﾀﾞｰﾛ･ 石製 ･　寸法不明 | 片立て膝の平座 | Mackey-1937-38,P1.LXC13a | 図16.1(6) |
| 3 | 片立て膝の平座像･護符 | Susa･象牙製･高さ28　(BC3100年頃) | 平座女性 | BM-WA120963 | |
| 4 | 片立て膝の平座像･部品 | ｺﾑﾙﾄﾞ･象牙製　　(BC9世紀頃) | 片立て膝平座女性像(ｽﾂｰﾙ) | BM-WA132989 | |

**略称：**姿勢名：SG:Sitting on the Grand(地面に平座),S:Sitting on the Mats or the Stool(座面に(片立てひざ)平座),
C:Sitting on the Chair(椅子に倚座),ST:Standing Posture（立位）

材料名：Chlorite:緑泥石,Calcite:方解石,limestone:石灰岩,steatitesteatite:凍石(ステアタイト･soapstone)
serpentinite：蛇紋岩

収蔵機関：BM = British Museum,VA = Victoria &Albert Museum,LV= ﾙｰﾌﾞﾙ美術館,BA= ﾍﾞﾙﾘﾝ美術館, IM = Iraq museum,
PLM:ピーボディ美術館, AOMO=岡山市立ｵﾘｴﾝﾄ美術館

# 附表2　　倚子と倚座の図像例—2期・都市国家の時代の印章

## ２期の印章と印影(紀元前2900年-前2334年)

| 項目 | 図像名 | 出土地,材質,寸法・高さ×径(m | 座・座具構成 | 引用資料・文献参照,図版、(所蔵元番号) | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 1.メソポタミア II期頃 | | | | |
| 1 | Pu-abi nin銘・饗宴倚座像 | U10939,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・49×25(PG8 | 椅子(玉座の性格) | Zetter1998:Fig.46b(BM-WA121544),Col | 図22.1 |
| 2 | 饗宴倚座像(2段) | U10871,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・49×25(PG8 | 椅子(玉座の性格) | Zetter1998:Fig.46a(BM-WA121545), | |
| 3 | 饗宴倚座像(2段) | U8615,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・42×20(PG33 | 椅子(玉座の性格) | Zetter1998:Ur20a | 図22.2 |
| 4 | 饗宴倚座像(2段) | U11904,ｳﾙ・金(瀝青)・40×17(PG1 | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.669. | 図22.3 |
| 5 | Abarage銘・饗宴と倚座像 | U10448,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・42×26(PG8 | 椅子(玉座の性格) | Zetter1998:Fig.18a,Legrain1936:Ur18 | 図22.4 |
| 6 | Dumu-Kisal銘饗宴倚座像(2段) | U12374,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・45×15(PG1 | 椅子(玉座の性格) | Zetter1998:Fig.19a | 図22.5 |
| 7 | 饗宴/動物闘争図(2段Pu-abi墓) | U12380,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・45×20(PG1 | 椅子(玉座の性格) | Zetter1998:Fig.27a | 図22.6 |
| 8 | 饗宴/動物闘争図(2段Pu-abi墓) | U12380,ｳﾙ・貝・36×15(U13521) | 椅子(玉座の性格) | Zetter1998:Fig.28a (U13521・31-17-11 | 図22.7 |
| 9 | 饗宴倚座像(2段) | Abu Salabikhｲﾗｸ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・28× | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.819, Pl.820(IM) | 図22.8( |
| 10 | 饗宴倚座像と門前運搬(2段) | U12387,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・38×12(PG1 | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.640(IM-7270) | 図22.9 |
| 11 | 饗宴倚座像(2段) | U10872,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・40×20(PG8 | 椅子(玉座の性格) | Zetter1998:Fig.17a(B16728),Legrain1936: | |
| 12 | 闘争文と倚座像(2段) | 不明,淡緑石灰岩・41×20 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.24c,Collon1987,Pl.91 | 図23.(3 |
| 13 | 闘争文と倚座像(2段) | 不明ｲﾗｸ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・38×19 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.26d、Collon1987,Pl.92(BM-WA8 | |
| 14 | 饗宴と動物闘争図(2段) | Kh-III298,ﾊﾌｧｰｼﾞｪ,石灰岩、24> | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.94 | |
| 15 | 饗宴と動物闘争図(2段) | U8085透明淡緑石灰岩；4.1×2.0 | 椅子 | Collon1987,Pl.91,Wiseman1962,Pl.24c | 図23.(3 |
| 16 | 饗宴と動物闘争図(2段) | 貝・28×9 | 椅子（円型） | Newell_plateV-40 | 図23.(4 |
| 17 | 饗宴と倚座像(2段) | U14622,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・42×20 | 椅子(玉座の性格) | Legrain1936:pl.17,337 | |
| 18 | 司祭'HE-KUN-SIG銘饗宴倚座像 | U9315,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・39×25(PG58 | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.93(IM-4294) | |
| 19 | 闘争文と饗宴神獣倚座像 | U14595,ｳﾙ・(印影)・49 | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.935,Legrain1936:pl.20,384 | |
| 20 | 饗宴と倚座像(2段) | U10871,ｳﾙ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・44×23 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.25d(BM-WA120535) | |
| 21 | 飲酒する人物倚座像 | U8461ｲﾗｸ・灰色凍石・34×12 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.26b(BM-WA120550) | |
| 22 | 飲酒する人物倚座像 | U8658ｲﾗｸ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・38×13 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.26e(BM-WA120551) | |
| 23 | 動物闘争図と饗宴座像(2段) | U10822,ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・35×19 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.24a(BM-WA121546) | |
| 24 | 饗宴と倚座像(2段) | U14443ｲﾗｸ25-a・大理石・36×17 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.25a(BM-WA122830) | |
| 25 | 重横の2人倚座像(1段) | U1547ｲﾗｸ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・19×10 | (箱形)腰掛け | Wiseman1962,Pl.23h(BM-WA123626) | |
| 26 | 饗宴と動物闘争図(2段) | U18983ｲﾗｸ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・41×14 | (箱形)腰掛け | Wiseman1962,Pl.26c(BM-WA123570) | |
| 27 | 饗宴と女性座像 | U18397,18400,18413,ｳﾙ・(印影)・ | (箱形)腰掛け | Collon1987,Pl.661,Legrain1936:pl.20,169 | |
| 28 | 座像（立像群中） | U14597ｲﾗｸ・30×20(印影)SIS4、 | (箱形)腰掛け | Collon1987,Pl.635(BM-WA119210),Legrain1936: | |
| 29 | 饗宴と倚座像(1段) | U11401ｲﾗｸ・凍石・35×18 | (形不明)腰掛け | Collon1987,Pl.714 | 図23.(1 |
| 30 | 饗宴と動物闘争図(2段) | ﾃﾛｰ出土,貝・41×17、 | X脚ｽﾂｰﾙ | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ文明展-2000,Pl.100(MNB1351b) | 図23.(2 |
| 31 | 神と動物闘争，飲酒人物座像 | Abu Salabikhｲﾗｸ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・:28> | X脚ｽﾂｰﾙ | Collon1987,Pl.82 (彫り直し図像) | |
| 32 | 挙手の倚座神像と供養者 | 出土地不明・大理石(calcite)・26 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.15g(BM-WA89475) | |
| 33 | 供養者倚座像 | 不明・凍石(磨耗)・49×19 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.24f(BM-WA89758) | |
| 34 | 酒椀をもつ男性座像 | 不明・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・20×9 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.24d(BM-WA102067) | |
| 35 | 上段:饗宴の男性倚座像 | 不明・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・34×12 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.24b(BM-WA102509) | |
| 36 | 応対する2組女性倚座像 | 不明・アラレ石・26×17 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.13g(BM-WA102593) | |
| 37 | 酒椀をもつ男性座像 | 不明・大理石・39×18 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.24e(BM-WA116726) | |
| 38 | 神倚座像と供養者 | 不明・大理石(片)・26×17 | 椅子(玉座の性格) | Wiseman1962,Pl.13h(BM-WA129600) | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | 2.メソポタミア I - II期頃 | | | | |
| 1 | 倚座像と従者 | ﾒｿﾎﾟﾀﾐｱ・緑石・26×17 | 椅子・椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.713(BM-WA89349) | |
| 2 | 飲酒する男性倚座像 | U8792ｲﾗｸ・貝・43×18 | （椅子） | Wiseman1962,Pl.25e (BM-WA120536) | |
| 3 | 饗宴と倚座像 | U142-9117ｲﾗｸ・貝 | 椅子(玉座の性格)・足台 | B-4182 | |
| 4 | 倚座像 | U188-7956,〃ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・45×11 | 椅子(玉座の性格)・足台 | Wiseman1962,B-4205 (CBS1685) | |
| 5 | Ur-siと従者Emananna | U198-9844,〃・Green Marble・ | 椅子(玉座の性格)・足台・不明 | | |
| 6 | 倚座像 | U268-9158,〃・Blk.Steatite・ | 椅子(玉座の性格)・足台 | B-4207 | |
| 7 | 倚座像 | U278-12029,〃・Steatite・32×19 | 椅子(玉座の性格)・足台・不明 | | |
| 8 | 倚座像 | U293-17815,I〃・不明 31×19 | 椅子(玉座の性格)・足台 | B-9561 | |
| 9 | 倚座像 | U295-17904,〃・Lapis lazuli ・3 | 椅子(玉座の性格)・足台・不明 | | |
| 10 | 倚座像 | U364-9750,U944-1/2部分暗緑石3 | 椅子(玉座の性格)・足台＋天蓋 | B-14577? | |
| 11 | 正面向人物倚座像 | 不明・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・68 | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.755(ﾏﾙｺﾎﾟｰﾘ収集品 | |
| 12 | 神倚座像と供養者 | ｲﾗｸ・ｳﾝﾏ出土・透明緑石・43×25 | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.757(VA-3878) | |
| 13 | 饗宴と倚座像 | 不明・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・24×14 | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.818(VA-7525) | |
| 14 | 獣頭人身の立像に混じる倚座像 | ｲﾗｸUr・30×20(印影のみ)SIS4、U | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.635(BM-WA119210) | |
| 15 | 神話の一場面椅子 | Abu Salabikhｲﾗｸ・ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ・22× | X脚ｽﾂｰﾙ | Collon1987,Pl.82 | |
| 16 | 饗宴の倚座像と植物文様 | Faraｲﾗｸ・石・20+ | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.89 | |
| | | | | | |
| | 3.メソポタミアII期-周辺地・シリア | | | | |
| 1 | ハープ奏者倚座像 | Tell Chuera, ｼﾘｱ・20 | X脚ｽﾂｰﾙ | 奈良ｼﾙｸﾛｰﾄﾞ博協会1988:pl.71,ﾀﾞﾏｽｶｽ博S2411、 | |
| 2 | ハープ奏者倚座像 | Tell Chuera, ｼﾘｱ・16×12 | X脚ｽﾂｰﾙ | Collon1987,Pl.663(ﾄﾙｺ・ｱﾝﾀﾙｷｱ博7789) | |
| 3 | 椅子(折曲げ)倚座 | Chagar Bazar,ｼﾘｱ・石・20+ | X脚ｽﾂｰﾙ | Collon1987,Pl.72(BM-WA131690) | |
| 4 | 奏楽,中央に椅子,側倚座像 | Charchemish,ﾄﾙｺ・石・30×13.5 | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.74 | |
| 5 | 神倚座像と供養者 | ｲﾗｸ・ｳﾝﾏ出土・透明緑石・43×25 | 椅子(玉座の性格) | Collon1987,Pl.757(VA-3878) | |
| 6 | 倚座像と神獣 | ニネヴェ,不明・赤鉄鉱・22×9 | 椅子(玉座の性格) | Ravn.O.E1960,No.11(ﾃﾞﾝﾏｰｸ王立博蔵-DFa685) | |

**略称：**姿勢名：SG:Sitting on the Grand(地面に平座),S:Sitting on the Mats or the Stool(座面に(片立てひざ)平座),
C:Sitting on the Chair(椅子に倚座),ST:Standing Posture（立位）

材料名：Chlorite:緑泥石,Calcite:方解石,limestone:石灰岩,steatitesteatite:凍石(ステアタイト・soapstone)
serpentinite：蛇紋岩

収蔵機関：BM = British Museum,VA = Victoria &Albert Museum,LV= ﾙｰﾌﾞﾙ美術館,BA= ﾍﾞﾙﾘﾝ美術館, IM = Iraq museum,
PLM:ピーボディ美術館, AOMO=岡山市立ｵﾘｴﾝﾄ美術館

# 附表3　　床座像、玉座倚座像の図像例-3期・サルゴンの帝国と以降の円筒印章

3期の印章図像(アッカド朝期-紀元前2334年ー前2000年)

| ﾅ･項E | 図像名　(段数) | 出土地,材質,寸法･高さ×径(mm) | 座像の座具構成（品名) | 引用資料･文献参照,図版、(所蔵元番号) | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 1.メソポタミア III期ー床座像 | | | | |
| 1 | UR,UR歌手銘･座像 | 不明･蛇紋岩･38×24 | 床座風(図25参照) | Collon1987,Pl.672(BM-WA89096)Pl.848と類似 | |
| 2 | 肩火焔神と跪座像 | ｲﾗｸUr･大理石32×21　U.9026(PG | 跪座･蹲踞座像 | Collon1987,Pl.844 | |
| 3 | 飲酒する人物座像 | ｷｼｭ出土,貝･34×18 | X脚ｽﾂｰﾙ | Collon1987,Pl.820(ｱｼｭﾓｰﾙ博1929.263) | 図30.1 |
| 4 | 飲酒する神(人)座像 | ｼﾘｱ･ｱﾚｯﾎﾟ購入･褐色斑凍石･21.5 | (箱形)腰掛 | Collon1987,Pl.123(ｱｼｭﾓｰﾙ博1913-545) | 図30.2 |
| | | | | | |
| | 2.メソポタミアIII期ーアッカドおよびシュメール地方他,出土印章 | | | | |
| 1 | 動物模様･饗宴の倚座像(2段) | 出土地不明･貝殻芯･62×25 | (箱形)腰掛け | Collon1987,Pl.109(IM-14334) | 図31.1 |
| 2 | 謁見図の座像･水鳥(2段) | 不明･緑泥石･40×12 | (箱形)玉座 | Collon1987,Pl.113(BM-WA132834) | 図31.2 |
| 3 | 饗宴で対面倚座像(1段) | 不明･緑色岩･27.1×16.5 | (箱形)玉座 | Collon1987,Pl.112(BM-WA89326) | 図32.1 |
| 4 | ｸﾞﾃﾞｱ銘･謁見図の座像(1) | 不明･緑色蛇紋岩･35×20c | (箱形)玉座(＋基壇) | Collon1987,Pl.114(PML) | |
| 5 | 謁見図の座像(1) | ｲﾗｸUr？･緑泥石24.5×12.5 | (Π形)腰掛 | Collon1987,Pl.115(BM-WA119330) | 図32.2 |
| 6 | ｴ･ｷﾞｯｽ銘謁見図座像(1) | 不明･緑色岩･25×13 | (田形)倚座 | Collon1987,Pl.116(BM-WA189042) | |
| 7 | 人物跪座像と水神閲見図 | ｲﾗｸ･ﾃﾙ･ｱﾙ･ﾘﾏｰ出土凍石43×29.5 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.104(IM-70548) | 図33.1 |
| 8 | ﾊｼｭﾊﾙﾙ･ﾅﾝﾅｼｼ月神閲見倚座像 | ｲﾗｸﾊﾞﾋﾞﾛﾝ･緑色石53×30 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.532(BM-WA89126) | 図33.2 |
| 9 | 牛男と水神と天蓋下ｼｬﾏｼｭ神倚座 | Ur5950,ｲﾗｸUr･暗緑色石36×24(P | 玉座･倚座(＋天蓋) | Collon1987,Pl.105(IM) | 図34.1 |
| 10 | 門柱と天蓋下の謁玉座像 | ﾆｯﾌﾟｰﾙ･淡紅色石灰岩･37×25 | 玉座･倚座(＋天蓋) | Collon1987,Pl.765(IM) | 図34.2 |
| 11 | 飲酒する神(人)座像 | 不明･蛇紋岩･18×9 | (Π形)腰掛 | Collon1987,Pl.124 | |
| 12 | 饗宴場面と神倚座像 | ｼﾘｱ･ﾌﾞﾗｸ出土,方解石27.5×18 | (Π形)腰掛 | Collon1987,Pl.125(BM-WA125793) | |
| 13 | 謁見図の座像(1) | U6607･ｲﾗｸUr･石灰岩 | (田形)玉座(＋基壇) | Collon1987,Pl.450(現所在不明) | |
| 14 | 謁見図の座像/銘付き（1) | ｲﾗｸUr･緑泥岩24×13 | (Π形)腰掛 | Collon1987,Pl.514(BM-WA115418) | |
| 15 | ｼｭ･ｲﾘｼｭ銘･閲見倚座像 | 不明･緑色岩･29.5×18, | ｽﾂｰﾙ･倚座 | Collon1987,Pl.637(AO22310) | |
| 16 | 饗宴の倚座像 | 不明･蛇紋岩･28×16 | 椅子･X脚ｽﾂｰﾙ･倚座 | Collon1987,Pl.673(BM-WA22806) | |
| 17 | 笛をふく人物倚座像 | 不明･灰色石･37.3×23.5 | X脚ｽﾂｰﾙ･倚座 | Collon1987,Pl.675(ｼｭﾐｯﾄ収集品453) | |
| 18 | 饗宴と倚座像 | ｲﾗｸ･ｷｼｭ出土･貝殻芯･33.5×17.5 | X脚ｽﾂｰﾙ･倚座 | Collon1987,Pl.820(ｱｼｭﾓｰﾙ博1929-263) | |
| 19 | 人物倚座像 | ｼﾘｱ･ｾﾚﾝｶﾋｰｲｪ出土(IV層)･石灰岩 | X脚ｽﾂｰﾙ･倚座 | Colln,D.,-1987,Pl.133 | |
| 20 | ｼｴｼｭ銘男神倚座像 | 不明、蛇紋岩･35×20.5. | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.107(BM-WA129485Sowesk Col.) | |
| 21 | 蛇神と人物倚座像 | ｲﾗｸ･ﾃﾙ･ｱｽﾏﾙ(ｴｼｭﾇﾅ)貝芯･35×20 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.108(BM-WA129485Sowesk Col.) | |
| 22 | ﾆﾝﾇﾘｯﾗ･ｳﾙ･ﾀﾞﾀﾞ銘･倚座(2段) | 不明･ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ･31×14.5 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.110(AO22011) | |
| 23 | ｼｭﾙｷﾞ銘倚座像(ウル王) | 不明･赤鉄鉱?25×13 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.458(ｼｭﾐｯﾄ収集品272) | |
| 24 | 倚座像 | ｲﾗｸUr･粘土33×20(半分欠損) | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.613(BM-WA123195) | |
| 25 | 演奏場面の倚座像 | 不明･蛇紋岩･20.5×11.6 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.670(ｴﾙﾚﾝﾏｲﾔｰ収集品98) | |
| 26 | 大･小人の二人物倚座像 | U.2714ｲﾗｸUr･水晶33×20(欠損) | 玉座･倚座(獣脚) | Collon1987,Pl.632 (BM-WA119210) | |
| 27 | 鷹匠風？人物倚座像 | 不明･蛇紋岩･24×14.5 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.701(BM-WA105159) | |
| 28 | 舟上の神倚座像と闘争図 | 不明･蛇紋岩･30×18 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.716(BM-WA89588) | |
| 29 | ﾄﾞｳﾄﾞｳ銘･人頭獣身獣と舟上の神 | 不明･材質不明･寸法不明 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.717(IM-11497) | |
| 30 | 神前の潅奠儀式と倚座像 | ﾊﾌｧｰｼﾞｪ･雪花石膏39×22 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.825(ｼｶｺﾞ大ｵﾘｴﾝﾄ研究所A7123) | |
| 31 | 鳥男ｱﾝｽﾞｰの神前倚座像 | 不明･蛇紋岩･32.5×19.5 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.847(ﾋﾟｱﾓﾝﾄﾓﾙｶﾞﾝ図書館 ) | |
| 32 | ｸﾞﾃﾞｱ銘･ﾆﾝｷﾞﾙｽ神前閲見倚座像 | ｲﾗｸ･ﾃﾙﾛｰ(ｷﾞﾙｽ)出土印影27＋金属 | 玉座･倚座(＋足台) | Collon1987,Pl.531(ﾙｰﾌﾞﾙ美蔵) | |
| 33 | ｲｯﾋﾟｼﾝ銘･王謁見倚座像 | 不明･黒色石灰岩･32×20 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.118､(BM-WA102510)関係 | 図35.1 |
| 34 | 閲見図･神格化された王座像 | 不明･赤鉄鉱；29×17 | 玉座･倚座(足台＋基壇) | Collon1987,Pl.156(ﾍﾞﾙﾘﾝ博物館VA156) | 図35.3 |
| 35 | 閲見図･神格化された王座像 | | 玉座･倚座(足台＋基壇) | OSTEN1934,Pl,5 no174 | 図35.4 |
| 36 | 植物男･女神倚座像 | 不明、蛇紋岩･40×24.5 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.106(BM-WA129478) | |
| 37 | ﾏﾏﾆｼｬ銘･倚座像 | 不明･淡緑石･24×11.5 | 玉座･倚座(＋基壇?) | Collon1987,Pl.117(AOD25) | |
| 38 | ｲｯﾋﾟｼﾝ銘･王謁見倚座像 | 不明･赤鉄鉱27×13、 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.533(ｼｭﾐｯﾄ収集226)関係Pl.118 | |
| 39 | ｲｯﾃﾞﾝ･ｲﾙﾑ銘･王謁見倚座像 | ｼﾘｱ･ﾏﾘ出土(M.1400).赤鉄鉱27.5 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.119(ｱﾚｯﾎﾟ博蔵) | |
| 40 | ｲｼ･ﾀﾞｶﾝ銘･王謁見倚座像 | ｼﾘｱ･ﾏﾘ出土･黒色石･26×13. | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.120(BM-WA139951) | |
| 41 | AN･ｻﾞﾊﾞｽﾞﾅ強き王銘･王謁見倚座 | 不明･緑色岩･32.5×15 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.121(BM-WA102055) | |
| 42 | ﾃｨｼｭｱﾀﾙ銘･王謁見倚座像 | 不明･赤色碧玉･33×18, | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.122(ｸﾗｰｸ収集112) | |
| 43 | ｲﾙﾑﾊﾞﾆ銘倚座像 | 不明･赤鉄鉱30×13.5、 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.515(BM-WA89138) | |
| 44 | ﾄｩｰﾀﾅｼｭﾑ銘女性神官倚座像 | 不明･材質不明･寸法不明 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.530(現所在不明) | |
| 45 | ﾀﾞｸﾞﾅ銘･閲見倚座像 | 不明･ﾗﾋﾟｽﾗｽﾞﾘ･33×18.6 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.642(ﾎﾟﾛﾌｽｷ収集) | |
| 46 | 神倚座像 | | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.643(ｼｭﾐｯﾄ収集443) | |
| 47 | ﾀﾞﾀﾞ銘･神前の潅奠儀式倚座 | 不明･蛇紋岩･22×13 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.831(ﾌﾗﾝｼｽﾍﾟﾘｰ収集) | |
| 48 | 鳥男ｱﾝｽﾞｰの神前倚座像 | 不明･蛇紋岩･38×25.5 | 玉座･倚座(＋基壇) | Collon1987,Pl.848(BM-WA103317) | |
| 49 | 閲見図･天蓋下の倚座像 | | | 5)Pl.684 [図4.6] | |
| | | | | | |
| | 3.メソポタミア III期ー不明 | | | | |
| 1 | 神倚座像 | ｲﾗﾝ･ﾃﾍﾟ･ﾔﾋﾔ出土･石灰岩･32 | 玉座･倚座(背板) | Collon1987,Pl.134 | |
| 2 | Ur神倚座像と超人の対話 | Haematite･25.6×12.6 IIｂ期 | 玉座･倚座 | Collon1987,Pl.458 | |
| 3 | 玉座倚座像 | 茶石灰岩･17x9 | リセス型脚部玉座･倚座 | Buchanan1966,Pl.421 | 図36.1 |
| 4 | ティシュアタル銘玉座倚座像 | 赤色碧玉･33x18 | リセス型脚部玉座･倚座 | Collon1987:pl.122 | 図36.2 |
| 5 | 有翼の神殿を摸した玉座座像 | 茶石灰岩･20×13.5 | リセス型脚部玉座･倚座 | Collon1982:Pl.179(BM-WA22423) | 図37.1 |
| 6 | 有翼の神殿を摸した玉座座像 | 貝芯･35x22 | リセス型脚部玉座･倚座 | Collon1982:Pl.182(BM-WA89390) | 図37.2 |
| 7 | 有翼の神殿を摸した玉座座像 | 貝芯･27X15 | リセス型脚部玉座･倚座 | Collon1982:Pl.183(BM-WA132845) | 図37.3 |
| 8 | 有翼の神殿を摸した玉座座像 | 貝芯･27X16.5cm | 口型脚部玉座･倚座 | Collon1982:Pl.180(BM-WA120545) | 図37.4 |
| 9 | 有翼の神殿を摸した玉座座像 | 貝芯･34.5X20.5 | 田型脚部玉座･倚座 | Collon1982:Pl.181(BM-WA129485) | 図37.5 |
| | | | | | |

**略称：**姿勢名：SG:Sitting on the Grand(地面に平座),S:Sitting on the Mats or the Stool(座面に(片立てひざ)平座),
C:Sitting on the Chair(椅子に倚座),ST:Standing Posture（立位）

材料名：Chlorite:緑泥石,Calcite:方解石,limestone:石灰岩,steatitesteatite:凍石(ステアタイト･soapstone)
serpentinite：蛇紋岩

収蔵機関：BM = British Museum,VA = Victoria &Albert Museum,LV= ﾙｰﾌﾞﾙ美術館,BA= ﾍﾞﾙﾘﾝ美術館, IM = Iraq museum,
PLM:ピーボディ美術館, AOMO=岡山市立ｵﾘｴﾝﾄ美術館